

コロニア小説選集

第二卷・助成文学賞時代

コロニア文学会編

『コロニア小説選集』

刊行委員会

鈴木 悌一

武本 由夫

清谷 益次（第二卷担当）

前山 隆（第一卷担当）

薮崎 正寿

カット 近藤 敏

装幀 前山 寿美子

(注・本文庫には8編を収録してあります。●印)

コロニア小説選集

第二卷 ★目次

●路 上	……………	安井新
●父	……………	原奈保子
●喪失の杜	……………	小滝土香
ミーリヨは夜伸びる	……………	春日健次郎
兇弾	……………	波多野達馬
●老移民のこの日	……………	山里アウグスト
●糧	……………	土井マンジヨリカ
はだかの灯	……………	枝盛梅子
●軟 水	……………	山崎準平
●壁の中の仲間たち	……………	島木史生
●珈琲園の唄	……………	園生昌夫
コロニア慣用語注釈	……………	

助成文学賞時代 年度別作品一覧表

第二巻の編集を担当して 清谷益次

路 上

安井 新

略歴 本名藪崎正寿。一九二二年東京王子に生まる。渡伯二十数年、農業、商業、新聞社勤務など転々し、現在はサンパウロ市で書店を経営。一九五八年、第二回「パウリスタ文学賞」に本集収録の「路上」が入賞、一九六〇年には第一回「農業と協同文学賞」に「移民の子供たち」が入賞しコロニアの作家としての位置を確立した。……ある一人の直面する悩み、苦しみ、悶えを作品の中で再現することが出来たならば、やはり意味のあることではないだろうか、というのが文学に対する僕の態度です。……と或る時の「作者の言葉」で書いている。パウリスタ文学賞、コロニア文学新人賞などの選考委員。

路 上

一九五三年、二月十日、山野信太は朝のセナイル坂をのぼっていった。さすがに未だ街路の空気は、ほこりつぽくない。往く人の足どりは一様にせわしい。その中で背を屈め気味にしていく彼だけが、調子外れに見える。歩調に急ぐ「意志」が感じられず、かと言って、殊更鈍い速度を取っているふうもない。要するにそのいずれの意志も欠いた足どりだったからかも知れない。だが、その癖一步一步がへんに正確に踏みしめられて行く。がそう見えたのも亦、彼が雑多な人種のいりまじるサンパウロの街中でどうかすると眼に立つ長身の故だったかも知れないし、幾分猫を背負った姿勢の故だったかも知れない。ともかく彼もやはり此の都会の午前七時の群集の殆んどと少しの変りもなく、出勤の途上にあるのだった。

彼はいま又、自分を抜いた下級サラリイ・マンらしい男の背中へ微笑を送る。こうして既に幾人となく、彼を超越した。信太はたった今、かぞえ終えた寺院の鐘の音を耳に追いながら、考える。

― 此の歩調に意志めいたものが無いように又格別

の思想だって、あるわけではない。唯……勤め先の邦字新聞社までの距離と、今、確めた時刻のバランスに此の速度は乗っているだけの事だ。元来、おれは「急ぐ」という事に好意を持つ。とりわけ「急ぐ者」の表情に限りなく好意を持つ。「急ぐ」という事が常になしもないのだ、からだ。

此処の往来は、さほど激しくなかった。点々とある店舗も未だ大扉を開かず、靴音だけが、よく響いた。うしろから一人、神父が風を巻くように前のめりの大股で、信太を追い越していった。茶色の長い僧服の裾がひるがえる。社を一、二度訪れた、達者な日本語を繰るマルチン神父であるのに彼は気付く。この聖・フランシスコ会の僧は街路を往く誰よりも首だけ高く見える際立った体躯で肘を張りぐんぐん進む。間隔がみるみるひらいた。

信太は自分を引き離すそのような速度に不図、胸を突かれた表情になった。そこに全てに対し或る距離を持つとうとする烈しさを見、一種の孤独さを感じたからである。

次の瞬間、彼はのぼり坂を駆けだしている。「神父さん信太は往手を阻むように前に廻って停ると、息をきらしきまり悪げにわらった。「オオ、アナタたくさん走つて来たのですか」マルチン神父は碧い明るい眼を殊更まるくし、言った。「いや、ついその下からなのです

…」

信太は未だ荒い呼吸をつづけ、差しだされた分厚な掌をとった。彼は、こうした場合の儀礼に就いて一寸迷う。

だが結局握り返えすだけにすると、ソツと離して言うのだ。「神父さんのうしろ姿を見ている内、急にお呼びしたくなったのです。」「ホオ…」「全く神父さんは実に素晴らしい大股で歩かれるのですね。アツ、ほんとうに今、お急ぎしなっているではありませんか。」「イエ、ワタクシの歩き方、何時でもこうなのです。」神父はそうこたえると齒のぬけた口を一杯にあけて笑った。

そして側の軒際に身を寄せながら、信太へ真直ぐ視線を向けた。皮のサンダルの爪さきから遥しい素足の指がほこりに塗れてみえた。信太の眼はそれに注がれていた。

神父は仕方なく、相手のひろい額に視線を置くと、力強い声で言う。

「マア、アナタゆっくりお話ししましょう。ワタクシは別に急ぎの用を持っていません。シカシ他の意味ではワタクシはやはり大急ぎなのです。アナタ、世界には何億何十億という人類がいます。此の都会にだけでも三百万以上の人が住んでいます。ネ…シカシその殆どの人が一番大切な事に就いて何も知っていない。自己

のタマシイに就いて、タマシイに一番大事なイエスさまに就いて何も識っていない。だから皆ひとりぼっちで淋しそうにしている。くるしんでいる。ワタクシはそういう人に教えてあげたい。そういう一人、一人に出来るだけ速く教えてあげたい。シカシ、その人たちの数は実に多い。アチラにもコチラにも一杯いる。ワタクシは眼が廻りそうになる。ソシテ、ワタクシの心は大急ぎになる。……」

その時、信太が顔をあげた。彼は眼を細め凝つと相手を見詰めた。

「ついさつき、おれは此のカトリックの僧の内に壮烈孤独者を感じたのだが、それは勿論単なる誤謬に過ぎなかつたわけだ。全くどうして神父を孤独だなんて考えたのだろう。」 信太は微笑して言った。

「神父さん。地球上の全人類が一人残らず本当のクリスマスチャンになったとしたら、もしそう成ったとしたら、神父さんは一体何をなさるのですか」 マルチン神父が急に警戒する眼付で信太を見据え、身をひくようにした。面上に不快の色が素速く走った。実の処、神父にはこのみなりのあまり上等でない日本人に就いての記憶が充分明瞭になっていなかったのだ。がそれはホンの瞬間で、マルチン神父は直ぐ元の笑顔に戻る。「一人残らずが真に立派なクリスマスチャンに成る。この都会全体も、その四方に連なる村も町もスッキリ。更にその遙か彼方

の他州も他国もスツカリ。世界中、隈なく残らずが。」信太はやはり微笑して頷く。神父はそれを見ると叫ぶように言った。「アア、そうだったら、全くそうだったらどんなに良いでしょう。シカシそれは大変ムツカシイ事ですね。デモ、マアしあわせに実現したものと仮定しましょう。シカシその時にも、やはり人の子は絶えず、この地上に産声をあげるでしょう。ソシテやはり教えを必要とするでしょう。ダカラ、ワタクシ達の天職には終点がありません」

マルチン神父の面は誇らかにかがやいた。その時、信太はだが、低くわらいだしていた。彼は妙に弾んだ声で「そうでしたね、全くそうでしたね」と相槌を打った。

神父の眼がそれをまじまじと見、厳しい口が一文字に結ばれた。信太は依然弾んだ調子で、「つまり神父さん達は何時でも「永遠」を持っているというわけですね。結構です。ほんとうに結構です。ではさようなら」言い終らぬ内にもうクルッと身体を廻していた。神父は背を向けて歩きだした彼に、何か言おうとし、手をあげかけたが、そのままたれてしまうと、かぶりを振って立ちつくした。

午前七時五十分、信太は正確に古びた扉口の前に立つ。

そして十段たらずの階段を、いつもと同様にゆっくりあがっていく。階段も扉と同様ひどく古びささくれている。

それは彼のひとあし、ひとあしに音を立てきしむ。あがり詰めた最初の横の扉、その中がこの一カ月余、勤める南米新報の営業部なのだ。三個の机が狭い内部を有効にする為、それぞれ向きをかえて据えられてある。信太は片隅の机に近付くと、ソツと撫でて見る。かすかなほこりが肉の薄い掌に着く。すると彼はズボンのかくしからハンカチーフを取出し、机の上を丹念に拭うのだ。恰度真下に当る半地下室風の印刷部からは、二台きりの旧式機械がそれらしい規則的な従って幾分ものうげな騒音の繰返しを響かせている。印刷部の奥につづく植字、文選、解版等の室々からは職工の声がその合間合間を千切れ千切れに飛んだ。しかし営業部は未だ窓に近い大型机も、信太とは隣り合せになる戸口寄りのも一つの机も共にあるじを迎えない。信太は拭い終ると丁寧にハンカチーフをたたみ直し、椅子に掛けながら、

― だがもう直き特徴のあるあの重たげな足音があがって来るだろう― と考える。

― するとおれは待構えるように顔をあげる。だが足音は直ぐには這入っても来ないで、扉のかげで一歩止まる。沈黙：或る重量に耐えるいかにも重げな一歩が沈黙を破って踏みだされる。其処に現われるのはし

かし実に貧相で小柄な老人なのだ。二人は面を見合せ、同時に挨拶する。それは刷りたての印刷物のように、キチョウメンではつきりした発音である。勿論その事に何の意味も有りはしないのだが、どうかするとヒドク儀式めいた感じで反響する。老人は戸口に近い自分の椅子を、まず、こちらに向け代え、ゆっくりと紙巻に火を点ける。

細い腕と、弱々しげな、頸すじのあたりが不図した折、痛々しい感じで写る。その頸には、まるで不安定な感じの四角な皺ぶかい顔や、その腕にはそぐわぬ節くれだった不ざまな指の不均衡が恰も不幸の極印のように見えるからだ。言うまでもなくそれは、この小川老人の過去に於ける農業者としての名残りなのだ。

：：この国に於いて、日本移民の生活は、先ず奥地帯の百姓として始められる。移民輸送船に乗込むまでは戸々雑多な職業を持った人々。たとえば元軍人、元教師、元会社員、元商人と言った者、又なお、その他さまざまな技術修得者、活動弁士、香具師等に至るまでを含むそれらの多彩な一群。だがそれはブラジル入国と同時に農業者としてのみ取扱われる。例外は認められない。何故と言つて、それは初めから二つの国家間で決定されている事なのだから。おのおの此の国での生活は、だから等しくそこから始まる。つまり現在社長であるものも、その社員であるものも又職工やその他諸々

の職域にあるものも一括し、これらは以前に於いてま
ず百姓だったわけである。……が老人の場合、殊更感じ
られる痛々しさは、一切が完了の型で示されていると
ころから来るものに相違なかった。と言うのは、その不
ざまな両手の十指は、明らかに現在の職業から蔑視さ
れたし、その細い腕は過去の敗残の印に他ならなかつ
たからだ。しかし、老人自身は格別屈託はなさそうに良
く笑う。そして来る日も来る日も、おれを相手に飽かず
話の花を咲かす。

……「山野さん、俺のような年寄がこんな事を言うと
面妖しく聴えるかも知れないが、俺はいつでも一分さ
き、一秒さきを信じるんだ。ウン、未来の、だが最も確
実な「時間」をね。たとえば俺が何か仕事でしくじり、
部長の叱言を喰ったとしよう。だがその時俺の内部に
あるものは後悔、自責、不安、立腹なんかじゃなくて一
秒さきの未来に対する確信なんだ。確信と言って不可
なければ「不信」と言い代えてもいい。そして俺の一
番気に入りの格言は「人間万事塞翁が馬」というアレ
なんだ」：

……「山野さん、だが考えてみれば人間の智慧なん
て、何千年来、一寸も動いてはいないようだね。だって
……そうじゃないかね。むかしむかしのシナの辺境の
名もない老人の思想が今でもやっぱり真理なんだから
ね」……

だがこの言い方は間違っている。老人の見方は逆なのだ。しかしそんな時、老人の眼は寧ろ一層楽しげに潤む。

…：「山野さん、俺はホントに子供運が薄くてな。生きていたら、あんた位いの年恰好の息子もある筈なんだが、結局たったひとり残った娘の夫婦に、俺とばあさん、それに小つちやいのが三人、不便な狭い借家に住んでいるが、それでも俺はしんから満足しているんだよ」
…：

そんな時の老人は、眼鏡の奥の小さな両眼をひからせ、一途に力む。部長の友井の話では老人の婿というのはイタリヤ系伯人で、町工場かなんかの職工らしい。こうして「万事塞翁が馬」は老人の口から或る時は歌うように、又ある時は呪文のように、日に十ぺんは繰返される。

…：「ナア、山野さん、たとえば俺が帰りの電車を一あし違いで、ホンの一あし違いで乗りそこねたとする。ネ、だが、そのお蔭で遇うかも知れない交通事故から免れる事だってあり得る。何も交通事故なんていう大袈裟な事でなくたって、その一電車遅れるお蔭ではあさんのムシヤクシヤが、恰度治まった時分に帰り着けるかも知れないのだ、ネエ…」…：

だがそんな時、どうかすると友井が這入って来て、まぜ返えすように口を入れるのだ。

…「小川さん、しかしその一電車逃がした為に、山ノ神に角を出される事だつてあるぜ」……

老人はすると、額の雛を一層寄せ、頑固に腕を振つてさえぎる。

…「そこがそれ、「塞翁が馬」なんだよ。ナルホド一電車逃がす事はそりやまあ一つの不運さね。だが其処で兎に角不達のなりゆきを凝つと見詰めるのだ。よしんば尚更に不運が引つづき見舞つて来るとしてもだ。更に更に重なつて来るとしてもだ。すると、いつかはそれが向きを変え始める。」……

…「だがそのいつかが最後まで来ず終いの事だつてあるぜ。」……

友井が皮肉なわらいで言う。すると老人はもう気弱そうに半ばおれへ向つて呟くのだ。

…「そりやそういう場合もあるかも知れない。いや、そういう場合の方が多くくらいかも知れない。だが…ヤツパリ最後まで待つ事は出来るのだ。ネエ山野さん。」

おれは老人へ微笑を送る。そして領いて見せてやる。全く、友井にとって観念は最も無意味なものの一つなのだ。が、そう言えば、小川老人も亦同様にそうなのではないか。老人は確かに或る思想らしいものを持ってはいる。だがそれは若し、思想が一個の物体であるなら、老人の影法師はきつと、それを荷物のようにぶらさ

げて写るに違いない、と思われるような持ち方でなのだ。おそらくいつになっても、老人と思想とが一体となる事はないだろうし、だからその影法師が手ぶらで自由になる事もないに相違ない。おれは微笑しつづける。そのようにしてまず一日の仕事が始まる。

午前八時、あの重い足音が階段をきしませた。……

八時二十分、部長の友井が席に着いた。……

彼は来がけに郵便局から受取った通信物を折り鞆から手荒くつかみだす。それを見遣りながら、小川老人が眼鏡をせりあげる。そして山野信太は帖簿をひらく。彼等の仕事は、先ず広告原稿のわりあて、と校正に始まり、発送帖簿の整理から、カード類の書き換え、外務員及び購読者への通信や更には料金督促の為のそと歩きにまで及ぶ。そして全ては、友井の鞆の中の郵便物から開始されるのだ。

やがて片っ端から開封しだした友井が、ついに最後の一通を覗き舌打した。幾通かあった書留の中からさえ、一枚の小為替も出なかつたからだ。

「相変らず今日も不景気だな」友井は一寸誇張した太息をする。この十日余り、発行部数五千足らずの社の会計は枯渇している。従業員は絶えず小額の伝票を要求する。前月分の給料が未だ支給されていないのだ。

―全く、社長は何をしているのだろ―

友井は壁越しに隣室の気配を窺った。小川老人がそれへ首を横に振って見せた。友井は又舌打した。……

その社長室とするされた扉は、十時過ぎても十一時近くなっても、ついに開らかず終いだ。友井は諦めたように椅子を立った。それから不図思い出したように、信太へ言った。「ア、そうそう、君は黄順元氏と知りあいだそうだね」「え？」信太は、友井を見上げ、かぶりをふった。「面妖しいな、今朝途中で先生に逢った時そんな口ぶりで言っていたがな、まあいい。兎も角、めしの後で行って見てくれ給え。先生の事務所へね。リベラー街だ。何んでも一寸した広告をしたいのだそうで、君は「お名指し」なんだ。それから広告代は出来るだけ前金で貰って来てくれ給え、君たちにも廻すからね」それだけ言うと友井はセカセカと出ていった。

……十一時……十一時五分、

――社長は今日も、来ずじまいかも知れない。そして勿論、月給の方はダメなわけだ――

信太は帖簿を閉じながら、間代を待兼ねているに違いない止宿先の老黒人夫婦を思い浮べる。それへ四日前から食券切れになっている福助食堂のあるじの顔が重なる。

彼は苦笑する。だがそれだけだ。彼は屈託のない調子で呟くのだ。

――全く、恰度いゝ按配に今日は腹も空かない。する

とその声に小川老人が「え？」と言つて面をあげた。一人言と知ると直ぐまたもとの姿勢に戻り、ペンを走らせた。少し前から印刷機の音も絶え、二、三度人の濁声が聴えたのを最後に、下は急にヒツソリした。社長室の更に奥の編集部も翻訳の泉田が―友井と前後して出ていき、後は無人にシンとしている。そうした中で老人の走らすペンの音だけが弱くあたりに軋みた。信太は凝つと耳を澄ます「静寂」が意外な深さで感じられた。彼は一瞬その深さに身を委した。その時、小川老人が不意に手を休め、信太の方へ言った。「そろそろ安川さんの来る時分だね。」

安川たか子は南米新報社営業部の窓硝子の反射に眼を細め、道路を横切ろうとしていた。彼女はこれから自分が果そうとする役割に就いて熱心に考えていた。彼女は昨日以来、殆どそのことだけに熱中していた、と言つても良かった。それは彼女自身にも納得できないほどである。

「あたしが一つ事に、それも――他人の事にこんなにも真剣になるなんて、オカシイ位いだわ。――」

彼女はほこりっぽい階段の下でそんな風に考える。安川たか子はR・K・Kラジオ日本語担当のアナウンサーなのだ。毎日午後一時から三十分間の受持プログラム中のニュース原稿をきまつてこの時刻に取りに采

るのだ。

彼女はもう慣れた軽い靴音で一息にあがる。いつもなら莫直ぐ奥の編集部に通るところである。だがきようは彼女はまず営業部の中をうかがう。待ち構えていた小川老人と顔が合う。すると彼女はマイクrofオンの前でのように声を張り、明るくわらった。「おじさん、こんにちわ。」勿論老人も負けない位い元気でそれにこたえる。たか子は一旦奥に入ったが、直ぐ足早に戻って来た。原稿紙が彼女の手の中で筒にされ、指揮棒のように軽く泳ぐ。

彼女は這入りざま、「山野さんこんにちわ。」と真直ぐ眼を向けて言った。それはかつてない事なのだ。上着の袖に手を通してかけていた信太は一寸あわて、老人の横に立ったか子へ挨拶を返した。小川老人はそれを見ると、意味もなく嬉しげに、たか子の顔をふり仰いで笑った。

「安川さんはいつも百燭光のように明るく陽気だね。」

「あら。だって……おじさん、陰気にじめじめしていたって仕様がなないじあないの。」彼女は相変らずの声音で、やや蓮つ葉に応える。「まったくね、だが……」老人はやはり彼女を見上げ急にまじめな口調になる。「……俺は時々思うんだが、ソノオ、あんまり上機嫌な笑いなんかみると、そういう人間の内心は実は一寸も嬉しいんでも可笑しいんでもなく何か……そう！虚無思想み

たいなものがあるのじゃないか、とね。だから安川さん、あんたが何時でもきまって、朗らかに快活に、振舞っているのを見ると、俺はかえって、あんたが一人でいる時の様子に気がなくなって来るんだよ。」立ったまゝ信太は一瞬、たか子の眉がひそめられるのを見る。だが次の瞬間、彼女はもう明るい表情で歌うように言う。「まあ、おじさんは大変な心配性なのね。そしてとても親切なのね。でもあたし一人限りでいる時でも、やっぱ一寸も変りませんわ。あたしはいつも歌っているの。でなければ純金のブローチとか、ダイヤの指輪とか、素晴らしい毛皮のオーバーとかつまりそんな物について、考えるの。其れから「明日」の事も少しばかりね。ほんとに単純なものですわ。おじさんのご想像になるような、例えば「暗い眼」なんかだからする事ありませんわ。オ・ア・イ・ニ・ク・サ・マ。」彼女は弾けるように笑う。その笑いをまるで掻きわけでもするように両腕を高く泳がせ、首をのべて老人は言うのだ。「それそれ、今、あんたは自分で自身を単純なんて言ったが実際単純な人間は決して、そんなふうには言わないものだよ。ねえ、俺は歎かれない。第一どうしたってそんな筈がないのだ。それからあんたは「明日」を考えるって言ったね、それはいい事だ。がそれもどうも本当とは思えない。あんたのようなひとが「明日」と「ダイヤ」しか考えないなんてーほんとに安川さん。「明日」を考えるのはね、

子供の時分か、それかこれは一寸妙な言い方だが、「明日」のなくなってしまうたつまり俺のような年寄なんだよ。」「では、あたしには「明日」を考える権利はないの。」「そうなのだ！」小川老人は声を張り力んで断定する。「…あんたや今、此処に立っている山野さん位いの時代には「今日」だけがあるはずなのだ。其れ位い「今日」が充実している筈なのだ」信太はその時或る耐え難いものを老人に感じた。しかし、全く熱し切ったその横顔に彼は不図わらいだしてしまふ。「小川さんはズルイな、確かにズルイですよ」老人はびっくりし、幾分、非難のいろもこめて信太を見る。それへ彼はつづけて言った。「小川さんはつまり、「明日」に焦れていられるのですね。しかもそれを一手販売にして、安川さんやぼくなどには断じて、許そうとしないのですからね。なるほど、ぼくなんかの年恰好で「明日」に焦れかかったりするとしたら、誠実な生き方とは言えないかも知れませんが。しかしそれにしても「明日」を許可しないのはひどすぎますよ。それからこれが一番重要な事ですが、小川さんと安川さんとは使う「明日」の意味もそれぞれ違うようですね」信太は老人とたか子とをかわるがわるに見た。…というのは、ぼくの考えるところでは、小川さんののは常に確実に遣ってくる「未来」としての明日ですが、安川さんのは、いつも「明月」としての未来らしいのですからね。小川さんは明日がくをとひとまず

其処で息を抜き、それから又、明日を待つ、といった具合ですが、安川さんののは、全く休息のない明日というわけなのでしょう。そういう「明日」にはやはり耐える努力が要りますね。簡単にイージーとも言えませんよ」小川老人はその間、困惑したように四角な顔をあからめ、眼をしぼたく。「俺が「明日」に焦れ掛かっているって。そんな事はないさ。俺は「今日」を信用しないように「明日」だって信じない。山野さんはそれを知っている筈じゃないか。債の考えているのは何時だって明日の「明日」なんだ。……」言いながら不図口をつぐむ。頭の中で彼我の立場が錯綜し、クルクル廻る。

―どうもまずいことを喋っているらしい。眼がうるたえ、急に言葉がつづかない。沈黙の中で老人の困惑はいよいよ脹れる。それへ安川たか子が、もうすっかり平常の調子ですかさず言った。「ではおじさんの「明日」も山野さんの謂う、あたしの明日と、どうやら一致したわけね。唯、結局、おじさんはケチンボオなのだわ」「これはおどろいたね。いや、どうもひどい事になったね」老人は仕方なく、わざとおどけた顔になり、そうして、たか子と一緒に笑い出す。その老人へ信太はやはり笑いながら「では小川さん、お先きに」と言って二人の側を通りぬけた。すると意外にたか子も「あたしもそこまでまいりますわ」とつづいた。「山野さんさつき友井さんの言っていたアレどうぞ頼みますよ」階段を降り

る二人の背後に、はしやいだ老人の声が飛んだ。

戸外に出るとたか子は信太と肩をならべるようにし、そのよく光る細い靴先を勢いよく前へ伸ばした。信太は一瞬歩調に戸惑い窮屈げな顔をした。が直ぐそういう自分を滑稽に感じる。

「全くこんな風にこだわるなんて、その事自体、実におかしい。と言って又、少しもこだわりを持たないと言ったら、それも同じくらいおかしいのかも知れないが……」此の思考は彼の微笑を誘った。信太はならんで行く相手を見た。その時、安川たか子が歩調をゆるめず、真つ直ぐ前方を向いたま、で言った。「山野さんは、砂田かづえさん、ご存じなのでしよう。あたし、あの方とはちいさい時分からの友だちですの。そして……昨日ある人から偶然、山野さんの事も聴き、一寸驚きましたの。」

それからあたし一度お話してみようと考えましたの」信太は、唯探るように眼を相手の横顔へ向けた。たか子は遙か前方を凝視し、寧ろ足を早やめた。信太は暫く次の言葉を待つ。彼女はだがそれきり口をとぎすどますます足を速めた。横顔が何となく蒼み、こわばって見えた。

二人とも押し黙ってサルテ街を進んだ。やがてマリヤ広場の木立が見えだす。どちらにも其処に着くまでと

うとう口を利かない。陽は強く明るかった。二人は中の木蔭に立つ。火曜日の正午のベンチは幾つも空いている。だが二人とも掛けようとしなない。かみ手のセエ寺院の尖塔に十字架がきらめく。たか子はそれへ眼を細め、吐息した。「……砂田さんがもうずっとメイリンクにいらっしやるのはご存じでしょう。あたしが、お逢いしたのは去年の八月末で、恰度あたしが、いまの職業（しごと）に就いて一週間目の事でしたわ。あのひとは修道院付属の幼稚舎の保母さんをしているとかで、その日も教材か何かを購めに出て来られたのらしく、大きな黒い布鞆を重そうに下げていました。服装は粗末な紺サージだったと思います。その故か頬は幾分、こけてみえました。けれども 眼は深くきれいに澄んで、そして絶えずほほえんでいましたわ。でも、あたしは話しているうちに「このひとはメイリンクで少しも生きていない」と考え始めました。あ のひとの非常に落凄いた声音、静かな眼いろ、そして微笑、そわどれにも結局あのひとは不在なのです。だのにあのひとはやはりほえみつづけているのです。あたし は殆んど我慢できなないものを感じ、急に意地悪く「ご幸福？」と問いかけていました。するとあのひとはまるで少しの疑いも持たない口調で「えゝ、幸福ですわ」と答えるのでした。……たか子はそこまで言って相手を見た。

信太はしかしさつきからずっと面を伏せていた。た

か子はひそかに深く呼吸する。それから不図口調を変
える。

「山野さん、あたしたちのむかしの面白い話、して
あげましょうか。みんな未だ二十才前で、ルツシイラ植
民地 にいた頃の事ですわ。町の洋裁塾に通う同年配
の特に親しい何人ががいたの。ところでこのグループ
はいつからか皆、自分自身を患者と考え始めたの。勿
論、あたしも砂田さんもその中の一人。何故って、……
結局つきつめれば皆「不幸」が無性に恐しかったのね。
不幸が結核菌と同 じくらい、至る処に充滿し狙って
いるように感じたのね。

で少しくらいの「不幸」なら来ても驚かないですむよ
うに肺結核と手を握ったのだわ。つまり肺結核を不幸
の免疫菌に見立てたのだわ。恰度、良い按配にこの病気
は若い娘たちに似合ったし、最も都合の良い事に、たい
てい我が儘がこれを楯に正常化できたし……でしま
いには皆晴着でも自慢するように自分こそ一番ひどい
症状にあると確信し主張し始めたくらいだわ。滑稽ね」
たか子は神経質に短くわらった。「……狡猾と言った方
がもつと本当かも知れないわね。不潔な思想だわ」彼女
は眉をよせ吐き出すように言った。「……それが十年前
のあたしたちだったの。ところで不幸の処方箋には肺
結核で良いとして「幸福」にはそれでは何がいゝでしよ
う。幸福。人を傷付けるのは、かえって何時も幸福なの

かも知れないのですものね。幸福の「拒絶」がそこで考
え始められるのですわ。砂田さんはつまり其処に立つ
て微笑を続けているのですわ。あたしはあのひとに向
かってもう少しで「意気地なし！」と叫びそうになっ
たのを思い出します……」

信太はだが依然首をたれていた。たか子は重い溜息の
ように繰返した。「結早……意気地なしなのですわ。結
局、みんな意気地なしなのですわ」思いがけなく信太が
眼をあげて言った。「かづえさんを支えているも

のは、それだけなのでしょうか。たとえば信仰は？・」
「あのひとの神は、あのひとに対しそれほど絶対では
ない筈ですわ。そしてあのひとの支えが「幸福」に対
する「不安だということも同時に確かな事ですわ。あの
ひとはそういうひとなのです。あのひとの姿勢は、いつ
もうしろ向きなのです。そしてあのひとは、その支えに
なっているものを「痛手」と呼びますが、その痛手は
決して、あのひと自身の疵においてではなく、予想の中
の、つまり一つの仮定に過ぎないのです。しかし、あの
ひとは その痛手を寧ろ信仰のように取扱い、古びさ
せないためにそれだけを見詰め、それだけを両手の中
で温めます。

しかしそれにも拘わらず、やはりあのひとは何も見
詰め てはいないし、手中に何も持たないのです。と言
うのは 結局、痛手など受けた事実がないからです。あ

のひとは 相変らず無疵なのです。でもあのひとは、それを承服し ません。そして確信に充ちた微笑を続けるのです。…… 若し、誰かが不意にあのひとの耳元へ「あなたは無疵だ とささやくなら、きつと眼を見張って驚くに違いありません。それからきつと憤るに違いありません。メイリンクでのあのひとの七カ年は要するにその思考だけで支えられて来たのですから。……でも、何時か、誰か、それを言っ て遣らなければなりませんわ。それが真実というものですわ。そしてそれには山野さん以上、適格者はない筈ですわ」相手の一句一句にふれ、信太のこゝろは濃淡の翳りに揺れつゞけた。

― この女は当時の真相を知っているのか。真相のすべてについて熟知しているのか。― しかし結局彼は何も質そうとしない。

― それは遥かに遠退き過ぎた。あまりにも遙かに……だがこの安川たか子はまるで距離というものを念頭におかず、へだたった二つの「時」を直ぐにも結合出来るものと考ええる。手さえ延せばとゞくものと考ええる。だが・・「かづえさんはいまでもメイリンクにいるでしょうかね」「言うまでもない事ですわ。砂田さんが彼処を「動く」ということは全く考えられないことですわ。あのひとはもうずっと以前から意志すること、極度におそれて、他人の意志でしか、動こうとしないのですから」「しかし、たとえあのひとがそうであっても、

ぼくにはやはり力が無すぎますよ。……それに、どうして兎も角、平穩に安らいでいる人のくるしむかも知れないような事をわざわざ言わなければならぬのです？」「それは砂田さんに「生きて」貰いたいからですわ。あたしはあのひとに「生活」を取り戻してあげたいと考えているのです」

たか子が斬り返えすように鋭く言った。あたりに憩う人や中の小径を行く人の眼が時々立つたままの二人に注がれる。「だが、かづえさんが常に「指令者」を待つ側の人間だからと言って、それは「生きていない」証拠でしょうか。誰もそうですが、もし自己の判断が誤まりばかり繰返えすとしたら、ついには一切の判断をなげだしたくもなるでしょう。そういう時、人は、非我的確信一充ちた指示を希んだりします。勿論、それは怠惰とよばれても仕方のないものかも知れませんが……。しかし

又、一面功利主義的な見地からすると、自己の判断なんかより、他人の、殊にその複数の何かの組織、そうしたものの、判断に拠った方がずっと賢明な場合があるものです。かづえさんの場合にしても、若しあのひとが自身自身の意志に基づき、他のどんな職業に就いたとしても、きつとその保母役以上に有益ではなかったかも知れませんが……。幼い多数の子供たちを毎日、定った何時間か面倒みる。そして唱歌の一節ずつでも教える。これ

以上に確実なしごとは一寸ないかも知れないではありませんか」

信太は眩しげに頭上の陽を仰いだ。それからゆっくりとあたりを見廻わした。樹木の線が不図ここに沁み

た。

彼はふっと微笑を浮べ語を継ぐ。「それに判断、判断には何時も必ず責任が付きまといますね。だが組織の中では其の所在が曖昧になる。殊に宗教的なそれの中では殆ど「不在」に近い。と言うのは判断は、其処では意志に依ってではなく「愛」に拠って下されるからです。そして、その愛は……勿論、神につながるものと確信されている。其処では結局のところ、責任者はいない。だが兎も角常に確実な仕事が其処に行なわれる。其処では誰もが落着いており、誰もが、それぞれの居場所で疑がわないようだ。……それは「生活」とは全然別のものでしょうか」

安川たか子は、相手をもう殆ど憎悪の眼で見据えた。彼女は精一杯の調子をこめて言った。

「あ、山野さんはとても雄弁家なのね。でもあなたは唯、喋っているだけですわ。唯のお喋りですわ。あなたはお自分の言葉に何の権威も感じることは出来ない。いえ、そうだわ。そして山野さんあなたは、やはりメイリンクに、おいでにならないのですわ。何故って……あなたはご自分の判断よりも、他人の、殊に

その複数の判断を一層信頼なさるのでしよう。でしたら、これはあたしとそれからあなたもご存じの筈の斉木さんと二人の、一致した「判断」なのですから」たか子は甲高い声でわらいつづけた。その笑いが信太の胸を打った。

彼は相手をいたわるように、自分も合せて笑いながら「斉木、ホオ、斉木が……そうですか、なるほどこれは確かに論理的ですね。実に論理的ですね」と頭をふった。

マリヤ広場は南北へ方形にひろがり、街路はそこから八方へ伸びていた。両側の地方裁判所と大寺院とは共に重々しく建ち並び、そろそろ反対側の方へ蔭を拡げ始めていた。東側に連らなる各商店の飾窓は強い陽差しの中で反射する。たか子は大寺院と裁判所とに狭まれる陽蔭の短い街路を足ぼやに通りぬけ、クローヌ広場のバスの発着所に立つ。彼女はずっと山野信太の言った言葉の意味を追い続けていた。

「あたしは決して負けはしなかったのだー彼女は強く唇をかむ。

「あたしは「自分の生活」に就いて言ったのに、あの男は唯「生活」に就いて話した。彼は巧みに問題をすり代えたのだ。あたしにとって、重要なのは「自身」の生活なのであって「何かの為」の生活ではない。あたしにとって意味を持つのは唯、幸か不幸かの、

はつきりした感覚なのに、彼はそれに触れず避けた。そして仕事の実りだけについて話した。が「生活」とは決してそんなものではない。「生活」はいつも自己自身を持つことによって生活となる。生き生きと在り始める。だから、あのメイリンクの神父が修道院のために生きるように、又あのドナ・リイザが伝道婦養成所のために生きるように、砂田さんが幼稚舎のために生きるのを、あたしは我慢できない。……あのひとは絶えず微笑した。あのひとはその微笑を確信した。があのひとの微笑には、何の必然もある筈がないのだ。あのひとの現在には「しあわせ」も「ふしあわせ」もない。だからあのひとにはどんな表情の必然もないのだ。……要するに微笑は、メイリンクがあの一とに与えたマスクにすぎない。あたしの快活が一つの仮面であるように、微笑は、単に仮面にすぎない。

しかし、あのひとはそう考えない。あのひとは疑わない。あたしには、そうとしか思えない。それがあたしを耐らなくするのだ。――

たか子はやがて来たバスに乗る。バスは往来の激しい都心を大胆な速度で滑りだす。

――五分間、バスは直ぐR・K・Kラジオの前に停るだろう。ホラ、もうその水色のビルディングが見えだした。ぐんぐん迫る。

たか子は下車のベルをおした。垣もなく、ゆったりと

開放的な芝生の中央に、十一層の明るいコンクリートが其直ぐそびえ立つ、――

―― 幼い夢の中の、積木細工に似た水色のビルディング。その十階であたしは毎日、午後の定った何十分間かを過ごす。そこである気安さを覚える。だが……はじめ、此処に来た時には……あたしは……恰度、このあたりで立ちつくしてしまったのだ。この建物があたしにあまり明るすぎたせいだ。その中に這入るには、あまりに心が暗すぎたせいだ。八年前の……あの日から、やつと辿り着いたその場所で、あたしは歯をくいしぼるようにして立ちつづけた。そしてやつと、自分を持ちこたえた。そして、玄関に向ってあしを踏みだした。そして、翌る日から、日に三十分間のアナウンサアに成り澄ました。……

―― たか子は昇降機を出ながら腕時計を覗いた。まだ時間には少し間があつた。彼女は控え室に這入り、電話の受話機を取った。63・3336「ジヨルナル・A S A H I ? ……」

齊木二郎は取次に出た田口に呼ばれて立った。その耳にたか子の声が流れる「安川ですわ。いまマリヤ広場で山野さんと別れて来たばかり」「……で、どうでした。どういう風に言っていました」「だめ、皆ずるいから。でもきつと近い内、メイリンクへ行くようにして見せますわ。齊木さんも一度お会いになつては」「……」

いや、僕はもう少し様子を見てからにしましょう。ところで、あんた達、全くお互いに識らなかつたのですか」「ええ、一寸、不思議みたいね。多分「かけちがつて」ばかりいたのね。ではまあ、ご報告まで」「あ、たか子さん、今日都合のいい時間、マリヤ広場まで来て呉れませんか」「そうね……」「いいでしょう。例の処で待つ事にするから」「……では、夕方頃……」「きつとですね」

齊木は受話器の掛けられる音を聴きながら、凝つとそこに立った。

……山野……メイリンク……砂田かづえ……ルツシイラ。それら一連の名詞が未だ残る安川たか子の声の中で明滅した。

――山野、彼は彼自身であることからの逃亡を企てているのではないか。でないとしたら、俺たちむかし仲間の誰をもさける彼の遣り方は納得できない。そして若し、そうだとしたら、彼との出会いは邂逅というかたちを持つのが一番よさそうだ。――

齊木は鈍い動作で机に戻ると両肘を突き、宙を見据えた。

――……かけちがい。かけちがいは至る処で繰返えされる。それは全く、一つの偶然に過ぎないが、しかし一度かけちがつた二つのものは恰も一定のメカニズムに従うように、無限にかけちがいを重ねてゆく。しか

も、それは偶然に過ぎないのだから、どう力んでみようもないのだ。その上、偶然は運命と同じ位い気まぐれで運命と同じ位い頑固でもある。つまりそれは運命そのものなのだ。そうして、山野と俺、安川たか子と砂田かづえ、この四人の運命は恰度あの日を境に急激に狂い始めた。

一九四五年二月十日、砂田かづえはルツシイラ植民地A部落の家で珍しく朝からミシンに向った。

一九四五年二月十日、安川たか子はルツシイラ植民地B部落の自宅に、サンパウロの学園から帰省中だった。一九四五年二月十日、山野信太は州北東部の旅を終え、サンパウロ帰途の列車内にあつた。

一九四五年二月十日、斉木二郎、即、俺は所用でルツシイラを後に隣り郡へ向った。

一九四五年二月十日、タピライ市所在、州警兵大隊は突然、四百余の一隊を出動、二十キロメートルを距てるルツシイラ植民地全体に徹底的、家宅捜査を行った。

意図するところは、同地日本人家族一千余の隠匿すると推定する銃器、刀叙類の押収にあり特にこの日が選ばれたのは、紀元節を翌日にひかえたことに因った。部隊は緑色のトラックを連らね、先ず市街地区に入ると、そこから数十手に分れ、一斉に行動を開始した。植

民地全体が忽ち暴風下の枯草の様相を呈した。加うるに日傭労働者として、同地域にあった一部、伯人らの密告、はては搜索参加がなされたため、混乱の度は一層増した。それは正午より約七時間にわたり続行され、日没後、黄昏の下を部隊は意外に少数の押収物をまとめて引上げていった。この変事はその夜のうちに近隣に伝わった。翌朝一番のバスで戻った俺の眼に、だがルツシイラは案外平静だった。しかし、それは勿論うわべだけ下恰度その時分から、諸部落における搜索の様がヒソヒソと語り始められる。そこでこのさまさまな哀感、殊にある種の悲惨が好奇の心に乗って風よりも速く伝えられる。

二月十二日、安川たか子は既にルツシイラから姿を消していった。

同十三日、夕刻。思いがけない山野の来訪。彼はサンパウロ市から二十時間近い汽車の疲れに、みじめに顔をゆがませて立った。

同十四日、砂田かづえがある地方の親戚をたよって旅立った。

この三人はその日から今日まで、ついにルツシイラには戻らない。砂田かづえがメイリンクへ移ったのは、それから程なくしてだったらしいが、たか子のその後の消息に就いては殆んどが灰色の幕のむこうだ。勿論

彼女は学窓に戻ったのではなかった。……彼女がふたび俺の前に現われたのは、ようやく、この半歳たらず前だ。しかもやはり俺にとっては依然灰色のむこうの存在なのだ。

斎木は二本目の紙巻を灰皿になげると、大儀そうに椅子を離れ、中庭に出たりふかく澄んだ空に幾つかの雲が浮んで動かない。斎木は不図このように雲を見ることの久しぶりなのを感じた。彼は身じろぎもせず立つ。すると心に「幸福」の二字が浮んだ。

―「幸福みんな誰もがそいつを眼の色変えて追いかける。だが厄介なことにそいつは容易に掴めない。しかも一層厄介なことに、追う幸福の意味が一人一人まるで違う。―

斎木は無言でそこをあるく。一、二、三、四、五、六、七、八歩。一、二、三、四、五、六、七、八歩。其処は高々、四坪たらずの空地に過ぎない。彼は直ぐ壁に突きあたる。腫をかえす直ぐ又、も一方の壁に突きあたる。だが彼は依然あるきつづける。あるきつつ、早朝旅客機でリオへ発った中田の言葉を思い浮べている「憂鬱だね」

中田は持ち前の大きな眼球を動かし、編集室の皆を見廻わし、わらいもせずと言った「憂鬱だね」斎木はその言葉をかみわけるように胸にくりかえす。今までとは

別のだが同じように重い感情が又、一杯にひろがる。

―中田がリオ・デ・ジャネイロへ飛んだのは明朝入港予定の母国船S丸を待機するためだ。そのS丸が乗せて乗る終戦後初の契約家族移民（近親関係の呼寄方式に拠らざる純然たる雇傭移民）十八家族、五十四名の同胞に、インタアビユウするためだ。同じその飛行機で新報と、ブラジル時事の記者も飛んだ。P・A・ラジオ日本語担当のアナウンサーも録音器を抱えて飛んだ。が……

おそらくその明日あたり、新来の同胞は、過去のどの移民もがそうであったように、彼らがその日までに心にながき育んできた「ブラジル」の最後の仕上げに大真面目でいるだろう。これとインタビユウする記者やアナウンサーは彼等の「ブラジル」を毀す権利がないし、又、その意図も持たない。要するに出来るだけ面白ろ可笑しく新来移民の持つ「ブラジル」を原稿紙やテープに写せばいいのだ。それは興味あるニュースとして直ちに活字または電波となつて、伯国各地に散在する数十万戦前移民の上に撒きちらされる。だがつまりは唯それだけの事だ。これら新来の同胞が未だ本来の目的地であるアマゾンニアに到着もしない内に、もう一般の関心は他へ移る。

新来の同胞がやがて自分達の「感違い」に気付き始める頃、それは単なる笑話として時折想いだされるだけ

だ。

そうして勿論それつきりだ。新来の同胞が自分達の「ブラジル」をすっかり失くし、現実のブラジルの内で途方に暮れる頃、人々は殆んど彼等のことなど思い浮べてもみない。――

斎木はなお歩くことをやめない。靴音が彼を追い立て、彼が靴音を追う。

―― 新来移民はひとまず、リオ港外れの小島にある収容所で到着かぬ日を送らなければならないだろう。そして内国航路の汽船にやがて便乗してからでも、目的の地に着くまでには、なお屈託の多い船中生活を、更に二十日間は続けなければならぬだろう。沿岸通いの二、三千トンのその船は、まるで故意のように小さな港の一つ一つに、ゆつくりと寄港し、それからアマゾン河口に入る。ところで、目指すP港は河口から更に一週間の遡行日数を要する流域にあるのだ。其処においてはじめて彼らの生活が始まる。

「憂鬱」を感じるのは、だがそのことのためばかりではない。彼らの行手がこの国で比較的発達を示すサンパウロ州内でなく、不便、未開発のアマゾンヤ州だからといって、それが理由の全部ではない。中田が憂鬱を感じ、俺が憂鬱を感じ、そして多少まじめに考えるならば、誰もが一種のやりきれなさを感じるに相違ないのは、単にサンパウロとアマゾンヤとの比較においてなんか

ではない。むしろ、これらの同胞がこの国の最も至便な、最もゆたかな何処かに配属されたとしても、否、否、他のいかなる国のいかなる「所」に配属されたとしても、結局のところ、失望は予定されている、という認識からなのだ。

斉木は黙々と編集室を通り抜け、外への通路を進んで行った。

マリア広場の東側より始まるスタール街からやがてリベラール通りに入りながら、山野信太は低く、「幸福」と呟く。電車、大中小さまざまな型のバス、自動車、スクーター、そして人、人、人。リペラール街の通りは、ひっきりなしに展開する。その片側を一定の歩度で歩きながら、まえよりも一層低く、も一度くりかえす。コ・ウ・フ：ク。ー 幸福、それはだが何という魅惑的な響きを持つ言葉だろう。しかも又何という紛らわしい曖昧な言葉だろう。ほんとうに幸福という「物」など何処にもありはしないし、嘗つてあった例しもない。だがみんなそれに騙される。幸福とは「満足」の総称に他ならない。それは渴えている時の一杯の水や、飢えている時の一膳のごはんや、清潔な寝床や、玩具やチョコレートや、又宝石や毛皮や香料や、要するにそういう一切合財を含む抽象名詞に過ぎない。「幸福」はそれ自体何も

もたない。

その癖、人間の満足感に嫉妬し爪を立て、そこに安住することを許さない。人間がようやく何かを掴み、「満足」にひたろうとすると、其奴は忽ち耳元へ来てさ、やうく「そんなものは幸福とは違う」・「幸福」とは詰りそういうものなのだ……又、「幸福」は常に飾窓の硝子越しにあるともいえる。つまり非所有として存在する。そして不幸はその非所有へ傾斜する心の度合によつて決定する。安川たか子、彼女はその傾斜する心の重さに自己の生活を感じとろうとする。彼女にとって、存在は幸か不幸かのいずれかでなければならず、どちらにも属さない在り方を彼女は決して肯じない。彼女の思考の内では、人は笑うか泣くかしなければならず、微笑は存在しないものゝようだ。そしてその彼女自身は不幸だ。……ところで幸福は依然として空虚なのだ。したがつて一旦、そのまやかしを剥ぎとつてしまえばええしたら、求めるものがいかに身近かにいかに確実にあるか、分る。それは一つ一つが間違いない手応えで存在する。それは一つ一つが明晰な意味を持ち、一つ一つが実にいい。毎日同じあしどりで同じ階段をきしませてあがる、あの繰り返しもいいし、小川老人の饒舌もいい。良くすすがれたシャツとハンカチーフもいいし、又一皿の熱いスープもいい。そのむかしピルロニアンの武林無想庵は「天金」の一隅で幸福に舌鼓打ったが、おれは

サンパウロの安食堂で毎日幸福を実感する。おれが「幸福」に欺されるといふことはもうないだろう。従つておれは幸福だ。：しかもおれがなおメイリンクを訪ねようとしなのは、幸福の意味が全く個人的であるという了解からなのだ。 —

信太はあるビルの前で止まった。かくしから紙片を取り出し番地を確かめると中に這入る。一、二、三、四、五、彼はそれらの数字を順に見送つて昇る。：六、七、八、九、彼は昇降機を出ると扉番号を見上げながら進んだ。九〇五号室、扉の把手が光る。彼は軽くノックして押した。

開いた室内には椅子の寄せられた大型机が人気もなく彼の眼に入る。と片隅の衝立の向うにかすかな気配がし、三十過ぎの陰気な男の顔が覗いた。「南米新報の山野ですが：」その男はだが暗い翳のある表情を少しも変えず大儀そうに二、三步進みながら、「黄さんは留守ですよ」と低く不明瞭に言った。いかにもなげやりな飽き飽きした調子だ。信太は微笑した。そして軽い唱うよくな巳調でくりかえすのだ。「しかたがありません。全くしかたがありません。ねえそうじゃありませんか」信太があっさり踵を廻らそうとすると、男がそれへ言った。「あ、五時頃も一度と言う事でした」けだるい前と同じ調子でだ。：：：やがて信太は幾人かの中に混つてビルからはきだされる。彼はついさつき来た路を来

たときと同じ歩調で戻る。通りすがりのBARの電気時計が午後一時十分をさしている。覗く彼の顔が壁に族め込まれた鏡面に写つる。痩せて頬骨の目立つ極度に血色の悪い顔だ。彼は不図渋面をつくり首をふった。

― 何という顔付き、これではまるで黄の事務所にいたあの男とそっくりそのままではないか―彼はだが急に思い乱したように胃の腑のあたりに手をやり、幾分誇張した身振りで撫で廻す―それから嬉しげに呟く。

― そうだ。現在おれの腹はひどく空き切っている。そして詰りそれが理由の全てらしい ― 彼は又彼らしい一定の速度を保ちつつ進む。

― しかし空腹もいゝ。空腹は常に幸福への予約でもあるのだからな。しかしあの男は見た処別に腹も空かしてはいなそうだったが、また、どうしてあんな、倦怠し切った顔でいるのだろう。あれは凡ゆる一切の何も彼もに飽き、殊に自己自身に飽きた者の顔だ。そしてそれはついこの間までのおれの顔だ。しかし兎も角、あの男が若しそうだととしてもその飽き飽きした自分自身を持ったように考えているとしたら、それは飛んでもない誤解をしているわけだ。と言うのはつまり、やはりおれのことになるのだが、おれはつい此の間までどんな自分自身も、第一持ったことがなかったのだから…。

午後一時十分、コーヒー茶碗を音たてて置くと斎木二郎は舌打した。夕方までの時間はながすぎた。実は翌日は十一日で各邦字紙は休刊ときまっていたのだ。というのはい寸奇妙な話なのだが、この国の在留日本人間には戦前ながらの紀元節感覚は、未だ生きつづけていたのである。さてそのことは彼に今日が「あの日」と月も同じ十日であるのを直ぐ思い出させたが、それ故の感懐は殆どなかった。寧ろ彼はそのように感懐を持たぬということに或る感慨を持ったのだった。

― 二月十日、この日は最早、俺にそう格別の意味で訴えない。「時」がこれを幾重にも包みふかく沈めた―。斎木はBARを出て又社の方へ足を向けた。胸に不図感動の波が走った。彼は歳月を逆に辿る眼差しで、久しく秘めて来た一つの言葉を今日こそ、たか子に言おうとところに決めた。編集室には、さっきまでいた田口も見えず、学芸部の谷井がひとりだけ、数種の新聞の綴込みを前にしおれた顔で紙巻を喫していた「戦後の呼寄移民の着伯後記事って実に少いのですね」彼は斎木を見るなり、相手に飢えていたように言った。斎木はそういう若い谷井にある親身を感じながらも、わざと投げやりな調子でこたえる。「結局、記事になるのは何か事件化した場合だけだものね。勿論肝心なのは何時だってそうなる以前においてなんだが」「こゝにこんながありますよ」

谷井が綴込みの一つを押し遣った。「南の花嫁失意の帰国」芥木は唯一瞥する。「南の花嫁、南への花嫁か」彼は低くなげつけるように繰り返しかえし机に戻る。其処には一冊の分厚な本が数日前から置かれていた。KR編纂伯国邦人移民史「四十年のあゆみ」本の背文字の色が鈍く光る。彼はその頁を繰った。

：一九四一年二月八日、枢軸国語に依る全ての伯国内出版物は、同日より一八〇日以内に廃刊さる可き旨発令さる。：

― 山野も俺も当時、日商新聞にいたわけだ。二人共、末だ社会部記者の駆出しで、妙に気のある相棒でもあった。唯、俺が既に少年期をこの国で過ごし、親兄弟をもつのに反し山野の場合は、着伯後二年目の無系類という相違はあったが、兎も角それにしても四一年の二月といえは、日本側のハワイ真珠湾奇襲にさきだつ十カ月前の事だ。つまりその頃からもう、この国の当局者は、枢軸国系在留民に対し、その程度に神経質だったのだ。その法令は後、幾分の迂余曲折はあったが、結局同年十月実施され、勿論日南新聞社も閉鎖された。十一月、俺はルツシイラの実家へ引籠った。十二月、旅行に最も困難を極めた時期に山野が漂然と訪ねて来た。各地至る処で、真珠湾の戦果に沸立っている頃だった。彼はそのまま滞留、翌年四月になってサンパウロ市に戻った。二カ月ほどして彼はふたたび現れた。その時には

仲々上製らしい折り鞆など抱え、ある伯大商社のセルス・マンになったのだと言った。その後も三、四カ月毎にかならず商用の他で姿を見せた。そして来ればかならず二週間くらいは滞在した。孤独の彼にとってどうやらルツシイラは故郷の役割をつとめたらしい。そのころ、これは当時の在留邦人の一般的風潮だったわけだが、ルツシイラもご多分に洩れず、青年層の間に著しい民族主義的意識の高揚が見られ、それは必然的に組織化へと進展した。これに属する者は年令より言っても殆んどが当国育ちかまたは所謂二世たちだったのだから、見ようによつては随分奇妙な現象と言えたが、そのような一切の理解を超えた外でこれは急速に伸長した。山野は多分何かのきっかけからそうした組織の幹部達とまじわりを持つようになったのだろう。彼なりの興味を寄せ始めた。

一九四三年になり、その青年運動の基本精神ともいふべきものと恰も正面衝突するような事態が植民地内に一般化し、その二律背反をどのように処理するかが、幹部層の緊急の課題となった。即ち二、三年来、植民地主の産業となった「養蚕」と「民族的自覚」との矛盾撞着である。その頃、在留邦人間に「養蚕」の反民族性が喧しく論議されていた。それははじめ極く風説的に、又極く素朴な論法でなされた。敵性国家内における生産は、一切その利潤の率に正比例して、反祖国的要素

を増す、といった具合に。要するに養蚕業は利敵産業の尤なるものと目されたのである。当時ブラジルの農産業は、珈琲は十年來の慢性的不況から脱し切れず、棉花はまた不況の底を突き、そうした中で生糸と薄花油のみ異常の活気を呈していた。殆ど一〇〇パーセント「養蚕」に依存するルッシイラ植民地は主体の掴みにくい非難の声の前にだんだん自信をなくしていき、臆病になった。唯これら植民者にとり僅かな自慰はむしろこの論法自体の内に非難を加える側さえ洩らさぬ峻厳さのあつたことだろう。

もしこれを完き嚴密さで推しすすめるとしたなら、人は絶えずより低き利へ、低き利へと転々せねばならず、そして、終局には死しかない筈だからだ。

∴生存しているということが、それを拒否している確証であり、非難しているということが非難される者と全く同様、生存している確証だ∴と彼らは考えたのである。やがて養蚕農家は自己の不安を徒らに胡魔化す試みをやめたが、同時に問題を敢えて突き詰めようともしなくなった。難ずる声はだが次第に激烈な調子を加えた。

生糸および薄荷油の戦略物資としての用途を論証しようとするパンフレットの類が何処からともなく、又誰からともなく手から手へと渡されて行つた。皮肉というか、そうするうち、実におもいがけぬ方面から、それ

を裏書するような発表もなされたりしている。 —

…一九四三年十月二十四日付、伯字紙に依ると、サン・パウロ州第二軍団長談話とし、州内某工場の製品になる絹布がパラシウウト用布地として、最適の旨が報道されている。……………

— この日から、…………と齋木は又回想する。…………このことから事態は決定的に悪化した。三カ月ほど後の一九四四年初頭、突如としてサンパウロ州アマリヤ市近郊日本人所有の蚕室数棟が放火され、灰塵に帰した。母屋から消火に駆けつけようとした家人たちは、威嚇の銃声に怯やかされ、傍観した。放火はその夜、のみにとどまらず、数カ所相ついで襲われ、それらの家家には、例外なく、「天誅組」というひどく時代がかつた署名の焼打理由書が投げ込まれた。「非国民」「国賊」等のレッテルが容赦なく、すべての養蚕農家、並に薄荷栽培者の額に張り付けられた。ルツシイラはアマリヤ市から百キロメートルの距離にあつた。植民者の表情はいよいよ暗く、いよいよ落着かなかつた。しかし誰一人その業を放擲した者はない。しかも彼等の面は一様に困憊してみえた。

…………ブラジルの繭が、アメリカの役に立っている…………

…………という考え方を彼らは勿論、憎んだが憎む態度よりは、怯える態度の方が何となく良心的に思えたので、彼等

はやはり怯えて見せた。この言い方は或いはシニカル過ぎるかも知れない。彼等が彼等同士の間でささやき合った不安の言葉は案外真実だったのかも知れない。だが、どちらにしても、それはやはり意味のないことだった。というのは、養蚕も薄荷栽培も中止したものはなかったのだから。

∴∴山野はだが、そうした彼等に、異常な強さで感動した。そして憑かれた者のように単身行動を開始した。在留邦人中の知名士間を、同問題に対する肯定的言辭をひきだすため歴訪したり、例の「養蚕、薄荷栽培反対」のパンフレット出所を突きとめ乗込んだり。∴∴反対派の本拠はサン・パウロ市内のあるささやかな雑貨商店だったが、老たる店主が古田純一と言って退役日本陸軍中佐だった。古田もだが面と向ってはさすがに「飽くまでもそれが、生業の規模をでないものである限り地理的、土質的、特殊制約の介在する限り、それらは自分達の非難対象とはならない」と妥協した。山野によつてそのことが齎らされると、青年運動の首脳者たちも一般植民者もこぞつて愁眉をひらき、その一点に凭れかかった。それには好都合な事に当時ルツシイラの地味は著しく減退し、棉作にしる稲作にしる、州標準の半作も覚つかない実状にあった。

∴∴全く、これが自家労働力のみ基本とする生業の規模である限り、しかも他の農作物ではどうにも採算

とれぬ瘦地の百姓である限り、ほかに一体、どうしようがあるのだ。……彼等はそう呟くのだ。事実、ルツシイラにはアマリヤ方面に見るような大規模な農場がなかった。

此処では一戸当りが所有面積が入植当時より二十五町歩単位だったからその制約もあって、仕事の規模も自ずと限定された。

……全く、アマリヤの某氏みたいに何百町歩という耕地面積に桑を植え、その中央の高台地に間口七米、奥行、三十米もの蚕室を百棟近くも建てつらね、そして「この景気が三年続いてくれたら俺も一財産作れる」

なんて放言することが不可なのだ。……

と彼等はそんな風に自己弁護するのだ。……養蚕はひきつづき植民地を潤おした。さまざまの華美が戸毎に競われるようになった。しかしそれにつれて、山野の生気は次第に薄れていったように思える。山野の善意は彼等の役に立ちはした。が要するにそれだけの事だった。山野の存在の有無に係わらず、彼等の生活はやはり寸分違わずおこなわれたに相違ないし、だから山野の演じた役割は滑稽なものとなるのだ。山野はだんだん沈黙し、やがて一切のそうした関係から離れた。……養蚕農家の不安、それはだが唯きれいごとの感傷に過ぎなかった。彼等は各自、己の不安を表明することによって己の良心を証明しようとした。つまりそれだ

けのことで思った。俺はそうした彼等の感傷を拒否する。ところで各地方邦人集団地における青年運動の旗印、「民族的自覚」は既に殆ど在伯邦人全体の合言葉のようになつた。民族自覚、これは何もこの移民国で、ことあたらしいものではない。それどころか移民として日本人がこの国に第一歩を印した刹那から連綿とつづいたものだったと言つてもいい。俺はそれにひとつの了解を持つ：：或る少数の種族が異邦におずおず這入ろうとする時、彼等は否応なく異種族の眼を意識する。その意識のうちで、にわかには種族差の反省を持つ。既に「自覚」はその由来において常に弁証法的なものである。かくして、日本人移民は入国と同時に、自己がその個有名詞で呼ばれる以前に、まず「ジャポン」であることを納得する。殆ど常に個人としてではなく、一個の種族として扱かわれることを納得する。罵言される場合も侮蔑される場合も「日本人」として成される事を納得する。

：：もし祖国が何の価値もない下らない国となり果てたなら、自分達も同時にそう扱われるだろう。……と、移民たちは考え始める。ジャポンと呼びかけられ疵付かないためには、常に祖国は優秀であらねばならぬ。ジャボネイスと呼ばれ動じないためには、そのジャポンに絶対の矜持を持つ他ない。

：：：そうでもしなければ第一、自分自身の持ちようも

ないではないか。……と移民達は考える。

つまり「民族的自覚」とはそのような保身の絶対絶命から生みだされたものなのだ。がそれはやはり弱者の意識だ。俺はそれを拒否する。在留邦人の「民族的自覚」はしかし当局の取締りが嚴重の度を増せば増すほど白熱化して行った。一般在留邦人にとって祖国の勝利は冷静な判断の帰結としてではなく、寧ろ唯一の祈願として信念化したのだ。

……日本は勝たなければならぬ……

ところで齋木は過去を手繰り寄せるように考えを追う。

―そこで注意しなければならないのは、大戦中の産業面における対立と戦後に惹起された対立とが、全く異質のものであることだ。前者が後者へ持ち越されたというようなことは全然ない。それどころか大戦中、激しい対立（といっても、それは始終一方的な攻撃だった）を示めした両者は、まるで何の支障もないように合流し、所謂、戦勝派の層を形成した。その事については終戦によって特殊産業としての、養蚕、薄荷栽培の特殊性が消滅したこと、又、好況期が短かったため、単に泡沫景気を呈したのみで、御破算の結果は両者の経済条件を均等にしたこと等が理由としてあげられるだろう。そしてこの派があらたに不倶戴天の仇敵と目し、憎悪

したのは、大戦中、全く彼等の問題には関与しなかった少数者に対してだった。彼等はこれを指して敗戦派と呼んだ。この余り芳しからぬ名称はその少数者が何の心理的抵抗も示めさず、祖国の敗報を承認したところに由来したが、この少数者は邦人間にだけでなく一応知名人として通る人達で、その共通する特色は各自個有名詞で生活する力量を備えていた事だった。少数者派は戦争の結果についても判断力を失わなかった。要するにこれら少数者の立場は強者の立場であり、それだけで勿論戦勝派の弱者意識を刺激するに充分だったのだ。不幸にも少数者派はこの自己の立場の一般に意味するところを理解しなかった。

つまり対立者の底にひそむ弱者意識を理解しなかった。それは……対立激化の因を成した。――齋木の指が又、本の頁を繰る。

……一九四二年一月二十八日、ブラジル連邦共和国は、枢軸三国に国交断絶を宣言した。同日、首都リオ・デ・ジャネイロに開催された汎米外相会議の決議に基づくものだった。……

翌、二十九日、枢軸国籍所有者の旅行はすべて当局発給の許可証が要求され、又、集会及び街上での外国語会話も禁止された。

……三月、各地方での日本人検束が頻々と伝えられる。

……四月六日深夜、サン・パウロ市内C・F街日本人洗濯店に刑事と称する四人の伯人現われ、家宅搜索のあげく、多量の物品を持ち去る。（これは後日、偽刑事と判明）この頃からしきりに真偽入り乱れて家宅搜索が行なわる。……

……同月二十九日、諸地方で日本人多数が不意に一斉検挙収監された。（断交後初の天長節に当り、当局が神経質になったものだろう）その中に後、臣道聯盟総帥となったT・Kもいた。

……五月二十二日、各処の日本書籍店は閉鎖を命ぜられ在庫の全部を押収さる。……

……八月サン・パウロ市内、邦人商店の飾窓、及びネオン・ライトが一団の民により投石破壊さる。検束、家宅搜索はいよいよ、しきり。

……同年同月、更に広汎な多数邦人の検挙があり、理由不明のまま四十余日収監さる。（後、明らかにされたところによると日本より巨額の騷擾費を極秘裡に入手、在留邦人農家を対象に生産サボタージュ、即ち自給自足以外の播種収穫反対運動を行なっているとの、嫌疑からと言われる）

齊木の手は其処で止まる。

……四二年には未だ養蚕、薄荷、共にさのみ盛んとはいえず、勿論、問題化してもいかなかった時分だ。日本人みずからによる論議以前、既に当局は、そのような疑心暗

鬼を描いたのだ。あの論議は結果的にみて、だから、その疑心暗鬼に挑発されたものだとも言い得る。

…同年九月、サン・パウロ都心附近のC・S街、C・F街、C・AP街、T街等に居住する邦人約五百家族が強制退去を命ぜられた。

…九月十七日、この日は当国官憲をも著しく憂慮せしめた事件、―P州南部、クレオパトラ市近郊在住の日独、…両国系三十数家族が突如暴徒化した伯人群集に襲われ、掠奪暴行を受けた…が起った。

…翌年には、サントス市においても、サンパウロの場合より一層徹底した広汎な日本人の強制退去が行われている。そして、勿論これと類似の事件は各地、各処にあり殆ど枚挙の暇もない。例えばルツシイラのあの大規模な搜索事件にしても、この書の頁からはみで、埋もれている。実にさまざまの不幸がこの頁の外にはみ出、埋もれている。そのような状態はずっと終戦後暫くまでつづく。其処で己自身を持ちこたえる事が、どれほど困難かは言を待たない。在伯日本人の大多数が一切を祖国の勝利に賭けた祈願の仕方も理解は出来る。だが俺はそのような理解の仕方をやはり拒否する。結局この頁に記述されている事柄は戦争の「狂気」が齎す災厄としては取立てて言う程のことではないだろう。―尚、それは戦を非道の証拠としてよりはこの国の寛大…

(注・二行カスレ多し。判読不能)

だろう。つまり不幸の説明として・・・(注・カスレ)・・・
僥倖の得心に役立つのだろう。だが実際には在留邦人の
の大多数はやはり不幸を感じた―移民としての境涯を
かなしんだに相違ないのだ。人間は判断する。判断の基
準は勿論比較対照にある。だが人間の視野は案外に狭
く、その対象を身近かにしか見ない。幸福についても不
幸についても。

例えば北米合衆国の下級労働者の生活が実質的に、
ブラジル共和国中産階級のそれと匹敵したにしても、
それは少しも前者の慰めにならない。亦そのブラジル
中産階級の生活水準が地図の上でしか知らない遠隔の
未開小王国の土侯のそれより豊かだったにしても、そ
れは決して満足のために役立たない。いかにブラジル
当局の対枢軸系在留民政政策が北米のそれより寛大だっ
たにしても、その承認にはやはり努力が必要だった。こ
の努力の度合こそ後に在留邦人を二分した条件なのだ。
終戦は訪れた。

しかし同胞間における混乱はかえって激しく、憎悪は
憎悪を呼び衝突した。所謂、戦勝派から敗戦派ときめつ
けられた例の少数者は、その初期において同胞の大多
数が戦敗の母国を承認しないのを、単に認識材料の不
足に因るものと速断し、種々の方法でこの報道を推進
した。そのことが一般からは不遥な敗戦宣伝と曲解さ

れ、相手をいよいよ攻撃的にした。

∴∴一九四六年四月一日未明、サン・パウロ市居住N・C（旧文教普及会事務長）宅に邦人青年五名来襲、寝込みを衝いて射殺、逃亡した。

この日、殆ど同時刻、同じく市内に住むF・T（旧外交官）も同様四青年に襲れたが家人の機転により危く事なきを得た。現場附近で捕縛された件の内の一人は係り官の訊問にこたえ、悪びれる風もなく、身分を明らかにした。彼は秘密結社「臣道聯盟」に属する特攻隊員であると名乗ったのだ。

∴∴六月二日、同じく郊外に居住のJ・W（退役日本陸軍中佐）も亦例の少数派の一人とし、二青年に射たれ落命した。

∴∴同様のテロ行為は勿論、サン・パウロ周辺にのみ限られず、各地において重ねられた。シンドウ・レンメイ。それはこのようにして登場した。シンドウ・レンメイ。それは一躍当国ジャーナリズムの上においても花形となった。シンドウ・レンメイ。多くの伯人はそう呼びかけてニヤリとする。シンドウ・レンメイ。それは在留邦人九十パーセントの願望をになっているシンドウ・レンメイ。だがそれは何という遣り切れない響きをもつ言葉だったろう。

そしてそれは、ずっと太平洋戦争勃発当初にさかの

ぼりそこに根ざすものと言われる。即ち当時川口清（退役日本陸軍大尉）と古田純一とが相い謀り興道社という非合法結社を起した。言うまでもなく国粋一色のもので、例のパンフレット類も此処から出た。これが戦時中ずっと続き、終戦直後新たに組織されることになった「臣道連盟」の母体となり、その役割を了えた。尤もこの二人は間もなく聯盟幹部らの過激化するにつれ、取り残されるかたちとなり、四五年の末には完全にその線から浮きあがって了った。即ち十二月に入り古田は病を理由にその役割より離れ、川口も亦、聯盟を抜けて別に穏健な団体を組織した。

「聯盟」が若し、最後までこの二人の線によって統御されていたなら、あれほど逸脱した行為に走る事もなかっただろうが、問題は二人の統御が不能となった其処にあるわけなのだろう。記録によると特攻隊事件の被害者総数は二十八となっており、内十四名が落命している。

「臣道連盟」は翌年七月本拠がサン・パウロ郊外一隅に発覚し、総幹部以下連類百二十余名が逮捕された事で一応壊滅した。しかし戦勝派は依然、存在し続ける。従って、それらの希求に応えるように、それらの夢をいろどる選手たちも次から次からと跡を絶たない。だが、さまざまな誹りは勿論免がれ難いとしても少くとも行動の純粋度の点で、かの臣道聯盟は最後のものだ。爾後

の亜流はそれを一つの企業と割り切る企業、これは全く奇妙な言い方だが、素暗しい利潤を齎らすという点で、まさしく一箇の好企業なのだ。去年そろそろ忘れられようとした臣聯事件の記憶をあらたに呼び覚ます如く、大袈裟に報道された未遂「前衛隊試事件」の川辺広造にしても、その通り。彼はアマリヤ市、高級住宅区にその居を構え、就縛当時その洋服単筒には二十着余の仕立て下し服があったと言うではないか。彼の所持した所謂、ブラック・リストには、やがて抹殺さるべき者として、サン・パウロ市駐在の日本総領事を始め、百名に近い、「敗戦派」の氏名が記載されてあったといわれるが、しかも彼は結局、何もしなかつたに相違ないのだ。川辺広造にとって、何かを為るということは決して目的ではなく、目的は彼の企業に投下される「金」にあったわけなのだから。川辺は、アマリヤ監獄につながれた。しかし、第二の川辺第三の川辺はもう至る処で何事かを目論見、意動し始めている。福田卓二、道後市助、それから旧日本名青井こと、南鮮人、黄順元、この三人を結ぶ三角形が、さしあたりそうだ。

齊木は、マツチをまさぐりながら考えるのだった。

午後五時、山野信太はふたたびリベラル街のビル、九〇五号室の扉を押した。さっきの男は見えず瘦せた白髪の男が一人机を前に控えていた。黄順元だった。彼

は信太を見るなり「いやあ久しぶり、さつきから待って
いたんです」と愛想よく叫んだ。信太はゆっくりと低
い声で、

「青：井さんでしたね。知りませんでした」とかすか
に眼じりにしわを寄せた。机を間に向い合うと黄が気
軽な調子で訊ねた「僕のこと全然聴いていなかった？」

「ええ…」信太は微笑してこたえる。「そりや君らしく
もないね…、まさか恍けているのではあるまいね」黄が
曖昧な眼色で言った。信太はだが微笑するだけだ。「ま
あいい、ところで君の社なんかで最近僕について何か
取沙汰していない？」「？……」「いや、この僕がね、
福田卓二、道後市助らと恰も深い関係でも持つように
世間では噂しているらしいのだ。それへ近頃はどうか
らあちこちの新聞筋までが何か悪く感線って、しきり
に立ち廻っているらしい」「そうですか。少しも気が
付きませんでした」信太は澄んだ眼を柔らかく相手に
向けて言った。黄はしかし黙って探るように見た。信太
は不図当惑した笑顔になる。「どうしてそういう噂など
出たものでしょう。黄さんにも全然思い当る処はない
のですか」

黄はそういう相手の眼を更に覗き込むようにする。相
手の眼はだが何の抵抗もなく黄の視線を包んでしまう。
黄は一寸はぐらかされたように瞳をそらす。

「……ない。事実無根なのだからね。まあ強いて言え

ば、僕のいまやっている宅地分譲区域の隣接地が福田卓二の地所であること、そんなことから二、三度食事を附合ったこと。それくらいのものだが、案外そんな事柄が噂の種になるのかも知れない。まあ、噂の種程度なら我慢も出来るが、何かの拍子で新聞種にでもされたら目も当てられないからね。目下の処、僕には二、三行のゴシップ記事でも笑いごとではすまされない。一寸困るのだ。で……どうだろう。山野君あたり、若し社内にもそんな気配でも見えたら僕に連絡して貰えないだろうか「信太は耳をかたむけるようにしていたが、いかにも気の毒げに相手を見て言う「しかし、いまぼくは全く新米の営業部員で、一日中発送帖薄などいじっているのですから、きつとお役に立ちませんよ」「そんなことはない。君なら大丈夫だ」黄が急いでおいかぶせた。すると信太はますます当惑した顔で「しかし只今、言われた程度のことのなら、やはり心配は要りませんよ。それとも実際そんな詮索がされるのだとすると、何か、例えば黄さんの日頃の言動に、彼らに同情的なところがあるとか、そういったようなことがあつて案外原因になつているのかも知れませんね」「同情的。なるほど。そうはつきりしたかたちではないが、言われてみると、どうもその反対でもないようだね。……大体僕はあの認識運動なるものの方法に批判的だったものね。アレは君要するに一種の知ったかぶりに過ぎなかつたわけ

さ。なるほど、敗戦日本への慰問物資は多いに越したことはない。そこで、彼らはその増大を計る為の先決条件として戦後日本の実情を広く在留邦人一般に認識させなければならぬと結論する。それは勿論結構さ。だがその運動の効果と言えば、唯同胞間を混乱紛糾させただけではないかね。結果として一キロの慰問物資でもふえたかどうか、疑わしいものだ。それどころか一般邦人はいよいよ意固地になっただけさ。又、若干戦勝派から転向した者も寧ろそうした者に限って途端に極端な利己主義者に一変し、慰問物資どころか、日本人であることまで、出来たら願い下げ仕兼ねない徹底ぶりになるのだからね。つまり、認識運動の目的である慰問物資増大化はどちらにしてもだめだったわけだね。そして、彼らはそこで当然再考しなければならなかった。ところが彼らは依然同じ遣り方で継続した。そればかりか、或る一人など「若し俺の言うことが真実でなかったら腹を切って見せる」なんて啖呵まで切ったものさ。まるでもう一種の賭だね。そんな人間たちの運動が好結果を収められる筈がない。と僕は考えていましたよ」黄はそこで饒舌をやめた。

刃物のように光る視線がすばやく信太へ走る「……ところで、福田、道後らは一体どんな事をやりどんな事を目論んでいるのかね」黄のこの反間に信太は苦笑する。

「ぼくはその二人に新聞の写真面で会っているきりで殆ど何も知らないのですが」信太は言いながらも、ねばりつくような相手の眼を感じ、話題を転じる「それはそうと黄さんはどうして北鮮でなく南鮮へ復籍されたのですか」「僕が日本人青井から、大韓民国人、黄順元に戻ったのは生れ故郷が南部朝鮮に位いする、というだけの極く簡単な理由からですよ。それに共産党が非法化されているブラジルで、北鮮国籍を有つことは無意味なばかりでなく、第一、不可能な話でしょう。僕は何事についても、至って実地的な男なのだからね。……そうそう、では広告の原稿をだそうかね。それからさっきの頼み山野君きいてくれるね」黄は引出しから原稿を取りだし、

「これを三十単位くらいの大さきで十回分、幾らになる？」と殊更に打ちとけた語調で言った。それは、宅地分譲に関するものだった。大きさも回数も申し分ない。信太はだが浮かぶ友井と小川老人の顔を一瞬重く感じた。

「一回分一〇五〇クルゼイロスになりますから、一万と五百、一万クルゼイロスにお引きして置きます」黄はあっさりと言き、小切手帳に無雑作にペンを走らせた。やがて差しだされたのを、信太は訝かしげに見直した。額が二千クルゼイロス多く記入されていたからだ。相手はただわらっていた。そして「余分は君が費かったら

いい」

とやはり笑ったま、で言った。信太の手はしかし逆にたれる。

「この男はひどく感違いしているようだ。ずっと前この男とおれが顔を合せたのは、確か古田純一の処でだった。それで黄はすっかり自分勝手にわれを色付けし、同類か若しくはその可能範囲の者と決め込んでいるのだ。しかも現在のおれの位置についてもおそろしく買い被っている。」

信太は相手の誤解を滑稽に感じる。それはまた同時に自分の腰かける椅子まで落着かないものにする。彼は腰を浮かせた。すると黄も身軽に椅子を離れ、彼に近付くとその胸のかくしにすばやく小切手をさしこんだ。信太は身体をずらし「ほんとうにぼくはとてもお役に立ちませんよ」とも一度繰返した。しかし相手は既に確信するように彼の肩をたたいて言う「大丈夫大丈夫」不決断のまま信太は結局机の上の原稿を取上げ、出口の方へ眼を向けた。其処に何時来たのか、あの先刻の男が立っていた「あ、山野君紹介しよう。これは木田と違ってね、僕のまあ、アシスタントだ。連絡には木田君を当てるからそのつもりで……」黄が二人の間に立って言った。

木田は先刻と少しも変らぬ陰鬱な眼を向けた。信太は

それにある重さと同時に親愛を感じ、溜息をした。

表ての通りはすっかり夕刻時の慌だしさに変わっていた。電車もバスも脹らむほど乗客を詰めこみ、警笛をならしつづけながら通りいっぱいに続く。BARの時計は六時五分前を指している。信太は這入っていくと電話を借りた。

「友井はもういないだろう。だが……信太はダイヤルを廻しながら考える「あ……山野です。部長はもう出ましたか、では小川さんが残っていたら一寸……」

電話口に出たのは宿直の文撰工らしい。やがて老人の覚つかなげな声がそれに代った「小川さん、友井さんがいなければむだだからそちらに戻りませんがね。例の方、あれ明日当てになさっていいですよ」しかし予期に反し

老人の声は弾まず、かえって情けなそうに「そりや……山野さん、明日は社はお休みなんだよ。折角だのになあ……」思い切り悪く言葉が途切れる。言われて信太もそのことに気付いた「まったく、そうでしたね……」彼は一寸考えたが急に元気な声で「では小川さん、これから直ぐ福助食堂まで出て来ませんか。名案があるから」

「それは行ってもいい、がね。しかし無理をして呉れなくても良いよ」老人の躊躇い勝な声があった「大丈夫、大

丈夫」信太が叫ぶように繰り返した。だが直ぐそれがさっきの黄とそっくりなのに、彼はわらいだしてしま

う。「そうかね。ではこれから寄ることにするから待っていて下さいよ」

信太はBARを出ると今迄より大股で歩き始める。福助食堂へは社からの方が寧ろ近距離なのだ。信太の前に赤い無精髭の男があやしげな足取りで現われ、右手を差しのべた。身体がたよりなく、左右に揺れる。

「よう。きようだい、少し恵んで呉れないかね」顔の中で鼻だけが特に目立つ眼球の寄った白人だ。火酒のにおいがしきりに漂う。飲んでいるのだ。信太はわらいながらかくしを探った「これでそれじゃもう一杯呑みたまえ」彼は男の掌に銅貨を一枚のせてやる「ありがたいえ。嬉しいね、まったく。どうだい、これで一つ一緒に」男はふらつく軀をかしがせ、二本の指につまみあげた銅貨を突きだした。信太はやはりわらって「附合いたいが、一寸用事があるのでね」と男の脇をすりぬけた。背後で酔漢の濁声があわてて喚めいた。がそれも直ぐ激しい往来の騒音にかきけされてしまう。退け時の都心周辺はすべてが、めまぐるしく、急速度に動いて行く。あの酔漢さえ、足をもつれさせながら側のBARへと急ぐ。しかしその通りの、とある片隅にじつとうずくまる影があった。

信太は進むにつれ、それがぼろをまとった混血女と幼児であるのを知る。彼は立止まり、かくしに残る最後の銅貨を女の膝の上に落して遣る。銅貨は一寸弾み、幼児の軀の蔭に隠れた。うなだれていた女が重そうに顔をあげた。街灯の光りが、その瞳に流れ、反射する。母子は勿論、物乞いなのだ。がそれをする事さえ大儀な程疲れていたに違いないのだ。信太はその時もう七、八歩さきを歩いていった。彼の面は何か能耐え、何かに克とうとしているようだ。

― 善行、おれは未だ善行について確信を持たない。だが何かしら、それに意味らしいものを感じ始めている。―

全く「善行」の終局が例え完璧ではあり難いとしても、どうして無意味だと言い得よう、善行の運命が結局「行方不明」だとしても、どうしてその故に無意味だと言い得よう。人間は常に永遠とか、完璧とか、絶対とかの至上観念に惹かれてやまない。しかし、これほど人間をみじめにするものは無い。全く、完璧について考える時、人は絶望しないではいられない。人はそこで自己の繰りかえした「徒労」について考えずにはいられない。それは絶望を一層深め決定的にするも「徒労」には何時も多くの悔恨と、より多くの屈辱とが含まれているからだ。最早、人は憤りの塊りになる他はない。そして復讐を試みるのだ。が復讐されるのは結局いつも

自己自身なのだ。

やがてその憤りが燃え尽きる時、人はひとつまみの灰でしかない。「完璧」それは人間に一切の努力を無効として感じさせるものだ。人は底知れぬ懷疑に怯え、立ち疎む。だがどうして「時」は永遠へつながらねばならないのだろうか。どうして孤立した一瞬一瞬は徒労なのだろう。あの「カラマーゾフ」のゾシマ長老はすべての願望をいささかの曖昧さもなく受け合うではないか。往った息子を待つ親には、その帰りを。病苦を訴える者には、その治癒を。又、貧しい年寄には受けたばかりの喜捨を。

しかし……恐らくその息子は帰らないだろうし、その病の快癒はない。貧困さえ、布施の銅貨だけでは解決不能だろう。だがゾシマ長老はそのすべてを受け合う。人はその前に救いを覚え、満足する。あの仕方がどうして、徒労だと言えるだろう。ゾシマ長老は自己の行為の終局に就いて考えない。考えるにしても、神への祈りにおいてしか考えない。彼は唯、その刹那、刹那を可能な限りで処理していく「現在の満足」を与えることだけが長老の目的であるかのようにだ。が「善行」がひとつの満足をかちうるとしたら、それだけで充分でないだろうか。

求めすぎでは不可ない。唯ゾシマ長老には禱りがあるが、おれはそれを持たない。ゾシマ長老の生活は神と教

団とによって支えられているが、おれはふたつながら持たない。従っておれは自らの「善行」を自身で抑制しなければならぬ。……これは難しい。――

信太はマリヤ広場の片側を歩きながら、夕闇にだけかけている大寺院の尖塔を見上げた。

……それは難しい。毎日、あの古びた階段をあがり、あの机の前に坐る。その繰り返えしを、一カ月おこなっておれははじめて三千クルゼイロスの給料を受取る権利を持つ。その内から先ず一千クルゼイロスの食券代と五百クルゼイロスの室代が減り、更に交通費、その他で最少限五百クルゼイロスが消えるから、おれの一カ月間の善行は常に残りの一千クルゼイロスの枠に限られる。

それ以上での場合、おれは無力だ。そして、一千クルゼイロスの終局についても同様に無力だ。がその一千クルゼイロスが誰かの掌に乗せられる時、掌の中に齎らす筈の満足感は信じていい。一千クルゼイロスはそれ自身の持つ重量だけ確実に「満足」を約束する。そして、勿論それだけで充分ではないか。兎も角、おれの善行はそのようにして続けられる。多分……それは何時か、あの梯子段をあがれなくなる時まで、何時か、あの極度に採光の悪い小部屋の寝台から起き上がれなくなる時まで、それはつづけられていくだろう。その日まで、おれを支えていくものは、あの寝台の下の皮鞆の中にあ

るちっぽけな缶だ。

彼は微笑を湛え、なつかしむように、それを思い浮べるのだ。

―それは、円型の平たい髑髏にX十字のマークがある劇薬の岳なのだ。中味は裕に五百人分あるだろう。無論、おれ一人には充分過ぎるくらい充分だ。つまりおれは自分の終局をそれに支えられながら、現在を生きる。∴「善行」を信じようとするおれが、自身の結末をそんな風に着けようとしている事は、ひどい矛盾に似るかも知れない。だがおれが信じようとしているのは善行の齎らす満足感であって、善行の必然性ではないのだから、まして禱りを持たないのだから、やはりそうした支えなしに、善行為の継続は不可能らしいのだ。―

信太は広場の南側に始まるタルタルガ街に入り、更にその小路へと折れる。その四、五十歩前方に薄い肩をすぼめた小川老人の姿が見えた。そこはもう殆ど食堂の前あたりである。老人は硝子扉に近付くと、内部を透して見るように額を押しつける。追いついた信太がその背に手を置いて笑った「恰度良かったですね」「おお山野さんか」小川老人はほっとしたように口を開けて振りむく「ぼくは今二千クルゼイロスだけ自由に出来るのですよ。直ぐ戻って来るから待っていて下さい」彼は言うなり、勢い良く回転扉を押した。むれたような空気と、特有のにおいとが彼を包む。二十ほどのテ―

ブルは全部塞がり、食器の音や咀嚼音や私語等が入り混じり、一つの喧騒となり、渦巻いていた。信太はその間を縫うように奥へ進む。

「自由になる二千クルゼイロス、だがそれはおれの物ではない。――彼は咽喉になにか塞まらせでもした顔で、急に足を鈍らす。

「二千クルゼイロス、だがそれは給料さえ入れば兎も角、返えすことの出来る範囲だ。要するにほんのそれまでの融通なのだ。――信太は頸のあたりに手を持っていきながら、奇妙なわらいを浮べた。戸外で待つ老人の期待が兎も角、彼を調理場の方へ押した。「オヤジさん」コック帽を斜めに被ったあるじの背後へ、ソツト呼びかけた。湯気の立ち込める中で血色のいい、まるい顔が振りかえった。「山野さんか、お昼はどうして来なかつたんだね。かまやしないのに。さあ、いいから何処にでも席をとって食べておくれ」 「ありがとう。実は未だその他に一寸、頼みたいことがあるのだが……」

信太はかくしから取出した小切手を拡げて見せながら微笑を深めた。ちらつと眼を遣ったあるじが少し首をかしげてから「要るのは幾らなんだね」と訊ねた。「出来たら、いま二千クルゼイロスだけ欲しいのですがね」振出人名儀を見、思ったより無雑作にうなずくと脇の潜りから奥の室へ姿を消した。程なく二百クルゼイロス紙幣十枚を揃えて現われたあるじは手早く信太に渡

した。「これで間に合うのだね」「ええ充分、ではこれは明日まであずかって置いて下さい」信太は小切手を柔らかな肉付きのいい手に握らせた。あるじが何か言ったようだ。が信太はそれへ腕をふると、もう扉の方へ引きかえしていた。表てに出て見ると小川老人は側らの壁に寄りかかってふかく腕を組み、顔を埋ずめていた。あたりはすっかり暮れ切って、街灯が点々と浮んでいる。そのひかりの下で二人の影が長く延びた。老人は身じろぎもしない。

信太は眉を寄せ、あしおとを忍ばせて寄った。その時老人が面をあげ彼を見た。老眼鏡のレンズが反射した。「なんだ、眠っているのかと思いましたがよ」信太は安心したように言い、笑って五枚の紙幣を干からびた手に掴ませた。

老人は一寸の間、紙幣と信太の顔を見較らべるようにした。「本当に、いいのかね」未だ幾分心配げな調子に信太は殊更、大声で笑うと「大丈夫、大丈夫ですとも。ではぼくは先刻から腹を空かしているのですから、失敬しますよ」老人の肩を軽くたたき、又食堂に消えていった。

小川老人は暫く彼の這入ったあとの揺れる扉を眺めていたが、のろのろ小路を引きかえして行く。やがて小路を出きる頃、老人の歩みはややはやめられる。どうやら足取りに力が籠もる。

信太は先客の立つのを待って、一隅の席に腰を下した。待つほどもなく、給仕女が定食の二、三品を乗せた盆を運んできた。「山野さん、表てに待たして置いたのは誰？いい人！」小皿を並べながら女がいたずらっぽい眼で訊いた。信太は済ました顔で答えた。

「ああ、そうだ。ぼくが一番いい人さ」。「まあ、あんな事を言っで！」若い給仕女はあたりの客たちが振りかえってみるほど、けたたましい声をあげた。：福助食堂は、この都心附近に勤める日本人下級サラリーマンにとって無くてはならない簡易食堂なのだ。そして、ここは、お櫃に、茶碗に、箸というおよそ当国色皆無な道具立てだ。全くそこが地球上で、人間の離れ得る最大の距離を隔てた、ブラジルであることを考えると、滑稽になるほどのノスタルジヤだ。信太は静かに茶碗を取り、飯を盛る。しかしやがて箸を運ぼうとして、殆ど食慾をなくしている自身に気付く。彼はそのまま茶碗をテーブルに戻す。そこからかすかな湯気が立つ。白い湯気は恰度彼の目の高さでとけるように内部の空気に入りまじる。しかも白い湯気は絶えずそこに立ちのぼる。信太はそれを見詰めていた。不意に感動に似たものが身内を走った。

彼は微笑し、吐息する。それからふたたび茶碗を取りあげるのだ。

― あの日から、きっかり八年が経ったわけだ。二月

十日：それから三日目、タイピラ駅着後、曲芸師のようにルツシイラ通いのバスに乗り移ったおれは、その鈍い速力に唯じりじりと焦燥した。

―信太は箸持つ手を宙にとめ、凝つ、と瞳を据える―その二日前の十一日の晩、おれはサンパウロ市で泊りつけの日本人宿、桜木館で二人の男の話に全身庇っていた。

信太は時々、思いだしたように機械的に箸を運ぶ。眼にその時の二人の相貌が浮ぶ。どちらも五十前後の奥地商人といったタイプだ。そのイメージの中に過去と現在とが重りひとつになる。一人の方が言う。

「何しろ、あんた、何百という剣付鉄砲の兵隊が植民地全体に、虱つぶし家宅搜索を始めたのだから、その騒動と言ったらなかったね。私ん家は市街地区だったお蔭でその割でもなかったが、部落によっては、その兵隊らと一緒にあって、カメラード（農村労働者）が暴れたというから、目もあてられませんや」「へエ、ルツシイラには私も身寄りの者がいるのだが……さあ、何部落だったか、しかし、よくまたその日の中に発ってこれたもんですね」も一人の方が言う。

「恰度いい按配に旅行許可は前日取ってあったし、今いう通り、うちの方は無事簡単に済んだもんだから……それに、あんた、あんたもどうやらそうらしいが、お互い、

いわばマカコベイリヨ（古狸といった程の意味、在留年間の久しい者に対する俗称）で革命戦火の下も幾度か潜り抜けて来たんだから多少度胸は出来てまさあね」すると相手はそれを受けて得得と二十数年前の革命当時の憶い出話しを始める。無論二人の話し声は始終ヒソヒソと控え目だったが、それがかえって話の内容を効果的にする。二人は互いに相手の話を引き取っては喋べる。そして笑う。笑いながら家畜や車輛や穀類やが往時、どんな風に徴発されて行ったかを話す。時には略奪や暴行がなされたらしいことどもを話す。恰も競うように話す。

話題は又ルツシイラの捜索事件に戻っていく。一人が不図、当日の事に実に恥しらずな想像を回らし、それを卑しく冗談めかして笑った。も一人も同じように笑った。

二人は笑いつづける：信太は重そうに両手をテーブルに置く。

― おれは二人への憤りに拳を震わせた。が結局何が出来たろう。唯、黙って二階の室に戻っただけだ。狭い急な階段の一段一段に自分の重さを持てあましながら。室に入ると文字通り、身を寝台に投げだした。凝つと仰向いた眼に天井のしみが不気味に迫った。しみは初め殆んど有るか無しかだったが視線を凝らす内、実にさまざまな容ちに拡大し、接近し、おびやかしてやま

ない。おれは声にならない叫びをあげ、跳ね起きていた。 —

二月十日、この日は実にさまざまな場所で、人、人にそれぞれの記憶を呼び覚ましていた。：午後九時、サンパウロ市南方二十キロメートルのメイリンク町は、澄みきった星空の下にひっそりしていた。此処は戸数五百たらずの小駅に過ぎない。が四季を通じて、行楽に恰好なメイリンク山の登り口として、又、聖フランシスコ会の修道院のある処として、広く親しまれている。家並は駅から山裾にかけて、点々と散在し修道院はその外れの高台にある。人の丈ほどの高さの生垣に囲まれた地内には、伝道婦養成所の平家造りと、四面硝子張りの幼稚舎もあるのだが、夜目には写らない。此処の創設者はヘルマンと呼ぶ独逸系の神父で、伯国には一九三六年、日本聖フランシスコ全より在伯邦人への伝道者として派遣された。

神父はだが着伯後、広汎な地域に分散居住する在留民の分布状態に鑑み、少数の聖職者による布教のとうてい困難なことから、先ず伝道婦養成所を設け、熱心なクリスチャンの育成に着手した。そのような理由から、入所者は自然、日系人に限られ、常時十名近くの女性が、所長、リイザ夫人の下にいた。彼女らの寝室は所内の最も奥で夫人の室と隣り合っていた。：其処から細

く洩れていた灯もさつき消え、屋内は完全に闇になった。が砂田かづえはその夜に限っていつまでも眠付く事ができなかつた。

十個の寝台を並べても、未だ充分過ぎるほど広い、天井の高い室には勿論調度らしい物もない。そして、そのことが一層内部の静寂を深め、闇を大きく感じさせる。同室の他の者はもうさつきから安らげな寝息をたてている。

その中で彼女の神経が益々磨ぎすまされていく。

一十歳の時、あたしはおさげ髪で毎日ランドセルを背に、日本の中部地方の小学校に通っていた。がそれから三カ月後のある日、あたしはブラジル奥地の伯人耕地に「移民の子」としてエンシヤーダ（鋤の一種）を握っていた。そして更にその一年後には耕地からルツシイラ植民地への五百余キロメートルの貨物自動車旅行の記憶が連らなる。そしていまあたしはカソリック系幼稚舎の保母として、さまざまな眼色の子らに囲まれ、日を送っている。一かづえは暗黒の中で見えぬ何かを見詰めるように眼をひらく。

！あたしたちの一家が五十九日間の移民船生活後サントス港に上陸して、はや十八年が過ぎる。家族構成は父母、中学二年になったばかりだった兄とあたし、此の四人きりで同じ耕地に配属された四家族中、一番貧弱な

労働能力とみられた。耕地はサントス港より幾度か汽車を乗りかえる七百キロメートル北方で、同地方では有数の大耕地だった。出迎えの先輩移民の方がその広太さを馬車やトラックやオートバイの速度をもって、得々と説明するのを皆、はじめ信じられない面持で聴いたものだ。

まず汽車を下りた町から、一時間、人家もない更生林の中の道路を揺れて行った地点に忽然と果てしないコーヒ―樹の海がひらく。その中の寛やかな起伏を幾つか越えると、左手に帯状の沢地が見えだし、沢地を挟んで二列に白壁の家族契約労働者の（あたしたちもつまりそれなのだ）住宅がならぶ。戸数はざっと百。十メートル位の間隔を置いて連らなる。四家族の新着移民と、その荷物とを満載した中型トラックは甲高いエンジンのうなりの割に速力なく、ガタガタとひとすじの道路を進む。進むにつれてコロニヤからは白黒、混血の子供らが走り、声一杯に何か叫びながらトラックを追う。子供らの髪の毛はモジャモジャでそして裸足だ。家々の空地には遠眼にも鮮かなバナナ樹や天狗のうちわに似た葉を有つマモンの樹が茂り、小豚や山羊やヒヨコ連れの牝鶏やが走る。

留守居の女たちがそれぞれ此方をゆびさし、大きな身振りで話し合っている。だがトラックはその家並の何処にも停らず更に樹海の中を進み続ける。四家族の者

は各自顔を見合わせ、一寸物聞いたげに案内者の方を一斉に窺う。期せず皆の視線を受けた先輩移民の石田さんは、癌性に眼ばたきした。「皆さんの住居もいずれは今、通ったあの家屋のどれかになるはずだが、それまで暫くは別に用意した処で辛棒して貰うことになっている」皆の眼がふたたび前方の果しない樹海に注がれた。そして十分、突然、眼界がひらけ、豪壮な館というに通わしい建物がやや高見に浮ぶ。その下手に先刻通過して来たコロニヤと同型の家屋が三十あまり。その他コーヒー精選所、製材所、製粉工場、倉庫等がひとつむらに見え始める。四家族が住居として割り当てられたのは、しかしそうした中の空倉庫の一つで、結局其処が一カ年間の棲家となった。

新着移民は与えられた倉庫の内部を田の字に板で仕切り、耕地生活第一夜を迎えた。翌朝は申し合せたように皆、暗い内から起きて、寝不足の顔で、戸外に焚火を囲んだ。

緊張のせいばかりでなく、充分の寝具なしには寒気がしみて、床の中にいられなかったからだ。八月末の頃でこの国の冬期は、もう終りかけていたが、所謂「南国」を勝手に一人合点して来た大人には意外な冷氣だった。しかも大部分の荷物は貨物便で二カ月後でなければ到着しないはずだった。：岐阜出身の大野さんは火に両手をかざしながら言った。「南米というからブラジルは

一年中暑い処かと思つたらどうしてこれでは日本の晩秋の氣候ですなもし」：東京出身の木田のおばさんが焰ごしに応えた。「ホントにあんた、うちの方の代理人も（海外興業会社が各地方に置いた渡航幹施人）ブルジルでは年中毛布一枚で暑過ぎる位いだ、なんて言うんでしよう。で蒲団もわざわざ綿をぬいて、かわだけ持って来たんですよ。マツタク一昨日の夜汽車の中といい、昨夜の寒さといい、これじゃ万事が思い遣られますわ」：遙か遠くで刻をつくる鶏鳴が聴えた。するとそれに和すようにやや間近の鶏が歌い、更に次々の鶏が歌う。それは忽ち接近し、最後におどろく程、身近かな樹立の葉蔭で一羽の雄鶏が力強く歌った。それは、又、直ぐこだまするように次には逆に遠く波のように繰返えされていく。あたしは父の膝の中にうずくまり凝つと耳を澄ませた。徐々に朝らしい黎明が訪ずれた。高台の館が次第にくつきりと輪廓を現し始めた。耕主の邸だ。その横に更にバンガロウ風の三棟が浮んだ。支配人と監督たちの住宅だ。次に一群のコロニヤが浮ぶ、それらには耕地直属の鍛冶、大工、左官等の他渡り者の独身労働者達が住んだ。その中であたしたちは完全に異邦人だ。日本語で話し合うことのできるのは、文字通り四家族同士だけなのだ。先輩移民の石田さんは同じ地内とは言え、十二キロメートルも隔てた低地帯に陸稲作りをしている人で、極く必要の時に限り出張、通訳に

当って呉れることになっていた。数日してこれら新来移民は一人当り、六百株の割りでコーヒー樹の手入れを請負う事になった。父母は兄を連れ、毎朝、暗い内からエンシャードを担ない出かけた。当分の間あたしは留守居として家に残った。そうした日日あたしは走って羽目板一重へだてたお隣りの木田さんの処へいった。大人のひとが誰か一人は残るのを知っていたからだ。

二カ月ほど経ったある日曜日の午前、木田さんの処では、おばさんが早仕舞してくる筈の家族の人たちに盛んにボリンニヤ（ドーナツツ）を揚げていた。例によってあたしは遊びにいらっていた。おばさんはよく自分の住んだ東京の話をした。おばさんの話の中で「東京」はいつも輝やかしく美しい。木田さんの家族はおじさんと二十歳くらいの娘さんとその夫とそれにあたしより二つ三つ大きい男の児との五人ぐらしである。だが実に賑やかな家庭なのだ。そのおばさんがいたからである。おばさんはボリンニヤを揚げながら何かあたしに言っては笑った。賑やかな声で一しきり喋っては笑った。笑いはだが途中で急に停った。おばさんの表情がそのまま凍った。

あたしは驚いて見詰め、その顔が向けられている戸口の方を振りかえった。そこに畑着姿の娘さんがお弁当入れの白い布袋を引きずるように下げて立っていた。娘さんは甲高い堰を切ったような声で叫び、おばさん

のそばに駆けよって泣きくずれた。土間に袋の中のアルミの器物が音をたてて転げた。おばさんの手から揚箸が落ちた。「まあ、どうしたの、お前、ホントにどうしたというの」おばさんは手を娘さんの肩に触れ、顔を覗き込むようにして言った。「おっかさん、もうこんなところは嫌！あたし：こんなところは嫌だわ：」おばさんの胸に顔を埋め身悶えして泣いた。あたしは自分が悪いところに居合せている事を覚り、黙んまりで一足一足あとすぎると、ソツと戸口を出、家へ駆け戻った。……何日か経ち人人の話す言葉の端々から、娘さもはコーヒー園からの帰途一黒人に襲われたらしいこと、その日、木田さんは仕事が早仕舞できそうになかったので、娘さんと男の児とを先に帰えすことにしたが、男の児が、何故か嫌がったためそんな結果になったらしいこと、がもし、少年が一緒だったとしても、暴漢は猟銃を持っていたといわれ、結果は一層悪かったかも知れないこと、等をあたしは知った。幾日か過ぎた。隣りに行くところの日以来、コーヒー園に行くことを辞めてしまった娘さんはおばさんと並び上り框に腰かけ、針仕事をしていた。おもいなしか顔色がさえず、おばさんも以前ほど笑わない。その時多勢の伯人らしい話声が横手から近付いて来た。それだけでもうあたしたちは戸口の方へ落着を失くした視線を向けた（窓と

いうものを持たない田の字型の住居は石油ランプを灯

す夜以外は戸口を閉めきることができなかつたし。前をストレスに通りがかったのは支配人を先登とする四十人あまりの労働者の一団だった。何か喋り合い無遠慮な笑声をあげゾロゾロ通っていく。不意に娘さんの顔が激しくゆがみ、眼が一杯に見開らかれて光った。

・血の退いた顔をおばさんに向け、短かく口走るように何か言った。瞬間、おばさんがすつくと土間に立った。血走った眼を男の群に走らせたと思うと、もう狂気のように飛びだしていた。

「おっかささん、よして！」うしろから娘さんが悲鳴に近い声で叫んだ。その時おばさんはひとときわ長身の赤紫の支配人の前に転ぶように駆け寄り立ちはだかつていた。

「貴方様先達って娘をつかまえようとしたのは彼奴です！」（シニヨール オートロデア ペガール モツサ アケール）おばさんはやっと精一杯の調子で立ちとまっている中の一人をゆびさして言った。支配人は小柄のおばさんを唯、訝かるように見下す。おばさんは一人の黒人の厚い胸を指し、張裂く口調で言った。「彼奴です！」だが支配人は背中をかがめおばさんを見、そしてそのさし示めしている黒人を見、それから困ったように微笑を浮べて呟く「分らない、さっぱり分らないし おばさんは必死に訴えるように見上げた。そして自分の言葉が少しも通じなかつたのを知ると泳

ぐように件の黒人の前に進みそのシャツのはだけた胸元に人差指を突き付けて絶叫した。

「こいつだ！こいつだ！」おばさんは絶句した。涙がとめどもなく頬をつたった。娘さんが少し離れた処から「おっかさん！」と身をもんで呼んだ。黒人の眼がチラツとその方へ走った。彼はにわかには狂暴な表情になると、何か怒鳴り、荒々しく手を払いのけた。おばさんがよろめいた。支配人がそれへ何か言おうとする様子を示したが結局肩をすぼめ、首をふって、も一度「ノン・コンプレインド」と独語した。そして大股に歩きだした。一行がそれにつれて動きだした。彼等には結局、奇妙な茶番としか写らなかつたのかも知れない。さまざまな笑声の尾だけが後に残った。おばさんは声をあげ、どつと地面に泣き伏した。娘さんが蔽い被さるよるに馳け寄った。

あの耕地に入った四家族だけが殊更不運だったのか、それとも、移民なら誰もが堪えていかなければならぬものだったのか。：兎も角、その後も実にいろいろな事が続いた。入耕三カ月くらいの頃、或る用件で、母は兄と私を伴ない、馬車便で石田さんのお宅を訪ねた。そして同じ日、陽が傾く頃、同家の馬車で送られ帰途についた。敬老は石田さんの処の二十歳くらいの若者、灌木の果てしない原の中を貫く十二キロメートルの遺すじには人煙も見えない。時々、聴える小鳥の吃りが静か

な入り陽の下で寧ろ心細さを深めた。途中には幾力処も大木戸が設けてあつて、馬車はいちいちそれを開けて通過しなければならぬ。開閉役は兄だった。道程の半ば進んだと思われる噴、馬車は向うから来た労働者風の二人連れとすれ違った。二人連れは黙々と道端に轍をさけ、四、五十メートル行き過ぎたが急にクルリと向き直ると、大声で何か呼びかけながら駈けて来た。駈者の若者は呑気に「きつと路でも訊ねたい、と言うんだらう」とたかをくくったように言い構わず二頭の馬に鞭を当てた。とたんに車台が大きく揺れ、速度を増す。

がそれよりも速く二人の男が距離を縮めるその執拗さによろやく不安を感じ始めた若者が面をこわばらせ矢次早に鞭を呉れた。が幾度目かの鞭を振りあげた眼に又しても大木戸が見えだした。若者は明らかに狼狽し汗をうかべた。手綱がしぼられた。未だ停止しきらぬ馬車から兄が唇を噛んで飛びおり木戸に駈け寄った。がそれよりも速く男らは既に迫り、荒い息をついた。一人が素速く中馬の轡をわしづかみし、他の一人が狂暴に兄の胸をねじあげて喚めいた「開けやがったら小僧締め殺すぞ」男らの顔がギラギラ不気味に光ったしたくましい白人と黒人だ。二人は駈者台に向つて何か短く怒鳴る。あたしは母の膝に震えた。若者が蒼ぎめた頬を向け憶える日本語で、降りるように言った。母はあたし

を抱き、ゆつくりと席を立つと道脇に馭者と並んだ。男のように一文字に口をむすび、固い表情であたしを離さない母の手が慄えていた。兄は大木戸の側に立ちつくしている。男らは荷台の覆いを手荒く剥ぎ、積荷を物色しだったが、豚油四十キログラム入りの缶を見付けだすと、引きおろした。豚油は石田さんが支配人への進物として出発間際に積み込んだものだ。黒人の方がそれを担ぎあげた。空手のも一人がこちらに眼を走らせるとズカズカと迫り母の持つ手下げ袋を掠めるように引たくって続いた。枯葉を踏み鳴らし、灌木の中を駆けぬけて言った。呆然と立ち続けた若者が、その時飛びあがるように馭者台に取り付くと、乱れた声で叫んだ。「さあ、おばさん、みんな、早く乗って下さい。大至急、支配人に報せ、引捕らえてやるんだ」若者はずっと耕地に着く迄、狂ったように皮鞭をふりつづけた。ようやく濃くなった夕暮れの中を馬が首を前に突き出し、突き出し喘いだ……。急報に接した支配人は直ちに屈強の男らに命じ追跡させたが遂に逮捕の報は聴かない。その前後、四家族中、大野さんに次いで大家族の元村さんの処では二十日足らずの間に三度も不幸が重なった。五歳と三歳との二人の子と、その祖父に当る老人の死だ。子供たちの場合はアミーバ赤痢の悪化からだったが老人は自ら縊れて死んだ。子供たちの病因が自分の与えた野苺と診断されたのを気に病んでのことと言わ

れる。二人目の児のわびしい葬儀の終わった夜半、老人は裏手にある水車小屋へソツと抜けだし、梁に綱を掛けて、命を絶った。…あたしたちにとって、実に殆ど無限とさえ感じられた一カ年の義務農年も、しかし終る時は来た。

四家族中、耕主への負債が一番少く済んだのは大野さんで二十八ミルレイス（当時の貨幣単位）、最も多額に上ったのはやはり、元村さんで医療費その他がかさんで三千ミルレイス余だった。別に渡航資金の余分も持たなかったとかで、元村さんの場合、負債の返済は何年かかっても難かしいだろうと噂された。あたしたち一家は、その歳最初からの予定通りルツシイラの土地を購入、入植した。元村さんを除く他の二家族の人もそれぞれの方面に移った。その頃、木田さんの処にはあの婿打という男はもう居なかった。幾年か経って元村さん一家も次の年とかに耕地を逃亡したと風聞した。

ルツシイラに移り、やや落着いた日々が訪ずれるようになった。部落内にある日語学校へ通うことも許された。

安川さんの一家が隣り部落に入植して来たのはその翌年に当る。同郷という関係もあり初めから親しく交際した。

たか子さんはその頃からのびやかな姿体の美しい少女だった。或る年、市街地区にブラジル語の夜間講習会が

始められると兄とあたしは毎晩、馬車を安川さんの家に回し、三人で通よった。寒い晩など狭い駁者台に三人身を寄せ合い、冷めたい風の中を声をあげて駆けさせたし、静かな涼しい夜など兄はわざと胸をそらせ、ゆつくり手綱を繰るのだった。そんな時、あたしたちは夜空を仰ぎ訳もなく笑い興じた。星が何処までも馬車と同じ速度でついてきた。…… 渡伯前、誰もが描く錦衣帰郷ははかなかったが一応生活は安定した。兎も角平穩な歳月が夢のように流れた。

それは太平洋戦争勃発まで続く。山野さんが初めてうちに来られたのは開戦後まだ間もない頃だった。

「K・Sというのはあなただったのですか」 兄から聴いたのだといい、あの方はあたしを其直ぐ見て笑った。生き生した眼と白い歯並が永く心に残った。K・Sとは未だ日南新聞のあった頃、文芸欄への投稿に使ったあたしの筆名なのだ。その欄の担当者が、山野さんだったということを知った。二、三日するとあの方は又おいでになった。或る団体の幹部だった兄と話のあるお様子で、そんな風に週に二、三回は訪ねて来られる状態がしばらく続いた。半歳ほどして、あの方はサンパウロ市の或る商社に就職し、自然ルツシイラにおいてになるのも間遠くなった。その時分、あたしたちは、文通し合うようになっていた。それはしかし葡語文以外の通信が全く厳禁され、検閲制度が設けられていた

当時、この唯一の手段さえ僅かに辿々しい葡語によるはかなく、もどかしい思いは寧ろ募った。乏しい語彙の手紙はそれ故に反って切実であり、遺瀨なくしたのだ。幸福の足音は波のように近付くかと思えば離れ、かえるかと思わせて遠退き、人の心を翻弄してやまない。あたしはその期待の内に疲れていった。疲れた心の中で幸福の価値が転倒する。やがてあたしは幸福と信じたものを拒み、それへの期待を憎むようになった。愚かしい。：　そしてあの運命的な日が来た。二月十日、その日、昼食の跡片付後、あたしは自室に入り、久しぶりにミシンを踏み始めた。突然、家の周囲に多人数の唯ならぬ足音が迫まり、同時に裏表の戸が乱打された。客間で読書をしていた兄が表の戸を開けに立ったらしい気配がした。

忽ちなだれ込むような靴音が床板に響く。父は留守だったし、あたしは母を気遣って直ぐ廊下にでた。戸の側で兄が数名の兵士に取囲まれ、何か言い争っていた。横の壁際に母がおろおろかすれた声で、兄に呼びかけている。

あたしはすべるように近付くと、その手を強く把った。両肩が頼りなくゆれていた。あたしは耳元へ唇を寄せ、低くだが必死に「お母さん」と呼んだ。兄を囲む中の、上官らしい士官が二本の指につまんだものを突付け怒声をあげる。それはあおぐろく錆びた短銃の薬莖がら

のようだ。その士官は威嚇するように腕をふりたて、重ねて怒号する。「短銃を差出せ」と言っているのだ。あたしは取り囲む兵士の肩越しに祈るように兄を見守った。兄は首をそらせ真直ぐ立っていた。横の一人が手荒く肩をこずいた。兄が口をひらき何か言った。声が干わきかすれて聴きとれない。士官は一層猛々しく喚いた。兄が声を張り再び繰り返した。「うちに銃器類は無い」あたしはやっと聴きとる。それはほんとうなのだ。がその

言葉はてんでに罵る兵士らの内で切れ断れに絶たれてしまう。刹那、一人の兵士の腕が大きく輪を描いてふりおろされた。肉を打つ鈍い拳の音が響き、低いうめきと共に兄の上半体が左右に揺らぐ。母が血の気の失せた顔で眼をとじた。又別の腕が降り下ろされた。あたしはアルバムの中に一枚だけ残されている筈の父の兵役当時の写真に就いて思い惑っていた。あたしは母の手を引いた。母はだが力の失せた身体を壁にもたせ眼を閉じたまま動かない。

再度やや力を込めて引いた。母は喘えぎうすく眼を開けたが、やはり其処を離れようとしなない。あたしは咄嗟に決心すると、母を残し、室にかけ戻った。……アルバム：古びた写真：父の軍服姿：動転した心に、そのもつ意味が異常にふくれせきたてる。手が絶えず小刻みに震える。早や家の中を靴音が荒れ、物の倒れる音、

くだけちる響きが伝わり始めた。やっとなぞ探しだした写真を幾つにも裂き、花ビンの中に投げ入れようとした時、室の把手があわただしく鳴った。目的を達するとあたしは息を詰め、じつと揺れる扉を見詰めた。鼓動が激しく波打ち、汗がつめたく背を伝った。把手はいよいよ音を立て、やがて鍵の毀れる音響と共に押しひらかれた。赤く怒張した顔が其処に立った。兵士は無言で中をぐるっと見回した。あたしはただ相手を見据えるだけだ。兵士が一步ふみいる。その顔をあたしは精一杯見据える。相手の眼が不図痺れるような鋭どさを加え、手が背後の扉の把手を探った。咽喉が干き、燃える。声をあげようとして声にならない。：陥ち入った一家の情況に対する絶望感の故だったかも知れない。：あたしは机に突いた片手でやっとなぞ身を支え必死に見据えつつけるだけだ。兵士の手が把手を探り当てた。あたしの手が無意識に何かを求めた。息詰る緊迫の内に屍が押しふさがれ外部を斜断した。異様に燃える両眼が大きく一步迫る。あたしの手が夢中で何かを掴んだ。脹れてひかる顔が又、一步迫る。

その鼻腔が激しく息付く。あたしはじりじり机を回り手にした物をふりかざした。相手の眼が一瞬、怯む。だが忽ち、一層狂暴なかがやきを加え、唇をまげ、低くうめいて、更に大きく迫った。覆いかかるように両腕がひらいた。：眼前が真紅に燃え、一瞬、深淵に似た感覚と

なつて、脳裡を走る。激烈な目眩、暗闇…その時、閉された扉が外側から又揺すぶられるのをあたしは聴いた。兵士の足が釘付けになった。扉が一杯に開らき士官が立った。その眼が不図、訝しげにあたしの片手にふりあげられているものを見たが、視線は直ぐ直立する兵士へ厳しく移された。「何んだ、娘の室ではないか、もういい、吾々は直ちに隣りに移動する」兵士は軍靴の踵を音立てて合せ、挙手して出ていった。士官は不図何か言おうとしたが、直ぐ無言でつぶいた。靴音は消えていた。くずれるようにあたしはその場に膝を突いていた。手に握り締められた裁ち鋏が指から容易に離れなかった。暫し放心したように開け放された扉の方を見た。細く震える母の嗚咽が流れる。身を起すと力の抜け失せた足を引きずるように室を出た。嗚咽は廊下を這うように聴えてくる。床板一、つたり坐った小さな母の背が、一時に荒廃した感じの跡に見えた。母は近付く足音にも気付かず、うつむきかき口説くように何か呟きつづけていた。膝の上に失神した兄の頭部が乗せられ、その乱れた頭髪を母の骨張った手が撫でていた。

信太は結局、一杯の夕飯さえ持て余し、食堂を出た。みち往く人の大半は既に寛いだ表情で、装いも軽快

な白服が多い。しかし夜目にその白が沁みた刹那、激しい悪感を彼は覚えた。身を震るわせ、上着の衿をかきたてながら考える。

― 熱があるらしい ―

何故か、ルツシイラでの太陽がふいに燃える明るさで遠い記憶の中から蘇ってきた。信太は恰もそれをふり仰ぐように首を上げた。記憶の中で陽ざしはいよいよ明るい。

だがその明るさには少しの温度もないのだ。氷のように白く、唯すべてを曝けだすための明るさなのだ。彼は又背をかがめ、震えながら進む。

― あの日、おれはルツシイラ市街地に二キロメートルの地点でバスを下りると、道端に立ってあたりを見回した。そのA部落の土は殆んど半歳ぶりに踏むものだ。その前の八月、訪れた時には、いわゆるこの国の晩秋蚕の終わった頃で一面の桑畑の株は白い切り口を並べ、黒土が何処までも見渡せたが、二月、この国の真夏の下で桑樹は青く二メートル以上も伸び、人家の屋根さえ、さえぎって見えない。やがて歩きだすと、少し行ったところから間道に入る。砂田の家はその柔らかな砂地の道を半キロメートル程這入ったところにあつた。砂深い間道はそれだけで、短靴の徒歩にはあるきにくい。しかもその道には過去のさまざまな自責があるのだ。おれは殊更、一步一步を深く刻み付けるようにし

て進んだ。誰にも行きあうことなく、訪ねる家の門に立った。外から見た戸も窓も閉され、人の在否も疑われる。しかし二、三度ノックすると、直ぐ足音が奥から聴え、鍵に触れる音がした。

「ぼくです山野です」待ち切れず鍵穴に口を寄せて言った。戸が一杯に開らかれた。かづえの母親のしげ代がかつてない、弱々しい取りすがるような眼色で迎え、うるんだ声で言った「まあ、お変わりありませんでしたか。どうぞさあ、這入って、かづえはさつき下へいったようだから、さつそく招んで来てやりましょう」「下へ、そうですね。ではぼくが自分で行ってみます」鞆だけ渡して、われは家の横を回った。

― 裏手の井戸端から、くさむらの中を細い小道が一条、うねうねと走る。それは少し行くと急に四十度くらいの傾斜をとり、生い茂るバナナの株間を曲りつつ下って行く。そこを下り切った狭間を小川が走る。あたしは其処を下と呼んで好んだ。流れは二キロメートルばかり奥の湧水に始まり、ずっと植民地南方のジャカー河へつながる。この辺では幅は楽に飛び越せる程度だが深さは背丈にあまり、しかも底砂の一粒一粒まで透いてみえる。両岸の鮮かな藻草が活例な水の中で揺れ続ける。ランバリ（メダカに類似の小魚）の群が絶えず泳ぎぬける。……その日、あたしはずっとうずくまるように其処にいた。そして、傾斜に押されて駆けとり

てくる靴音を聴いた。あたしは瞬間、それをあの方だ、と感じる。だがあたしは水につけた片手を流れにまかせ身じろぎしない。靴音は十メートルくらい後ろの処でとまり、弾む呼吸であたしの名が呼ばれる。があたしは反って一層軀を固くし、流れに視線を凝らす。複雑な感情だった。重ねて押し殺した声が呼び、靴音は一気に駆け下りた。あたしはやっと立ちあがり、向き直ってほほえんだ。あの方は黙ってそして実に真面目な眼差しであたしを凝視した。沈黙が重くるしく二人を取りまいた。

あたしは眼をはずすと「おいでになるの、大変だったのでしょう」あの方はだが答えず、視線を離さず凝つと立つ。両方の手が拳にされ、小刻みに痙攣していた。あたしは次第にうなだれ、足元に眼を落す。異様に庄えた声であの方は言った。「それより、こちらこそ、たいへんだったというではありませんか」……

無雑作にうしろで束ねた髪に手を遣り、彼女はほほえんでみせた。しかしそのほほえみにある努力のようなものが感じられた。彼女はやがて伏眼になり深くうなだれた。その額の生え際を怒ったように見詰め、ふたたび言った。「それよりこちらこそ大変だったというではありませんか」「あゝ、家宅摸索のこと、ほんとうにあの日は何処でも大変でしたわ。うちの兄など一時失

神したくらいですわ」彼女は言つて一寸面をあげた。顔にはやはり微笑があつたが、それは精一杯のようで、かすかにゆがみ、眼が哀願するようにひかつた。自らの内の或る想像に怯えながら、知らず識らず弱い眩きに似た調子でまた言つた。「話に聴き一刻もじつとしていられず、殆ど夢中で発つてきたのだが……」彼女はそつと背を向けると、水際の積つた朽葉の上に膝を突き、指を流れにつけて言つた。「ご覧なさい。きれいでしよう」水中に指先は白く、魚のように揺れて見えた。「……でもあの日には、かみの方が踏み荒され、濁つたまゝ仲々澄みませんでしたわ」その言葉に黒い不吉の陰を見たように、おれは忽ちあおぎめる。だが力かぎりそれを押しつけ、声をはげまして言つた。「だが、いまはやつぱり元どおり、澄み切っているじゃないか」「でも……ほんとうに一寸したこと水は濁つてしまふのですわ」彼女はかなしげに、だが、どこまでも頑くなな調子で言つた。深い朽葉を踏んでその様にかがむと、おれは或るおそれに慄えながら「やつぱり何かあつたのですね。そうにちがいない。隠さず全部話して下さい。ねえ、全部だ」思わず肩を掴んで言つた。彼女は顔をそむけたが、やがて向き直ると、重い調子で言つた。「あたしの家が兄のことだけで済んだのは本当ですわ。そして又、殆どの人もやはりそれほどひどい目に遇つたということはありませんわ。けれども……気の毒だつた方も、全

くなかったとは言えませんの。此の……同じルツシイ
ラで。……あの日からあたしはあなたのおいでを、どん
なに待ったか知れませんか。ですのにいま、あなたがお
りていらつしやる時、あたしはそれを知りながら、近付
く速度と同じ速さで、あとすぎりする自分を感じたの
です。そして、それはあの日、恐しい不仕合せと隣り合
せになりながら、「無事」だったということの故から
だったかも知れません。このことはまだ自分自身にも
説明できない気持なのです。でも兎に角「無事」が何故
か少しも喜びになっていないのは事実です。それどこ
ろか、この「無痕」という位置が今ではかえって一層
不安を掻き立てるのです。全く、あたしはこの幾日か、
どんなにそれを重く、堪えがたく感じ続けてきたで
しょう。現在の無痕ということに、少しの「確かさ」も
ないからです。ほんとうにあたしは幼い頃から幾度不
仕合せと紙一重でできたでしょう。幸福、それはいつも無
力で、そして不安定なのですわ」……

― あの方は途中、幾度かあたしの言葉を遮ろうと
した。

そうしては口をつぐんだ。あの方はやがて話しだした。
が、それは自分の一言一言に自ら抵抗していく苦しい
な弱い調子だった。「ぼくが十日の出来事を知ったのは
翌日の晩、北東地方から帰ったばかりの時だった。話し
ていた男たちは無恥な卑しい言葉遣いで喋った。それ

がぼくの胸に暗い陰を重くなげた。彼らに対する憤りより、寧ろ一種絶望的な危惧に打ちひしがれ、室に戻っていったのだ。ぼくは乱れる思いをまとめようと努めた。

しかし激しい狂気染みた疑惑が唯、火のように渦巻き、疲労だけが澱のように重なる。ボンヤリと照らす電灯の下で、ぼくは何時までもそうしていた。ぼくは自己の不安、焦躁、危惧、煩悶等の一切が、二人の運命の一つに結ばれていない処から生じるのだということを考えていた。二人の運命が離れ離れでいる処から、それらが発するのは間違いない事だ。ぼくの心は決まった」

「でも、別々の運命がどうしたら、一つになれるでしょう」 「二人の生活を一つに持てばいいのだ」 「それでもやはり、二人の運命は別々なのですわ」 あたしは寧ろ、自分自身に復讐する意地悪さで言った。あの方は吐息した。

沈黙を破るように 「二人が力を尽しさえしたら……」 とあの方はまた言った。が、それはもう無力な呟きに似た。木の間から洩れる光りがそこゝに明るく躍った。それが余り明るすぎたので、かえって、白々しく感じられた。……

犬の遠吠えが闇を這うように響いた。信太は終点で

市電を下りると、一区画毎にまばらになる家並の路を行く。

人通りも途切れ、街灯もない場末の夜は、慣れぬ者には歩き難いに相違ない。ずっと信太の後を尾行してきた男は忽ち躓いてよろめいた。信太は歩きながら、振り返える。男は既に気付かれることを予定していたように無表情で追いついた。夕刻、黄に引合わされた木田と呼ぶ男だった。「ホオ、あなたもこちら方面にお住いですか」信太が無邪気な歎声をあげるように言った。木田はだが、かわいた口調で冷めたく見る。「僕は君の尾行を言い付かったのだ。兎も角、お住居までお供しよう」

「尾行、そうですか。それは大変でしたね」信太は微笑すると、済まなそうに言った。「ぼくの下宿は、この通りを外れまで行った右側の最後の家なのです。番地は一五〇〇、実に覚え易い番号でしょう。でも、やはりそこまで行って見られますか」相手は唯、黙ってうながすように顎をしゃくり歩きだす。信太はそれに並らび「黄さんの意図も、あなたの行為も、全然無駄なことなのですがね。いくらぼくを縛ろうとし十重二十重に網を張り廻らせてもですよ。若し肝心のぼくが煙りのような存在だしたら結局無駄ではないのですか」「フフ、煙りか。だが君は現に黄氏の手からでた金を使っている。煙なんかでない立派な証拠じゃないか。兎も角その金額に相当することを代償として君は仕なければなら

ない」木田は冷笑した。信太の微笑はしかし疵付かない。木田の陰鬱な横顔にふと愛をさえ感じる。「木田さん、確か木田……さんといわれましたね。あなたは どうして、黄さんたちと関係を持つことになったのです」木田は瞬間、神経的に眉をあげ、腹立たしげに、並んで進む信太を見た。そして向けられている相手の微笑にぶつかり、かすかに狼狽の眼をそらす。やゝ間を置いて、木田は意外に素直な口調で言った。「僕にはこれ以外の生き方が無いのです。全くどうにも仕様の無いことなのですよ」重い溜息になった。信太は眉を曇らせ、一語、二語噛みしめるように言った。「あの戦争では、たった三、四十万に過ぎないこの国の日系在留民の内にも、随分ひどい、筆絶の立場に追い込まれた人がいることでしょうね。憎むことだけが、やっと生きる手掛りになっているような人も、きつといることでしょう。それは苦しいことですね。……かけ代えのない唯一の愛とか、純潔とかが突如として踏みにじられてしまう。そこでは、人は死を選ぶか、復讐の鬼、になるかの地。全く術がないようにみえる。だが、死を選ぶ、と言っても果して人間にその選択権が許されているかどうかが先ず疑問なので、結局、人間には「生きる」という一途しか無いのかも知れませんか。人間の「取捨」の範囲に常に生と死とが在るのではなく「生」の中にしか人間は いないから、だからこそ、人間は悲惨なのかも知れませ

んからね。が、では復讐する、……何に？。だが一体、何に復讐を企てるのか。蹂躪者へか、又は、その指令者へか。……信太は疲労したように吐息した。彼の面には相変らず、微笑があつたが、それは余り弱々しかったので、夜目には泣いているようだ。「……復讐は実に不思議に自己自身にかえる。復讐の窮極の対象が常に自己自身だというところにこそ、復讐自体の痛烈な意図があるらしい。……彼はこみあげた咳にこらえかね、足を停めた。くるしげに咳上げて揺れる背を見遣り、木田はじめて親身な感情らしいものをこめて言った。「加減が悪いのではありませんか」 信太は微笑のたゞよう眼で相手を見ながら呼吸を整えようと口をつぐんだ。それへふと訴えたげな眼を向けた木田が「それなら、それなら一体……どうしたら良いのですか」 「ぼくにも分らないのです。唯、全然新しい「所有」の観念だけが、あるいは救済を可能にするのではないか、と考えるのです」 信太がかぶりを振り、気の毒そうに言った。二人とも沈黙した。力ない咳声だけが又、歩き始めた暗い路に重ねられた。やがて、家並の切れた処で停つた信太は手をさしのべ、努めて元気な声で言った。「こゝです。この家です。さあ、這入りますから、しっかり見ている下さい」 木田は、その手を力込めて把つた。意外に熱く、ひどい震えが伝わった。

「たいへんな熱じゃありませんか」 木田は眉をひそめて

言った。「山野さんはお一人きりなのですか」額に掌を
持っていていきながら、信太は唯うなずいた。凝つと瞳をこ
らした木田が、ふいにささやくように早口で言った「山
野さん、僕の女房は戦時中、身投げしたんですよ。当時
：：ご存知かと思うが、例のP州南部のクレオパトラ
近郊にいましてね。ハハハ、想えば僕の一家は、この国
で皆、不幸でした。：で、僕も現在は天涯孤独というわ
けです。：ではどうかお大事に」、木田は急に恥じたよ
うに、くるりと背を向けると遠く見える停留所の灯の
方へ大股で引返した。すでに暗さに慣れたといえ、土塊
だらけの道に足元は乱れ勝になる。あやしむように横
合から犬が飛びだし、けたたましく吠えたてた。木田は
舌打し、躊いた土塊を思いきり蹴った。

― 俺は憎む。 ― 彼は別の土塊を力まかせ蹴つ
た。

― 俺は憎む。だが：本当に何を憎む可きなのか：僕の
一家は皆、不幸でした。：彼は山野の顔を思い浮べ、唾
をはいた。木田は誓うように声を出して、言った。

― 俺は憎む、最後まで、俺は憎む。 ―
犬が肉迫し、牙を立てるばかりに猛け猛けしく吠えた。
あちこちの飼犬共もつられ、ときならぬ喧騒を極める。
木田は歩みを止め、首だけねじ向けると無言で睨めた。
犬は、白い毛並を逆立て、いよいよ狂ったように牙をむ
いた。それへ向けられた木田の眼がやがて陰惨な色を

帯びふたたび前方を向くと、背後の犬を全く無視した足どりで進んだ。闇の中に益々、激しく吠え声がひびく。彼はだがもう振りかえらない。眼の色が一層暗く、一層一途の輝きを増す。そして闇を黙々と行く。

執拗に離れず追いつづけた犬もいつか消えて静かになつた。彼は吐息した。

一人間は不幸について、常に無知を粧おうー

：人間は自己の上に不幸が確定するー、その刹那まで、それを信じたがらない。ひよつとすればあの犬奴は跳りかかり、肉深く鋭い牙を喰い入らせたかも知れないのだ。

が、そうだ、それでも俺はやはり大したことに考えなかつたろう。彼奴の不潔な牙がこの五体の何処かに打ち込まれ、鮮血が吹いたとしても、やはり大したことに考えなかつたろう。そして、それは路を往来する人数に比し、噛まれる者が稀に相違ないという予想からであり、亦噛まれる者のうち若干パーセントが発病するに過ぎない。という予想にもたれてのことだ。人間は此の当てにならない幸運のパーセンテージに依りかかり、眼をふさごうとする。

確かにこの知慧が人間を存続させて来たのだし、永劫に生きぬかせることだろうが、しかし「不幸」はその間にも所有するパーセントの行使を一度だって休んだこ

とはないのだ。

木田は最終停留所の灯の下に立った。うつろに似た視野に、やがて電車の光芭が近付いてきた。

容ちのいい額の生え際から、面長な頬が柔らかな線を描く。やや浅くろい皮膚は健康に、双眸は艶やかに張りを見せている。要するに其処に在る「顔」は二十九歳の女だが、未だ充分、美しきを保っている。唯、紅を落した唇が僅かに勞れ、色あせている∴安川たか子は凝つと鏡を見詰めた。鏡面に写る置時計が午後三時を指していた。二月十一日、彼女は長めにカットした髪をいつまでも梳きつづける。一見、いかにも丹念な仕種だが、気を付けると、単に機械的な繰り返しに過ぎないことが分る。

たか子は鏡の中の自分の眼を見詰めていた。

― 昨日も遂に行がなかったように、今日もあたしは行かないだろう。そして沢山の余白を残した日記のように、終止符は打たれる。何回も待ちぼうけに逢うことは彼にとって恐らく、がまんできないに相違ないから。若しかしたら∴彼はあたしにとって最後のチャンスの提供者かも知れない。だがやはりあたしにはこうするより仕方がないのだ。別に、自身「幸福」に価いしな位と考えてではない。決してそうではない。たか子は否定するようにかぶりを振った。

―あたしは人間と幸福との関係をもうそんな風には見ない。寧ろ幸福と人間との関係が余りでたため過ぎるから、どのような必然も皆無だから、あたしは立ち尽してしまうのだ。幸福は決して人間に価いしない。「幸福」の前で、どんな人間も卑下する必要はない。そうだ。「幸福」に較べれば「不幸」は未だしも必然的といえよう。

けれどもその「不幸」にしても、人の生涯をぬりつぶしてしまうほど決定的ではない：この頬を野蛮な力で打たれたとする。手型が紅く残りヒリヒリ痛むだろう。だがそれはやがて、手型が消え、痛みが去る時零になるはずなのだ。この皮膚と肉を残忍な爪でズタズタに引き裂かれたとする。だがそれさえ、痛みの消え去る日、零になるはずのものだ。よし、傷痕は永く残るとしても、それは不幸とは別の何かなのだ。そして幸も不幸も元来、感覚的なものだ。では：どうしてあたしはそれを除け、立ち疎くむのか。あれほどかづえさんの怯懦をわらい、否定したあたしなのにそれは矛盾ではないだろうか。何故？何故なのだ。：あたしは、それを：：知らない。そしてあたしは此処に坐りつづけるだろう。たか子は耐えるように瞳を据えた。鏡の中の顔が彼女を睨んだ。その顔が次第に白く、かすんだ時、彼女は扉を打つ音を聴いた。

一九五三年、二月十一日、午後三時十分、斉木二郎はマリヤ広場附近の日本人BARでテーブルに肘突き、壁の電気時計を見詰めていた。十人近い中の客は同胞の常連ばかりで、思い思いの姿勢でスタンドによりかかり雑談にふけている。スタンドの内側のラジオが急に高められる。マスターが此方に背を向け、ダイヤルを回わす。

R・Gの古典音楽を素通りし、ジャズやバイオンや道化劇を素通りし、やがて日本語が流れだす。P・A・Rのリオ・デ・ジャネイロからの中継録音放送らしい。雑談の音が消え人人の注意が集中する。雑音と共に断続的に流れる日本語は、今朝、サンパウロより出張したアナウンサーの声である。雑音と聴えたのは、どうやら、F島移民収容所へ向う彼ら一行を乗せたランチの発動機音らしい。

一しきり、波のくだける音、海風のうなり、など入り混り、やがて栈橋に着く。録音は一転し、収容所の内部に移った。又、一しきりあわただしい足音、ダブル話声。そして「新来者」へのインタービューが始められる。「ではそちらの隅のお方から、御出身地は？」「〇〇県でございます」 「無事、御到着おめでとうございます。もつともアマゾンへは未だ距離がありますが、そこで早速ですが御抱負を一つ：」「ハア：わたくし：彼地に

参りましたら、花や果物の温室栽培を致してみたいと
考えているのですが」録音器の前で、ひどく固くなつて
いる一人の男の様子が眼に浮ぶようだ。B A Rの内の
斉木を除く、皆が声をあげて笑った。

「エエ、あなたは〇〇県御出身のYさんで：日本では土
木の方をおやりになつたとのことですが、御抱負を「わ
たくしはアマゾン河の落差を探り、発電事業を起した
なら面白い、と兼々、考えているわけです。そこで：」
「ハ？アマゾン河、落差：ハハア、なるほど、面白いで
しょうね」アナウンサーの間の抜けた応答を聴きなが
ら、皆の者は前より一層、大袈裟に笑いこけた。片隅で
斉木だけが強く唇を噛んだ。

「赤道直下で温室か」

「アマゾン河の発電、これは大きいね。なるほど」てん
でにアナウンサーの口調など真似、尚笑い続けた。

「エエ、〇〇さん」笑声に掻き消されそうになりながら
アナウンサーの声が依然つづく、斉木は凝つと、うつむ
いたまま、笑っている者全体に激憤した。アナウンサー
の口調に、その新来の同胞たちに、殆ど憤りを感じた。
彼は紙巻を灰皿に押しつぶしながら、苛立つ視線を迷
わせる。

すべては未だ、始まってさえ、いないのだ時計の針
が三時三十分を過ぎようとしていた。激しい失望の眼
が、見上げた。たか子との約束時間は確実に三十分過ぎ

た。

そして、それだけで、充分過ぎるではないか。彼は折りかさなる憂愁を掻き除けるように、手をふり、酒を命じた。

扉はずっと、前からたたかれていたのかも知れなかった。

たか子は引いた扉の把手を持ったまま、見知らぬ、男を見た。極端に血色の悪い、無表情の顔だ。身なりは一応ととのっているのだが、妙にうらぶれた感じが、ただよう。男は低い乾いた声で言った。「山野さんをご存知です。ね。昨夜からひどい熱で、ずっと寝込んでいるようです。」

何とかしなければ不可ないかもしれない。「男の言葉は勿論たか子を驚ろかせた。しかしそれ以上、彼女を反発させる響きがあった。彼女は皮肉な調子になった「わざわざそれを報せに来て下さったの。ごしんせつですわ。」

でも折角ですけれど、今日、お見舞には伺えません。それに、あたし、あの方に関しては、何も、特別な扱いを受ける訳はありませんのよ」 「無論、あなたは自由ですよ。唯、さつき、新報へ寄ってみたら、留守居の者しかいなくて、そして、各日、あなたから、山野さんへ電

話があつたと聴いたので伺っただけです」男は暗い眼を大儀そうに、あげて言うと、背を向けて去ろうとした。「二寸、あをた、お名前は何とおっしゃるの。山野さんとは一体どういう関係がおりになるの」たか子は腹立たしげに呼びとめた。男は首だけ向け、面倒くさそうに答えた。

「木田といいます。山野さんとは多分、あなたと同じくらい、無関係の者です。病気のこととも偶然知つたに過ぎません」「兎も角、山野さんの所書でも置いて行つて下さらない」「先刻、扉の下から入れて置きましたよ」男の唇が微かにわらつた。「そう…それは、ありがとう」彼女は相手を睨み、立ち去る背中にひびくように扉を閉めた。見ると壁ぎわに紙片があつた。それは彼女を嘲けるように白々と写つた。たか子は指を噛み、無視するように奥へ行きかけたが、一つの思考がその彼女を引き戻した。

「勿論、あたしには格別意味のない、一片の紙切れなのだわ」彼女はそんなふうにかへたのだ。兎も角、紙片はこうして彼女の自尊心によつて、拾いあげられ、一瞥された。

しかも彼女は少しすると、見舞のための仕度を始めていた。勿論、それが一番自由のように考えられたからだ。実際その日たか子には何もする事が残されていなかった。

その家のあるじは、狭いゆれる梯子段を忍ぶように入り、屋根裏部屋の戸をソツと押して覗いた。内には入らず、直ぐ来た時と同じ忍びあしで下りていく。階段の下に妻女が人の好い心配顔で待ち受けている。夫婦は五十過ぎた純黒人系で、あるじの白髪も小さな巻毛で、頭部に密着している。その頭が無言で、横にふられる。下り切るのを待ち兼ね、妻女が声をひそめた。「このまま放つて置いて良いものかね」「だけど俺らにもっと、何が出来るな」あるじはいま覗いた部屋の小机の上に、さいぜん持っていったままで眼に付いた午餐の器を思い出しながら言った。「ほんとに、で何かね、別にひどく苦しんでも、いなさらなかったね」「ん、まあ、壁の方向いて、どうやら、寝んでいなさる風だったがな」「オオ！かみさま、ほんとに早く親切なお友達でも、おいでて呉れますように」妻女が淡朱色の掌を組み合わせで言った。「ま、も少し、待ってみよう。先刻あの方の事を訊ねに来た男の人が方々へ報せて呉れるかも知れないからを」あるじが言った。二人は黙った。そして頷き合いながら自分達の居間へ這入った。

屋根裏部屋は、ほど中央に、十センチ平方の明りとりがあるだけで、隅々は昼間でも暗かった。この小さな部屋の三分の一は独り寝の寝台に占められ、唯一つの小

机さえ、ひどく、窮屈げにみえる。それに粗末な木造りの椅子が一脚、これだけが部屋のすべてだ。否、かすかな光線の下に、注意すると、寝台の下から引きだされ半開きにされたトランクが一個眼に付く。その金具が鈍く反射し、内部の陰気さを一層にきわだたせる。昨夜、信太は立ちかえると直ぐ、烈しい悪感に襲われ、やっと引き出したトランクから、有りたけのシャツを取り、毛布の中で震えつづけた。蝦のように身体をまげ、両膝を抱いて凝つと、瞼を閉じた。震えは容易に停らず上下の歯が打ち合って鳴った。やがて、それが静まり、全身が汗ばみ始めた頃、彼は微笑を浮べていた。膝を抱いた姿勢のまま、やがて仮睡状態に入った……。

彼は深い霧の中に立っていた。視野は数メートル以上に及ばない。その中を道がどこまでも坦々と延びる。乳白色の霧の中に無限に展く道が彼には何となく素晴しく思えるのだ。道を往く目的ははっきりしない。だが往く手に目的とするものが、約束されているのは確かなことのようなだ。だから、その往く手が霧に隠されて、いることさえ素晴らしいことに思えるのだ。視野をふさぐ霧の中が、全てあらたな期待を孕むからだ。一步進む。すると、その歩幅だけ視野が展く。更に又、一步進む。其処に忽然と、目的物が浮ぶかも知れないのだ。信太はふるえる心で、一步、一步踏んだ。彼の前に高いかめしい鉄戸が浮んだ。彼は困惑したように左右を見

回わす。肩の高さを越す生垣が霧に解けている。彼は門を離れると垣の方へ近付いた。厚く重なりあつた葉の一葉一葉が露をたたえていた。彼はのびあがつてみた。すると、意外に近く白のブラウスを着たひとの姿があつた。彼はそれがかづえであることを直覚する。かづえはうつむき、余念なく掃きつづけている。簡素にうしろで結んだ髪形も柔らかな肩の線も、ルツシイラのあの「下」での時と不思議に変わっていない。彼は暫し、唯、見詰めた。かづえが不図、顔をあげ、彼の立つ方を見た。彼はグツと踵をあげ低く、その名を呼ぶ。かづえは瞬間、僅かに身を退いたが、眼を一杯に見ひらくと、引かれるように寄つた。彼は整理の付かぬ表情でわらつて見せた。かづえは、だが、固く緊張した表情をくずさず、無言で右方を指差し生垣ぞいに行く。彼もそれに連れて進む。垣を挟む内と外で、平行して進むうち、強く心に迫まるものがあつた。二人はしかし、寧ろそれを噛み締めるように、沈黙のまま歩を運ぶ。

小木戸のあるところに出た。かづえが開けながら、静かな声音で招じた。それは幾度も胸の中に復唱したらしい感情をこもした声であつた。それが深く心に沁みる。彼は哀願するように相手をみた。かづえは顔を外に向けた。庭内の処々につゝじの植込や花壇がよく手入れされ、既にさまざま色の花が咲きぬれている「あれが修道院で、裏手の方に、伝道婦養成所はありますの」か

づえが荒壁の二階建てを指し横顔を見せて言った。「きみはどんなしごとをしているのですか」彼がうしろから問いかけた。

彼女は歩みをとめず答える。「あちらの木立ちの向うに幼稚舎があるのですけれど、その児童たちの世話や菜園の手入れや、お掃除や、いろいろですわ。…あたしたち幼稚舎の事務室の方へいきましようね」。少し行くと茂みの蔭に彼女の言う四面硝子張りの舎屋が覗いた。かづえはスカートのカクシから鍵束をとりだし、「毎朝、九時になると、五十人以上の児が集って、それは賑やかですよ」と言った。事務室と言っても其処は一隅を二方、薄板で仕切っただけの狭さで、内には二個の木造椅子と机が一つ、その上に数冊の帳簿が積まれているきりだ。

かづえは椅子の一つを彼にすすめ、自分もソツと掛ける。

彼女の眼がいたわるように見る。その眼差しのまえで、彼は急にみじめな気特に襲われる。彼は思わず視線を落したがやがて努めて軽く言った。「ところで、きみは末だずっと此処に住むつもりなのですか」「え…」。彼女は不意に狼狽し、眼ばたきした。彼は笑顔で一層軽く、冗談めかした。「つまり、…生涯ここの生活を続けるカクゴなのですか」「覚悟とか何とか、それほどしつかりしたものは、只今ないのですけれど…唯、あた

し先刻、申上げたように、朝早くから晩まで、お仕事、お仕事で追われ、つづけるでしょう。そして、夜はやはり労れる、故でしょうね、それは良く寝すめますの。それと：此処を一あしでも離れたら忽ちひどい目に遇いそうな気がして。・：すつかり臆病になったのですわ。それにあたしもうおばあさんですものね」彼女は言いながら、ほほえんだ。彼はほほえみの前に又みじめな気特にとぎされ、うなだれる。そして自己の無力を噛み締める。だが、彼の面上にやがて、彼女のほほえみに似通う微笑が漂い始める「きみがおばあさんならばおぼくはオヂイサンです。勤め先でもね。ぼくは小川さんという七十近い老人ですが、その人と一番仲良しなのです」彼は椅子を離れると、内カクシから幾枚かの紙幣の入った封筒をとりだし、彼女の膝の上にソツと置いた。「これを幼稚舎の子供たちにも何にでも良いように、使つて呉れないかな。ぼくの寄進です」 「まあ：すみません。でも、山野さん、あとでご不自由なさいませんか？」彼女は椅子にかけたまま、ふり仰いで言った。「ダイジヨオブ心配要りません。生活費は残る勘定ですから」彼は笑つて言うと、さりげない調子で語を継いだ。「ぼくはいまのしごとに就くまで、酷い生活を送ってきたのです。それが：ある日、そうなんです。全く何でもないある日ですよ。ぼくはまじめな勤め人になる決心をしたのです。そして、その時のたった一つのぼくの希み

は、こんな風に余分の金は残らず、慈善団体か何にかそういう所へ寄付をするという事だったので。なぜ？
と言つて、ぼくは未だ立ち直つたばかりで、「自己の善行」についての確信はないわけですからね。そのようなぼくにとつては兎も角「善行」に自信をもつ人たちに任かすのが一等間違いのない遣り方ですからね」彼女は無言で、視線を膝に落した。膝の上の封筒にしずくが一滴落ちて光つた。彼はそれには気付かぬげにつづける。「皆「解答」を追うのに性急過ぎたようです。終局に待つものが「孤独」「混沌」「矛盾」「徒労」であるにしても、「不幸」と「あきらめ」以外の結末はないにしてもそれらの「答」に一直線に突進する必要はないばかりか、有害でさえあるわけです。「答え」が確固不動であるならあるほど、其処へ辿り着くコースは大きく弧を描く方がいい。解答が生涯の終点と重なるように、刹那の狂いもなく丁度、重なり合つて、一となるように、コースを選択するのが、智慧というものであるらしい」彼女が指先で眼頭をおさえた。あれたくすり指の傷が破ぶれ、鮮やかな血がにじんで見えた。「おや血がでていますね」。彼女は反射的に手を覆おうとした。が思いかえしたように、きつちり膝の上に揃えた。両手の指は艶を失しない、無数の傷痕が刻まれていた。しかしその故に紺地のスカートの上のべられた手は、寧ろ清潔で美しかった。彼は彼女の捷毛に光るしずくを

凝視し、清例な感覚に浸っていった。

安川たか子は信太の額に掌を当て顔をうかがいながら、火のようだわと思った。その時、やっと信太が眼を薄く開け、寝返りを打とうとした。充血した眼が鈍く光った。

彼は一寸の間、訝るようにたか子を見上げたが、尚疑うように眼を細め、そしておずおず言った。「何時……誰に聴いて来られたのですか」 「もう三十分にもなりますわ。随分寝苦しそうになりましたが、只今、ご気分は如何が」 たか子は掌を離すと、電灯のスイッチをひねり、訊ねた。ぼんやりと淡い光線がひろがり、汗を浮かべた信太の脹れぼったい顔が照しだされた。彼は眩しげに眼をしかめたが、直ぐ嬉しそうに「そうでしたか。ところで、ぼくは実に楽しい夢をみましたよ」するとたか子の顔の表情が激しく変化し意地悪い眼付になった。「山野さんはこんな風になっても、やはり笑っているおつもりなの。たまらない方ね。でも……あたしはもう昨日のように、その笑いに庄されたり、怯びえたりしませんから。山野さんの「微笑」の秘密を、すっかり知ってしまったのですから」

彼女は首をそらせ、挑戦するように言った。信太は身を起そうとし、咳入って背を波うたせた。彼は凝つと己

の咳に耳を澄せるようにしたが、相変らず笑顔で、たか子を見た。「勿論、安川さんが圧迫を感じたり、怯えたりする理由はないのですよ。しかし笑うぼくが幸福だということも、同時に事実なのです。それで、いいではありませんか」「嘘、おっしゃい」たか子が鋭く、たたきつけるように言った。「あなたの微笑が、幸福の証拠なんかで、あるものですか。あなたが幸福、だなんて、それこそ誰一人信じるものですか。さあ起きようとなんかなさらないで、凝つと寝んでいらっしゃい。本当にあなたの熱はひどいのですよ。燃えるような高熱なのですよ。お自分で額に手を遣ってご覧なさい。それからその咳、そのまるで力のない咳、あなたはもう完全な肺炎を起しているか、ひよつとしたら肺結核かも知れないですよ。そうだわ、あなたの両肺は、きつとずっとまえから、真黒な数えきれない空洞で、めちやめちやなのに相違ないわ。あなたは死ぬのです。もう直き死ぬに定まっているのです」たか子の顔が急にゆがみ、悲鳴に近い声で、真直ぐ、彼を指差した「あなたは直き死ぬのです」しかし彼女の眼に信太の微笑はいよいよ深く、いよいよ大きくひろがるのだった。たか子はくずれるように膝を突くと、寝台の縁に手をなげ、思い迫った眼をきらめかせて言った「山野さん、死にましよう。ねえ山野さん、ほんとにあたしと一緒に死んでくださらない」声がかすれた。信太は痛ましげに見、しかし首を

横に振って言うのだ。

「ぼくの死が確実であるとしたら、どうしても、急ぐ必要があるのです。全く：「死」は全ての人間に確実なのだから、人間は生きることだけを考えればいいわけですよ。そして、ぼくも勿論それまで生きて行くつもりです」

たか子の眼が又、憎悪で燃えた。冷ややかに身を離すと、半ば蓋のあいた、側らのトランクから小さな缶をつかみ、信太の面前に突きつけて言い放つ。

「卑怯者の、見栄張り屋さん、あなたが確信するのは「死」なんかではなく、ほんとうはこの缶の中味なのでしよう。どうお、口惜しそうね。検温器を探そうとして、見付けたの。でも死にたくないと言うなら、お随意に何時までも生きていくがいいわ。その代り、もうこんな物、忍ばせて置くような、気障な真似はおやめになるといいわ」信太は眼の前のX十字に髑髏のマークの白く浮きでたそれを見詰めた。感動の色が浮かび、微笑の波がひろがった。「安川さん、若しその中味が実は何でもないメリケン粉か何かだったとしたらどうなのですか」たか子の表情が動揺した「：やつと分ったのですが、こんな物は人間にとって、全然、無意味なのですよ。運命の終局は、正確無比なのだから、人間は待ちさえすればいいのです。そして、そういう人生はやはり素晴らしい、と言えませんか」たか子の手を離れた缶が床の上で

幾度か弾み、暗い隅へ転げて行つた。彼女は唯、信太を睨み据えた。

信太が、又、咳始め、悶えるように背をまげた。するとたか子はそれを蔑すむように見下し、不図唇をゆがめて言うのだ。「ではせいぜい命惜みをなさい。これでペニシリンでも大急ぎで、お打ちになることね」彼女は机に置いた、ハンドバックを取上げ、乱暴にひらくと、一枚の紙幣を投げるようにした。紙幣はひらひらと舞い枕辺をすれすれに床に落ちた。： 信太は駈け下りるように階段を踏み、遠去かつて行く靴音を聴きながら、紙幣を凝視した。ほこりっぽい床の上で、弱い光りを受ける紙幣は、もはや彼の眼に、紙幣でなく、ある新たな啓示のように感じられた。

「おれは、生きる。おれば死のやってくる迄その刹那まで生きる」。で生きる。

信太は声にだして、そう呟いて見た。そしてその言葉の意味の、余りにもあたりまえな、あたりまえ過ぎる位いあたりまえな事に気付き、直ぐ苦笑を洩すのだ。それはおそろしくたいくつな論理の反復に過ぎない。従つて、それは又ユーモラスでもある。殊に屋根裏部屋に呻吟する彼と、その言葉との関係に於いてユーモラスである。

信太は声をあげて、笑い出していた。が勿論、笑いは忽ち込みあげる咳に中断されてしまった……。

下の妻女が階段の中程まできて、苦しげな咳込みを聞いた。彼女はひとの良い顔を左右に振りそれが癖である大きな溜息を一つ重く洩らした。

(一九五八年)

父

原 奈保子

略歴 本名原ひさ子。一九五二年十月着伯。ノロエステ線グワイサラ駅で農業に携わる。現在サンパウロ市在住、主婦。パウリスタ文学賞、農業と協同文学賞に佳作入選数回、「コロナア文学」にも比較的多くの作品を発表しているが、最近は余り書かなくなっている。或る年の農業と協同文学賞佳作入選の時、この受賞を機会に、生への執着にも似た文学への憧憬は、ある種のひっこさを増して来たようです……と言っているのだが。

父

原奈保子

予定の荷造りが済む頃になって漸く雲間から太陽が姿を現わした。只さえ頭痛を覚える様な近頃の天候に文治は鼻柱を押える様にして空を振り仰いだ。云い様のない柔い冬の日射しがパイネーラの幹の間を縫う様にして、文治の体にふりか、つてくる。一旦家に這入った彼は妻の料理姿をしばらく眺めていたが誰にともなく呟く様に云った。「もうこれで済んでしまった」妻のしげのは首だけ動かして夫の方を見たが再び鍋の蓋をガチャガチャ云わせながら気忙しそうに手を動かし続けていた。「俺は一寸その辺を歩いてくるからな」そう云い置いて文治は部屋を出て行こうとした。

「パイ、遠くへ行ったらいかんよ。文夫が帰って来たら又どんな用事が出てくるかわからんから」

しげのは相変らず鍋の方を向いたままの姿勢で、やや強く云った。竹叢を通り過ぎた処からカンナ（さとうきび）畠になっていた。此処に移って来た当時の文治の生活は相当貧乏だった。先妻の子孝治が未だ幼なくて、母を失った淋しさに泣き疲れては一本のカンナをしや

ぶったま、文治の背中であむったものだった。二二本しか無かったカンナが根を張って今では娘の春江が器用にその汁をしぼって椰子の実などと混ぜ合せ、菓子や飴の材料に使う様になった。人の背丈の倍程にもものびていて、文治が腰の小刀で斜めに切り落とすと粘い汁が噴き出る様に滴った。五寸程に切って表皮を刺すとそれ自体が透き通ったキャンデーの様な甘い匂いを放った。小口切りに刻んで文治は口の中にほりこんだ。奥歯でそれを噛みしめると歯の間々から舌の上一帯に溶けて流れた。文治はゆっくり歩きながらその味を噛みしめていると亡くなった先妻のちかの事が想い出されて来た。大正七年同村の山科の構成家族で渡伯した文治は、五年程して山科の次女ちかを妻に迎え、貧しいながら精限り根限り働いたのだが、孝治を出産するとその妻は次第に衰弱して行った。財産どころか何の貯えも無い彼等に、貧乏は容赦なく掩い被さっていった。一進一退の病状に終止符を打ってちかは孝治の名を呼びながら死んでいった。その時孝治は三回目の誕生を越えたばかりだった。幸な事に子供の方は健康に恵まれ、育児の経験等まるで知らない父親の手でぐも、容易に取扱う事が出来たのだった。滅多に父親を手古ずらせない孝治だったが、時折遊び過ぎて寝小便等を洩らすと翌日は一日中気分を滅入らせて父の背中で泣いた。子煩悩である文治は良く此の子のために自作の子守唄

をうたいながら、夕暮の道をおんぶ姿で散歩した。そうした時必ずと云って良い程孝治はカンナの一茎をしゃぶっていた。母親似の色の白い息子の寝顔に幾度か男の涙が滴り落ちた。文治は遣瀬なく頭を振りながらちかの幻影を追い払う様にして歩いて行った。左手に展ける綿畠に眼を移すと二年続きの豊作で予想以上の高値を呼んだ綿の木が、今は整理されて焼野原にその残骸を晒している。此の綿が豊作でなかったら、街に出る事にもならず済んだものをと文治はしばらく佇んで掘り返された土の色を見つめていた。今にも土の中から綿の木が芽を出す様な錯覚に捉われながら、文治はそうやって立って居る地所が、すでに自分の手から離れてしまったものだとは思ひ度くない気がした。つい此の頃迄汗水垂らして働いた此の畠も自分の持ち物では無くなった。何か足許を掬われる様な不安が文治の脳裡を掠めた。其処を通り右手に曲る処から五アルケールの方の珈琲園が細長く縦にのびて二つの山に股がる。綿の方に精力を取られた形で、珈琲樹の方の成績は余り高く評価されない品種である。が文治に取ってどの一本でも夢おろそかに扱った木はないと思う。文夫と春江も父の馬鹿丁寧な手入れの仕方には手を焼いていた程、文治は暇さえあれば珈琲樹の中に居た。よそを歩いてみて総体に通路際の樹は傷め付けられているものだが、彼の畠は道際も真中も殆ど変らない位にその枝ぶ

りは栄えていた。そんな事にも文治はひそかな自負心を持って居るのだった。千本ずつの区切りに打ち込んだ棒杭の処迄来ると文治は訳もなく胸が一杯になつてくるのを覚えた。何故か白く塗った棒杭が墓標の様な淋しさに映るのである。歩き出しては立ち止り、止つては樹を見上げてして文治は涙が落ちるまま拭いもせず山を越えて行つた。

一万本程の珈琲樹林も見渡せばかなり広大な面積を占めていて、眼を細めて見遣る彼方の樹間はみどり色の絨毯を敷きつめた様に空の色に溶け込んでゐる。

夢を誘う様な午後の日射しの中で、文治はとつおいつ考えに沈んでいった。

先妻を失つて孝治を背中に縛り付けては働きに出ていた文治だった。人の世話で此のアミザーデ植民地に流れ込んで間もなく今の妻しげのと知り合つた。彼女は最初の結婚に失敗して戻つていた頃で、兄の許に身を寄せて居たが、時折見かける文治の子負姿に何故か引きつけられる様に近付いて行つたのだった。文治とて男手一人の不自由さを思う時、縁さえ有れば後妻を迎え度い気はあつたのだが底をつく貧乏の中でそれは余りにも夢じみていた。三回五回と逢う機会毎にしげのの態度が積極的になつて行き遂に文治の口を割らせる日が来た。

「しげのさん、あんたは私と孝治の世話をしてくれる気は無いか？」 「文治さん、私の様な出戻りで良かったら、孝ちゃんの面倒見させてください」

此の時文治の心には結婚という浮き立った気分は全然湧いてこなかった。何か請求に応じた義務感の様なものしか感じられなかった。

しげのの兄は是も貧乏暮しの中に在って、縁あって嫁づく妹の幸福をと云うより、厄介物が片付いたと云った表情で内輪ばかりの祝宴中騒いで居た。とに角に文治は孝治から放たれて働きに出られる様になった。この事は文治に取って便利な事であつたばかりでなく、冷飯を味噌汁で流し込むといった無味乾燥な生活から、すつかり抜け出た。朝の空気は清々しく彼の肺腑を洗い浄めるのだった。

時折彼は妻の態度に合点の行きかねる節にぶつかった。

それは急ぐ用件の時に多く見られた。というのは文治が側面に在って何か云った場合彼女は知らん顔をして自分の仕事をしていた。初めの裡は気付かなかつたのだが、度重なるにつれて聴覚に異常の有る事を知つた。

それ以来彼は特別大声で云うか、聞える方の側に寄って話す様にした。慣れる迄は妻の知らない不快を味わされた。そんな仲にも次々に子供に恵まれ、孝治の下に二人の弟が産れた。下の子が歩き出す頃、突然高熱

に見舞われ幼い生命はあつけなく消え去った。文治とても子供の死は悲しみの他のなにもでもなかつた。だが、しげのの眼に映る夫の愛情は、どうやら健康児の孝治に注がれているとしか思えなかつた。上の子も病弱で何時も母の傍について廻り、孝治が遊んでやろうとしても男らしい勇氣にかけて些細な事にも涙を見せたりする子供だつた。三番目に文夫が出来る、交替の様にして上の子は死んでしまつた。文治は何か知ら先妻の執念が其処に働いている様な恐怖に駆られる事があつた。文夫は色の白い女の子の様な優しい顔立ちで、心もそのまま、に病氣もせず成長して行つた。文治は内心ほっとしながらも祈らずには居られない不安に付きまといられていた。孝治は文夫が余り大事に育てられるのを嫉ましそうに横目で眺める事があつたが、決して手を出していじめたり泣かしたりする様な事は無かつた。以前程に自分から遊んでやろうともしなくなつた。三才とは思えない孝治の頑強な体つきに父は肩巾の足らないだけの息子の若武者振りを見る思いで山からの帰り道には何時も、充ち足りた心を抱いて並んで行くのだった。文夫の下に女の子が産まれたが、これも誕生を過ぎると間もなくひどい胃腸障害を起して可愛らしい笑窪をその頬に残した俥死んでしまつた。

次々に愛児の死を見送っては文治も男泣きに泣いた。妻がヒステリックに振舞う事があつても、文治は呪わ

れた宿命と自分に云い聞かせて野良仕事に専念した。

妻から五回目の妊娠を知らされた時、文治は全身が総け立つ思いで聞いていた。

早朝から起き出しては死んだ三人の子供の位牌の前に回向を手向けている妻の姿が有った。何時の頃からか朝、茶を沸かすのは文治の仕事になっていて冬の夜長をかまどの前で過ごし乍ら余りにも厳しい現実にともすれば逃げ出したい様な想いに駆られる事もあった。

五番目の出産は女の子だったが精気に欠けていて誰の目から見ても、半年程の寿命にしか見えなかった。其処でしげのは産褥を離れると隣接の植民地に住むと云う黒人老婆を訪ねて出掛けて行った。言葉がわからなくては、と云って文治は孝治を伴わせてやった。其の老婆は産婆もして、占もするとかで、黒人ばかりでなく近辺一帯の白人達からも人望があつた。

「此の子は助かる、立派に育つ。だが一度捨て児して他人に拾ってもらい更めてもらい子すれば必ず育つ」

との事で、捨て子と聞いただけで神経衰弱のしげのは、眉をキリリと吊りあげて通訳に立った孝治をにらみつけて云った。

「孝治、お前は此の子を捨てさせる気なんだね。今迄大事に育ててもらった恩義があり乍ら、ようしそんなら見てるが良い。わたしがどちらを捨てるか、見てるんだぞ」孝治は驚いて母の顔を見守った。蒼白な顔色に眼

ばかり異様に光る母の表情は孝治の感じ易い心を恐怖のどん底に追いつめていった。母を残した俣孝治は飛んで帰った。只ならぬ気配に文治は息子を問いただして見たが、あらましの顛末を語っただけで心の動揺には遂にふれなかつた。其の日から、夫婦の間にもしげのと孝治の間にも気まづい溝が掘られていった。

そうこうする内にも一年の才月は流れ去っていた。人の世話で末娘春江は一度捨て児され、更めて拾われた後、もらわれて父母の許に戻り、どうやら危険期を越えたのである。

或日突然孝治は父を呼び止めて云った。「パイ、おらあ、よそに働きにいくよ。文夫も大きくなったし、パイのアジューダも出来るし：ね：い、だろう？。おらあ働きに出しておくれ：パイ」今は父よりも頑強な体格の孝治の影法師が長く影を落している。もう十八才の若者である。「お前が行ってしまおうと、パイもさびしくなってしまうぞ。もう少し辛棒してくれんか」「おらあ、もう一人前になったんだ。金なんかもらえんでもい。パイ、おらあ、あのママイと合わねえ。ママイから文句云われるたんびに死んだママイの事思ひ出すんだ。おらがパイにアジューダする様になつてから買った土地なのに、ママイは文夫にやりたいんだ。やっつていいよ。その代り文夫がパイとママイを見て

行かなきゃならん。ねえ、パパイ」

そう云って顔をそむける息子の言葉を、父親は腹をえぐられる思いで聞いた。しばらく無言で歩いた後、家の近くに来て父親は立ち停つて云つた。

「孝治、お前が良く働いてくれた事は、パパイが一番良く識つてるぞ。だがなお前がひねくれもせず今日迄来られたのは、ママイが可愛がつてくれたおかげなんだぞ」「パパイ、おらあ、ママイから捨てられたんだ」「馬鹿！お前はもう立派に一人前じゃないか」父は激しく息子を叱りつけ乍らも、妻のしげのが片寄つた可愛がり方をするのを苦々しく心に描き出していた。

それから間もなく孝治は飛び出してしまった。その頃から文治は鼻に異常を感じていた。にぶい痛みに襲われると何も彼も手につかなかつた。そしてそれは冬が巡ってくる度に悪化していった。人の話しでは今に骨が腐つて鼻柱が無くなつてしまふという風土病だとの事で、年々みにくく変形して行く己が鼻に呪いと失望を深めていった。それに引換え不思議に文夫も春江も健康に恵まれ、学校へ行く様になつても殆ど風邪も引かぬ程丈夫になつていった。余り出来の良くない文夫を母のしげのはせめて中学校まではと力んでみたが、二年続けた受験も見事失敗に終つた。妹の春江はグルッポも常に一、二位を争い気性張りな性格を兄妹の間にもはつきり現わす様になつてきた。時折は母をや

りこめて自分の願望に従わせようとする事もあった。その春江もそろそろ中学受験を来年に控えると何となく落ちつきのない素振りを見せる様になって来た。

「春江、お前は暇さえあれば机にかじりついていて、少しはママイのアジューダでもしないか。ママイは一人でバタバタしてるのに、お前は丈夫より役に立たない」そう云って母は恨み言を並べたりした。その年の冬は寒気が厳しく曇りがちな空模様の明け暮れが続いていた。

最近になって買い足した珈琲園の手入れで、文治は孝治と連れ立って歩いた日の記憶を思いながら、丈夫と二人それにかかっていた。時折顔中を真紅にして、鈍痛を訴える父の顔に春江は涙を一杯ためた顔を近づけてのぞきこんだ。

「パパイ、痛い？注射打っても駄目なの？。パパイの痛そうな声聞いてたら、あたし勉強が手につかないのとやさしく云った。

母親似の気性を持ち乍ら、反面涙脆い春江は、時々こんな態度で父親を驚かした。そして、遂に受験の日が来ても出掛けなかった。

「春江、どうして行かないのかい。ママイは一生懸命仏様にお祈りしていたに」と訝しがる母に「もう行き度くなくなった。卒業したらパパイのアジューダするよ」

とポツンと云って部屋から出て行った。隣の部屋

で文治はそれを聞いていた。年々変形してゆく自分の鼻、一人娘の春江が華やかな女学生生活をあっさり思い切る陰には、この親の鼻が災しているのだ、きっとそうに違いない。誰よりも気性張りの娘の、そうした心遣いが文治にはたまらなく思えた。彼は首に巻いていた手拭を取って顔に押当てた。片輪者になってしまった自分が怨めしかつた。可愛想な娘の心情を思い遣って文治は泣いた。涙が新しく湧き上る度に鼻の芯が錐で揉む様に疼いた。

春江が野良仕事を手伝う様になると、文夫の徴兵が迫って来た。男まさりの春江は文夫よりも先頭に立ってカマラダを使いこなしていった。文夫がマツトグロツソ方面に二年程つとめてくる間、春江は立派に父の助手をつとめ、体格も早や母親を凄ぐ程に成人していた。

文夫が帰って間もなく、徴兵中知り合った浦塚清と云う青年が遊びにやって来た。文夫よりも老けて見える此青年はL市に住んでいて、トランスポルテの運転手をしていると云った。

二三日遊んで行ったがその間に春江ともすっかり親しくなった。彼が帰ってから現在迄文夫は文通を続けていて、引き続いた二年間の綿の豊作に、若い文夫と春江は吸い寄せられる様に、都会見学に出掛けて行った。その浦塚青年の案内で一週間程都会の華やかな空気を

吸って帰った二人は、家に帰っても未だ脱け切らない興奮に頬を火照らせて両親に話して聞かせるのだった。

「パパイ、上市には日本人が沢山いるよ。そしてみんな綺麗な生活してるよ。僕も清君みたいにシヨフエイロしようと思っただけど、どお？」 或夜文夫は両親の前にや、固くなり乍ら、こう云った。

「お前、一人で行くつもりかい？」 と母は眼を注いで息子の顔を仰いだ。

「ノオ、此処のシチオを売って、町に家を二、三軒買つて、ママイ達はその家を貸して家賃で暮らすのさ。僕はカミニオンを買ってもらってトランスポルテをやるのさ」 春江は黙ったま、両親の顔を見較べていたが、「ママイ、私も自分で月給取りになつてみたい。私位のモツサ達が大勢働いているよ、みんな綺麗な格好してさ。

「いつ迄もこんな百姓よりシヨフエイロの方が良いって云うなら、あと誰が此処のシチオやっで行くの」「そんな事云つたつて、お前、町の生活は大変な金が要るんだよ、折角今迄辛抱してきたのに忽ち無くなつてしまふよ」「ママイ、だから兄ちゃん云ってるじゃないの、只住むんでは勿体ないから貸家するのよ。その家賃で三人や四人位結構食べて行かれるよ」「それでもねエ。お前だつてそろそろ嫁にも行かなきゃならん様になつてくるし、文夫だつて嫁を貰わんならんというのに、金要りばかりで入ってくる目当てが無いんじや、わたしは

心細いよ」「ママイ、私なんか末だ先の事よ、兄ちゃん
だって二、三年稼いで自分の結婚資金位溜めるよねエ。
もう一人前だもの」妻は娘と息子の顔をかわるがわる
見較べ乍ら傍の夫を省みて言った。

「あなたはどう思います」

「うむ」文治は黙り続けたま、苦い表情で一同を見廻し
た。其処には二十三才の立派な若者と十九才の瑞々し
い娘が父の返答や如何にと眼をあげて注視している視
線が有った。

春江のふくよかな胸の線が父の視線の中で、ゆった
りと波打っている。触れれば跳ね返る様なむっちり
と引締った胸元は、父の瞳さえも戸惑わせる。若い希望に
充ちた視線の中で、文治は吾が身の老いを知った。年々
痔き通した鼻柱が彼の精力をも減退させてしまってい
た。

文治は気まずい沈黙の後三日を経て、文夫の前に承
諾の返事をした。息子と娘の浮き立った気分を引き廻
される様にして、文治とその妻はネゴシオ、整理と心落
ちつかぬままに、日を送っていた。文夫は浦塚を呼んで
何彼と彼の意見を求めた。フォード五一年型の新車を
運転して帰って来た文夫はもう立派な運転手だった。
自分の息子乍ら、立派な成人ぶりに文治は更めて驚い
て驚異の眼を瞳っていた。そして永年夢に描いた自家
用車の雄姿は、暫時文治を捉えて悦惚の境地を彷徨わ

せた。浦塚は一足先に帰って行つたが、文夫らの町に出る事に対しては心から賛成している風ではない様子が、文治の眼には汲み取れていた。愈々出発の日が迫ると、家財道具も整理されて、古いもの、汚れたもの等はほとんど処分されていった。板壁の喉にも、土間の窪みにも、ランプで煤けた大井にも、天井の隅のくもの巣にも、文治は遣瀨ない思い出がひそんでいる事を想つた。都会での生活、それは幾度夢見た事か知れなかつた。だが余りにも遠い存在であつた様な気がする。すつかり片付いた部屋を出て明朝の弁当拵えをしている妻の後に立った文治は、其処にも云いしれぬ淋しさを感じていた。

十三才も年の違う妻とは思われぬ程、しげのの皮膚は色艶を失い、髪にも白く光るものがまじっている。文治は鼻の病気さえ取除けば、まだ五体は健全だし、頭髪も黒々とその容貌を保っている。だが年は六十八才と云う高齢の部に入っているのだ。もう長くはないと思われる己れの将来に今は親孝行を誓つてくれる二人の子供だけがすべての頼みの綱だつた。そう思うと文治は一人でしばらく此の思い出をまとめ度いと思つた。歩き乍らの回想は、しばしば彼を立ち停らせ、その歩みをのろくしたのだった。やがて暮れ易い冬の陽も西に傾き、二つの山に股る谷間一帯は明るいみどり色と濃いみどり色とに染めわけられていった。樹々の間を

縫って吹きあげてくる風の音が大きく耳につきだす頃は、又冬の寒さを想わせる気温に下っていった。翌朝未明に予定通り出発の準備は整った。同部落の家長は殆ど全員積荷を手伝う為に、文治の家を集って来ていた。名残りを惜しむ者、励ます者、送る者、送られて行く者の心の中には共通の寂然とした空間がつくられていった。隣家の世話で一同に熱い茶が配られ、心づくしの菓子等をつまみ合って、文治達は熱くふくれる胸を抱える様にして車上の人となった。

運転台に文夫が坐り、助手席にはしげのが並んだ。遠距離のためお互いに疲れを覚えないために、ゆっくりと席を取ったのである。春江は風呂敷を頭に被って、父と並んで荷物の間の椅子に腰を下した。

「文夫君、決して急ぐんでないよ、未だ、あんたの腕だめしは先で良いからな。パイやママイに怪我させん様気を付けるんだよ」「文治さん、体には呉れぐも気を付けて、又気が向いたら何時でも遊びに来て下さいよ。あんたの子供衆も此処に眠ってるでなあ」口々に訣別の言葉を送る裡に、文夫は静かにエンジンを踏んだ。一回、二回、三回とフンションさせておいて照明のスウッチを押した。そこに点されてあつたランプの光りを吸い込む様にして、灯りは点された。

植民地を去る時の習慣として、ブジーナが一回鳴らされた。「今此処を出ます、皆様お世話になりました」

という意味で。

皆が一斉に手を振った。文夫も片手をハンドルにかけたまゝ、両側の人々に向って片方の手を挙げた。しげのも半巾を顔に押し当てたまま手を振った。文治は帽子を取ってそれに応えた。春江は甲高い声をあげて半巾を振った。東の空がほの白くしらみかけて夜風が冷たく彼等の襟元にふれた。除行を続け乍ら、家の前から州道に出た文夫は徴兵中に習得した運転技術が役に立って嬉しくてたまらない、といった顔付きで緊張に面を強張らせ乍らも、その口元には会心の笑さえ漂よわせていた。

その日一日走り続けても目的の地には着かなかつた。途中で休憩したり、食事をしたりするのにも或程度時間を取ったが、文夫の計算よりもはるかに時間を超過していた。

「今から道が良いから少し飛ばそう」という息子の肩に手を置いて、「文夫、い、からゆっくりやれ。道の悪い処ではお互いが気を付けるから良いが、道の良い処にくると皆飛ばすから注意の上にも注意が必要なんだ」と父は優しく訓す様に云った。

乳色の霜に包まれたL市に入ったのは翌朝六時すぎだった。浦塚が奔走して呉れた三軒の空屋は何時人が入っても良い様に綺麗に掃除されてあった。運良く表通りに面して二軒並んでいてその真裏に小造りの板家

が一軒、寝室も、台所もちゃんと備えられてあった。荷物の上のものからおろしかけた処へ浦塚が友達だと云って半黒のブラジル人を連れて来て手伝った。二軒の間の通路を通して荷物は運び込まれた。必要品以外はあらかじめ処分して来たので、自動車一台で済んだと思つた荷物も、部屋に配置して見れば、狭い造りの上に、ゴタゴタ置く訳にもいかず、結局表通りの二軒とも一時片付く迄使用する事にした。ガラクタ道具類は、一応裏の板家に押し込んだ。

不慣れな町の生活はしげのを時たま狼狽させる事が有つた。今迄野菜一葉買った経験もなければ、その値段さえ知らないのであつた。そして買物の帰りには決つてごつそり費した財布を表から押えてみるのだった。一寸其処迄出るにも靴に履き代えねばならなかつた。髪にも櫛を通す様にと娘から注意されたりして。

家の整理もついて皆の腰がどうやら落ちついた頃、春江の就職も決つた。すべてが浦塚の世話に依つてなされたのである。大きな薬局で「日本語とブラジル語と両方話せる者」を求むとの事で、春江は浦塚に案内されて行つてから、一週間程して採用の通知を受け取つた。活気に充ちた春江の処女らしい装いも段々身につついて、あの野良着に埋もれていた頃とは、一段変つた美しさが出て来た。母は眼を細めて娘の後姿を見送るのだった。

文治は思い切り体を動かしてみたいと思っても限られた屋敷内ではどうする事も出来ず、狭い乍らも僅かばかりの畠を耕す事に依って、青味を楽しむと云った処である。

文夫は浦塚の世話で仕事の方も順調に行く様になり、時折は遠方で二三日手間取って家に帰らない事も有った。

初めの裡はしげのも文治も夜は寝付かれぬま、案じ明かした事もあつたが、次第に馴れていった。

文治は退屈な生活を持って余す様になつた。子供らは隠居でいたら良いと云ってくれるのだが、実際に労働を中断してしまうと、その後に襲い来る虚脱感に対抗してゆくには余りにも無力すぎる己れの姿を見るばかりである。耳が何となく遠くなつた気がする。眼も弱くなつた様だ。息子と娘の時代になつて来たのだろうか。文治は手持無沙汰のまま次第に弱つてゆく肉体を自覚していた。しげのは忙がしい忙しいと愚痴をこぼし乍ら、部屋を磨いたり、台所の用事をしたりで結構毎日休む間も無い程働き廻っていた。湯水の様に出て行く金の行方を時々文治は深刻に考え込む事があつた。文夫も春江も普通並以上に月給を取る様になつていた。しかし眼に見えて残る額は、百姓の一カ年分の収穫の割から見れば、余りにも僅かなものでしかなかった。二年続きの綿作りが当つた事は、たしかに文治をも有頂天

にさせた。否綿作り業者の誰もが、その懐を温めたのだった。

文夫は酒も煙草も手をつけない性で、仕事に対しての真面目さを買われて、誰からも可愛がられた。戎日文夫の得意先であるK組合の人が文治を訪づれて来た。予め文夫から来客の有る事だけは知らされてあつたので、しげのは愛想良く招じ入れた。

「初めまして、文夫君の御両親ですか？私は富沢と云つてK組合に働いています者で」その男は立派な体格をややこごませる様にして丁寧な挨拶を交わした。紅くめくれた様に皮膚の組織迄変ってしまった鼻はどうしようもなく来客の前に晒されていた。

客は心持ち眼を上向けて、それでもこめかみの辺りに瞳を据えて語り出した。

「それは簡単に云うならば、自分の組合に働いている娘さんの一人を、文夫君に世話したいと思つているのです」その男は文治よりもはるかに若く見えるのに頭は三分の二は禿げて頂上の辺りには申し訳ばかりの髪の毛が几帳面になでつけられてある。心持ち口の端をつぼめる様にして云う素振りが、何如にも人好きのする柔和を湛えている。

文治は膝の上で指を折つてみた。何時の間にか息子は二十四才にもなつていた。一通り話しが済んで来客は娘の写真を置いて帰つていった。心の片隅ではもう

大分以前から計画の裡にあった事乍ら、いざそれにぶつかるとあわてずにはいられない感じである。その夜夕餉の席で、「文夫、今日はK組合の富沢と云う方が見えてネ」「ふうん」「お前には何の用事で采られるか云つてなかつたのかい」「う、ん、僕は何にも聞かなかつたよ」何よりも腹ごしらえと云つた様子で文夫は頬張り乍ら時々チラと両親を見返つた。

「なあんだ、そんな話しだったの、僕は又良い話だつていうから大きな商売でも見付けてくれたのかと思つたよ」「だって兄さん、一度は考えなきゃならない問題よ、ねエママイ。へんじだつてほつとく訳にいかないよね」「春江お前遠慮せず先に嫁つて良いんだぜ、僕はゆつくりあとから氣に入つたのをもらうから」

「ふふ…」。兄さんの氣に入る人つて一体何時現れると思つてるの、そんなのんきな人に見付かる前にみんなほかの人にもらわれていっちまって、兄さんが探す時になつたらさっぱり居なくなつてしまふよ。兄さんは實際のんきすぎるんだから」文治は二人の子供が何時の間にか立派に成長して早や結婚の事実を前にして活発な意見を闘わしているのを不思議な心境で聞いていた。

文夫の態度はその娘との話しを断つてくれでもなければ問い訊すでもなかつた。何時頃からか親しく往き来する様になつた富沢氏も、文治との囲碁に凝り出し

てからは仲介口の方は忘れていたかの様である。

「さてと、明日は公休日と、日曜と二日続きなのでわたしの発案で若い者ばかり集めてピクニックをする事にしてるんですがね、どうですパイも一緒に行ってみませんか？。文夫君の車を前から頼んでるんですがね」

文治は初耳だった。それにしても今迄一言も親の自分に返事も聞かせてくれなかった息子の遣り方としては少なからず心憎いものを感じさせられた。あの内気な文夫か直接逢ったのだろうか。それとも一応は逢つてみたいと云う好奇心からであろうか、とに角そのいずれかでなければ文治は納得がつきかねるものがあった。その夜、子供達の前で文治は云った。

「文夫も春江も良く聞けよ、パイはな、お前達の倅せばかり想っているんだ。だからどんな小さな事でもパイに相談してくれ」もつとあれもこれも云おうとしていた事が言葉にならずに文治の口の中で消えていった。幼い子供と違って今は成人した二人の姿は、何かしら文治を親としての粹よりそとに隔離させようとする、眼に見えない力を持っている様で文治にはのけものはされまいとする自分の卑屈にさえ見える焦燥が悲しかった。

翌日は快晴に恵まれ文夫は春江を乗せて出掛けて行った。彼等が夕方帰ってくる迄、文治は異様に重苦しくのしかゝる心の鬱憤と闘っていた。じつとしている

事が嫌なのか、それとも惜しいのか、しげのは鼻をぐずぐずいわせ乍ら幾度も夫の前を横を通りすぎたが、夫の存在を気に止めている風でもなかった。昨夜おそく迄かゝつて春江がはしゃいでいた手作りの弁当も、陰気な家の中では見栄えばかりでさっぱり味を楽しませてはくれなかった。

若い頃と違って舌の上の感触も敏感であり、練達されていた。

「こんなもの何処がうまいんだ」

「パパイ、そんな言つたつてどおする。若い者は若い者の口に似合つたものを作つて楽しむのに」「いや、日本じゃ若い者も年寄りも大体同じ様なものを食べる」「そりゃ、わたし達の頃は貧乏暮しが多かつたし、それに田舎だつたらそんなぜいたくも云つていられますよ」「どうも近頃食事が進まんでいかん」「パパイの様に毎日ゴロンゴロンしてたら腹へらんのが当り前よ、何もするじゃなし」終りの言葉がチクリと脇腹にさ、つた。そのとげは意地悪く文治の神経にふれた。それは抜こうにも抜けない深さで止まつていた。

「馬鹿野郎」手当り次第投げつけたい衝動に駆られて文治はメーザの上に手を伸ばしたが、とつさに妻は彼の手の届く辺りのものを卓布ごと自分の方へ引寄せてしまった。最近時々発作的に起るこうした狂暴性に家中の者が警戒を初めている事も文治には淋しかった。理

性を無くし切れないで、意識しながらやる芝居の拙劣さにやり切れない侮辱を感じなら。

妻の三角に吊り上った臉をにらみ付ける様にして文治は一番手近かな息子の部屋に姿を消した。力一杯扉を叩きつける様にして閉めた。

激すると鼻柱がツーンと針金でこずかれるように痛む。と同時に大粒の涙が両眼から溢れ落ちる。最近とみに感傷的になってきている自分自身を慰めるものは自分以外に無い事も知った。自分では未だ年等考えている時ではないと思う。それでいて環境は彼に楽隠居という結構な身分を与えた。その中では常に白い眼を以って文治の行動を見ているもののある事を意識させられる。時々その白い眼が大きく施回して文治の眼の前に牢獄の格子を思わせる事がある。そんな時は決して夢の中でだが、のたうち廻る自分の声にうなされて隣りに寝ている妻を驚かすのである。夢から醒めても異様な悪寒が体内に残っていて、その日は終日鼻の痺く日でもある。

どれ程ねむったのであろうか、人々の声高な笑声に眼覚めて首を起すと、窓外はとつぷりと闇に浸っていた。

「パイパイ良く寝たのね。さつき帰った時顔出したんだけど余り気持良さそうだったからそつとしといたのよ」「そうかい。ちっとも知らなかったよ」文治は明るい団

樂の中に自分から入っていった。

「パイ、富沢さんから話しのあった人ね、中々兄さん
気に入ったらしいよ」

「そうか？。そりや良かった。富沢さんも喜ばれたろう
な」 文夫の単純にはにかむ様を見乍ら、文治は父親ら
しく優しくそういった。

春江は兄を前にして、兄の相手であるその娘井手康
子について細かく話して聞かせた。

「春江、お前みたいに良い処ばかり云ったらうちの様
な処には勿体なくて来てもらわれんじやないか。ねえ、
パイ」しげのが浮きうきした笑顔を夫に向けてきた。
「うん、うん」どちらにともなく領いて文治もその笑い
の中に加っていた。その次に富沢が来た時略々話しは
まとまり、半年の交際期間に入った。文夫は仕事の都合
上何時も康子を誘う事は出来なかったが、セマーナで
も暇が出来るると彼女を電話で呼んで家で話したり、映
画を観に行ったり、普通のコースを辿っていった。

それは第三者から見れば、文夫は紳士的な振舞いに
見えるのだが、文治の眼からだど、すべてが康子に
リードされている様子がありありと見えて、器用振ろ
うとしている息子の愚鈍さが、反って彼女の取澄まし
た表情に笑窪の一つも作らせているのである。

半年の期間は夢の様に過ぎ去った。中でも妹はたっ
た一人の兄の為にと云って、自分の小遣いを割いては

豪勢な掛布や室内飾り等を丹念に作っていた。そうした取り込みの中で、文治も鼻の痛みから遠ざかり、新しい生活への計画やら挙式の費用、形式等について一人の胸算用を楽しんでいる風だった。

「此の頃、パパイ元気になってきたのね、顔の色がとても良くなったよ」娘にそう云われて鏡をのぞきこむ日も多くなってきた。人の出入りもいくらか多くなつてくると、不精ひげも剃らないではおれなくなり、文治の気分も幾分か引立てられていった。愈々挙式の日は古くからのつきあいが泊りがけで手伝いに来てくれたり、近隣の手伝人で手狭な街の家は人々々でごった返していた。

本人の文夫は朝から妹に説教され通しで、する事、なす事が手につかない風であった。

「兄さん、ほらそのシャツの時は此のネクタイよつて云つといたでしょう」「その靴には此の靴下よ。そらバンドも古いのしたままじゃないの」「髪は何時もなおしておかなきゃおかしいよ」

妹とぶつかる度に注意されている文夫は、それでも人の間を泳ぐ様にして、新しい来客に一人一人親から教えられた挨拶を交して歩いた。文治は奥の部屋に行き、山と積まれた祝儀のお返しの前に立って、手にした人名簿と照らし合わせて手抜かりの無い様に調べていた。その時ふと文治は忘れものに触れた思いがした。そ

れは長い間姿を消してしまっている先妻の子、孝治の事だった。今日の様な華やかな祝いの気分には浮び上った孝治が恨めしかった。

孝治は黙然と父親の鼻先に在った。思えばもう親の許を子つて二十年の才月が流れていた。あの日あの頃、庭の垣根代りに茂るに任せて放ってあった紅いプリマヴェエラが花盛りであつた。

その花垣の向うから、今日は帰ってくるか、明日は帰ってくれるか、と空しく待ち侘びた文治の姿があつた。

子を待つ親は二十年の才月に老い込んだ。が杏として未だに知られざる息子の消息に、今は悲しく思い諦めていたのである。

文治の眼元が潤んだ。

「孝治、お前は一体何処にどうしているんだ。俺が生きる内に一眼会いに来てくれ。そしてお前の子供らにも逢わせてくれ、な。孝治俺は意気地無しの、父だった。もう笑物だ、だがお前にも文夫にも春江にも俺は親なんだ」その時春江が探しものをしながら馳け込んで来て云った。

「。パイ其処で何してるの？ママイが探していたよ。もうそろそろお風呂に入って仕度しなきや直ぐ時間が来るよ」慌たゞしく馳け去って行く娘は父の頬の涙には気が付かなかつた。心持ち前屈みになつた背をのばす

様にして文治がその部屋から出て行くと、もう其処には子供用に作られた食卓に沢山の手がのびて、思い思いの御馳走に浮き立っていた。

富沢氏夫妻に伴われて花嫁の一行が着いたのは時刻きっちりであった。幾度か見馴れた井手康子のうわ背な花嫁姿はしばらく春江の足を釘付けにする程美しいものであった。予定の通り着席すると儀式は順々に進められていった。

せまい乍らも庭の植込みに仕組んだ噴水は、見る者の眼を楽しませ、涼を誘った。客の中には春江の友人や文夫の同僚である外人の男女が四五人交って坐っていたが、春江のもの馴れた扱いにすっかり周囲の人々と溶け込んで微笑ましい雰囲気を醸し出していた。参会者一同の祝福を受けて森山家の祝宴は何時果てるとも知れず賑っていた。

親子水入らずの生活に美しい花とも云うべき康子が加り、和気霜々の裡に日は経っていった。父親を幼くして失ったという康子は、嫁と云うより文治には娘の様ないとしさが感じられて「康子」と気軽に名前を呼べる様になった。

文夫と康子が二人仲良く並んで坐っても、それは夫婦と呼ぶより、兄妹と呼んだ方がふさわしい様な二人である。文夫の婚約中に寝込んで遂に結婚式に姿を見

せなかつた浦塚が、或日ひよっこり訪ねて来て若夫婦を喜ばせた。

「清君、こんどは君の番だぜ」

「いや、僕は未だ当分一人だ。親父が居ないうちは、長男が見て行かなきゃならないがらな。僕は未だまだ自分の事なんか考えた事はないよ」「いやー、でもみんな弟も妹も働いてるんだから、何も君ばかり責任もつ事無いと思うな」「おふくろが可愛相でね、どいつもこいつも、自分からおふくろを看て行こうなんて云う気持ちの奴は一人だつて居やしねえ」

「君が余り一人で何も彼もやるから弟や妹が（注・この行不明）してるんだよ」「いや、そうじゃない。父親が長い間病気で寝てた人で大分借金も出来たのさ。でもあいつら僕に比べたらうんと楽しってるよ、精神的にね。僕は何時もおふくろの泣き言を聞かされ乍ら長男だ、総領だつて小さい乍ら責任負わされて育ってきた。だがあるいつらにすると親が作った借金なんか子が払う責任は無いと、済ましたもんさ。」

いくら僕が云つて聞かせたつてそんなら兄貴が払えば良いじゃないか：つて、兄弟でもこうなんだぜ、僕は時々悲しくなる事があるんだ。僕の死んだ後誰がおふくろを看て行くんだらうと思つてね」浦塚が鼻をくすんと云わせて仰向いた。そして直ぐ顔を上げて笑顔を

作り乍ら、「いや、済まない。お祝いが変な事になつちやつて堪忍して下さい。奥さん」ペコリと頭をさげた。隣室で聞き入っていた文治は飛び出して行って清を抱いてやり度い様な衝動に駆られながら、じっと眼を閉じて居た。折柄雨模様の雲足が急に拡がって大粒の雨が窓ガラスを叩き初めた。しばらく沈黙が続いた後で、文夫がラジオのスイッチを入れると、陽気な音楽が流れ出した。文夫であろうか、靴の先でリズムを取っている音が隣室の文治の耳にも伝わって来た。

文治はたったいま友の気の毒を身の上話を聞かされたばかりの息子が、いかに新婚とは云え、全く其の場にふさわしからぬ行為に出ている事が、はしたなくも憤ろしくも思えて其処からは見えない浦塚に恥づかしい気がした。

文夫と清とは同じくブラジル生れであり乍ら、相対的な性格を持っていて、生い立ちの境遇をさえうかゞい知る事が出来る。

何時か文夫は又、清とブラジル語を交せて、面白そうな話を続けているもようので、時折つつましやかな康子の笑い声も洩れてくる。

しばらくして清が帰って行った後、若夫婦は室内でひとときを過してから、シネマに行く、と云って腕を組んで出掛けた。

今はすっかり一人前になった息子の広い肩巾が有つ

た。

寄り添う様にして若く美しく着飾った康子の姿も大人びて見える。まさに幸福の絶頂を想わせる夫婦の睦まじさに、近隣の女達は振り返り乍ら羨望と憧憬の瞳を送ってきた。

玄関に見送ったしげのが庭の植込みに廻って最前の雨足で叩かれたスカートピーの茎を起して棒切れに結わいつけたりしている姿を、窓から眺めていた文治は、訳もなく大きな溜息を一つついた。百姓の苦労だけが見みこんでいる様なバサバサの髪を無造作に束ねて捲きあげている妻の後姿は、文治の心に佗びしい影だけを植えつけた。

死んだ母もどん百姓の貧乏に追われ通して逝った。只、女には子供を大きくする為の義務の前に絶対服従があるばかりなのであろうか。殆ど其の生涯を子育てに費してやれやれと腰をのばす間もなく死んでしまった母に比べれば、しげのは余程幸福な母の座に居るといふ事になるが、それでも康子達の時代には「母の座」等と呼ばれるものが、どんな形になって現われてくるのか、文治は妙な心理に捉われていた。日本に昔からなつかしい子守唄があって、日本独特のネンネコの味を知らない者は居ない。明けても暮れても子守唄を聞かない日は無かった程文治の兄弟姉妹は多かった。しげのも病弱な子供を背中にくくりつけては、夫の仕事の

手助けをして来た。女は子供を育てる事以外に仕事を沢山もつていて、それを上手にやりくりして行く妻が、働き者として歓迎された。だがいわゆる外国での生活は特に町では、女は子供を隔絶して育てる。

授乳も容色の衰えを防ぐ為に早く母乳を止めて、人工栄養で育てる。夫婦は何処へ行くにも連れ立って行くが、子供は部屋に鍵をかけて置いて行く。そうした遣り方を見聞きするにつけて、文治は親子の情愛に疑問を抱く様になったが、少くも自分の家庭ではそうした体験は絶対に無い事を誇りにしたいと思ってきたのである。だが時代は変って息子の代になった。

いくら親でもそれを強要出来る筋合いのものではなかった。康子は子供が出来る迄は、夫婦共稼ぎをしようとって一週間程経つと、又もとの勤め先に通い出した。時代の変遷が明治生れの文治には走馬灯の様をめまぐるしい足跡のみを刻んでいた。其処には故郷の匂いを含んだワラジの跡があり、ハダシがあり、ゴム靴があり、上等の皮靴もあった。それらの一つひとつが異国で余生を楽しんでいる彼の歴史を秘めている。誰からでも干渉を受けない時間が一日の大半を占める中で、次第に無気力な無抵抗主義に陥ちて行く己れの姿を、哀れにも佗びしく持て余している文治、忘れた頃にやってくる囲碁友達の富沢も、少ない森山家の客人の一人である。或日、その日は急激に降下した気温のため長居の

富沢が早々に切り上げて帰っていった。

「森山さん、こりや此の分じゃ今夜あたり霜ですね、せつかく世の中が景気になって来たと思えば綿は下がるし、珈琲は豊作だし、百姓も中々大変ですよ。肥料代も馬鹿になりませんかなあ」 底冷えのする空を仰ぎ乍ら、富沢はこう云い置いていった。翌日のラジオにはやはり寒波襲来で各地が霜害に見舞われた模様を伝えていた。文治達が売って来た一帯も珈琲の被害地に数えられるのを聞いていた文夫が、「パパイ、良かったね、やっぱり町に出て来て良かったよ。綿もうんと安くなったし、カフェも霜でやられちゃまって三、四年は駄目だし、あの時思い切って売っちゃまって僕達は運が良かったよ」と得意顔で父を見返って云った。何か素直に「そうだね」と合槌の打てない感情があつて、文治は手にしていた新聞に眼を落した俣の姿勢で黙っていた。その新聞記事には大暴落の綿作として、近年の収穫高に伴う価格高の統計表が大きく記録されていた。世の中の衰微が此の紙片の一枚に依って群衆の心理を左左している事が、何かしら途方もなく大きな力を持っている様に思えて文治は偶然とは思えない現在の生活をふり返ってみていた。遠大の理想は実現を見なかったけれども、とも角も不動産が残った事だけでも文治の生涯を飾る事業の大半は完成されていると云える。まして今は立派に成人した子供がブラジル国民として、

社会に役立つている事を思えば親としてこれ以上の望みは、早や慾と名付けられねばならないであろう。

そう思う心の片隅に、やはりこれが自分の生れ故郷であつたら：と不覺な執念が頭をもたげるのである。父の常癖として見なれている文夫は文治が意固地に黙り込んでしまふと妻を誘つて自分達の部屋へ引揚げて行つた。

しげのも立って隣家になつてゐる文治ら夫婦の寢室へ向つた。その頃春江は急患が出来たり、仕事の都合で帰宅時は乱れがちだった。今迄陽氣一点張りだった春江の姿が部屋に見えないといくら文夫夫婦が楽しそうに振舞つても、それは彼等夫婦だけのものであつて文治にも妻にもその半分も楽しい感じは湧いて来なかつた。

時に話に興じた文夫が、康子とブラジル語で議論めいた口調をやり始めることがある。そんな時しげのは決して席を立てて行つた。それは二人の会話の意味が解らない為ばかりではなく、何かしら其処に理解されない嫁に対する感情が働らいていた。嫁と姑のいざこざは全くと云つて良い程起らなかつたが、その眼に見えない溝は何時もしげのと康子の間に横たわつていて、二人は巧みにその感情を繰つていた。

それは春江にも文治にも極どい軽業師の様な器用さを想わせるものがあつて、男まさりの氣質の春江を吹

き出させる様な事もあった。康子が一年目に流産した時にしげのは其の枕辺に坐つて云つた。

「康子やお前にそんな無理して迄働いてもらわなくたつて、宅で貧乏してるんじゃない、少しは世間体も考えておくれ」「ママイ、わたし好きで働いてるのよ、ちつとも無理なんかしてないです。だって家にじつとしてるの勿体ないんですもの。文夫さんだって一生懸命働いてるのに私が遊んでいたら、あの人が怪我でもして働けなくなつた時困るじゃありませんか、私は好きで働いているんですから心配しないで下さい」康子の言い方には眞実がこもっていた。文治はしげのから此の言葉の後から聞かされた時、出来た嫁だと思つた。がしげの方は穏やかならぬ面持ちであつた。康子の病臥中は春江も良く枕辺に来て注射をしてやったり、打とけた話をするようになってきた。戒日、それは春江に持ち込まれた縁談の見合が明日に迫つた土曜日の日暮れであつた。もう起き上つてボツボツ身の廻り等片付けていた康子は、春江の何時になく打ち沈んだ表情を迎えていた。

「どうしたの、春江さん、顔色が悪いワ」

「姉さん、明日の西田さんとの見合、私行きたくくないの」「どうして？。だってママイもパイもそのつもりよ。

西田さんの方だつて」

「ねえ。姉さん、聞いて」

すがりつく様にして云う春江の表情に女同志の直感で康子は春江と並んで腰かけた。

「姉さん、私結婚したい人があるの」

云ったかと思うとさつと顔があからんだ。

「そう？。誰？。だって春江さん、西田さんの義雄さんとは幼馴染で仲良かったんじゃないの？」「あの人とは小さい頃近所だったから遊んだ事もあるし、けんかした事もあるわ。それよりもパイが西田さんにすい分世話になってるのよ、姉さんが嫁に来るずーっと昔の事だけど」「それでどうして今頃になって断る気になったの？」康子の視線の中で春江は肩をすぼめる様にしてうつむいていた。そしてポツリポツリと語り出した処に依ると、西出義雄の一家が春江達の部落から町に移って、彼は勉強のため聖市に出ているという風の便りは聞いていたが彼の姉がこのL町に嫁びて来ている事は知らなかった。

薬局に買物に来た客が差し出した医者レセイタに依って、かつての西田綾子その人である事が解り、春江の家にも遊びに来る様になってその弟との縁談が持ち出されたのだった。相離れて十数年を経た今、写真に見る義雄の容貌はすっかり変って、秀でた眉、引き締まった表情の一つ一つが春江の処女心をかき立てたのであった。が春江は日を経るにつれて、自分の無学が悲しかった。あっさり捨てた学問への憧憬は徒らに春江を失望

へと誘った。

文治もしげのも娘の心に触れる術もなく、明日に迫った義雄との見合に心浮き立っているのである。春江は姉の康子も小学校だけしか出ていないではないかと自分に云いきかせてみるのだが、どうにも潮騒の様に胸一杯に拡がった感情は、孤独へと彼女を突き落していった。

康子は健康そうな片頬を見せて云った。

「私は文夫さんの愛情だけを信じて生きてるわ」

はつきり云い切って春江の顔をのぞき込んだ。

「それじゃ春江さんが好きになった人ってどんな人」

口ごもる様にして春江は視線をそらしたが、康子に催促されて口を開いた。

「浮浪児よ」

その声はかすかに震えを帯びていた。

「ええ？浮浪児って、新移民の事？」

「ええ、親も兄弟も無いみなし児なの」

「どうして何時頃から知り合ったの？。その人今何処に、何してるの？」 急き込んで畳みかける康子に気押しされる様にして春江は低い声で答えていった。

「やっぱり薬局で知り合ったの。一カ月位前よ。その人は訪日した人の手づるで呼んでもらって田舎で働いてたんだって。だけど余り労働や待遇がひどすぎてすっかり肝臓を悪くしてしまったの。それで無断で飛び出

しちやったらしいけど、此の町に出て好きなメカニコの職に就いて間がないんだって。持病になってしまった肝臓の痛みに堪えられないであの人が、私の薬局に飛び込んで来たのが縁だったんだわ」何時か春江もすっかりした通常の話し振りにかえっていた。

「そお、だけどそんなに好きになったの」

「姉さん、私折角楽しみをしているパイ達に病弱なあのひとの事云えなかつたの。その内に云おうと思

つてたら、急に見合が決ってしまつて、私どおしたら良いかわからない」「そうね。でも結婚はみんなが喜こんでくれるのでなければ、あんたが一人で苦労しなきゃならないわよ」「私、西田さんの家庭良く識ってるの。だから余計に私ひげ目を感じてしまつて、あそこの人はみんなしつかりしてるのよ。日本語だつて、みんな完全なの。私みたいな中途半端な人間は嫁いだつて恥をさらすばつかりよ。それよりか親も兄弟も無い不幸な人の片腕になつて一緒に苦労する方が私にはどれだけ気が安まるか知れないの」「私には何とも云えないわ。一人一人考えが違ふんですものね。結局春江さん自身の問題だと思ふわ」「じゃ明日の見合どうすれば良いか教えて。あの人ずっと具合が悪くて私注射打ちに行つてあげてるの、だから明日も時間通り行かなきゃならないのよ」何故か冷く顔をそむける兄嫁の態度に、春江はギクンとした。此の人は浮浪児なんかと一緒になる

うとしている、この話には賛成していないんだと直観すると、素早く席を立った。

「姉さん、ごめんなさい。こんないやな話を聞かせて。でも姉さんの胸に止どめておいてね」

そう云いおいて春江は自分の部屋に引揚げて行った。部屋に帰ると春江は明日の為に仕立てた洋服を取り出して下着から一切取り揃えた。準備が整うと鏡の前で髪の手入れをしながらふと泣けてきた。悲しいとも幸いとも云い様のないふんわりした感情が、鏡の中の春江の姿にこもっていて、何時の間にか恋を知る女になった自分が不思議な涙の中に浮んでいるのを、ボンヤリ眺めていた。

翌日は逢ってみれば口元にも眼元にも幼き日の悌はありありと残っていて、親達の計らいで散歩に誘われた春江は、立派な紳士となった将来ある義雄に否応なく魅せられて行く自分を感じていた。それは義雄の飾らない素振りの中に遙しい向学心のそれを見抜く事が出来たからである。羨ましい様な、妬ましい様な感情が入り交って、心の隅で反抗心さえ起ってくるのだが、話していれば、それは左程にも強烈なものではなく、潜在意識の働きであるのだ。注射の時間が刻々迫ってきた。春江は義雄に悟られぬ様度々腕時計をのぞいていたが、「私つとめの関係で毎日同じ時間に注射打ってあげてる

患者さんがあるんです。今日は他の人に代ってもらいますから一寸其処で電話してきます」 そう云って義雄の傍を触れた。

緊張の故か火照った顔に当る風の快よさに、春江はぶつかる様な姿勢で通りを横断して行った。彼の下宿にはかけずに薬局の方にかけて。丁度都合良く友人が出て快諾はしてくれたものの待っているであろう香山哲次の悌が浮んで来ると軽く目を閉じて追わずにはいられなかった。

予定通りに一日は終って、父母と共に義雄の運転する車で送られて帰った。康子は文夫と並んで迎えに出て来たが、そつと春江の横に来て「どうだった？」と声をかけた。

康子が用意してくれた茶をすら乍ら、文治もしげのも満悦の態で美しく成人した娘の上にこよなき慈愛の瞳を降り注いで云った。

「春江。義雄さんみたいな立派な人と結婚したら、わたし達も肩身が広いよ。なあ、しげの、苦労した甲斐がある」と云うもんだ」「ほんとに、西田さんは昔も今も変りないねエ、子供衆も立派な人物ばかりだし」 眼尻を低くして喜色ばんでいる両親の眼には捨て児に迄して育てた一人娘の可愛さが深く淀んでいる。春江は他日には処女の恥らいとも見えるであろう、今の自分の中途半端な心境の前で戸惑っていた。

「お互いに半年位交際した方が良いだろう」と西田氏の提案で、いくらかほつとした気味の春江であったが「こんど日を決めて呼ぶから、好きな本でもあれば遊びに来て持ち帰って良い」と云う義雄に惹かれるものはつきり感じだしていた。義雄にも哲次にもどちらつかずの心境で暮れて行く日々は、春江に取って重苦しい苦悩の連鎖であった。日月は矢の様に飛び去って今は全く健康に復した康子に比べて、春江は急に二年程年を取った様な沈み勝ちな表情になっていった。それは康子以外の者には気付かれないまゝに過ぎた三カ月余りだったが、焦燥と不安の明け暮れにも両手に握った幸福はどちらも天秤にかける事の出来ない値を持つていて、春江は慾深い己が姿にボンヤリする事があつた。父親らしい心遣いを見せて、文治が部屋の扉口に立って娘を見降ろし乍ら云つた。

「春江、お前此の頃仕事無理してるんじゃないのか？。顔色が悪い様だが」

その眼射しに逢うとふっと蕾んだ生花の様に、強いて笑顔を作ってみせるのである。

文治もしげのも晩年になって得た春江は掌中の玉であつたが、年令の差は掩う可くもなく、デリケートな彼女の心理を掴む事は出来なかつた。初めの内は貪る様にして義雄から借り出した本を読んでいたが、月日と共にそれも遠ざかつていった。が手先の器用な春江は、

次から次に刺繍や小物細工等続けていったので、両親には早や嫁ぎ行く娘の倅せを祈るばかりであった。此の頃しばらく顔を見せなかった浦塚がひよっこり尋ねて来て、団欒のひとつきに加った。

「春江さん、お芽出度う、縁談が決ったんだってね」

そう云った浦塚の視線の中で溺れる人の様な不安に戦き乍ら、春江は軽くうつむいた。

祝福されば嬉しい筈のものなのに、周囲の人々が余りにも善意的であるのが悲しかった。誰かにぶちまけたいと思っていた相手が、浦塚であった事に気付いた時はもうおそかった。

「浦塚さん、いよいよ春江も決ったよ。こんどはあんたの番だねエ」「え、まあそうなりますね。でも未だ僕の様な貧弱な人間は、結婚なんて考えるの生意気だと思っっていますよ。その内に神様が与えてくれるだろうと思つて、気永く待っていますよ」ソファに深く体を埋める様にして、吐き出す様に云う言葉の一つひとつが、文治の心にじわじわとしみ込んでいった。孝治をかかえて途方にくれた昔の追憶がなまなましく胸に浮び上り、思わず大きく息を吐き出した。が誰も振り返るものはなかった。それはその人自身の思いであつて他の人には測り知られざる胸中なのだ。

文治はふと、浦塚の視線が春江の上に注がれるのを見て狼狽した。子を持つ親の必然的に備わった習性か

も知れなかった。「春江を好きだったのではないか？」

その疑惑は霧の様に文治の心に拡がっていった。やがて浦塚は辞して帰って行ったが、以前の様に別け際の冗談も云わず、心持ち落した左肩が、軒灯の光をよぎって行く時その横顔には云いしれぬ淋しさが宿っているのを文治は玄関に立って見守っていた。春江はソファにもたれたま、首を垂れて思案の態だったが、文治が入って行くと思ひ切った様に顔を上げて、父の顔を仰ぎ見乍らあえぐように云った。

「パパイ、私西田さんの縁談断ってもらいたいんだけど」「え？。何？何だった？」「義雄さんとの話断ってもraithたいの」「まあ、春江、何だね急に、そんな変な事云い出して」「おろおろしながらしげのが春江の横に坐り込むと、そつと娘の顔をのぞき込んだ。

「パパイ、そんな恐しい顔したら、春江が云い度い事があつても云えないじゃないですか」「春江、その訳を云って見ろ」 穏やかに云い乍らも先刻の浦塚の視線がちらついで、春江の唇に注視せずにはおれなかった。

「康子さん、あんた達は明日が早いから、もう行って寝て良いよ」しげのがそう云うと、素直に「おやすみなさい」と云って彼等夫婦は部屋から出て行った。

「おい、どういう訳か云ってみなさい。子供じゃあるまいし、只嫌いになったって訳はないだろう」 肩で呼吸をしながら春江はしばらく息を整えていたがやがて顔

をあげると一緒に、「交際してる人があるんです」「何？誰だ。何をしてる者だ。何処にいるんだ、その男に誘惑されたんだろう」「パイ、誘惑なんて、そんな人じゃないわ」「どうせ親に隠れて交際する様なんだから、つまらん男に決つとる」「春江、その人は何をしているのだい？え？」「ママイ、浮浪児よ」
そう云い終った途端に、文治の右手が春江の頬で鳴った。

しげのは飛び上って春江を引寄せた。

「パイ、何で手なんか出すのさ。余りひどいじゃないか」しげのは眉を逆立て、夫をにらんだ。文治は握ったこぶしを小卓にのせたままかすかに震えていた。

「馬鹿、お前の様な恥しらずは此の家に居る事はない。さあ、今直ぐ出て行け」

文治の心の中で裏切られた執念がのた打ち廻った。浦塚の顔が、義雄の顔がグルグルと彼の脳裡で転廻し続けた。春江は唇を噛み締めているのか、声も立てず大粒の涙を膝に落していた。日頃起きた事のない癩癩が音を立てて噴き上ってくるのである。もう一度撲るか、それでなければ暗闇に飛び出して行き度い様な衝動に駆られて、文治は春江をにらみつけたままの姿勢で仁王立ちしていた。

「パイ、わたしがあとから良く話すから、もう行って寝た方がよいよ」しげのがそう云うと、ついと離れて

戸の開け立ても荒々しく去って行った。しげのは娘の苦悩の幾分かなりと分担してやり度い気で優しく話しかけてみたが、気がゆるんだのか、春江は声をあげて泣き出した。

「ママイ、私は親不幸者ねエ、かんになして」

「春江、気を落つけてママイにくわしく話しておくれ、どおしてその人と親しくなったんだい」娘は母親に肩を抱かれる様にしてしばらく、嗚咽に沈んでいたが、ポツリポツリ話し出きた。

「だって、もう義雄さんとだって三カ月以上にもなるんだよ。そんなに好きな人が出来たんなら、何故もつと早くママイにそれを云わなかったんだね。わたしや、義雄さんとの仲が進んでるものとばかり思っていたよ」母の吐く溜息が大きく春江の耳に入ってきた。

「それでお前は義雄さんの何処が嫌になったのかい。それを聞かしておくれ」「ママイ、私義雄さんも嫌いじゃないわ」

「こんどは甘い感傷を含んだ涙が、春江の掌に滴り落ちた。

「私義雄さんはアミーゴとして交際してきたの。あの人は不幸な生い立ちなんですもの」母には解って貰えそうもないと思うと、余計に板挟みの愛情が苦しかった。物質的にも境遇にも義雄とは対照的な香山哲次の、みなし児の淋しいかげを宿した悌が、春江のふくよかな

胸の中に住んでいる。医者から手術をすすめられている、病弱な彼の視線をガツチリ受けとめて、姉の様に振舞っている自分の看護姿を、春江は瞼の裏に描いていた。

「今夜はもうおやすみ。お前も疲れてるだろうから、亦パイには気分が落ちついてから、ゆっくり話した方が良いよ」 しげのも足取り重く部屋から出て行った。春江は一人になると、戸締りをして自分の寝室に引揚げて行った。

翌日哲次の仕事場に回ると、意外に明るい顔で働らいていた。浮浪児だった彼を一時引取って育ててくれた人が、技術者で、弁当を持って行ってはその人の仕事場に這入りこみ、じつと見ている様な哲次だった。間もなく手伝いの様な仕事を与えられて、二年程やる裡に人が驚く程機械に対する関心を持ち始め、その素質は一つ一つの機械や製品に対してもはつきり才能を現わし初めていた。丁度其の頃社会は窮乏していて、中小企業は停滞状態に陥り、その一家も一時閉鎖の憂き目に逢った。人の世話で鉄工所に入ったり、時には仲間割れして靴みがきにおちたりしながら、哲次は戦争の被害者である浮浪児という極印を押されて転々して歩いた。その頃の僅かの経験が、異国で役に立とうとは誰が予測したであらう。気分のいい日は明るい笑顔で同僚と働らいている哲次の、浮浪児とは思えない気品にひき

つけられる様にして、春江は接近していったのである。

「春江さん、元気がないな」

「ねえ、哲次さん、私達結婚する時が来てるのよ」春江は暮れなずむ家々の軒灯に照らし出されて歩く二人の靴音を揃え乍ら云った。

「君の方さえ、その気だったら僕の方は何時でもOKだよ、だけど急にそんな事云い出して、今夜の君はどうかしてるよ、何かあったの？」「え、でも今は話し度くないの、それよりもあなたの手術はどうするの？。手術を先にする方が良いかしら」「大丈夫だろうと思うんだけど、やっぱり何時かはやらなくちゃならないんだし」
「来週の土曜日どう？。私病院の先生とは懇意にしてるから一切交渉してみるわ、ね、私の云う通りにして」
「だって、僕のフトコロの都合もあるよ」「いいから任せて、私真剣なのよ」哲次が静かに空を仰いで立ち停った時、もう春江の何処にも最前の打ちおれた様子は見られなかった。そして何時もの甲斐々々しい姉の様な明るい表情で哲夫の顔を仰ぎ見ていた。

春江は成る可く父と顔を合わせない様に心がけて、逢っても静かな物腰で接する様に注意していた。母も以前の様に話さなくなった。兄も姉も皆が白い眼で自分の行動を注視している事を意識すると、春江は直ぐにでも飛び出して行ってしまいい度い様な衝動に駆られるのだが、やっとの思いで自分を制していた。

それからの毎日は春江にとって一日千金の値を以つてしても償われぬのではないかと思われる程、緊張と準備に明け暮れて行った。山田病院の一室に彼を伴って行き、呼び出しが来る迄の間、春江はしっかりと哲次の手を握っていた。彼を慰める為にと云うより、自分の心の不安からくる動揺を隠すためである。

「君震えてるじゃないか、どうしたの？」

「うゝん、震えてなんかいやしないわ」

そう云い乍らも膝頭がふれ合う程に激しく震え出すと、片手をほどいて洋服の上から、しっかりと押える恰好をした。

間もなく呼び出されて哲次が手術室に這入って行くと、扉口から顔をのぞかせて医師が春江を手招いて呼んだ。

「春江さん、貴女も入って手伝って下さい」

「いいえ、今日は許して下さい。とてもそんな」

唇がふるえて終りの方は消え入る様に廊下にひびいていった。看護婦が軽く目礼して扉を閉めるとその向うで、聞き馴れた医療器具の金属のふれ合う音が、春江の神経に突き刺さる様にひびいて来た。春江はあと帰って、哲次の荷物の置いてある部屋に入った。すっかり整えられた寝台に腰かけ乍ら、未だ経験した事の無い厳粛な気持ちで、目に見えぬ神に縋っていた。

祈る等と云った経験さえ持ち合わせてない彼女のそ

れは切羽つまつた「人間の姿」であつた。一時間半余りの所要時間が、春江には半日もそれ以上にも思われ、体中べつたりと汗ばんでいた。麻酔の醒めきらぬ哲次の寝顔にそつと風を送り乍ら、春江は祈り続けた。案外に麻酔が長く効いて、彼が深い眠りからさめた頃には、夜空に銀河が尾を引いていた。

「痛かつた？。苦しくない？。今夜は私がついて、あげるから安心して寝てね」笑顔は変らなかつたが、切開手術のあとにくる疲労には抗す可くもなく、哲次は春江に手を預けて眼を閉じていた。

傷の快復は順調に行つたが、一時はひどく衰弱して輸血をしたりした。O型の春江は今迄にも何回か此の病院の患者に血を提供してきた。自分の体内から失せて行く血の気が、やがて哲次の腕に注入されるのを見ていると、云い知れぬ歓喜が溢れてくるのだつた。

つとめの帰りに寄つては快復の状態を視てしばらく慰めては一人夜の道を帰つて行つた。

哲次の手術の事については母と姉にだけ云つてあつたので、おそく帰つても別段とがめられる様子も無かつたが、父の執拗な迄に頑固な視線に逢うと、脆くも涙が出てくるのである。四十日程も経つた頃にはすっかり健康体を取り戻した、哲次が仕事場に姿を見せる様になつていた。彼は春江の言つた結婚問題についてずっと考えて来たのだが、何かしら春江の切羽つまつ

た行動の裏にひそむものを感じ出ししていた。

「ねえ春江さん、君の両親賛成してるの？。反対なんじゃない？、どうも僕にはそんな気がするんだ」「哲次さん、あんたは私の愛情だけじゃ足りないの？あ、私そんなに信用されない女なのかしら。やっぱり二世は駄目なの？」春江は泣き声になって立ち停って云った。「そうじゃないよ、僕がみなし児なんで僻みかも知れないけど、時々ふつとそう考える事があるんだ。特にブラジルの事は何も解らないんだからね」「だから私も一生けん命なのよ。はっきり云っとくけどパパイが大反対して結婚の仕度もしてくれそうもないの。

だから私達は自分達の力で新しい生活始めなきやならないのよ」「うん、やっぱりそうだったんだね。初めの内は君にも共稼ぎをしてもらわないとやって行けないな」「私、兄さん夫婦が共稼ぎしてるの見て、大丈夫やって行ける自信があるの。それより此の国では一カ月前から届出をしておかないといけないのよ、だから日を決めたら登記所に行って手続きしましょうね」春江はこの国では、十八才以上の子供が結婚の意志がある時、その親が反対した場合、強制的にカデア入りさせられると説明した。が日本で育った哲次には、こっぴいな感じがするだけで春江の感じている程には真実に迫ってこなかった。何が彼女をそうさせるのか、春江は一人気負い立っていた。しげのが春江をつかまえて、西

田との縁談を断った由告げた時でさえ、春江は訳の解らない興奮に包まれていた。

しげのは面と向って自分の娘を非難する言葉を吐く様になった。時にはわざと文治の前で、日本新来青年の各処で耳にする噂を持ち出したりして、春江の表情を盗み見たりした。「可愛さ余って憎さ百倍」とはこの事かと思われる程である。

春江は届出の日を数えるのが苦痛になってきた。いつそ自分もみなし児であつたら、こんなにも義理や人情にしぼられずとも済むものを、と思うと毎日顔を合わせる事がたまらなくなってきた。だが云わずに済ませる問題ではないので、思い切つて母に一度「香山哲次」と逢つてくれる様に頼んでみた。

「そりや、お前ももう一人前になつたんだから自分の事を自分で片付けるのは結構な事だよ。だがね親に反対して結婚する以上は、その相手だけがお前の味方だつて事を良く覚えておくんだよ」としげのは云い切つた。

勿論手続上の署名は両親とも否む事は出来ず、渋渋乍ら出向いて行って済ませて来た。文治は前にも増して部屋に籠りがちな日々を送る様になった。アルモツサの時に、しげのが娘の事を話そうとしても、文治はさつさと其の場を引揚げて行くので、母親の本能でそうさ

ればされる程春江が可哀相であり、憎らしくもあった。自分の腹を痛めた子であり乍ら、心底から通じ合わない心のしこりに泣けた。こうした文治やしげのの眼に仲睦まじい息子夫婦の姿は愈々複雑な感情のかげりを植えつけていった。最悪の一週間が過ぎてその日は遠方に泊りがけで出掛けた文夫の留守の晩の事であった。文治は寢室に引揚げていたが、しげのは康子と話し込んでいた。

「ママイ。春江さんの此の頃の様子見てると、とても気の毒な気がするわ」「仕方ないさ、親の云う事聞いてくれないんだもの。私ももう諦めたよ、持たなかったものと思つてね。娘時代にはどんな好きな人があつたって、ちやんとした家の娘なら、親の決めた通りに嫁つたものだよ」「二世は親子でも中々思つた様にいかないらしいわ。でも私達でも時々ママイ達の云つたり為たりする事が何故そうしなければならぬのか、解らない事があるのよ」「そうかい。でもあんたはしつかりしてゐるから、春江なんかとは違ふよ。やつぱり家庭の躰だね、こんな事になつたのは可愛いさ一点張りで、あの子のする事に干渉しなかつた事が私の罪だよ。それでもね、こうして外国に来て子供に背かれるなんて全く運命を呪い度くなるよ」「ママイ。ブラジル育ちは何処か日本の人と違ふのかしら」

「そうだね。そりや今頃は日本でもすい分変ったらしいけれど、やっぱり何と云うのかね、日本と云う国家の伝統が自然の生活の中に溶けこんでいるんで、親が子に云って聞かせなくても、自然にそれを受けついでゆるんだね」「私も日本語学校にも行って、少しは本も読んでみるんだけど、やっぱりブラジル育ちと云われると、ブラジル人の様な気になってしまふんですよ」 帰宅のおそい春江を待ち乍ら、二人はしばらく話し合っていたが、突然門柱の呼鈴が鳴った。夜の静けさを引き剥がす様な無情な音である。康子は飛び上る様にして立って行ったが、部屋の中に居たしげのの耳には何やらブラジル語で云い合っている声だけが伝ってきて何を話しているのかその気配さえ察する事は出来なかつた。突然うめく様な声と共に「ママイ」と一声呼んだ康子は、軽いめまいを感じて門柱に寄りかかっていた。しげのに支えられると、「ママイ、文夫さんが、怪我して乙市の病院に運ばれたって、その人が知らせに来てるの」「え、えっ?」

しげのも立ちくらみした時の様に傍の壁に片手を突いた。そして突拍子もない声で夫を呼び立てた。一家に掩い被さった不安は動揺を産み焦燥と恐怖の腕を拡げのしかかってくる。その処へ帰って来た春江は瞬間的に父の顔を仰いだ。眼だけが大きく見開かれた人形の様、彼は身じろぎもせず一点を凝視していた。その男

の案内で彼等一家がZ市に向けて発ったのは間もなくの事であった。

折から時雨始めた空模様は、疾走する車窓に湧き上る様な滴を吹きつけていた。静かに眠る家々の灯がまだらになって、車は峠を幾つか越して、牧場地帯や農園の間を縫って走り続けた。誰も話さなかった。口を開けば叫び声が飛び出しそうで重い沈黙が辛うじて其の唇を閉ざしているのであった。Z市の灯りが見え初めると一同の表情に緊張の色が満ってきて、すっかり濡れそぼった窓ガラスに額を押し付ける様にしていた文治の大きな吐息に、ギクリと体を動かした春江達であった。康子は祈ってでもいる様に膝の上に組み合せた掌をしっかりと掘りしめてうつ向いていた。不安が大きな渦を巻いて一人一人の心に流れ込んで来た。静寂、それは疾走する車の音の流れだけで車内は霊柩車の様な名状しがたい雰囲気に含まれていた。

病院の車寄に降り立つと、さっきの伯人が飛び出して行って受付で何やら話していたが、戻ってくると直ぐ先に立って病室に導いていった。廊下にみなぎる消毒薬の匂いは何とも云えぬ静けさに溶けこんでいて、一同は声もなく長い曲折を渡って行った。部屋につく迄の間、それはまるで処刑の宣告を受ける前の囚人の様な、まどろっこしくも恐怖に充ちた胸の裡であった。

その部屋の扉口が関所ででもあるかの様に、文治は立ち侍ったま、息を吸い込んだ。純白の塊りが其処にうづくまっている様に、看護婦が付き添って静かに脈を計っていた。一同の到着も識らず意識不明のまま、彼は逝った。嗚咽と慟哭の修羅場が展開され、夜は静かに東雲の彼方に消えて行った。

文夫の遭難現場に行ってみると云って、文治が伯人の案内で出掛けて行った後、三人の女達は只泣くだけで精一杯だった。日頃気性張りな春江でさえ、康子と抱き合って父の帰る迄泣いていた。骸を自宅に運ぶ間、後から後から新らしい涙が湧いて来るかの横に、三人の女の手には半巾が掘りしめられていた。

埋葬が済むと間もなく康子がどっと寝込み、家の中は全く灯の消えた静けさになった。文治は一日中寢室に籠っている日が多くなった。医師の診断で康子の妊娠がわかった時、

「康子、産んでくれ、森山家の跡取りを産んでくれ。どんな事があってもわしの手で育てるから、きつと男の子が出来とるぞ」喜びと苦悩とが入り混った文治の表情であった。興奮すると赤味を増してくる鼻柱が、歪んで見える程、文治はその真情を吐露して云った。

悲しみの裡に春江の結婚届出の日がやって来た。日夜無悩の果てに春江は貧血を起す程憔悴していった。愈々押し黙ってしまった文治は、一言もその問題に触

れ様とはしなかった。或日康子の親類に当る者が訪づれて来て云った。

「話しに聞けば康子が妊娠している様子、今更夫も亡くなったのに、苦勞させる事はないでしょう。今の内に始末してはどうですか」「いや、康子は森山家の嫁です。折角出来たものをそんな無情な事はさせません」「でも子供が出来れば、一生其の子に惹かれて未亡人で暮すか、それとも一人で再婚してゆくか、どっちかになるでしょう」「そりや康子の心次第です。家に居たければ、一生居てもらいたいし、また好きな人でもできれば嫁に行かせるかもしれません」「いづれにしても、康子も未だ若いんですから其の身が立つ様にしてやって下さい」そう云って末だ他にも将来の問題や、財産問題に迄も首を突込んで帰って行った。

文治は客の帰った後、一人ぼやいていた。丁度春江は隣室に居て父の一人言を聞くともなく聞いていた。

「あーあ。俺は一体どうすりや良いんだ。あのまま田舎にいたら、一生好きな百姓をしていられたのに、こんな事になる位なら了供達だけ町に出しておけば良かったんだ。俺は口惜しい」すべての登記は、殆ど文夫の名義にしてあったので、文治の生涯に残されたものは、老いた自分の体だけであった。夜になると文治は枕に顔を埋めて泣いた。しげのは只黙ってその夫の背中を眺めていた。幾十年の苦勞だけが刻み込まれている様な

赤銅色の首すじ、小柄乍らこんもり盛り上った肩の線、共に苦勞を頷って来た夫婦であり乍ら、余りにも意固地な夫の表情に、しげのは慰めの言葉も見出し得ず、無言のまま見つめていた。

誰に話さずとも春江の結婚の事については、文治も心

(注・二行印刷悪し)

半され、機十年の努力は全く水泡に期し、手塩にかけた愛娘は戦争の被害者とは云え、浮浪児といういまわしい過去を持つ男の許に嫁くという、踏んだり蹴つたりの態である。失望と落胆と悔恨の岸に立って、文治は余りにも不甲斐なき人生を呪った。

新しい位牌の前に、康子としげのが手を合わせているのを見ると、ムカムカとこみあげてくるものがあった。

彼は文夫の位牌の前にも坐ろうとはしなかった。外部には非情に見える父親文治の、底知れぬ深い孤独は、誰にも解されず日一日深まっていった。

「パイが不信心だから、宅に不幸ばかり続くんだよ。自分の大事な息子の位牌にだって、一度だって掌を合わせるじゃなし」しげのは康子を省み乍ら夫に白い眼を向けて云ったりしたが、文治は黙って応えようとしなかった。そうする裡に春江は来る可き日を迎えて、哲次と約束した時間に登記所に行き、結婚の誓いと共

に署名を済ませてきた。

予期した事ではあったが、余りにも孤獨的な立場が悲しかった。

「哲次さん、今はあなただけが頼りです」

そう云って春江は歩き乍ら眼頭を押えた。哲次の友人の家でささやかな祝宴が設けられて、文字通り簡素な披露となったがそれだけに二人の心には絶対の信頼と愛情が湧き溢れていた。春江は彼と起居を共にする様になって、彼に今迄全く見られなかった純粋なものを発見していた。

それは情熱も含まれるであろうが、もっと単純な心の動きであった。朝起きる時、夕食の時、就寝の時、その都度きちんと膝に掌を組んで、しばらく祈りに静まつた。

あたかも母親に倣う幼児のその様に、荒んだ過去の生活の蔭は何処にも見られず、ただ素直さだけが彼を支えていた。春江も誘われる様にそれに倣った。

「哲次さん。日本の人はみんな信仰してるの？」

「さあ、どうだが知らないが、でもみんな何かしら頼り度くて求めている感じだね」「うちのパイはちつとも信仰なんてしないのよ」「そりゃ、大きな不幸に見舞われてショックを受けてるからだよ。君が僕と結婚した事だって、君の両親にしてみれば、全く心外だったに違いない。君の我儘を通して呉れた事だけでも感謝しなけ

れば」「それじゃ、あなたはわたしを見捨てたパイ達に對しても、変な氣、持っていないの？」

「君は親があるからそんな我侷な氣になるんだ。僕に若し親があつたらどんな事をしてでも喜ばせてあげるよ」「だって、私だってもう一人前よ。何時迄もパイのマシンド（命令）ばかり受けてる訳にはいかないもの」「わからない人だな。君は幾つになつても親の子なんだよ、そして親を喜ばせる様に自分から努力しなけりゃ。

今からだつておそくないよ」

「でも口を聞いてくれないのに、どうすれば喜ばせる事が出来るの？」「まず二人がすっかり結ばれる事、眞実の愛情と信頼とをもつてパイ達に近付く事これだけだ。人間は不幸に陥ちている時は、自分が最大の苦しみに逢つてると思うものだが、心さえ清ければきっと光の中に照らされる日が来るよ」明日は初の日曜、トランク二個と手提袋等をタクシーに積んで、逃げ出す様に出て来た親の許に、今は夫婦となつた二人が、初の訪問を計画していた。

「パイが若し何か云つても、決して怒らないでね。挨拶だけ済ましたら直ぐ帰りましょう」春江はそう云い乍らも、対面の情景を瞼の裏に描いてみると、どうにも氣のすゝまないものがあつた。翌日親の

家に着いた時は、文治は外出していて、しげのと康子が掃除等をしていた。他目にもつわりの症状ははっきり

して、げっそりやつれた康子の顔と逢った時、只、手を握り合つた俣で、春江はいばらく泣き入つた。不幸を背負つた人のその瞳はゆるく瞬く瞼の奥に、ひっそりと沈んでいた。掌に伝わって来る感触の中に、左手の薬指にはめた二つの指輪が冷く、春江の指にふれた。未亡人になって夫の形見であるその指輪を自分のより下にはめているのである。

春江はその指を幾度も撫で乍ら涙を拭いていた。哲次は母にすすめられて、従順に椅子に腰かけていた。しげのは哲次と向い合っている間に、今迄抱いていた感情が少しずつほぐされて行くのを、不思議な心境で感受していた。

「お母さん、こう呼ばして頂いて良いですか？」

笑顔の中からそう云つて見上げる哲次の眼には、一点の曇りもなかつた。只親しみだけが柔く溢れていてその瞳でじつとみつめられているとしげのは自分の心の醜さが少しずつ顔に現れて来るのでは無いかとさえ思われた。

親密感が湧いて来ると、何も彼もが一時に明るい気特に置き換えられて行く様で、しげのは帰ると云う春江を引き止めて夕飯を一緒にして行く様にと云つた。食事の仕度に取りかゝると間もなく、文治が帰つて来たが、冷い横顔を見せたまままで小路を抜けて自分達の家の方に行つた。しげのが呼びに行つても、食事が始まつ

ても彼は姿を現わさなかつた。春江は頭から拳骨を見舞われるよりも、もつと手巖しいシヨツクを受けた。

「ママイ。パイは一生私の事許してくれないのかしら」「さあ、そんな事はあるまいけど、何しろ自分が思ひ込んだら絶対あとに退けない性なんでね。一日中黙りこくって鶏の世話をしたり、庭の草をむしったりしているよ」「じゃ又出直すわ。哲次さん、ごめんなさい」
帰って行く春江の肩に手を置いて康子が低い声で話しかけて来た。

「哲次さんを絶対に信賴するのよ。悲しい時は私の事も想って頂戴。そしたらお互いに慰められるわ」「姉さん。パイやママイをお願いします」進まない足を引摺る様にして、哲次の肩にもたれて歩いて行つた。生活の経済を考えて間もなく彼等は小さな家を一軒借りて新世帯を持ったが、それは全く二人を天国に遊ぶ子供の様な楽しい気分浸らせた。

或日、哲次と共に母の許に行つた春江は、其処に親しく話し込んでゐる浦塚清と康子の姿を見た。勿論しげのも近くに居たが、何かしら置き忘れられたもの様をうつろな表情であつた。娘の姿を見かけると飛び立つ様な恰好で迎えに出たしげのは、「裏の家に廻っておくれ」と簡単にそう云つた。

その時、手洗いにでも立っていたのか、文治が背を見せて康子達の方へ寄って行くのが見えた。

「ママイ、浦塚さん何しに来てるの？」

「清さんかい？。文夫のカミニオンを売ってやるって、いろいろ心配してくれてるんだよ。男手が無くなつて何も彼も不自由を事ばかりさ」「だって、パパイが居るじゃないの」「パパイのブラジル語じゃカマラダには通じてても、読み書も出来ないのに何の値打ちがあるかね、口ばかりやかましくて」「本当だわ、パパイなんか何も出来やしない」「清さんはネ……」と云いかけてしげのは口をつぐんでしまった。

「清さんがどうしたって？」

「い、や、何でもないよ。それよりお前達家を借りたつて云うじゃないか」

「え、ペンソンじゃとても高くついてやり切れないからよ」「家に来れば良いのにね」「ママイ！　ママイは私の事可愛い、と思つてそんな事云うんだつたら、どうしてパパイが私を許してくれる様仕向けてくれないの？」

此の時横から哲次が春江の肩を押えて云つた。

「時期が来れば自然に融け合う日が来ると思うよ。君がお母さんを責めたつて、お母さんが可表そうだよ」「哲次さん、実の親子であり乍ら、こんなに冷たい人達つてあるかしら」「いけない。君にだつて僕にだつて欠点があるじゃないか。お父さんは不幸の殻の中でもがき苦しんでいられるんだよ。僕達は結婚出来たんだから此の感謝の心を以つて、お父さんを温く迎え出してやら

なくては」「春江、気を落ちつけるんだよ、ママイだつてお前の気持ちは良くわかつているさ。焦らずに時期を待つ方が良いと思うよ」「それで浦塚さんちよいちよい来るの?」「そう、この頃は組合の方からも康子に手当てがつく様になったし、丈夫の残っていた仕事の整理やら何やらで、此の処ずっと清さんが奔走してくれているよ」

「ふうん、パイもさぞ助かるでしょうよ」

哲次は立って行って狭い乍ら小じんまり作られた鶏舎の側に立ってその中をのぞき込んでいた。

かつての日、未だ此の町に出て来た頃は、乙女ごころにほのかな憧れと愛情が春江の胸にも芽生えていたのであったが、煩雑な町の空気に触れ、慣れてくると何時の間にかその人、浦塚清は市井の人となってしまうていた。

義雄と交際していた頃、ひよっこり訪ねて来た彼の、祝いを宣べる言葉の端に秘そんでいたあのかげを春江も見のがしてはいなかった。その浦塚の心に住んでいた春江が、清と親しげに語り合ってる康子と其の位置を置き換えられた様な気がしてならないのである。妙に狂わしく嫉ましかった。加えて兄の嫁たる康子の、未だ忌も晴れやらぬ身であり乍ら、と思うと益々春江は心の乱れに苦しんだ。年月は人を待たず、康子も大きな腹を抱えて歩く様になった。しげのは朝夕丈夫の位牌に

掌を合わせて「男子誕生」を祈願していた。神知り給うか、森山家の跡取りに立派な男の児が恵まれた。文治は初めの裡は遠慮していたが康子の産後が肥立つと、殆ど一日赤ん坊の傍で眺めて暮らした。

「ルイス、お前はな、わしの一番の宝だぞ」

可愛いくてたまらないと云う風に文治は頬ずりをしながら云った。やがて別れ行く母とも知らず、無心にその乳房に吸いついている赤子の悲しい迄に穏やかな表情。

「あ、わしにもこんな時代があったんだなあ」

「本当に、パパイ、大人になっていくのが悲しい気がします」康子が涙声でそう云うと 文治は慌てて笑顔を作って、子供をあやしにかかるのだった。日一日と成長して誕生近くなるとまるで文治はつききりであった。授乳の時以外は母親は省みられない程、文治に馴れていったので、遂に文治はしげのに別の寝台に移す事を要求した。

母乳は豊富にあったが、他の食物をとる様になると一層ルイスは片肥えして見えた。そんなある日、改まって浦塚が年輩の紳士と連れ立って訪ねて来た。それは康子に結婚を申し込むためであった。予じめ康子とは打合わせがしてあったものか、来客と同時に引込んでしまった康子はしばらく姿を見せなかった。しげのに呼ばれて部屋に入って行くと文治は優しく自分の隣りの椅子を指して坐る様にと云った。文治は浦塚の好意

が何より嬉しかったのだ。春江をのぞんでいた彼が、婚約の決った娘に、

「お芽出度う」と云った時のあの表情は、今もなお文治の心に深く焼き付いている。

「康子、お前の気持ちを聞かせてくれ」

そう云う文治の声は震えを帯びていた。康子は思い惑っているのか、中々顔をあげようとしなかったが、再び文治から催促されると、仰向いたまゝの姿勢で、「パイやママイが心からそう思ってた下さるなら」と云った。結局康子は森山家から、浦塚家へ嫁いで行った。

「ルイス、ルイス、パイと隠れん坊しよう」などと終日孫の守りに明け暮れる文治である。車に乗って別れて行った母を追おうともせず、文治の腕に抱かれて手を振ったいたいけな孫の頬に自分の頬を寄せて運命の息吹を確かめていた。康子を送り出した後に亦新らしい穴があいた。風が吹き抜けて行った後の様な空しさが部屋一杯に満っていて、運び去った家具の跡がくつきりと印象に残る線を床にあらわしていた。或日しげのは春江の急病を告げに来た哲次を迎えると「ルイスを預っていてくれる様に」と云いおいて夫を探しに出掛けた。

哲次は初めて扱う子供のその柔い肉体を、人形の様にして相手になっていたが、子供の方でも心得たもので、無理におりると云ってぐずり出した。泣かれては困

ると思ひ、そつとおろすとそとに出ると云う。セメント塗りの上だけに哲次は冷汗をかき乍ら子供の後からついて廻っていた。彼が人の気配に振り向くと其処には文治が眼をみはって立っていた。

「あつ。おとうさん。お母さんと逢わなかつたですか」「いゝや」

「春江が急に倒れたので、お母さんに来て頂き度いと思つて呼びに来たんですが」「わしは知らん、さあルイスはわしが見るからあんたも行ったら良いよ」突揆ねる様にそう云つて文治は子供の後に立つたが、哲次は黙つてその様子を見ていた。子供と一様になろうとする文治の傍で見ればおかしくてふき出し度くなる様な動作の端々迄見る事が出来た。しげのを待つている間に、哲次は一人で帰ろうかと思つた。又思ひ直してじつと其処にたたずんでいた。間もなくしげのは帰つて来たが、時刻は四時を廻っていて、夕飯の仕度時間が来ていた。

「困つたわね、わたしが行ってしまつたんじゃ、ルイスの御飯がしてやれないし」「お母さん。お父さんも坊やも一緒に行つて下さる様頼んでみて下さい。春江がどんなにびっくりすることか、きつと直ぐ治つてしまいますよ」

哲次はしげのの後について行って、文治の返事を待った。彼は容易に返事をしなかつたが、しげのはじり

じりしながら夫の背後に迫った。

「パイ。私はルイスを乾干しにする事は出来ないからね、あんたは来なくなかったら来なくても良いよ。わたしはルイスを連れて行く」云うなり子供を抱きあげて哲次の手に渡した。哲次は戸惑い乍らもしつかり抱きしめて改めて文治を省みた。

間もなく彼等はタクシーを拾って先を急いだ。文治は窓の内からこれを見送っていたが、顔を見せようとはしなかった。

一方春江の方では意外に手間どる夫の帰りを待ち侘びていた。失神して間もなく駆けつけた夫の腕の中で、次第に恢復はしていったものゝ、未だ五体に力が無かった。

それが疲労と妊娠の兆候によるものである事はわかつていたが、夫には何も云ってなかった。大体の予備知識はあっても初めての事なので、恐怖が先に立って母の到着がしきりに待たれた。しげのは何を聞いてもさっぱり要領を得ない、哲次の返答に手を焼いていた。

車が停ると哲次は素早くルイスを抱いて降り乍らしげのの眼に溜っている涙にふと気付いて愕然とした。母親の本能で今はたった一人生き残った娘の病床の姿を想っていたのである。暮れかけた窓にカーテンがゆるく揺れていて、其の中にいる春江に逢う事が恐ろしいという様な表情をちよっぴり見せて、しげのは這

入って行った。

「ママイ、良く来てくれたのね。あら、ルイスも来たの？。パパイは？」「うん、パパイはぐずぐずしてたから放って来たよ。だがお前どうしたんだい？」「今日は土曜だから早く帰ったのよ。そして洗濯でもしようと思つて裏に出た途端倒れたらしいの。丁度隣りの伯人が見ていたんで、直ぐ哲次さんと呼んで来てくれたのよ」「お前、子供が出来たんじゃないのかい？」「えっ？。子供？。春江若しかしたらそうじゃないか？」母親の言葉尻を捉え、哲次が眼を輝かしてそう云つか。

春江は掛布を引摺りあげて眼元まで持ってゆき、幽かに領いてみせた。

「馬鹿だねエ。哲次さん、あんたもあんたじゃないか。自分の妻の体の事も解らんでどうする？、わたしや余り不幸ばかり続くんで、どんなに心配して来たか知れやしない」

しげのはそう云つて大きく眼をしぼたいた。哲次は叱られた事が嬉しいとでも云いたげに素直に頭をさげた。

「ママイ、私一人じゃ心配だから、二、三日泊つて行ってね」「だって着換えも何も持ってないじゃないか、その元気なら大丈夫だよ。明日は起きらるよ」わざと背を向けてしげのは素気なく云つた。何時の間にかルイスは哲次の腕で眠っていた。しげのが夕飯の仕度をす

る間、哲次も傍にいて何彼と手伝うのを見て、「哲次さん。あんたも良く辛棒してくれたね、パイももう一息という処だよ。うちで余り不幸ばかり続くものだからすつかりひがみ易くなってね。考えてみれば気の毒な事さ」「お母さん、僕は全く親の顔も知らないんですよ。どうすれば親孝行になるのか解らないんですよ。でもね、きつと雪だつて溶ける日が来る、とそう思つて気永く待つ事にしたんですよ」「春江の我俣に私も初めの裡はカツとしたよ。でもね、あんたが余り優しいから、知らずしらずとかされてしまったらしいよ」

しげのはささやかな所帯道具の中から、夕飯の皿茶碗等を取り出していたが、奥の方でゴソゴソやっていた哲次が紙包みを抱えて来たのを見ると、「何だね、それは」と顔を突込んで聞いた。

「僕が日本から持つて来た茶碗です。今夜はこれで食べましょう」 そう云つて無造作に紙包みを破った。中から小手毬の模様の入った美しい茶碗が六人前蓋付きで出てきた。

春江の傍に小卓を運んで、しげのはルイスを膝に抱いて賑やかな食事が始まった。

「今頃パイはどうしてるかな。一人でしょんぼりしてる様子が見える様だわ」と春江が云った。

「お父さん一人で淋しいでしょうね、僕行つて呼んで来ようか」「哲次さん、無駄な事は止した方が良いでしょう。あ

の人は自分の気が向かない限り絶対動かない人なんだからね。私が一番良く識ってるよ」 食事の間にも表の道に車の音がする度に、哲次は急いで立ってのぞいた。食事の後片付けが終わっても文治は姿を見せなかった。意外に元気を取り戻した春江を囲んで、

話は日本とブラジルの間を、何回となく往復して続けられた。話に興が湧いてくるにつれて、しげのは哲次の人のよさに惹かれていった。幼いルイスは自分の遊び相手がいない事を識ってか識らでか、時々あたりを見廻す様にして、馴れない家の中をあちこちしていたが、何時かしげの腕に抱かれて夢路に入っていた。

病人らしくない病人の春江を疲れさせては、と云ってしげのはルイスを抱いたま、隣室に引揚げて行った。間もなく安らかな寝息が聞え初めると、哲次は静かに境の扉を閉めた。春江も静かに眠って居た。戸締りをして自分一人になった哲次は、客間の椅子に深々と腰かけて夜の足音を聞き取ろうとするかの様に、眼をつぶった。

丁度其の頃文治は冷い布団の上に坐って、次から次に起ってくる妄想に責めさいなまれていた。「何時かはたった一人になる日が来る。今迄の生涯の亡霊が俺を取り巻いて、二度と再び陽の光の見えない処に引張りこむかもしれない。ルイスだって俺の手から離れて行った。妻も自分を捨てて行ってしまった。春江！

お前はもう此の俺に逢わないままであの世に逝ってしまうのか？。哲次のあの優しい眼が俺をじっと見つめていらい俺は悪態の限りをついてあの男を呪ったつもりだったが、俺の負けだった。淋しい淋しい」。文泊は立っても坐っても居られなくなつて、扉口に立った。鍵の感触が冷酷な看守の様に、文治の足を釘付けにした。がそれをはねつける様にして表に出ると、蒼い月がせせら笑う様な柔い光を投げて来た。夜霧が蛇腹の様な縞を作つて流れていた。それらはまるで悪夢の続きでもあるかの様に、文治を取り巻いているのだ。すっかり自信を失つた文治が歩を地面に移した時、星が流れて行つた。

憑かれたもの、様に文治は歩き出していた。それは春江の家をさして。哲次が読書に疲れた眼をあげて、静かに窓を開いた時、うづくまる様にして黒い蔭が近寄ってくるのが見えた。そつと表扉を開けると灯火がさつと道に流れ出た。その蔭は気付かないのか、哲次の家の門に近づいていた。

直感してそれが文治であると解つた時、哲次は走り出していた。

「お父さん、お待ちしていました。良く来て下さいました。さあ、ずい分お疲れの様ですね。あつ！歩いてきましたね。もうオニブスも通らない時間だ」哲次は文治の肩を抱える様にして、家に這入つた。そして直ぐ春

江の寝ている部屋へと導き入れた。静かな眠りの中で何を夢見ていたのか、春江が大きな吐息をついた。文治は哲次の若い力に支えられて、娘の横に立っていた。

「春江、お父さんが見えたよ」。哲次が軽く春江の肩を揺るとボンヤリした視線を送ってきた。次第にはつきりしてくる視覚の中で、まちがいなく父親の姿を認めた時、春江は親にはぐれた子供が巡り合った時の様に、飛びついて父の体を抱いた。夜霧がしつとりとその服に染み込んでいて、幼い頃から嗅ぎ馴れた父の臭いが其処にあつた。瀧の様に滴る涙を拭くおうとせず、春江は取り縫って泣いた。二年余の堪えに堪えた涙が堰を切って溢れ出したのだ。文治も泣いていた。何時起き出して来たのかしげのが扉口に立って意外な情景に、我を忘れた様な表情で居た。哲次も静かに文治の腕を支え乍ら涙に咽んだ。

みなが初めて一人々々の心にとけ込んだのだ。断ち難き肉親の情は、七難八苦の末にやっと、曙光を見た。哲次は文治に椅子をすすめて坐らせてから台所へ立つて行った。戻って来て、「お父さん、一人で夕飯食べたんですか」と聞くと、文治は急に思いついた様に佝びしい笑顔で首を振った。

「飯の事は忘れて居たよ」

しげのは笑い乍ら立って行ったが、わざわざ途中で哲次の持つて来た日本茶碗を見せに采たりした。

「パイ、パイ。哲次さんが持って来た茶碗、これでご飯食べたら格別の味がするよ」「そうか、良い品だな、これは。おお、これは有田焼じゃないか、なつかしいな」そう云って眼を細めて掌の上で裏返して銘を見たりした。何年振りかで平常に返った文治は、父親としての寛容さを取り戻していた。

失望の極地から急転換して、笑顔の楽園に迎えられた文治は、茶碗の事から話しの橋渡しのついた哲次が、全く偶然に同郷出身者であり、哲次の母方の祖父と文治の父が古い知己であった事も話題を弾ませた。しげのの運んで来た食事を春江の傍に運ばせて文治は熱い茶をすすった。

もう何年ものあいだ忘れ専られていた茶の香りが、文治にもしげのにも、春江にも、哲次にもしみじみとした落ちつきを覚えさせていた。音を立て、茶をすすする文治の両手に、血管がふとく浮きあがって、老いの影は三人の瞳に見守られつつ、たしかな息づきを刻んでいた。

(一九五八年)

喪失の杜

小滝土香

略歴 本名、小滝友太郎、一九一二年生れ。一九二七年渡伯、農村生活を経てセントラル線スザノ市において歯科医を開業していたが一九六〇年五月二十三日脳溢血のため急逝。作品には本集所載のもののほか一九五七年第一回パウリスタ文学佳作入選の「イペー」がある。俳句もよくした。

喪失の杜

小滝土香

マリリア駅地帯にあった珈琲園を売却って父と兄は日本へ帰って行った。耕作はそこから約二百キロメートル奥の、緑の地獄と呼ばれている森林地帯の土地を買って此の国に一人残った。十年と云う年月の間に、耕作はブラジルの百姓生活を愛せるように成っていたのである。耕作にとっては、少年から青年に成長した過程の年月でもあった。

買ったその土地は、ルッセリア町とノロエステ線のヴァルバライズ駅とのやや中間にある樹海の真只中のウルーと云う植民地であった。ウルーは、鶉に似た山鳥の名で夕暮れの樹海に一羽が、「グワツコー」

と鳴きだすと、それに合せて其処ら中のウルーが一斎に鳴きだす。一羽の時は、「グワツコー、グワツコー」と聞えたのが、しまいには「グワラコー、グワラコー」と、まるで傾いた夕陽を樹海の中へ揺り落すような合唱を奏でる鳥である。そのウルーの移しく棲んでいる所であった。

最初入植したのは十五家族であったが、ウルー植民

地だけでも四百アルケールある所へ入植したので殆んどが処女林をはさんで隣合っていた。耕作は此処へ十アルケールの土地を買って入植したのである。

密林の中に区劃されてある境界線の径を分け入って隣との境になっている谷川から、少し離れた高みに住家を建てた。住家と云っても壁は椰子の幹を縦割にしたので囲い、屋根は同じ椰子の葉を荒々しく葺いた、如何にも土人の伝える杜の住人と云った小屋であった。それでも耕作の寝る所へは、以前の住家から運んで来た板で寢床を造り、その上に布団と日本から持って来た柳行李と小さいバスケットを置いた。燻んだ色の柳行李もバスケットも渡伯十年來のものであった。それ等の物を寢床の上に置いた時、永年一緒に暮した父と兄の顔がふと浮んできて、いよいよ一人ぼっちになったんだぞつ、と云う実感が強く迫って来るのであった。

五人の旦雇人夫はみな屈強の体格をしたバイアーノ（バイア州の人間）であった。彼等はめいめい椰子の丸太をならべて腰高な寢床を造った。その上にきまつたように、白いメリケン袋に入れた大きいトランクを置いた。一番歳若のジュゼーは寢床のそばの椰子壁に釘を打って、やはり白い袋の中からヴィオロンをとり出して吊り下げた。

「さあ、これが当分自分達の家だぞ」

耕作はジュゼーの肩を叩いて皆んなに向って云った。

が、それは自分の心に背水の陣を固めさす為に云ったようなものであった。

生木の丸太を組合せて三脚に吊り下した大鍋からは、煮えたぎるフェジョンと乾肉の匂いが、青い椰子葉葺の小屋いっぱいにこもった。夕暮の樹海を小刻に揺するようにウルーの声が鳴きひろがって、その中に突調子もない、

「おう、おう」

と、人を呼ぶような鳴声もした。

夜はさすがに淋しかった。太古からの原始林の闇が一気に襲ってきた、そんな感じであった。そしてわずかに伐り倒した杜の空間の上に、もの凄く冴え渡った空がのぞき、其処に銀河は白泡をたて、杜へ轟き落ちていた。

ごうっと耳朧を打って響きくるその音は、真に迫って耕作の心を研ぎ澄まし、刻一刻と凄まじさを加える、そんな時、「ぎやおーつ、ぎやおー」と、かすれた二節の獣の声が樹海にひびいたりした。

黒人のマノエール、半黒人のライムンド、白人のミゲールとオデイロン、この四人は山伐りに年功を積んでいるらしく伐り方が上手かった。枝下三十米もあらうかと思われるフィゲーラやペローバの大樹にかゝると、四人は憑きものがしたようにその樹の囲りに陣どり、幹をはさんで両側から中心に向って切込んでゆく。

片方に二人づつ四人が向合つて調子を揃えて斧を打込む。

はだけた荒々しい胸毛、赤銅色と黒色との毛深く盛り上った彼等の腕節、霧のけむる処女林に旭は眩しい光線の縞を投げる。

「くわっ、くわっ」

斧がそれにきらめいて苔むした千年の大樹の幹に赤い三角型の口を無惨に切りあけてゆく。木端が飛び散る。次第に鋭さを増してゆく彼等の眼光に北伯人特有の情熱が燃上つてゆく。彼等は斧に合せて歌を唄う。低い声だが勇壮に木零が降る、次第に斧と歌との間の静寂が深い杜に吸われてゆくのを感じたりする、低いが深かい拡がりをもつて木霊が返ってくる。

「お前等のしている事は、見ているんだぞっ、お前等のしている事は。倒すがいゝその大樹を、俺等杜の精は此処で見ているで、倒して見ろよっ」 朽ちた落葉の匂いの地の底から響きくる虚ろな木霊の声を感じたりして、ペローバの巨木の荒い奴をよせた幹々が、あの土人の伝説に出てくる緑色の歯を割出したコルビラ（杜の魔性の男）のように見えて薄暗い密林の奥を振り返り、ぞっと背の寒さを覚えたりした。

一斧ごとに大樹の幹はしんしんと鳴った。振り下す斧は斜に、すくい上げる斧は水平に、三角型の切口は左右から鋭く深く幹に食い入ってゆく、そこには潤みをお

びた紅色の樹芯がひそんでいるのだ。彼等はそれを、メ
ニーナ（処女）と呼慣わしている。汗がミミズの如く額
にながれて睫毛にたまる。メニーナも肌を守って最後
の木質部は固たいひびきで斧をはね返す、打込んだ斧
に最後の柔かい手答を受けた者が薄紅色のメニーナを
得た悲鳴に似た叫びを上げる。そこで小休止譜的に斧
を休め額の汗を振り払うが、間髪を入れず 「ソール
タ・カブレスト」と喚く、切込んだ幹の両側の間に切
残された部分を彼等はカブレストと云いその楔状に残
されたカブレストの伐方によって両側の何れかへ自由
に倒すことが出来るのであった。

カブレストは伐られた。大樹は腹の底を挟ぐるよう
な音をたて、バイアーノ達は斧を振りかぶって飛び
散った。

耕作の頭上が急に明るくなって大地が空の方へ傾き
上ってゆくのを覚えると同時に、樹海を襲う雨に似た
音を聞いた。それは広い梢の青葉を斜に流れ朝空を
きっている音であった。耕作は傾きゆく幹に吸引され
乍ら足に力をこめた。近くの樹々の枝を荒々しく折り、
引裂いて大樹は倒れた、地響がした。遠い地震が足の底
から全身を揺りうごかした感じであった。

樹を伐倒す前に下刈と云って、幹の上から蛇のよう
に垂れ下っている太い蔦葛や鋭い棘のある細い葉を二
米も放射線状に伸ばした山パイナップルの茂等、この

他の灌木を伐払うのであった。

ある日、その下刈をしていた時、丈高く伸びたマルハチ（樹状の齒桑）を伐ったフォイセ（斧）を急に止めて、鼻に人差指を置いたミゲールが、彼特有の沈静の表情を示し「しーっ、獣の匂いだ」と、急に叫んだ。小川近くの谷でフィゲーラやタンプリンの大樹が鬱蒼と空を覆っている所であった。その密林の下にはさ乍ら石炭紀の齒柔類の森林を想わせる、へゴとマルハチが茂っていた。その鮮やかな広い青葉を擁めて前方をのぞいたミゲールが「バクの糞だよ」と陰険な顔に北叟笑みを見せて云った。

五抱はあるうかと思われるフィゲーラ樹が屏風のように根を張りめぐらした影に、牛糞に似たいかにも盛んなる糞の山を見たのである。バクはそこへ寝るようであった。

楕円形に少しくぼんだ落葉の中に毛が混っていた。パルミッタ椰子の群青の葉がひっそりとその上に垂れていた、あの柔和な日を細めたバクが「夢を喰う」褥であつたのだ。

或る日は切込んでゆくジャトバ樹の幹が、ぼーん、ぼーんと鳴った。

「ジャトバの葡萄酒だよ、親方」

眼を輝かせてバイアーノ達は斧をせわしく打込んだ。

黒人のマノエールが最後に振り下した斧を引いた途たんに、赤い口を開けた幹の芯から葡萄酒色の醬液が、とぶとぶと流れ出た。バイアーノ達は慌て、それを両掌に受けてすすつた。

「早く飲め親方」

白い大きな眼をぎろつと向けてマノエールは耕作をうながした。耕作は彼等の真似をして掌に受けた、赤黒い液体は掌を染めてそれは案外澄んでいた。一気に飲んだ。

一寸と渋味があつた。葡萄酒程の甘味はなかつたが仄かに酒の匂いがした。

斯うして谷の小川より、ゆるやかに盛り上っている高みの境界の方へ樹海を伐り開いていった。樹海を伐り開くことは、空を伐り払げる事でもあつた。上から被る大樹の重圧感と昼なお暗い杜の落葉の匂いに深まる杜の精への思念、そう云つたものからは空を伐り払げる事によつて次第に開放されていった。が、昨日伐つた大樹の伐株に朝露にぬれた樹脂が光っているのを見る時杜の女神の嘆きの跡を見るようで、それ等の伐株に筒状のサンジョン花がさながら朱色の花輪を被せるやうに咲き拡がつて行くのを見ると、「俺は自然を征服しているんだぞつ」と、云う勇壮な気持の底に、じつとりと濡れた少女の瞳のような感傷が胸に湧き上ってくるのであつた。

その伐採した倒樹の間の細径を行く耕作を阻むように、木の洞から飛び出た梟が「かつ、かつ」と嘴を鳴らして怒りの眼を向けて来ることもあった。

「何でい、この野郎」

木片をぶつつけて追払うのであったが、ジユゼーと珈琲を沸かす薄明りの厨の朝、椰子の葉の屋根に、ぐわし、ぐわし、と羽音をたて乍ら飛乗るカラスより小さい鳥がいて低い声で「ジョン、ラスキン」と鳴く。耕作はふと深い思索に捕われていた。ジユゼーは珈琲袋へ沸いたヤカンの湯を注ぎ入れる、濃い匂いが湯気となってもうもうと立ちのぼる。

「ジョン、ラスキン」

その声はまるで哲人の独白である。黄色い嘴をむけ、厨を覗き込む。あのとぼけた鳥の表情に耕作は頭を傾けた。牛馬の使役すら反対した思想家の名前であったかと、

「お、ゼー（ジユゼーの略称）一層山伐やめつちまおーか」「あきれた、どうしたんだ親方」・「ジョン：ラスキンと鳥まで鳴くぢやないかし」「鳥がどう鳴くつてー」ジユゼーは手にもつた飲みかけの熱い珈琲を外に走り出るや屋根にぶち撒いた。

「この糞野郎の恥じ知らずめ、地獄へ落ちろ」

ぐわし、ぐわし、と羽音をたて、鳥は飛び散ったが、直ぐジユゼーの頭上を飛んでがさがさと屋根を鳴らし

舞いもどった、耕作のふさぎの虫はジユゼーの悪態に一つぺんに吹きとんでいった。

サンジョン花を見て、お、サンジョン祭はもう来たのか、と、今さらのように感づいた。それ程耕作は山伐に狂奔していたのだった。

乾肉、フェイジョンと、バイアーノ達の腋臭と汗の匂いが、小屋の中にも耕作の体にも沁みついていった。小屋の周囲の伐採した樹々の間に放便した人糞が時折り厨の中まで匂ってくることもあった。パイナーラの棉の実が寒々と梢にぶら下っている時雨の樹海に鳥はあわただしく渡って行った。もう長い事人里離れた暮しをしている事を意識しだしたのである。

バイアーノ達は木の枝に抱きついている灰色の小犬程のナマケモノをよく捕まえて来て小屋の椰子壁に抱きつかせていた、奴くちやの顔は眠っているように見えだが、そうではない、婆さんのような細い眼を開けてバイアーノ達のするがままになっていた。その鈍い動物が一夜明けるときまっぴかき消すやうに姿を隠して了うのであった。

朝それを探がすバイアーノ達の声が周囲の処女林に木霊して、おう、おう、と鳴く山鳥の声に似たりした。

椰子壁を洩る隙間風は日毎に冷たく霜は樹海の緑を薄茶色に塗り更えていった。霜をまぬがれた木蔭のカブシんギは紅葉もて、ふと、故郷の櫨紅葉を想わした。

鹿はよくその森影に姿をあらわし、伐倒された樹々の葉は朝な朝な露零をおこして色越せ、うず高く落葉となつて径をうづめた。

そうした或る日、日本の花火から飛び出てくる小さい落下傘が空を渡って行くように、ブラジルの子供が六月の月一杯、灯をともした色紙風船を空に放つ、その灯風船でも飛んで来そうな小歳日和の朝食の時であつた。

ライムンドは食事前にする何時ものサンバの鼻歌をやり乍ら、今伐り倒した幹にまたがって山盛にした飯を二口三口喰べていたが、急に眉をびくつと動かした瞬間、匙で叩いて皿をひっくり返して了つた。

「この糞野郎、俺は豚ぢやねーわい」

仁王のような顔になつた彼はじだんだふんでジユゼーを罵つた。おかずのフエイジョンがひどく焦げついていたのであつた。その鋭い眼は耕作の方へも向いて来た。

あの時もしジユゼーが反抗していたら、激し易い北伯人の常として腰の山刀を抜いていたかもしれなかつた。あの眉の迫つた陰険な相をしたミゲールは時々不気味な含笑いをして見せるだけで、ライムンドの大略な振舞に一歩も出なかつた。他の者は、皆、正直者であつたし、ジユゼーは炊事係として時々失敗はしたが、真面目

に働いた。勿論、耕作は六連発のピストルを腰よりはなさなかつた。が、それによってバイアーノ達を威嚇する仕ぐさはしなかつた。耕作は彼等の気質にもう十年間馴れていたものであった。斯うして心配していたバイアーノ達との大した諍いもなく、予定の伐採面積五アルケールに近づいて来た。

ジュゼーは夜の珈琲を沸かしていた。その厨の椰子壁を洩れる手燭の灯は黄色い柔味をおび、山鳥の声は甘いジャズ音楽を思わした。それ等の鳴声を包んで闇は暖かい雰囲気を醸していた。もう春の息吹は樹海の中に籠りだしたのであった。

女体を思わせるアンヂツゴの滑かな肌の樹株にその手燭の灯は淡く流れてそこにバイアーノ達はうごめいていた。

一人の黒い逞しい影が矢庭にその樹林をだき抱えた。時々、「ういつ、ういつ」と重く叫ぶ声からしてライムンドのようであつた。彼等は唇と唾で一種の音のリズムを繰り返した、夜鳥の鳴声はそのリズムの音に合っていた。

絶え入る、せわしく要求する女のをバイアーノ達は真似た。悲鳴に似た獣の聲が樹海の闇にひびいた時、ライムンドは荒い息づかいに樹株を抱き上げるように体をそらした。坤く女の聲の叫びが彼等の口によって

なされた時 突如、暗い谷の樹海を震わして唸る一声がした。

「ぐにやうぐおーん」

と、響いたその声は全く唐突に樹海の闇をひっくり返した感じで、その響きは一切の雑音を吸込んで了つた。

耕作は停止していた自分の心臓が、恐ろしく静まり返った闇に再びとく、とくと鳴るのを覚えた時、ぞつぞつと脊すぢを襲う悪寒に両足を震わしていた。硬直したようにたっていたバイアーノ達は無言のまま、小急ぎに小屋に入った。

「斑紋豹だ」耕作は闇を飛躍して来るオンサを背に感じ腰のピストルを固く握って厨へ飛込んだ。

次の日よりジュゼーは杜影の谷水を一人では汲みに行けなくなった。樹海は今までとは違ったものに見えてきた。それは唯恐ろしいと云うようなものではなく、深かい神秘とでも云おうか、矢張りあの木霊の杜の精が虚ろな声で呟き乍ら山伐りの人間共を見守っているような感じに静まって見えた。

あの夜の空気に籠った春の兆は、また杜の森深く潜まっただけで、色植せた緑と薄茶色の樹海の起伏の彼方には、うねり動く白蛇のやうに毎朝霧が帯状に流れていた。その辺は常に緑濃く霧に咽っている所であつ

た。そこは樹々を蔽う蔦葛の茂の隙間に見える、濁り澱んだマラリヤ蚊の巣くう沼と処女林の灰汁に泌み出た濁流が魔者のように流れているリオ・フエイオの河霧なのであった。

その旭に輝き動く白蛇のやうな霧を見ていた耕作を呼んで、或る日ミゲールが例の陰険な眼を細めて近寄つた。

「親方、俺達の勘定をしてくれ」

と急に云いだした。山刀を抜いて腰を落とし、地面に山刀で筋をひき始めた。強談判をする時の彼等の手である。

「来たな、こいつめ」

と、耕作は思った。

「オンサに喰われない内に俺達は此処を出て行く」と、云うのである。耕作の胸にむらむらつと怒りが燃えてきた。そこ等中の樹株にピストルをぶつ放したくなった。が、直ぐ彼等のずるい策略がわかった。

「よし、もう一ミルづつ日給を増そう、今日から七ミルにしてやる」ミゲールは仲間の方へ振返って片目をずるく閉じて見せていた。

「オンサは大丈夫か親方」

と、云つた。

「俺がしるか、ずるい奴、さっさと仕事を始める」吐き棄てるように耕作は敗北を喫し乍ら云つた。

最後の山伐は土地の傾斜が強かったのでピカンサと云う被せ倒しをした。それは樹の幹を半分づゝ程切つて進み最後の高みにある大樹を伐つてそれ等に押被せるのである。

その大樹は伐られた。頭上の空の一角が現れるや髪を振り乱した女神の叫びに似て大樹はその近くの樹々の上に被さり倒れた。津波のようにどよめき倒れゆく樹々の上に空は一変に拡がつてゆき、木霊は山鳴と成つて返つてきた。こうして山伐は済んだのである。

山焼の時、隣の杜に火を入れない為に界に防火道を造る。耕作達はその火道あけを始めた、山鳥の囀りは朝の未明の内から、それは春の潮騒が次第に近まりくるように日に増し高まつてきた。寢覚の耳に囀りはすでに籠っていた。哲人の独白に似て「ジョンラスキン」と鳴く鳥は、ジヨゼーをからかうように毎朝ぐわし、ぐわし、と奇妙な羽音をたて乍ら飛んで来た。

耕作は寢床の中で此の鳥声を待つようになった。

「パトロン（親方）、あいつ等は珈琲の匂いが好きなんですー。ゼー起きろ、ゼー起きろ、と呼びやがる」ジユゼーは厨にのぞくジョンエフスキンと鳴く鳥の恍けた表情をして見せるのであった。

火道を開けるそばに木葡萄は飴色の芽吹きを見せて暖かい木の芽時の匂いがした。その樹海の中に山伐の

どよもしと騒がしい喚声が境の密林の高みの方から近
まってきた。時には斧の音が微かに、

「たん、たん、たん」

としたり、急に大きく

「たあん、たあん、たあん」

と響いた。森の魔性の男コルビラが後ろに向いた足を踏まえ乍ら、いよいよ出て来たかなと思わせる程の妖しい音に聞えたりした。

或る日の午後、その山伐のどよもしを吹消して、山鳩の音がし強風が樹海に吹きまくって来た。風は耕作達の脇の下で唸声をあげて過ぎた。伐り残された枯れた大樹が根こそぎ倒れた。

帽子を吹き飛ばされ、髪を振乱したライムンドは機嫌の良い時にするあの口の口の両端を三日月型に上に曲げ、風上に片方の掌を拵げた。

「親方、北西風だよ」

と囁いた。北西の熱帯諸州から吹いてくる此の風はカーチンガ（灌木とサボテンの原野が荒涼とつづく乾燥地帯）の暑さをもって円味をおびた弾力ある物体のように耕作の体を押し倒そうとした。乾いた熱砂を頬に感じた。

「北西風だ」

耕作は全身に甘く燃え上るものを覚えた。土壌を

被って珈琲の実をさびた遠いマリリアの耕地生活がよみがえったしこの風が吹いたあとの枯草の牧の崖ぶちに沿うて咲いた白い穂状のリツシアの花、その崖み下にある泉へ行く、水槽を頭にしたイタリア系伯人娘。

ふと、眼の前に吹落された太い枯枝が耕作の幻想を瞬時に醒ました。眼の前にライムンドの破れたシャツが旗のようにひらめいていた。毛深い胸をのぞかせ乍ら夢見る様な眼つきを荒狂う樹海の風上へ向けていた。

ジュゼーはヴィオロンを爪弾いていた。バイアーノ達は二部合唱でそれに合せていた。小屋近くの伐倒した太い幹に一系列に腰掛けてサンバ調の恋歌を唄っていた。彼等の向いている方角には伐倒した樹々の重なりの上に、赤く染った月がのぼっていた。乾燥びた暑さと何か心の焦躁をかきたてる狂わしい感じの月であった。

耕作は一人寝床へ入った。バスケットを開け、手垢のついた幾冊かの日記帳の中から古びた青い表紙の日記帳を手にもぎ取った。茶色の麻紐の一片のやうなものがめくる頁の間から床に落ちた。乾燥びたりシシアの押花なのであった。耕作はそれを鼻におしあてていた。ボリュームのある白い仄かなものを抱いた感じで、あの北西風に燃えあがったイタリア系伯人娘アンゼリーナの名前を呼んでいた。

北西風が吹いてから樹海には淡い霧が漂いはじめた。

春霞といった感じであった。その樹海を一つぺんに赤紫に染めてイペーの花が咲き拡がっていった。さながら耕作達に恋の焰をそそった北西風の置土産のように。

火道開けを仕乍ら花莫塵と散り敷いたイペー落花を踏んでいると、耕作は急に人里が恋しくなってきた。日曜日バイアーノ達を連れて、あの山伐の音が聞えた境の密林の高みの方へ境界径を分け入った。

耕作の土地の界まで山伐は樹海の中に広く長方形を画して済んでいた。耕作達は山際を下った。未だ火道は開けられてなかった。耕作の土地では見なかったパウ・ダ・アーリヨが濃い緑の若葉を毒々しく光らせていた。そのそばを通る時ニンニクの匂いがした。土人は此の樹を刻んで喰べたと云う。ニンニクの匂いを好んだものであろう。

「お前達はこの匂いが好きだろう、土人の血が混っているんだから」バイアーノ達をからかうと、「とんでもねー、この樹を焼いたあとはフェリィダ・ブラボ（森林梅毒）の巢だ、だが土地は肥えているんだぜ」

ライムンドは大袈裟に鼻をつまんだ。頭の重くなる匂いだった。そう云えば界を越したこちらの土地にはイペーの花は少なかった。こちらの土地の方が肥えていたんだなと思った時、伐倒された樹々の重なりを越えてマンドリンの旋律が微かに聞えてきた。

土地は急に低くなって、苾の喰べられるパルミツタ椰子の密生している林に出た。その林の下の透きとおる青さの羊齒の茂みに、うごめく桃色のものが眼に付いた。

それは頭にしたレンソ（スカーフ）で、耕地の服を着た娘が居たのであった。そこには羊齒の茂みを漉いて出る小川があつて、娘はバケツにその水をすくつていたのであつた。

耕作は近づいて声をかけようとした。が、レンソからはみ出た黒髪と衿首とが、はつ、と息を詰めさすものがあつてたじろいたのであつた。バケツから水雫をこぼし乍ら体を伸ばした時、娘はちらつとこちらを向いた。低い鼻の円顔であつたが、白い顔の額を染めて目尻の方へ紫黒い黒子の点々がついていた。それが一直線に耕作の方を見た大きい瞳に、さながら苾がばらつと動いて開いた山サボテンの花を思わした。耕作はどぎまぎして帽子をとつた。「僕は此の杜の向うに住んでいる草間と云う者です」じつと耕作の方を視つめていた娘は軽く頭を下げた固たい表情のまま、

「家そこですから、どうぞ寄っていらつしつて」

齒切れのよい澄んだ声であつた。云い終ると娘は素早くバケツを天秤にし椰子林の小川を離れた。ひよいひよいと飛ぶように、赤くしみ出た樹脂の匂う大きい伐株の径をまがつてその姿は隠れた。そこには長いト

タン茸の家があつて、マンドリンの音は其処よりしていたのであつた。

「どぎやん若者んかい」

と、革脚絆を穿いた四五人の若者が、ぞろぞろと出て来た。その家は三つに仕切られ三家族が一緒に住んでいた。今の娘の家は小森と云う姓で、マンドリンを弾いていたのは娘の兄であつた。眼をしきりにぱちぱちさして、乙女のように紅かい唇をした長身の華奢な若者であつた。

その息子に似た父と娘に似た母との四人家族であつた。

多くの若者達は、此処がウル―植民地の中心であり、三家族も一緒に住んで居る所は他にないので、日曜日には此処へ遊びに来るのだと云う事であつたが、小森家はまだ日本から来て一年しか経ていなかった事、長男は大学を出た気にならない音楽好きのインテリー、娘は女学校出の魅力ある娘、石油の空箱にぎっしりと詰つた金文字入りの文学全集など、若者達を吸引する条件がそろつていた。

耕作は椰子壁の隙間から見える炊事場に動く娘の姿を眼に捕えていた。常にその方を視ていたのではなかつたが、若者等と話す束の間も白い娘の顔の動きを眼の感覚に捕えていたのであつた。

椰子壁をもれる濃い、珈琲を沸かす匂いがして、や

がてメリケン粉で造った揚団子を盆に山盛にした娘が輝くような笑顔を見せて出て来た。若者達は騒がしく色めきたって「智沙ちゃん、待つとつたぞな」革脚絆の足をぴたつと揃えて最敬礼をして見せる若者もいた。

「貴方は一人でやってらつしやるんだってね、大変だわねー」珈琲をついで呉れた娘の母は耕作の肩を撫ぜるようにした。

傾いた陽を揺落すように何時ものウルルの鳴声が樹海に響きはじめて、日雇仲間と遊んでいたバイアーノ達が帰りを促しに来た。耕作は芥川全集の本を一冊貸して貰うことにしてみんなに別れを告げた。新聞紙に包んだ本を手渡して呉れた娘は盗み視る深い視線を耕作に向けたが、直ぐ眼を伏せ頓を赤らめ、こくと頭を下げた。

火道あけは済んだ。方々の樹海の中に山焼は赤褐色の煙を上げ始めた。しばらくして其れ等の煙は灰白色の菌の形に拡がつて、ぽっかりと悠大に空へ浮び始めた。煙雲は深霧のように日にその濃度を濃くしていった。もう三ヶ月も雨の降らない乾燥びた灰色の空には盆のように朱色の陽が昇り沈んでいった。

夜鳥の鳴きしづまった深夜、耕作は本を閉じ、枕もとの手燭を吹き消した。煙くさい淡くかすんだ空気に何

か胸の興奮を覚えて本が読めなくなつたのであつた。
夢の国からでも響きくるような微かな音を耳にした。
その音色はもうずっと前からひびいているようであつた。

サツシーが鳴き始めたのである。耕作は枕の下に敷いていた新聞に手を触れた。それは彼の娘が芥川全集の本を包んで呉れた新聞紙なのであつた。ぬるぬるとした樹脂の濠み出て匂う伐株の径、天秤にしたバケツを担いでそれ等を跨いで行く小肥りした彼の娘の四肢。耕作の眼の前にはそうした娘の肉感的な幻影のみが浮かんで来た。耕作は新聞紙を固く握りしめ、その幻影に吐息をつき、おののいていた。

濃い、煙曇りの朝、耕作は本を返しに小森家を訪れた。

ジユゼーが川辺で採ってきた紫のカトレア蘭の一株をたずさえていた。家にはたゞ小森夫人と娘が居た。

「山焼をしたらいそがしくなります、当分おうかどい出来ませんから、本を御返しに采ました。珍らしくはないでしょうが蘭を持って采ました」

母の肩に手をかけていた娘は、斜に倒れるように耕作の前に接近して蘭の花株を受取った。

「まあ、智沙の歩き方」

婦人はかるく咎めた。娘の睫毛が音たてゝ開くよう

に、瞳が薄繁の蘭の花弁の上に開いた。それば花心を思わす黒子にもう一つの大い花が眼の前にかぶさつて来た感じであった。毎夜描いたあの肉感的なものは少しも受けず、唯、美しい陶醉の中に耕作の魂は吸い寄せられていた。

娘の唇がひろがった。片方の上唇に八重歯がのぞいた。

「ありがとう」

瞬時、耕作は幻覚の世界に入っていたのだった。蘭の花株を未だ手離していなかった。掌の感覚にそれを感じてあわてゝ離れた。その所作が滑稽であったのであろう。

夫人は一寸睨んだ笑顔を見せて

「早いこと出来るわねー、で、何日なの山焼」

「明日ははじめます」

「お手伝いしないの」

夫人の言葉には暖かい響きが籠っていた。

その夫人の肩越に見る娘を全身に受けて耕作は家を辞した。外にはむせっぽい程の煙曇が霧のように閉じていた。椰子林の小川の径に、娘の靴跡を探がし、その上を躍る心で踏み歩いてきた耕作は、ふと羊歯の茂を梳いて出る水の黄色い明るさに心惹かれ小川の岸にしゃがんだ。そして煙曇の中に包まれたオレンジ色の陽をふりあおいだ。

「陽の色のせいかな」

とつぶやき、処女林の下を漉して来たその水を掌に掬ってみた。矢張り黄色い透明な水であった。その中に海月の破片のような一つの塊が眼についた。その塊は見る見る小さく碎け掌の水槽の中に拡がっていった。

「水垢ぢやろうか」

耕作はその水を流れにもどした。その小さい塊は無数に際限なく小川には流れていたのであった。耕作は急に無限生命を感じ、ふいに、その水を掌に掬って飲んだ。

サツシーが間近で鳴いた、それは爽やかな現実感の籠った韻律であった。

直ぐ頭上の群青の椰子の葉の茂みに薄茶色のサツシーの姿が動いた。ホトトギスに似た鳥で強い靈感をおこさせる目であった。喉を脹ませ、憑かれたように胸を上張って嘴をひらいた。

「フイツファイ」

そこで休止符を打って、次の

「フイツファイ」

に移る空間に深かい静寂を凝りかためた、が、次にはいつかの夜、嶋更けた夢幻的なメランコリーの余韻を残して煙曇の樹海遠くへ飛去って行った。

耕作は思わず立ち上って、

「智沙っ」

と、娘の名前を呼んでいた。

四人は木質部が腐って皮のみが残っているジャカラチア樹の乾いた手ごろなのを銘々に分担して持った。土地の高みの杜辺の火道に椰子の枯葉を集めた。ライムンドとマノエールが火道を左へ、耕作とジユゼーは火道を右の事へ火をつけて下り谷の小川で落合うことを約した。

煙曇の午後の樹海は微動だもしない無風状態であった。

耕作はマツチをすった。バイアーノ達は人差指で胸に十字を切った。明るい朱色の火が椰子の葉に燃え、四人がさし出すジャカラチアの棒先に燃え移った。四人はさっと左右に分れ、やく四米の間隔に火をつける。ちろちろと落柴について火は樹々の枝に花火のように燃え上ってゆく。ライムンドとマノエールの姿が飛ぶようにその焰の中に消えた。

耕作達は火道の角をまがった。此処から谷の川まで一直線の下りである。風は無い、どろどろと燃える火の音を聞き乍ら、今日の山焼は成功だと思った。

百米も火道を下った時、背後に何か襲いかかるものを感じた。ふわつ、と熱い風が耕作達の体を包んだ。紫黒い煙が巨大な化物のようにごうつと音をたて、迫って来た。風は耕作達の不意を突いたのだ。一挙に火を捲

し立て、真赤な焰の舌を、べろつ、と頭上にのばして来た。

ふと、猿のように火道を越えて隣の杜へ燃え移ってゆく焰の姿を見た時、それは耕作達の進路を断つかのように見えた。ジユゼは飛上って馳け出そうとした。

「あわてるなつ、ジユゼー」

と、叫んだが、一面火の海となった背後の焰のあふりを喰って、焼けつく頬の熱さを感じ耕作もまた無中で火をつけ乍ら馳け下っていた。

ジャカラチアの火を振りかざし乍ら煙の火道を馳け上って来るライムンドとマノエールに出逢ったのは谷近くであった。火照った顔を向け合って互に叫び合うのであったが、ただ機関銃のような音、空中をあふる焰の音の中に消されて、無意味に口をぱくぱくして見るだけであった。全体の火は中心に向って大きな火柱をたて竜巻を起した。どろどろと、地面と空中を揺する音は耕作達の体と心をまるでゴム風船のようにふわっふわっ、と、揺りつゞけた。その音がやつとおさまった頃、紫黒い煙に包まれたまゝ夕方となり、夜となった。

煙にむせ乍ら飛火を消しに隣の杜に入った。消えたと思つた火が足もとから燃え上つてりして、遠い世の原始人達の影の如きを感じたりした。火消の道を開き伐るそばに夜目にも白いリツシヤの花が咲いていたりした。飛火はやつと消すことが出来た。汗ばんだ肌に夜

気は快よかった。もう夜中を過ぎていた。不思議に夜の杜の恐しきを少しも感じなかった。山焼あとの明るい火の点滅は夜の街を思わせ、それが耕作の心をロマンチックにしていた為であろう。伐残された高い枯木の瘤が、仕掛花火のように、ぶーつ、と火の粉を散らしたりした。

その夜は隣の杜に移した小屋で四人は炭よごれした顔をつき合して珈琲を飲んだ。バイアーノ達が寝しづまった後も土間の火を焚きつき、椰子壁に脊をもたせて明日からかかる家建のことを思っていた。珈琲蒔付、籾蒔等のことを考え、そばに積んでいる種籾の袋に手をふれたりした。

椰子壁に釘づけた曆をめくり、日雇い達の日給を胸算用した。残り少なくなる金の事を考えたが、それは陸稲の稔を空中に措くことによってその不安は消しとんだ。

「明日から家を建てよう」

そう呟いた時

「今、来て貰ってちや困るんです、家を建ててから来てつかーさい」

と、智沙の母に約束した事を想出した。すぐ長い睫毛がはじけ開く智抄の瞳が浮かんだが、今宵、杜で見たりツシアの花に、イタリア系伯人娘アンゼリーナの面影

が匂うように浮かんで来た。

突然、頬へばらばらつ、と珈琲の実を打ちつけられたあの弾力ある痛さをまざまざと想い出した。

「嘘つき、耕作のエゴイスト」

「日本に居る母に約束して来たんだ。僕は父とやがては日本へ帰らねばならない。お前との恋をこれ以上つづけることはお前を不幸にする、僕はみすみすお前を悲しめたくないんだ」

アンゼリーナはそれ以上、耕作の言葉を聞こうとしなかった。

彼女はペネーラに掬いかけていた珈琲の実を両手につかんでは、耕作の顔を目がけて投げつけた。イタリア方言らしい悪口を叫んでは投げ、又投げつけた。

「お前は、チアーボ（悪魔）よ」

とも叫んだ。あの匂うような中世紀的な美しい面輪がぞつとする程な憎しみに歪んでふるえていた。

永住の決意をした耕作は、結局、母との約束をやぶりアンゼリーナをも欺いた事になった。それは十年と云う年月が彼にブラジルの風物を愛させるようになり、この国と離れがたい心になった時、アンゼリーナは家庭の主婦となっていたからであった。

その時、土間のおき火から急に火花が散って、ぱちぱちと音をたてた。耕作は消えたその火花を追っていた。

火あかりがゆらぐ闇の中に山焼きあとの燃えくづれる音が遠のき、不意にごつとん、とポルテラー（木戸）の音がした。

眼の前に珈琲園が浮び、白い物が無数に飛んで来て耕作を包んだ、蒲の穂棉であった。ここはブレイジョン（湿地）に接した珈琲園で、珈琲採集の喧騒の中に耕作より早くさび終ったアンゼリーナが現われてきた。

ペローバの倒木に腰をかけてレンソ（スカーフ）をとり、柔かい午後の陽射しを受けて渦巻く亜麻色髪を梳きだした。

それは如何にも親しみをさせる娘らしい仕ぐさであった。そうして汗と土壌をぬぐった後の、びっくりする程に上気したバラ色の顔を耕作の方へ向けて微笑み乍ら、不意に「耕作、ヴオセー・ノンゴースタ・デ・ミン」（あたしが嫌い？）と云った。微笑は消えて射すような瞳であった。耕作はペネーラにさびかけていた珈琲を入れたままで硬直したように、反射的に「ノン、嫌いではない、君が好きだ」二回ほどたて続けに云ったが、その声はかすれ、頭は早や鐘のように鳴っていた。アンゼリーナはかけ寄って、耕作のペネーラ（ふるい）の向側を握り、「エエ・ヴェルダーデ・（本当？）耕作」と、声をふるわした。熱いものがぽとと、耕作の腕に浸みてきた。アンゼリーナの瞳に涙が溢れ、それが耕作の腕に落ちてきたのであった。長い間云い得

なかった愛の告白である。聖マリアを思わず顔の土よごれしたうぶ毛の額、その素朴な吸引する青い瞳の顔の喘ぎがすぐそばにあった。耕作はアンゼリーナの手を握った、二人の間に珈琲は土埃を上げてこぼれ、ペネーラは舞って転んだ。

その埃の中に二人は接吻した。耕作は吸い千切られる程の熱い痛みを唇に感じ、ふるえる体で倒れくるアンゼリーナを掻き抱いていた。

「おい、ヴオセーは一体どうしたんぢや、アンゼリーナも戸惑いしとるだろう。スローモーシヨンのエナモラードをつくってさ、何もヴオセーのように遠慮することはないよ、好きな者同志ぢやないか、うんと青春を謳歌するんだよ。まさか結婚と云う事を対象にナモーラしてるんぢやあるまい。えゝ何んだい深刻な面をしやがって。それともヴオセーはアンゼリーナとカーザして一生コロノで暮すつもりかい」

兄の知は口に入れたフエイジヨン飯を吹きだすようにし、くうつ、くうつと笑いだした。珈琲採集のアルモツサ（昼食）の時であった。

「俺達はな、ここ十年もしたら日本へ帰るんだぜ。一生の内に二度とこうしたフアゼンダでブラジレイラ達と一緒に生活することはないんだよ。俺達やー云ってみりやーエトランゼ見たいなものだ、そのエトランゼに恋してくれるんだもの何の遠慮がいるかい。俺や何人

とでもやるぞっ」

プラツタの縁をサヂで叩いて知は云った。珈琲の蔭で日増しに熱烈になる接吻のあと、アンゼリーナは或る目二人の婚約を父にページ（乞う）して呉れと耕作に迫った。

耕作は愕然とした。泳ぎに熱中していた者が、何んの気なしに危険区域をすぎ水流の強さに気づいた時のように、しまった、日本語で声なき声を心に叫び、耕作はうろたえた。

アンゼリーナはその驚きを知らなかった。耕作の指をもて遊び一つ一つを唇に触れ乍ら「ケリード・耕作、今日のトマカフェーの時に来てよ、パイに云つとくから」アンゼリーナはチャウ、チャウをし、鹿のように跳ねて珈琲のルーア（通り）を横切つて行つた。

耕作はアンゼリーナの行つた後、唇に指に受けた移り香を焦がれるように喚ぐのが常であった。それは時間にして二時間か三時間で、またルーアを接して会えるのに束の間も離れる事の佗しさを味っていた。

それが今アンゼリーナの去つた後に鉛のように重いものが心を暗くしている。悦びにはづむ思いで云つた婚約の言葉に耕作はびっくりしたのである。結婚、家庭の設計、十七才の彼にどうしてそんな事が考えられよう。

アンゼリーナに惹かされアンゼリーナを愛した。二

人は長い間珈琲の葉蔭で見つめ合いの無言劇をつづけて来た。耕作はそれだけでも満足していたのであった。偶然の機会が、あの蒲の穂棉の飛ぶ低みの珈琲園で二人に接吻を交わさした。耕作は始めて接吻後の渴きを覚えた。

結婚を考えない者が、知らず知らず危険地帯へ接近していたのだ。

「馬鹿野郎、たった一人の娘にだらしが無いぞ」

耕作のおどおどしたわびしきを見て知が奴鳴った。彼は今、三人の娘と恋をしている。アルモツサの時イスパニヨーラの娘の所へ行き、トマカフエーの時セアレンセ（セアラ州の女）のモレーナの所へ行く。そこでラバヅーラ（粗糖）を貰ってくる。

それをもう一人のイタリアーナの娘の所へ持って行ってやる。こうした演り方で朗らかな恋愛をつづけていた。

耕作は、そんな技巧まで労して三人の娘達に恋をする必然性をよう認め得なかった。

「何、必然性、俺にやそんなものは無いぜ。だから遊びと始めからことわっているんだ。ふん、必然性か、生意気な事を云ってやがる。ヴオセーはそいつに自縄自縛になつちまうぞ」

知はあざ笑ったが、耕作はもうそこへ行き着いているのだった。知が予言した通りだ、遊戯的にすべきで

あった、ピンポンをするように軽るやかに楽しく……だが、それが自分に出来たであろうか？ 一途に一人の娘に惹かれハートを傾けつくす。それが耕作の行き方であった。それがいいとかわるいとか云うのではない、そうするより外にやり様のない耕作であった。

お前は今、ハートを傾けつくすと云った。そんならそうしたらいい。アンゼリーナと結婚しろっ、冷厳な言葉が心の中でおきた。接吻まで交したんぢや。おう、耕作は顔を覆うた。接吻はさけるべきだった、あの時アンゼリーナの手を握らねばよかったのに………耕作は逃げ場をうしなったネズミのようにおののいた。どうしよう遠い日本の母を思い母を呼んだ。すがりつきたい少年の頃の心であった。

耕作はその時、母に誓った言葉を思出した。それはもうとつくに心に決めていた事を今さらの事のように思出した。十年したら父や知と帰国すると云う事であった。耕作達の現在の生活の基盤はそれであったのだ。耕作の人生への希望も設計も日本へ帰国してそこから開くものなのであった。それはもうとつくに決めた事なのだ。アンゼリーナを知る以前に、耕作と云う人間はその方向に造られて居たんだ。

耕作は、珈琲の落葉を踏んで歩いていった。涙が湧くように頬を濡らし、干潮びた落葉にかるい音をたてた。決

心がついたのだ、アンゼリーナに謝る決心が。

耕作たちは、その年、耕地生活をきり上げて土地を求め、耕作が出来た。

その土地はマリリア高台の密林が急に大傾斜して落ちた緑の樹海の中に、チビリツサ河が霧に囲って流れている方へ奇った所であった。

そこで十アルケールの処女林を伐拓いた。

当時この地帯に集った日本人は数千家族で、さ乍らガフワニヨットの如く広大な樹海を伐拓していた時代であった。

耕作の家では一万二千本の軸排を蒔付け、間作として陸稲を蒔いた。山焼したあとの黒く焼けて立並ぶ伐株の畑、酷暑の陽に焼灰と土、そこへ文字どおり汗と油を流した働きの日々がつづいた。腰の骨はぎしぎしと鳴った。

日本へ帰れる土台が掴めたのである。明るい月の夜も初を蒔いた。それは苦しくとも希望に勇躍した働きの日々であった。

耕作はその頃から、日頃よわい胃をいためていた。無理な労働がたゞついていたのである。顔は蒼黒く尖って、食事の前後は息もつまる程の痛みを受けていた。

ある日の朝食後、青々と伸びた陸稲畑の除草をしている時、錐で揉まれる程の痛みを胃部に覚えると同時

に、胸一杯にどつと押し上げてくるものを吐いた。今喰べた物に湿って赤黒い物が稲の葉に被さって光った。「血だっ」と思った時、もう、間断なき吐血に耕作は傍のペローバの倒木の上に崩れた。

耕作はその日、マリリア市のサンタ・カーザで胃潰瘍の手術をうけた。

故郷の衣懸の滝水に仰向いて、滝水を口一杯に飲むうとした。水は喉に入らなかつた。たゞ冷たい滴りが、わずかに唇を濡らしたただけであつた。

朦朧とした霧の中に、アンゼリーナが現れた。頭にしたら水樽をとって耕作の口につけてくれた。冷たい水が唇にながれた、だが、水は口に入らなかつた。

アンゼリーナは水樽を縦にしたり横にしてもどかしがつた。

コツポ・デ・レイテの花、そんなものが眼の前に動いていた。その白いものゝ中に尼の顔がありありと浮かんで来た。

「ソンニヤンド」（夢？）

と、微笑んだ。棉に含ました水を耕作の口に湿してくれていたのであつた。

兄の知の顔が大写しに迫って来た。おろおろ声で、「助かつたぞ、もう大丈夫だぞっ」と云つた。

その夜、耕作は息苦しさをおぼえ、渴したように空気

を欲したが、胸に空気は入らなかった。

尼が来て大きいマスクを鼻に押しあてた。耕作は、可
細い息をつき乍ら、自分の命の灯を凝視した。蠟燭の灯
をともしして荒野を行く自分を思った。

「風よ吹くなよ、音たてるな………みんなだまって
見て、呉れよ」耕作は一秒一秒、可細い命の灯を持ち
つづけた。短かい命だと思った。

虹のようにアンゼリーナの事が思出された。父と兄
は結構日本へ帰れるだろうと思った。

耕作はそのような死線をさまよったが、不思議な程、
彼の命の灯は強靱にともりつづけて危険状態をだっし
たのであった。鼻からぎし込んだゴム管で胃洗浄が行
われ、お粥の一匙が胃に落着くようになって耕作は日
に日に元気を回復した。

豊穡な陸稲の稔の秋、耕作は健康な体にもどってい
た。

鎌を磨ぐ、頬にふれる黄金色の稲穂の株を抱き刈る、朝
露がぐっしよりと衣類をとおして身に沌みてくる。そ
の快よい感触に耕作は手術後の水や空気に渴したとき
の事を思い、ぞくぞくと再生の喜びを味った。

今踏みしめている湿った黒土が、この空気が、周囲の
緑にぬれた山々が、そこに咲くプリマベイヤやパイ
ネーラの花が宝石のように耕作の眼に映じて来た。彼
の眼にブラジルの自然が此のように輝いて写った事は

今までに無かったことであつた。今の彼の気持はそれ等の自然に親しみを持った、と云う程度のものでなく、それ等の自然は自分の細胞のつながりの一部として、真摯な感情を以つて接するようになった。

そのような再生の悦びに湧く耕作であつたが、ブラジルの陸稲刈はあまりに過重な仕事であつた。それは成功を急ぐあまり、労力の少ない家族が、広大な面積の畑を受持つている事に原因してゐるのであつた。その上亜熱帯の陽は強いので、刈つた陸穂は半日以上陽に当てると中の朶にひゞが入る。ひゞの入つた朶は二束三文に値を叩かれるのであつた。

午前中、刈つた陸穂は、その日の内にどうしても叩いて袋に詰めるか、稲城にして処理しなくてはならない。これは熟れた陸稲を刈らずに長くおく事も、矢張り同じ結果になるのであつた。九人十人と常に旦雇は使つたが、十アルケールの陸稲の収穫は大変な仕事であつた。夕方になると息がつまる程の疲労を覚え、引きつてくる足を兄と引張り合つたりした。その労働が来る日も来る日も収穫の終る日まで続くのである。小便は赤く濁つて体は腫れつぽたくなる。日曜日など休むと返つて体が痛み頭が呆つとする。夕方やつと積み終えた稲城の側に、自分の体より大きく切つたマモンの葉をかついで、倒れては起き、又振りかぶつて行くサウバ蟻を見て、「そうだ、俺もこいつ等と同じだ」と呟い

たりした。成功して日本へ帰る、常に額の上に輝いていた金科玉条にもう耕作は堪えられなくなっていた。何時果たすとも解らないその言葉に自分の大切な青春を賭ることの苦しさを切実に感じだした。それに何よりも耕作は、此の国の自然が好きになっていた。焼けつく太陽も、豊かな曲線を碧空に描いて無限に延びゆく土地の起伏も、長い雨季と乾燥季の軽るい四季の変化からくる雰囲気も、耕作には離れがたいものとなっていた。

此の大地に、此の土地を囲む緑濃い此処の自然に耕作は自分の命を注ぎたい、此処に自分等の生活の美しい設計をはかりたい欲求が強まっていた。

その頃から耕作は、青草を貯蔵する円筒形のサイロ、それ等の牛舎風景や杯状形、扇状仕立の果樹の整枝法等のついている農業本を漁って読むやうになった。何んだか明るい世界が耕作の胸の扉を開いた感じであった。

耕作は陸稲を刈り乍ら、その穂波の上に牧場と乳牛の風景を描いた。そこには家鴨の群れる池が浮かんで来た。

杜を思わす果樹園が浮かび、小川の流れには水車の音が響いた。その昔にまじつて、ふと、ソプラノの声が一刷毛の赤い夕雲のやうに響き、懐しい甘いものが胸に

湧いて来た。思わずアンゼリーナと、名を呼んで、両わきの父と兄に顔を赤らめるのであった。

此の国に到着かんとした時、このようにアンゼリーナの面影がさし込んできたのであった。

耕作は砂漠に行く旅人が、果てしもない砂丘の彼方に、オアシスを描くように、疲れ喘ぎ乍ら陸稲の穂波の上に、そうした空中の夢を描くのであった。

「可能な事ぢやろうか」

「可能だよ、単一農業で体を機械のように酷使する今の耕作面積を半分に減らして兄い、大丈夫できる」

自問自答を繰返していた耕作は或る日、父と兄にその事を話した。

「お父さん、そう仕様や。お母さんは日本から呼んだらええが」

「せーから兄さんも嫁を貰える」

父と兄に急き込むように云った。緩やかな畑の起伏を掩うて黄金色に熟れた陸稲の穂波が、耕作達の脊に砕けていた朝食後の休みの時であった。兄は近視の眼鏡を外していた。そんな時の彼の眼は「へ」の字だ。その眼に、お前は馬鹿だなっ、と云う表情を見せた。

「ブラジルは良い国だよ、俺が若者だったら、大成功するまで帰国はせんが」

父はそう云った。帰国したいのだ。椰子帽子で額をおぐあの強い意志的な眼は、此の頃弱く衰えた感じで

あつた。

その父の表情を見ては、耕作は二度と永住の話しをする気が起らなかつた。が、兄には反撥の視線を返し乍ら、無言の耕作の心はかえって強靱に、永住の決心を腹のそこ深く打ち立ててゆくのであつた。

マクコ植民地では棉の収穫をすました頃、耕作の家でも陸稻の収穫をやつとすまし、農閑期となつた。処女林の際に朱色のサンジョン花が咲き、その山際に脂肪草の穂が乾燥した冬陽に焦臭い匂いを発散させていた或る日の日曜日、耕作は一途に別れ来たアンゼリーナに会いたくなつた。何よりも永住の決心をした事を告げたかつた。

悦ぶだらう、ヴェルダーデ耕作、ヴェルダーデ耕作を連発し乍ら、胸をはづませ、耕作の両掌を握つて揺するであろう。父と兄にはオリエンテのS耕地へ行く、親友のOに逢いたいから、と云つて家を出た。アンゼリーナ一家が、前に耕作達と一緒に住んでいたサン・ヂョゼー耕地から移転して行つたと聞くバリニンニア耕地は方角違いのマリリア駅の方へ寄つた所である。処女林に包まれた植民地を出て、マリリア高原の広く展開する珈琲園の地半に、白く輝いて見えるマリリア町を見乍ら、決心したよ、お前と結婚することを。俺は日本へ帰らない。

此の言葉を告げたい、わくわくする胸を抱いて、薄コ

バルトの空に曲線を描いた広い珈琲園の幾起伏を超えて、ここへアンゼリーナ一家が転耕して来たと聞く、バリンニヤ耕地の入口のポルテータを開けた。

そこは牧で、丈高いジャラグワ草の穂波に埋まった赤い一本すぢの道が、枯葉色の陽の光りと、馬糞の匂いをただよわしていた。其処を過ぎると、丘の麓に、赤いフランセーザ（フランス風）瓦の屋並が長くならんだコロニア（集落）に出た。コロニアの中央には、小さい礼拝堂があった。その広場にはもう近まっているサン・ジョンの焚火祭の丸太木が山と積まれ、子供等はそこへ融け上り、そばに立てられたサン・ジョンの旗竿に向つて叫び合っていた。

色とりどりの着物を着た娘達は、あかるい冬の陽射しに林檎色の頬を輝かし乍ら広場をまはり、若者達は胸の旋律を訴えるかのように、カヴァキンニヨをかき鳴らし乍らその後へつゞいていた。

耕作は、曾つてのアンゼリーナと自分の姿をそこに見出だし広場の方へ歩を早めて行こうとした時、朱色のサンデジョン花がまつわり咲いているヴェランダの中から、ちつと、此ちらを視つめている亜麻色髪の娘を見た。

碧い瞳はびくつと、大きく見開かれ、唇はかすかに痙攣した。

「おおアンゼリーナ」

耕作の足は其処へ釘付けにされて了つた。甘ずっぱい涙が沸騰して、やたらに唇がふるえ、用意して来た言葉、「決心したよ、お前とカーザする事を、俺は日本へ帰らない」その言葉を、おろおろと胸の中で叫び、思わず走り寄ろうとした瞬間であつた。

「アンゼリーナ、早く仕度をしろよ」

不意にバスの声が響くや、花束のやうに着飾つた嬰兒を、アンゼリーナの顔に被せ、彼女の頬にちゅつと接吻した、ポライナを穿き鏝広の帽子をかぶつた監督風の男があらわれたのである。彼は嬰兒をアンゼリーナに渡し長身の体をやや前かがみにし乍ら、ヴェランダを下り家の裏の方へ歩み去つた。そして「オーラ、グワラニー」と、よく響くバスの声が聞こえ、ぽんと馬の首を叩く音がした。

耕作は其処へ硬直したまま、嬰兒の帽子の上に凍りついたように視つめているアンゼリーナの瞳を見た。

耕作の眼に始めて家の前の鐘の柱が眼につき、ヴェランダのある家は監督の家だと云う事が脳裏をかすめた。

「結婚して了つたのか、アンゼリーナ、もう結婚して了つたのか」耕作の馬鹿、お前とカーザする事をトレイス・マリア様（オリオン星座）にヂユラ（誓つた）したのに」そう云つたあの頃のアンゼリーナの笑顔を見たかつた。

だが、眼の前の嬰兒を抱いたアンゼリーナの瞳には白い光りが動き、その光りが溢れ、まじろぎもしない大きく見開かれた瞳をぬらしていた。

「耕作の馬鹿、一年も私をほつといて、耕作の馬鹿」、そう云つている無言の言葉を鞭のように心にうけていた。

このような無惨を現実が、一年と云う年月の間におころうとは、単純な耕作には思い至らなかつたのだ。

馬の鼻を鳴らす音、

「オーラ・グワラニーー」

馬車のコレンテを馬につける音、もう猶予ならない。監督は即刻ここへ現われるであろう。耕作は視線に力を入れ「アデウス」と、唇を震わした。アンゼリーナは身を泳ぐようにヴェランダを馳け下りたが、そこで喰い止められたかのように立止つてすがりつく瞳をむけて来た。

身をひき裂く思いで急に踵を返した耕作がもと来た道へ小走りに走っていた後ろでは子供達の喚く声とカヴァキンニヨの音が聞えていた。が、それ等の音は丈高いジャラグワ草を揺する風の音に消されていた。狂わしい乾季風が吹いて来たのだ、耕作はその牧の道へ頭を突込むように走っていた。

耕作は吹き呆けてゆく甘蔗の穂のような心を抱いて家へついた。その彼をとらえ父は、0の家族の事をしき

りに尋ねて悩ました。兄はどこかへ遊びに行つて居なかつたので幸いであつた。

耕作は風呂を焚き乍ら、燃えてゆくペローバ木の匂いに、もうとり返す事の出来ないアンゼリーナを恋う心が火のように亢つた後、日本へ帰るからお前と別れると云い、ブラジルが好きになつてからお前とカーザ（結婚）すると云う、虫のいゝ自分の言葉に、吐きかけたい程の自己嫌悪を感じていた。一年も、ほつといつてよくもづうづうしく会いに行けたものだ、そうして、アンゼリーナを失つてしまつたんだ。

「ざまあ見ろ、耕作」

自分の顔に、唾を吐きかけた心であつた。頭を深くたれて、風呂場の前にたたずんでいる耕作の背をつたつて太陽は沈んでいた。淡い朱色の柔らかい光りに燃えて、樹海は薄紫の霧にけむつていた。冬のさ中に春らしい気配を漂よわしていたが、風呂場のうしろの枯れつくしたミリーヨ畑（トウモロコシ）は、「かさつこそ、こそつかさ」と突きささる程佗しい音をくりかえしていた。

「ファイファイファイツ」

淡い煙曇の樹海や畑に、サツシーの鳴声が春を告げだす頃となつた。

「ロセイロよ、種蒔けよ」

「お、サツシーが鳴き始めたぞ、もうミーリヨを蒔かねば」

隣のカイピーラ（田舎者）達はそう云うのであった。そうして狩とヴィオロンに明暮れた彼等は、杜蔭のせまい畑にミーリヨを蒔き始める。

フオイセ（あなた）で土をそつと掘る、左手で抱えた瓢と胸の間へフオイセを置く、ミーリヨを瓢よりつまんで蒔く、足先きで土をかぶせる。これを機敏にくり返す。

瓢よりつまみ出すミーリヨはきまつて四粒。

「三粒は俺に、一粒はタツーに」
と唄い乍ら蒔く。

蒔付けたミーリヨを喰荒すタツー（アルマジロ）に、さも念をおすように、「いいかい、三粒は俺んだぞ、喰つちやいかんぞ、ほら、一粒はお前んだからな」と云う意味の種蒔歌であった。

この国の自然と、そこに住むカイピーラ達と、山に住む動物によって醸しだされる、このような雰囲気の中に、われ知らず頬笑み、アンゼリーチを失った耕作の淋しい心は、しだいしだいに癒やされてゆくのであったが、夢のようにしかも胸を突いてくる、果敢なサツシーの声に、鋏を投げたまま夢遊病者のように、杜辺の畑をさまよって兄の知を驚かす耕作でもあった。その頃

マクコ植民地では色々な事が起きていた。棉の駆虫剤ヴェールデ・パリスを飲んで、一晩中その青い劇薬を吐きつけ自殺した若いH、街の女郎屋に通いだしたR、日雇のバイアーノ（バイア州の男）と駆落したMの妻、大上段に斧を振りかぶり、割りそこねては跳ねとぶ薪を気合をかけて追いまわす気の狂ったS、それ等は皆苦しい生活からくる、落伍者なのであった。

当時、棉は一アローバ拾ミルで良い値であったが、採集賃と、運搬賃、袋代、それから無理算段をして買った土地の年賦を払えば、来年の収穫季までの生活費が出る人は良い方で、殆んどが青田借りをすると云った状態であった。日本へ帰ることの困難さを血のにじむような体験によつて味うのであったが、みんなが皆、出稼根性の鬼に憑りつかれているひたむきな働き振りであった。

タツ一の如く土にまみれた主婦達が、年に一回か二回、バケツの底に張りついた氷を掌に、国を懐しむ表情には哀れさがあった。

「せめて故郷の霜柱を踏んで死にたい」

そんな言葉を洩らして、不明の高熱にとり憑かれて死にゆく主婦達もあった。

シヨロン（泣く）と云う名の長い葉の松が植えてあったマリリア市の墓地には邦字の記された十字架が並び埋まっていた。

ぼつぼつ人々の心の中に、疲れと焦慮が忍び込んで来た。

マクコ植民地のやや中央には、アルブの坂と云う長い坂道があった。それはミナス州人だったと云う昔の地主の名前であった。その坂道を登りきった所に日本人の営むボテキンがあつて、その酒屋も誰云うとなくアルブの店と呼ぶようになった。

そのアルブの店で俗にビッシヨと呼ばれる賭事を取扱うようになった。それは一から百迄の数字を廿五の組に区分して、それに廿五匹のビッシヨ（動物）の名をつけたもので、そのビッシヨの名はABC順になっていた。

つまり一番はアヴェスツルス、これは一から四迄の数字を意味し、二番はアギアで五から八迄と云った具合であつた。その動物の名のついた数字に良い予感を得て賭けるのであつた。例えば今日は大きな蝶を見たからボルボレッタ十三から十六迄が出るぞ、と云うような、漠然とした予感をパルピッテと呼んで珍重した。

「やあお早う」

その次には決まって良い天気だとか、よく雨が降るとか云うのが普通であつたが、

「どう、今日のパルピッテは」

と尋ねる言葉に置き換えられていた。

「どうだ、パルピッテは」

「うんあるぞツ、俺の妹がコブラ（蛇）ば賭けち見んのつて云うから、どうしてつと尋ねたら、コブラに乳ば吸われた夢を見たちゆけん、今日はどうしてんコブラぢゃ」

コブラは三十三から三十六までである。それは気軽なユーモアのこもった一種の流行となつて、楽しみが少ない又、苦しい植民地生活の息抜となつて、主婦までが運だめしに賭けるのであつた。当然なくとも良し、当ればなお良しと云う程度のわずかの賭銭で、精一ばいの期待などと云うものではなく、しかも小さい望みのランプを灯して呉れると云つたものであつた。

耕作はアルブの店で受取つた隣の松井の手紙をとどけ、彼の畑道をのぼつていた。陸稻の穂波は黄金色に午後の陽を照り返して暑かつた。その穂波の上に白い袋状のものが浮かんで見えて、そこから火のつくような嬰兒の泣声が聞えて来た。耕作は稲穂をおし分けて近づいた。倒木の枝に吊つた砂糖袋で造つたハンモックの中に、嬰兒はあの小さい舌を今にも引きつてしまひそうに泣きわめいていた。松井は毘沙門を思わす大男で、彼の妻は円っこい小柄な女であつた。夫婦は精出して稻城を造つているところであつた。びっくりして松井の妻は耕作より嬰兒を抱きとり、汗に匂う太く尖つた乳房を嬰兒の口に押しつけた。夫婦とも評判の稼ぎ餓鬼であつた。

その松井には年賦払の土地代の期限が迫って来ていた。

陸稲は豊作であったが値が安く未だ売っていないかった。

一日金策に歩いたが借りる事が出来なかった彼は、ア
ルブの店に寄ってピングア（甘蔗酒）に鬱を癒し、自分の
家のそばまで帰ったとき、ぴかっと赤く燃え光る眼を
闇に感じた。木諸畑の方であった。しばらくしてごそご
そと逃げゆく音がした。

「タツ―だなツ」

彼は今店で聞いたビシヨの事が頭にひらめいた。

「ターと、タは7に似とる、ふん」一寸と北里笑んだ。

「ツ―と、ツは何かな、ワン、ツウ、スリーと、そうだ
2だ」

天帝の如く松井の頭脳に七十二の数字が金色に光り
出した。彼は自分の家の灯をうしろに、今来た道を店の
方へ引返した。

「七十二はポルコバナ、よかパルピッテたい」・

窓を開けて取りついで呉れた店の主は云った。松井
は財布の底をのぞいた。札が一枚だけ残っていた。

「ウントストーン」

と云いかけたが、急に頭を一振りしてその札を店の
主の方へ突出していた。彼の場合は運試しに一厘賭け
ると云うようなものでなかった。どうしても必要な土

地代のことが頭にこびりついていて、五ミル札一枚しかなかった大切な金を全部賭けて了ったのであった。それが翌日の抽選番号の真上に燦然と光って出たのであった。松井は幅広の百ミル札を四枚受取った。昨夜の闇の中に赤く燃え光った眼の事を思った。あれはビシヨの神様だったと思った。彼はビシヨ賭に凝りだした。

耕作の土地は丘になっていて、松井の土地は低かった。

縄煙草を小刀で刻み乍ら肩を振って歩く彼の姿が陸稲や棉畑の中を毎朝アルブの店の方へ通うのが見えた。松井は砂道についている大トカゲの足跡に、山猿の声にパルピッテを得た。畑には稲城を積みあげてゆく松井の妻のみの姿があった。棉の実が開いて植民地は雪景色のような棉に埋まっていた。町から来る貨物自動車は新しい棉袋を畑にばら撒く、日雇いのバイアーノ達の唄うサンバ、日本人の流行歌、ここではあらゆる歌が棉摘歌となってひびく。棉袋を満載した貨物自動車の上に乗って丁に行く植民地の人人、娘達は着物を買って貰い、童達は十キロ入りの菓子缶を待つ、大人達は甘煮酒の大樽を買って来る。運動会、そこに燃える若者の情熱、村芝居、恋、此の国の秋を象徴するハイネーラの花が植民地を囲む処女林を明るくするように、移民の村の大人の心にぼーっと明るい灯をともした。

その棉の収穫が終った頃、雨と埃に色槌せた棉が松井の畑にのみ残っていた。その頃彼のビシヨは神の如くよく当っていた。

ある夜、松井は夢に人殺しをした。手に油汗をかいて目醒めた瞬間、ぴかツ、と光る焰の眼を感じた。松井は寢床にあぐらをかいて、「ひ、と、ご、ろ、し」と、低い声で句切りをおいて云った。その言葉はそのまま、次の数字となつて彼の眼前に浮んで居た。一、拾、五、六、四、「六十四はレオン（獅子）だ」松井の眼は薄気味悪く光っていたが、それでいて何処か空洞を視つめている感じでもあった。冷たい風が椰子壁に洩れて口笛のように鳴っていた。零五六四と千の単位に賭けたそのレオンは当った。店の主は顎を外した顔をして見せた。彼は一夜の内に三十コントの富を得たのである。マリリア市のビシヨの事務所で、づつしりと重い三個の札束を受けとり、其れを銀行にあづけた。サン・ルイス街の日本人の店に寄り黒いハンドバックを買った。

松井は其処にあった玩具類の中から蟬のブリキ細工を手にとつた。女店員は笑窪を見せ、その玩具をぺけぺけと鳴らして見せた。松井はそれを買つて乗合自動車に乗った。時々ポケットからそれを出してはぺけぺけと鳴らす大男の彼の仕種を、人々は異様な眼つきで見た。松井は家に帰るや妻をだき抱え、髭面の顔を妻の上におおい被せた。欲しい欲しいと長く思っていたハン

ドバックが妻の胸にあつた。眠っている愛児を揺り起し、ペけペけを鳴らして見せた。久しく隠れていた昔の松井が帰って来たのだ。松井の妻はビシヨに当つた以上、それが嬉しかった。

黒黒と引抜かれた棉木の畑と黄色い稲城の立ちならぶ植民地の畑に一時の間、茜色の夕陽があたっていた。それは初冬に向う冷やかな空気の中で、何か人の心に浸み込んで来るものがあつて、時々煙の這い出る厨の小さい窓にのぞく松井の妻の顔にも、手ばなしで喜びはしゃぐ松井とは違つた夕映の翳りがあつた。

舅がやって来た。

「博打と同じばい、ビシヨは、もうすつことならんぞ。あん金で日本へ帰るなり、町の家でん買つとくたい。百姓が荒畑をしちや了いたい」 噛んで含めるように松井を説いた。松井は絶えず脛をゆすったり、太々しい視線を舅の顔に投げつけたりしていた。始めから舅の言葉等聞いていなかった。ランプの灯のゆらめきに松井の影が後ろの椰子壁に大きく揺れ動いた。その影はまるで舅を威嚇しているように見えた。

夢にも忘れた事のない故郷へ錦を飾ることを考えてもない様子であつた。その翌朝、松井は来年の絵暦を四枚貰つた夢を見て眼が醒めた。

「来年は一九三三年、三十三は蛇ぢや」

何かに急きたてられるように、松井はアルブの店に

飛んで行った。一九三三の番号に三十ミル賭けた。

「馬鹿んこつ、博打と同じか」

昨夜の舅の言葉を嘲り乍ら冷っこいコップの甘蔗酒を一気に喉の奥へ投げ込んだ。バイアーノ達がするあの飲方である。彼は確信を以って夕方の抽籤番号の紙を受取った。彼の顔にうろたえが走った。一九三三の数字が見あたらなかったのである。五七のジャカレー、七十三のパヴオン等の数字に占められていた。名刺型の抽選番号の紙は松井を始めて裏切ったのである。「こんなこんなこつが」彼は同じ番号を又賭けた。その翌日も蛇は姿を見せなかった。松井は生生しく受取った美しい絵暦の夢が忘れなかった。

「追賭ビシヨばやつちみよう」

追賭ビシヨと云うのは、目的の一つの動物の数字が出るまで毎日かかさず賭けるので、日に賭金は倍額になるものであった。七ミルから賭け始めて、拾日日には一コント七百九十二ミルとなった。松井はちつとして居られなくなって、マリリア市へ出た。

ボン屋、肉屋、靴屋の商家にはさまって日本人の営む、うどん屋、魚屋、飲食店等がごてごてと建並んだサン・ルイス街の木賃宿に宿った。

裸電灯の下の寝台には五、六人の人が寝ていて、その部屋にはむっと鼻をつく生ぬるい臭気がしていた。松井は一つ空いていた隅の寝台に腰を下ろし労働靴をぬ

いだ。

汗に蒸れた腐ったような強い臭みが、松井の足先と靴から発散して、今までであった生ぬるい臭みをおしの打て部屋一杯に籠った。そのべつとりと汚れた靴下で足指をぬぐいだした彼に、隣に寝ていた行商人風の男がちえつと舌を鳴らしたが、髭面に光る松井の眼はするどい一瞥を

(注・一行 判読不可)

街の騒音が静まった夜中を過ぎる頃まで、抽選番号を記した手帳をめくる松井の呪文を唱えるような声かしていた。

奥地への汽車の音が街を通過する暁方、枕元の騒々しい声に行商人風の男は眼を醒した。

「馬ぢゃー、首の無か馬ぢゃー」

太い眉をぴくぴく動かして、今にもがばつと跳ね起きそうな松井の寝言であった。

マリリア市での四日間は過ぎた。数字と金に取り組む苦しい焦慮に苛まれた日日であった。首の無い馬の夢が常に松井の心を不吉な思いに掠め去った。蛇は遂に出なかつた。

銀行に収めた三十コントの金は、あっけなくもとのビシヨの事務所に返っていった。木賃宿の宿泊料を支払った手中には一コント何がしの金が残っただけであった。

アルブの店の前で乗合自動車を下りた松井の顔は蒼白であった。その彼の肩を景気よく叩いた者がいた。隣の植民地のカンビスタをしている男であった。

「おい、川豚の肉があるんだ、一杯つき合え」酒気をおびたその男は店の奥へ松井を引張り込んだ。其処では博打が打たれていた。おどろいた松井の耳のあたりにか細い妻の声があった。一瞬の間、悲しみが彼の全身に走ったが、それは荒削りの柱の陰に鳴く蚊であった。

ぐつぐつ煮る肉鍋のそばの甘蔗酒を一気に飲んで松井は博打うつ者の中へ割込んだ。

植民地には棉を焼く煙があがり、稻城が姿を消した。その後へ匂うばかりの黒土が耕やされていった。そのゆるやかな曲線を描いた畑の起伏に、かちこん、かちこん、と活気に充ちた、それでいて農夫の心にちつとして居られない忙しさを急きたてる蒔付機の音が響いた。

松井の畑には収穫をしなかった去年の棉が、又芽吹きを見せて、おい茂った雑草の中にあつた。その荒れた畑を拓いて僅かばかりの陸稲を蒔いただけであつたが、それも妻の手によつて蒔かれたものであつた。

瀑布のような雨足が落ちて、チビリツサ河辺の緑の樹海を白く煙らし始めると、毎日のように午前か午後かには沛然と降りすぎて行く雨が植民地の畑を潤してゆき、樹海の地平に赫つと躍りでる夏の陽に、作物の芽

は日に日に伸び、黒い地面を青と緑の縞で蔽っていた。

松井の博打は毎晩つづいた。夜明方になると倉皇と自分の家に帰るのであったが、ある朝、帰りついた自分の家の戸が開いたままになっていた。

「おい」と妻を呼んだ。何時もの返事がなかった。薄暗い寢床には妻子の姿は見えなかった。ただ柳行李のみが何時も松井が寝る床の上に置かれてあった。松井は厨へ馳込んだ。椰子壁のすき間に洩れる薄ら明りに、皿や鍋が板棚にかたづけられてあるのが眼についた。

「花子」

思わず叫んだその声は虚ろな響きに慄えていた。苦しい悔恨と淋しさが一気に迫って、何時も妻が占めていたバンコの位置にくづれるように腰を下ろし号泣の声を上げ、ペローバ板の机の上に顔をうつぶした。彼の濡れた眼に映る机の木目木目は、側側と妻子への情を馳りたてた。

松井は急に土間を蹴って立上るや棚の鍋を掴んで竈にぶちつけた。彼は寢間に引返し柳行李の蓋をとった。衣類の底にしまっていたピストルを掴み外へ走り出た。庭に深く印した自動車の轍が始めて松井の眼についた。松井は狂気の如くその轍の跡を追った。

広い棉畑を二分する長い緩傾斜の街道をのぼり馳け下って、昨夜賭博をうったアルブの店の方へ坂道を

走った。

店の板壁は黄色く朝陽に映えていた。その背後には青色の棉畑と、濃緑の処女林とが平行した斜の二つの縞をゆるやかに曳いていて、空には薔薇色と薄碧色との雲が帯のように平行して同じく斜に流れ、地上のそれに交叉していた。

忽然と樺色の大きい影が、黄色い店の板壁に写った。その影はあまりにも周囲の景色に調和しない、異様な不吉さを強いて動いた。

店の前の十字路に紛れた轍の跡を探す松井の影が写っていたのであった。

舅の住むチビリツサ村につづく珈琲園の方へ彼は飛ぶように走った。鍬をかついだ誰かと道で会ったが、それは誰かであった、と思うだけで疾風の速さの感じでその側を馳けすぎた。珈琲園、棉畑それ等の中の砂道を走りつづけ乍ら、もうどんなに走っても追いつかない、遠い、遠い地の果に隠れたのだ、妻子に、もう二度とは逢えないのだ、と云うような不吉な思いに、つと立止つたりした。

つぎには何か祈るような叫び声をたてて走つたりした。燃え上りゆく真夏の陽にコバルトの空が薄白く、むっとする熱気を帯びてゆく朝食の頃、松井は舅の家に着いた。

「花子は居つか？」 家の戸口で組んだ松井の眼は血

走っていた。舅が出て来た。

「今頃来たつちや花子は居らん。裁縫で身を立てるちゆうて、サン・パウロさ行つたばい」 松井の大きな体が一寸とよろめいた。

「サン・パウロの何処さ行つた」

舅はその言葉に、乾からびた枯葉色の顔の筋を硬張らせた。

「どこさ行つたもなか、此の博打うちの甲斐性なし」

怨にふるえた声であつた。松井の体に戦慄が走つた。どす黒い血が頭の方へ燃えたぎつた。ピストルを掴むや舅の胸をねらつて弾込んだ。舅の口から、あつ、あつと短かい叫びがもれた。両腕を抜け松井に掴みかかるうとして二三歩あるいたが、戸口の敷居にのめり込んだ。にぶい呻き声と掌を固く握りしめて痙攣したが、そのまま動かなくなつた。陽焼汚れた皺の頭に、赤黒い血がするするつと、ミミズのように一すじ走つた。

姑の叫声が棉畑を馳けのぼつて行つたのを、ぼうつとした頭の中に松井は聞いていた。

庭の土間の隅々から、黒い影がほろほろとうごめいて強に静かに血を流している舅の上にその影は被さつて行つた。松井は眼のくらむのを覚えた時、荒々しい足音を身じかに聞いた。フォイセを横に振りかぶつた舅の長男が燃える眼を向けて迫っていた。松井はピストルを掴む手に力を入れたが、次の瞬間、長男の方へそれ

を投げあたえ、何者かを追う眼つきを広い棉畑の遠い地平線に向けた。長男の燃える眼が飛びかかって、鎌が松井の首に光ってとんだ。松井の頭はぐらつと左の肩に傾いた。ぱっくりと開いたザクロの実の真赤さがそこに見え、血潮はしゅっしゅつと吹飛んだ。そのまま松井の体は急に走り出した。彼は首に燃える焰を感じた。木の節で造った煙管を喰え、赤い三角帽子をかぶった、一本足の黒人がその焰の中に姿を現わした。魔性のサツシーである。生血の色に光る眼を向けて、げたげた笑って見せた。松井は木藪畑の闇に光った、あの眼を想出した。松井はそれを掴もうとして走った。煙管の煙が黒雲のように吹上つてサツシーを包み、闇が、どつと松井に迫った。

パラ―栗の木の下で、土壌を上げて彼はつんのめつた。

体は仰向いて倒れたが、土に汚れた血だらけな顔は陰惨に左の肩の上に横向きに眼を閉じていた。其処には灼熱の太陽にようやく熱した大地が縁濃いパラ―栗の葉影を吸っているところであった。

・
・
・
・
・

雨季の雨上りの夜の月は珈琲の青葉にエメラルドの露を光らしていた。耕作はその珈琲園と再生林の間の道を歩んでいた。甘い香りが鼻をついて来た。暮鐘草の

花がぼーっと白く燻っているように見えて来た。その時、泣叫ぶ女の声を聞いた。珈琲園の中であった。静寂がその叫びを溶かしたように暫くは何も聞えなかった。耕作は自分の耳をうたがった。ひそひそ何かささやく声がした。

「へけ、へけ」

ぞっとするその音は、不吉な予感を籠めて間近でした。

髪を振乱した女の影が珈琲園を飛ぶように横切った。狂った松井の妻が又出て来たのだ。ふと、耕作は一本足の古いさらばえた土人の女が、夜の再生林の脇道を通ると云う北伯のサツシーの事を思った。

マチンタベレーラよ

パパ、デーラはもう死んだぞツ

お前を自由にする者を知つとるか

今度は俺だ。

しわがれた声で謎めいた歌を唄って処女林の中に消えて行くと云うあの伝説を想い、耕作は体に鳥肌を感じた。

眼の前に赤いものが写った。その赤いものは長方形の黒い枠の中と、その周りの格子の隙間に赫々と燃えていた。小屋の戸口に赤って見える山焼あとの火であることが次第に解り、耕作は椰子壁に背をもたしたままの現実の吾れに返っていった。時々どっとう、と、燃

えくづれる音が響いた。耕作は長いマクコ植民地時代のことを回想していたのであった。それにしても、どうしてあんな陰惨なことを想出していたのかと訝った。悪夢から醒めた感じを受けた時、椰子壁を洩れくる風に、杜の奥深くから短くピアノの鍵を叩く音が聞えて来た。

「フイツ、フイー」

S A C Iだ。それはあの陰惨な魔性のS A C Iを一変にぬぐい去って桃色の薄絹を被せる、ローマンチックな律動を耕作の胸に吹込んで来た。

耕作は自分の胸に抱いていた者が離れてゆく気配を感じて眼が醒めた。彼はその者に離れまいとして無意識に片肘をついて起きようとした。柔かい掌が耕作の胸をかるくおさえた。

「耕作さん寝てらっしゃい、私珈琲沸かすわー」

耕作は夢を見ている気持であった。昨夜の事が蘇がえってきた。この部屋で、智沙と枕を並べて寝た事、ランプの灯に花心を思わず智沙の顔の黒子が艶いて見えた事ランプの灯を消して、耕作は、どうしようかと惑った事耕作は智沙の掌を握り、かすれ声で云った。

「智沙ちゃん、接吻ゆるす」

返事はなかった。智沙の両掌を固く握りしめたまま、耕作は思切つて接吻した。

処女林の中に木葡萄に似た匂いと云えようか、そん

な匂いと感触があった。智沙は吸うことを知らなかった。頬に触れる智沙の鼻の震えが快よかった。耕作は智沙の胸を抱きよせた。隆起した乳房をすり寄せて智沙は身もだえした。二人は胸の鼓動を響かせ乍ら固く固く抱き合っていた。外には篠をつく雨の音がしていた。あれから一年たって耕作は智沙と婚約を交す事が出来たのであった。

「今は、娘三コントが通り相場ぢや」

仲人として頼んだ森さんの言葉に、昨年穫れた農作物の殆んどの収入を結納金として納めねばならなかった。

耕作は少しもそれが惜しいとは思はなかったが、まるで智抄を買うような変な気持がした。耕作はその為に青田借をしなくてはならない嫌な気持を一寸あったが、そんな事は天にも上る喜びの中に消されていった。

ランプの灯のゆらぐ赤土壁の部屋に机に向き合った耕作と智抄は、仮祝言の盃を交した。カーキ色の服を着た森さんがついで呉れる徳利から甘蔗酒の音が妙に、とくとくと大きく響いた。皆んなが赤茶け渋い顔をしている中に、白い着物を着、薄桃色の頬をした智抄の姿は、後ろの赤土壁に浮彫のように見えた。こうして耕作は智抄と婚約を交したのであった。

一日智抄は兄の秀夫につれられて来た。夕方迎えに来るから、と云って秀夫は帰った。午後よりうつす程の大

雨となつて、秀夫は来ず、智抄を送つて行く事も出来なくなつた。

それが結婚前の二人を一部屋に寝かせる事になつたのである。が、結婚までの純潔を守ろうとする若人らしい心と、烈しい抱擁と接吻に酔うた耕作はそれ以上の肉体的交渉を結ばないまゝに、明くる朝、智抄を送り帰したのであつた。

毎日午前は晴れ、午後は雨が降つた。腰のあたりまで伸びた二年樹の珈琲が、円く撰定された盆栽のように並び緑の葉を競い茂らした。

「チホーチホーチイー

チヨイチーチヨイチー」

ひょうきんに心の隅をくすぐつて、それは喜びにふくらんだ想を歌える、素朴を娘の魅力を以つて、バナナ林に朝、未明の内からサビア鳥は鳴きつゞいた。

耕作は毎朝その声に起される。部屋とは一段低くした厨の竈に火を焚きつける。庭に残したプリマヴェーラ、パイネーラ、イペー、それ等の樹々の伐株から芽を伸ばして茂らした輝かしい青葉の陽影を踏んで、口笛を吹き乍ら片方木藪、片方はさやさやと音をたてるトウモロコシ畑を下る。その畑の豚小屋の柵から鼻をのぞかして豚達がやかましく口笛に答える。耕作はその鼻面を一寸と撫でて、そばの小屋から貯蔵したトウモ

ロコシを投げてやる。其処からバナナ林の方へまわり、カデュー、マンガ、蜜柑類の若い枝に触れて見る。来年は稔る黄金色の果実を想像してみる。その頃は妻となった智抄が籠にそれ等を採るであろう。微笑が耕作の顔にのぼった。

「チヨイチーピピ」

サビヤ鳥の鳴声はつゞいた。

獣と山鳥の声に明暮れた耕作の両隣へ入植者があって、三軒家と呼ばれるようになった。智沙の住む部落へは沢山の入植者があって、樹海は棉畑の海とかわっていった。

ライムンドが云ったとおり、智沙の部落には梅毒に似た、フェリーダ・ブラボが猖獗した。智沙の部落の人に会うと必ずと云ってよい程、ヨード・フォルムの匂いがする。其の人は大抵フェリーダ・ブラボにかかっているのであった。それ位い沢山の患者を出した。ヨード・フォルムが此の病気の特效薬ではなかったのであったが傷薬として持参して来たこの薬を付けるより外に植民地の人には方法がなかったのであった。

パウ・ダ・アーリオの多い森林には、ビリグイと云う蚊がいて、風がおさまった夕方になると人家を襲う。その蚊は蚊帳の目を通して侵入する糠のような蚊で、これに刺されると赤い斑点が出来、それがフェリーダ・ブ

ラボになるのであった。

森林の水源地の水を飲みに来る獣が病原菌を持っていて、それをドリグイ蚊が媒介するのであった。

智沙の父には脛の下に赤くたゞれた潰瘍が出来た。痛みは感じなかったが頑固に癒らなかった。フェリーダ・ブラボであった。

「あいつは運が悪いと鼻が落ちるからなー、梅毒みたいなもんだ」 「パウ・ダ・アーリオの焼灰が多すぎるよ 此処は」 日雇のバイアーノ達の交す話を聞いていた智抄の母は極度に焼灰を踏む事を恐れた。日本から持参した金が済まない内に、店でも始めよう、と云いだした。秀夫と智沙を見て、

「あんた達の鼻が落ちたらどう仕様、もう百姓いやいや」 一番の働手であった母の想つきで、小さい雑貨商の店を開いた。丁度その頃、乗合自動車は智沙の家の前を、ルツセリア町からノロエステ線のヴァルパライゾ駅へ通いはじめ、店はよくはやった。智沙の店を出張所として隣の興農園植民地から、松谷と云う医者が毎週、水曜日に来ることになった。

アルコール、カンフル、エーテルの匂いの中に切り、縫い、注射をする彼の手さばきは、堂々とした彼の体格の厳しい顔付と同じように、荒さ、機敏さと共に自信に充ち充ちていた。

「僕はフェリーダ・ブラボをね、森林梅毒と名付けてい

るんだ」

そう云い乍ら、彼は六百六号の注射を患者の腕に射っていた。その松谷医師の紹介で日本の歯科専門学校を出た石塚と云う歯科医が来ることになった体格のよい鷺鼻の若者であった。

巻煙草を喰える。要領よくセビヤ色に光るライターの音をたてる、横にかしげた顔をうつむき加減に煙草を吹かす、

(注・一行判読不可)

それは都会的であったが男性的な威厳のある美しきであった。彼は独身で、智沙の家を診療所として寄宿することになった。

露に濡れた野菜袋をかついで来た耕作は、それを智沙に渡している時、白い開襟シャツを着た石塚と始めて会った。

「綺麗な若者だなッ」

と、眼を見張った耕作は、ぐーん、と胸に抵抗を感じた。それは彼の気取った態度と、耕作の方を視る侮蔑の眼色を見たからであった。汗臭いシャツとズボンに泥靴をはいた、黒く陽焼た耕作の渡す野菜袋を、よそよそしく受取った智抄は、逃げるように厨へ入った。

音楽好きの秀夫は、ヴィオロンを習い始めた。一目店の売台に腰を下ろしてサンバ調、バイヨン調の歌を弾くようになった。そうした、コスモポリタンな秀夫は、

日雇のバイアーノ相手の商売がうまくなっていた。

智抄は時々、石塚の手伝をするようになっていた。ゴムの茶碗に溶かした石膏を茶褐色の歯型に入れたりしていた。

「そんな事をして僕のおさんどんに成れるかな」

手拭いで額の汗をぬぐい乍ら何時ものように野菜袋を智抄の手に渡しからかった。

「まあー」

すねた表情の笑顔をむけ、前掛で耕作を軽く打った智抄の瞳は急に、見る見る曇った。耕作は晴れた樹海に濃緑の雨雲がすーと襲いかかる時の冷つとしたものを心に受けた。

智抄は次第に石塚の手伝をしている日が多くなった。ある日、石塚と同じ白い作業服を着た智抄が、彼と額を重ねて抜歯の手伝をしているのを窓越しに見た時、むらむらと燃え上る嫉妬を覚えた。こんな事を智抄にさせてよいのか。家族の者の心が知れなかった。

耕作はその怒を秀夫に洩らそうと店に入った。吊り下げた腸詰等の下の、腰掛の青に顎を乗せて後向きに腰かけていた秀夫は、「下顎の歯を皆抜かねばならんだ、今も一本抜いたんだよ」と浮かない顔を向けてきた。右耳の下が変に腫れて、女性的な彼の顎の片方が喉の方へ下ったように見えた。

ふと耕作は不吉な感じを受けた。マクコ植民地にいた

頃、「毎年、俺の所へ来る患者だけでも、十二、三人居るんだ。きやすめに血清注射をしとるが」

と云った、山栃医師の言葉が想浮かんだのであった。

「どれ、口を開けて見んさい」

耕作はそこに赤く爛れて腫れ上った鶏の鳥冠に似たものを見た。そのものは喉の奥の方が盛上って不気味な光りを見せていた。

耕作はふるえる指を秀夫の頬から離し、平静を装い乍ら彼を離れた。

石塚を外に呼び、耕作はブラジルの風土病に徴の病原体を以つブラストミコーゼと云う病気のあることを彼に聞かせ、その発生から病気の経過を説明した。

秀夫の口の粘膜を犯しているのはその病気かも知れん、あんたはブラジルに浅い方だから知りんさらんのは当然だ。少しも恥ぢやない。水曜日まで歯を抜くのは止めて、松谷医師に見せてつかあさい」と、頼んだ。石塚はピンセットを掌の上でもて遊び乍ら、あの鷺鼻を向け頭を上下にかかるくゆすって見せただけであった。

「心配ないですよ」

人を喰った表情に一寸と笑をうかべ、そのまま家へ入った。

耕作は石塚に無視されたことよりも、秀夫の喉を見たあの興奮がまだつづいていて、智沙にのみ水曜日に来るからと、かるく云って別れた。帰る道々、智抄は歯

の仕事に興味を起しているのだ、ただそれだけなのだ、
「あんを生意気な野郎に惚れるもんか」

吐くように大きい声をたてゝいた。

反射鏡を額にした松谷医師は、秀夫の口の中に赤く腫上った粒々のある粘膜と、黒く乾からびた粘膜のあることを見た。

「梅毒性の兆候かなっ」

と、頭を傾けていたが、耕作の方を見て

「君の云う通りだ」

彼はそのまま、大声で、隣室の石塚を呼んだ。

「秀夫君の齒はもう抜かれないよ、今日サンパウロの
大学病院へ僕が連れて行くから、君は仕事の際に店を
手伝ってあげ給え」 石塚は返事のかわりに細く落窪ん
だ眼を上引張り上げるやうに眉を動かして見せた。

「そんな大学病院に行かなきあ癒りませんか」

秀夫は腑におちないと云った表情で尋ねたが、案外
平気であった。耕作は智沙や、智沙の父母にのみ、ブラ
ストミコーゼと云う此の国の風土病でフェリーダ・ブ
ラボより癒りにくいのだとだけ話した。「まあー」智抄
の母は毎日の注射に痩せ細った夫の肩にとりすがった。

「耕作さん、兄さん大丈夫」

智沙は耕作の両掌を握って瞳を近寄せた。久し振りに
見せる彼女の真率な表情であった。耕作はそれが嬉
しかった。その掌を強く握り返した時、固く指に触れる

ものを感じた。ルビーの金指輪がその指に光っていた。智抄はさっと掌を引込めた。急に冷めたい表情に変わり顔を伏せて了った。

一家の者が受ける悲しみの中に耕作の心も沁みるように入っていた。ルビーの光りはさ乍ら谷底の暗い淵の閃となつて、その耕作の胸を苛なんだ。

頸や四肢の淋巴線を犯され、半年か、一年後には死んでゆくであろう秀夫は、嘘のようにネクタイを付け、脊広服を着、末だ学生風を抜けきれない清酒な姿を見せて、松谷医師とルツセリア町行きに乗合自動車に乗った。

旅にでも行く気軽な出立であつた。耕作はトランクを彼の側においた。

「死に行く秀夫なのだ、智沙の事は黙つてこらえよう」じいーん、と熱くなる眼頭をやつと制して、何か云わねばと惑つた。とつさにヴィオロンが思いうかんだ。笑い乍ら云つた。

「ヴィオロンは店で、僕が代りに鳴らしとるから、養生してきんさいよ」秀夫は笑い乍ら何時もの癖の眼をぱちぱちと、せわしくして耕作の掌を握つた。

智沙は始めから石塚に惹かされていた訳ではない。特別な感情が動いていたものでもなかつた。それは耕作と云う許婚者があつたから、他の若者には自然な気

揮で接することが出来たのかも知れない。他の男に惹かれるとすれば、むしろ耕作に会う以前に、私の気持はあのボライナの足をぴたっと合わして最敬礼をして見せる山路に傾いていたんだわ。外の若者がいやらしい目つきで接近してくる中に、彼だけは素朴に天真爛漫に心の奥をのぞかして見せたから、それに大きい体格のどこかピエロ的な彼の風貌の中に案外すゞしい目が優しく笑んでいたから、私の前に耕作さえ出現しなかつたら……智沙は山路の中広い胸を描いた。

だのに私は、あの齒桑の茂で水を汲んでいた時、額の真中で長髪を無雑作に分けた白哲の小柄な若者が、雲つくバイアーノ達をしたがえて現われたのに強い印象的なものを受けたのだった。智的な広い額、太い眉毛、そこに覗く清新な目が身なりの粗末な中に光っている感じで、今まで接つた多くの若者とはぜんぜん異質のものを智沙に受けさせたのであった。

彼は長い間あこがれていたものに巡り逢った感じで芥川全集を本棚からとったり、頁をめくる包みきれない感動の表情をしたりした。私はカフェーを入れ乍ら椰子壁の隙間から見ていたんだわ、彼等が去ったあと、私は彼の名をそつと呼ぼうとして名を忘れていることに気がついた。彼が居た時は、彼を見るのが重大であつて、名のことに関心がなかつたのであった。いま名が呼べない事は淋しい事であつた。私は彼等の去つた

方へ水汲みに羊齒の茂に入った、バケツに水を掬った、心にあの若者を思って面を上げた、羊齒の青さの中にその若者は居た。

「僕、この杜の向うに住んでいる草間と云うものです」

若者の姿は消え、羊齒の葉が私の頬をなせていたわ、私は酔うたようにウル－の鳴声が全山にひごくのを聞いていた。

そうして私は耕作の許婚者になれたんだわ、兄は私を連れて、始めて彼の家へ行き、夕方迎えに来るからと云って帰った。

はじめて耕作と二人きりになれたのだ、あの沈み入る目を間近に寄せて耕作は何んて囁いてくれるだろう、私は胸を躍らせて待った、目の前に耕作は接近して来た。

小さいフオイセを持って、バンコに腰かけている私の手をとって、「智沙ちゃん、珈琲園を一廻りして采ようや」それはあつと云う隙もあたえない動作であった。耕作は私を連れて珈琲園をまわり、農園の計画を話した。砂質のこの土地は地力が早く衰えること、ゆくゆくは牛を飼って堆肥を作り、地力減退をふせがねばならぬこと、「五十年位はもたせねばねー智沙ちゃん」耕作は親しみをこめた眼ざしでふり返った。

私を人生の伴侶として、五十年の珈琲を云々する彼

に深い信頼を受け乍らも、どこか心にそぐわない、あの胸に描いた耕作でない、別な男と話している、そんな感じがしてならなかった、彼はミーリヨ畑の方へ私を連れて下り、「ここへ池を作り、あそこへ小さい水車をつくる。牧場はこの辺からだ、果樹園は………」彼の言葉は次第に情熱をおびてくる。私は彼に返事をし乍ら、初め感動し退屈し（注・一行判読不可）齒桑の茂に現れた若者でない、沈み入る程詩的で感受性の強い若者でない、私は心に反問していた。私は彼に期待していたんだわ、強い抱擁と酔うような言葉を。

午後から大雨となって兄は迎えに来なかった。耕作は夕方私を送り返そうとした。雨は増す増す烈しくなり、私が淋しい顔をして見せたら、「うん、とまれとまれ」と、自分にうなづくように云った。

その夜、ランプの灯を消して彼は始めて私にベエイジョした。被れは熱のかたまりとなって私の胸を烈しく抱きかかえた。彼は私の下半身には意識して触れない努力をしている様だったわ、篠について降る雨の音に私の体は次第に燃えて、耕作の胸が私の乳房を強く圧迫する度に身もだえした。その時、私の腿が彼の腿に触れる、びくつとふるえて耕作は離す、私は更に烈しい身もだえをおこす。

耕作はこのくり返しに疲れ、私を抱いたまゝ軽い寝息をたて始めた。燃え上った私をそのままにして。私は

遂々朝まで一睡もしなかつた。

石塚はこの頃、私の家に寄宿していた。美しい若者だったが、人を見る目の猥りがまじさは外の若者と變りがなかつた。たゞ變っているのは彼の場合その嫌らしさが底抜けに徹底していた。私は始めそれを厭い抵抗を感じ、何時の間にかその嫌らしさを待ち望む女になつていた。

それは耕作と云う許婚者が居でも、どうする事も出来ないものであつた。むしろ堅蔵の耕作に半ば反撥するものがあつたんだわ。

蛙が鳴いていた月の夜、タンプリンの切株の蔭で苦もなく彼に犯されて了つた。耕作によつて始めて燃え上つた肉体は石塚によつて果たされたのだ。一人の男から他の男へ、女と云う者は簡単に移つて行く、それも許婚者となつた耕作からこんなにも脆く移つて行く、これでいゝものだろうか？自分と云う体が彼の時、別な生命体となつて私を引張つていつて了つたのだ。

私はがらがらと崩れゆくものを意識していた。それは耕作との結婚の夢をうばい去る突風のような烈しさであつた。沌み入る目の耕作の顔が浮んだ。が、悔は私の胸におきなかつた。むしろ、その烈しい風に、身についている耕作との一切の絆を吹き飛ばして欲しい、そんな氣特であつた。

荒っぽく私は又、抱き倒されていた。焼灰の匂う土の上に、煙草くさい石塚の唇が被さってきた。

耕作は日曜日だけ店の手伝をした。日曜日の店は、日雇達の遊場であった、甘煮酒を飲む、間断なく土間に唾を吐く、腸詰を掴む、むせる匂いの縄煙草を吹かす、ヴィオロンの音、歌、二人抱合って腰の山刀を抜き、刃を合せては踊る、殆んどがバイアーノを含む北伯人達であった。

耕作は、今日こそ智沙に忠告しようと思いつめていた。

優しく素直な気持で言える自信がなかった。それを知って智沙は出て来なかった。店を石塚に代って朝食をしている時、智沙は白い作業服姿を厨に現した。石塚の治療室に居たんだ。智沙には一体良心があるんだろか。

「智沙ちゃん」

と、思わず、怒の声を掛けた。智沙は、ゆっくりとこちらを向いた。が、それは智沙の顔ではなかった。細い眉の腫れっぼたい眼をし、ベルマネンテした髪は鬼女の頭のように波打っていた。

「耕作さん、どう、智沙綺麗になったでしょう」

母がその顔を見上げて云った。智沙だったのである。

「トツパン市に行つて、パーマメントして来たの

よつ、石塚……」

と、云つて言葉を切った。智沙の横顔が母を睨んで、そのあとを云わせなかつた。石塚、と云つて言葉を切つた母の声を、おそろしい思いで聞いていた耕作は、ルツセリアから百キロ近く離れた、トツパン市への道程を思ったが、それは大凡日帰りの出来る道程のものではなかつた。

耕作は喉につかえる朝食の匙を置いて、智沙の傍に立つた。もう一度、真実の事を聞き正そうとした耕作の心は、憤りの奥底深くからくる淋しい祈るやうな眼を智沙に注いだ。が、智沙はさつと、切るように、その視線を避け、うつむいて小刻に震えだした。前に下る、ちりぢりに巻いた髪の毛を、顔を横に振って後ろにした、その時の上気した横顔が強情に耕作の方を見まいとする、何か意志する強い表情を示した。ふと耕作の心に、震えて抵抗する智沙を愛しいと思う心が湧いて、最前から眼についていた智沙の耳下の赤いものを見た。それは円く血のにじんだ皮膚の色であつた。

「……、どうしたっ」、

と尋ねた。おどろく程急変した、耕作の愛情のない子供っぽい尋ね方であつた。

両掌で耳下と顔を隠したその指の間から、睫毛の長い大きい瞳が、うろたえた表情を示して、昔のままの智抄が、そこに覗いていた。

「フェリーダ・ブラボ」

と云う懸念と、切実な心配が湧いて、それに触れて見ようとした時、耕作の手は強くはねられていた。ふとぶとしい、それでいてどこか赤蛇の鱗光のきらめきを思わす眼がそこにあつた。曾って見なかつた智沙のその眼に耕作は射すくめられていたが、それはほんのはつとした瞬間だけで、その瞬間が過ぎた時智沙の耳下の赤い封点は救うことの出来ない驚愕を耕作にあたえて了つた。めらめらと燃え上る炎を意識し、その中に耕作は焼けくずれる自分を覚えた。

「智沙は興えたのだ、此の体を、彼の男に」

耕作の心は絶望感にのたうちまわっていた。その彼の眼に、智沙の耳下の血のにじんだ歯型の染は、喰入るように写っていた。怒りふるえる耕作の眼に、何か靡爛した、官能的な匂いを持つその染は、絶望に喘ぐ耕作の胸に急に眼も眩む程の情慾をそそり、不意に智沙の円い肩を掴みそこへおし倒そうとした。

耕作の中ば痺れた耳を痛く刺戟して、何か叩きつける音、鋭く尖つた声が響いてきた。それは容易ならぬ声が籠っていた。一瞬のたじろきが耕作におき、店に走つた。

智沙の母の衣を裂くような叫びが聞えた。

耕作は土間へ、無惨に智沙をおし倒すや店の方へ

走った。吊り下げてあつた腸詰は、さながら斬られた太腿を思わして、土間へ斬り落されていた。

手に山刀を振上げていたバイアーノが石塚に迫っていた。鼻のそり上った赫顔の若者であつた。耕作はピストルを持って来なかつた事を悔いた。・どうする自信もなかつた。だが事態は寸刻を争う。

「この女蕩し、いい気味だ」

と思う心が湧いたが、途端に腕を伸ばし、そばの小さい塩袋をつかむや、赫顔の眼をねらつてぶちつけた。石塚は耕作の脇下をすり抜けて奥へ馳け込んだ。彼の背をねらつて振り下された山刀は、耕作の頭上に閃いてきた。

危くそれをかわした時、耳を掠めるピストルの音が響いた。山刀は耕作の眼の前に落ちた。どす黒い血を腕にたらしめて転び乍ら売台を越えたバイアーノは矢のように外へ走った。潮が退くように、店に充満していたバイアーノ達は彼の後を追うて逃げた。土間の片隅には、赤黒い顔の猫育男が一人残っていた。弾つたピストルを腰にしまい乍ら、

「死にそこないめ、どこへ隠れやがつた」

意外にもそれは日本語であつた。石塚が逃げ込んだ奥の戸の方をのぞきこんだ。ぞつとする妖気のようなものが、その男の汚れたカーキ色の服に漂っていた。耕作は、一度に重なり起きた事の、心の衝撃に、礼の言葉も

出し得ず、呆つとその男の顔を見つめていた。

その男は近寄って来て、売台の向うから掌を差出した。

耕作は無意識にその掌を握った。彼は耕作の方をぢつと見すえた。下に曲った口、陰険に吊り上った眼の奥深くから、彼は泌みる程の淋しさをひしひしと、耕作の胸につたえてくるのであった。

「親方、俺を匿ってくれんか」

やつと云い得たように、終の語尾をふるわしていた。

「何んて事を云うんだらう」

耕作はとっさの事なので返答に窮したが、心を打たれたまゝ強く掌を握り返した。

耕作はその猫背男を連れて帰った。境の土地の丘で、智沙の家の方を振向うとして止めた時怒がふつふつと込み上げてきた。

耕作はその夜眠れなかった。柳行李の底にしまつて山伐以後、掌にしなかつたピストルを固く握っていた。バネ仕掛のようにそのま、馳け出そうとする心と、やつと、それを制御する心とが相争つて羽交綿にされる胸の苦しさが長くつゞいた果に朝を迎えた。

昨日連れてきた猫背男は、汚れたカーキのズボンを穿いていた。腰のあたりに黒い汚点が拡がりついていた。

それが奇妙に耕作の眼を吸い寄せた。その汚点はシャツの方にもあった。ふいに、耕作の胸に昨夜の戟懐が起きた。昨夜考えていた恐ろしい想が、現実感となつて、くらくらと眩いを感じたのであった。

「こいつ、人を殺したんだな」

と、直感した。耕作の仕事着のシャツとズボンを彼に与え、

「大分よごれているようだ、今日洗ったがよかろう」
すくい上げるような陰険な眼付を感じ乍ら、耕作は素知らぬ顔で云った。

さやさやと音たてる玉筍黍の葉音の朝風に耕作は大きく息をした。何時もの朝の日課をくり返した。庭の樹々の青葉の下を通り、口笛を吹く。それに答えて喚く豚達の小屋に下る。一身に向けて来る彼等の、桃色の鼻面を撫で玉筍黍をぶち撒く。何時ものように果樹園にまわり、それ等の若枝にふれる。たとえ様のない淋しさが胸をおそう。

その日は珈琲の幹を掌で擦る仕事をした。細い幹の、ぎらぎらとした上皮を擦り取るのである。幹を強くし生育をすめる為であった。猫脊男は手早くその仕事をした働き者であった。彼は耕作より二つ歳下の二十四才で、峯と云う姓であった。あの日、店で見た陰険な相は、そのま、彼の特長ある一種の剽軽さにも見えてきた。血に染っていた服の事は、もう暫く聞くまい、匿まえるだ

け匿まって黙ろうと云う気になった。

長い柵の鬼針金に、薄白く霜は光っていた。傾いた木扉の柱に風雨にさらされた白い牛の頭骨が、長い思念の虚ろな眼をむけていた、そばに小さい礼拝堂があった。その前に積まれた木株の山に火は燃え始めた。その炎の影から、栗色の髪を長く垂らした全裸の少女が現れた。胸と腰の線に、すでに処女となりゆく膨みがあった。

黒衣を着た、鍵鼻の老女がその側に作った。呪文を唱え、何か吹出すように口を筒のようにした。その度に炎の周りを踊っていた少女の肉体は、ゆらつ、と炎に触れ、白く、透通る肌に赤痕の焼あとをつけた。

「血のにじんだ歯型の皮膚」

老女は、呪文のようにそれをくり返した。

広い金盆を抱え、赤茶けた皮帽子をかぶった男が、山刀を腰に下げて木扉をぎーつと開けて来た。

眼が醒めた、ちつとりと汗をかいていた。部屋には螢火が無数に灯っていたが、それは庇を洩れる月の光りであった。ぼーつ、とした頭に今の少女を想った。それは知っている筈なのに想出せなかった。ただ、あの赤痣の焼あとの痛みを感じた。

耕作は毎夜、眠れなかった。眠った時は、こうした夢にうなされているのであった。

「いーっ、ひっひっ、ひー」

引裂く声の嗚咽が外でした。耕作は窓の隙間から外をのぞいた。

月の光りを浴びた、黒い影が、そこに震えていた。その黒い影は急に二、三步走った、何か、二言、三言叫んだ、誰れかを呼んでいる悲痛な声であった。

耕作はそれを自分の姿と見た、また夢を見ているんだ、と思っただが、それは峯の姿であった。

青い月の光りに、さ乍ら彼を呼んでいるかの様に、パインーラの葉が微かに揺れていた。耕作は彼を呼んで寝かせようと、起きて戸に手をかけたが、すぐ思直して崩れるように寢床にかえった。

「ほっといつてやった方がえゝんだ」

と、苦しい胸の毒を吐く思いで呟いた。

土曜日となった。谷の樹海の上に今朝は珍らしく瑠璃色の空が展げていた。真夏の内に、ふと秋を感じさせるあの空の色である。悩みの果の今朝、耕作はやっと、心の清しさを取戻していた。旅にでも行く出で立ちで、サンパウロへ行った秀夫の事がしきりに想浮んだ。珈琲の幹を擦り乍ら耕作は、「落ちろツ、落ちろツ」と、力を入れて咳きを繰り返していた。それは、眼の前に浮んで来る智沙の鬼女を思わす顔と戦っていたのである。珈琲の幹の醜い肌を擦り落すことは智沙の剃り取った

細い眉毛と、血のにじんだ耳下の染みを、智沙から擦り落とす事であった。そうして柔軟な、すべすべした幹に、山サボテンの花に似た智沙を想浮べていたのであった。それは智沙の純潔を求めていた心の苦しい諦めからの悲しい執着であった。

そうして、露を浴びた西瓜の大きいのを選んで爪はじいていた。

「明日はこれを智沙の胸に抱かせよう、そしてやさしく意見してやろう」輝く朝空にピリキットの群は鳴り飛んだ。

日曜日、西瓜の袋を据いだ峯を伴って智沙の家へ着いた。店はまだ閉っていた。耕作は裏の扉を開けた。厨には、智沙の父母二人が卓をはさんでひっそりと朝の珈琲を飲んでいた。

「智沙ちゃんは？」

耕作は青に濃緑の縞の通った大きい西瓜を先づ智沙に抱かせたかったので入ると直ぐ尋ねた。智抄の父母は顔を見合した。当惑した表情であった。

「それがねー」

智抄の母の鼻が一寸と曲った感じであった。

「智抄は急に兄のことを心配して出してね、昨日サンパウロ市へ行ったのよ、一人で行けないでしょ、石塚さんについて行って貰ったの」

耕作の眼の前に黒い影がふらふらと舞った、智抄の

父母の顔が大きくおどって見えた。峯が肩を支えて呉れるのが解ってきた。「意気地なし」耕作は自分の体を憤っていた。

「わかりました」

智沙の母の顔を見すえて云った。

「智沙ちゃんとの婚約は解消してあげましょう。智沙ちゃんは僕の家で宿ったことがあったでしょう。安心して下さい、お互に体は潔白ですから」

耕作は戸口の方へ出た。智沙の父が、おろおろ声で、
「耕作さん、誠にすまん」

と、頭を下げた。

耕作は峯をうながして外へ出た。

「耕作さん、それ誤解よ」

と、智抄の母が追って来た。耕作の腹は煮くり返った。憎悪を籠めて智沙の母を呪んだ。

「なにが誤解だ」

叩きつけたい言葉が胸に沸騰してきたが、やっと、それをおさえ表へ出た。

智沙を始めて見た小川の一本橋を渡ろうとして足を止めた。不意に、流れの水を掌に掬った。海月色の水垢、あの小さい塊も、透通った黄色い明るさの水の光も見あたらなかった。羊歯の間を湧いて出たひと跨ぎして渡れた小川は今濁水となって幅広く流れている。すでに今日の酷暑の前ぶれのように、その川を埋めて青く

おい茂っている脂っこい匂いを発散させている。

耕作は一木橋を渡り乍ら、煙曇の処女林に鳴消えたサツシーに智抄の名を呼んだことを想った。が、それからは、ごうつと鳴る風の音を耳に感じるばかりであった。それは山伐の時、樹海の闇に聞いたあの音の響きに似ていた。

猫脊の峯は耕作の後を踊り乍ら歩いていた。腕を突き出し、眼を怒らし、鰐口を開けては罵っていた。それがいかにも、踊っているように見えたのである。

「刺されていいんだ、あの生意気なやつ、親方が出るから、くそつ、俺りや、彼奴が刺されるのを見たかったんだ」

耕作はその日、峯のつくった朝飯を喰べようとしなかつた。唯水と珈琲を飲んだ。眼の前が、かーつとする油照りの中に、珈琲の木肌を艶々と擦っていた。峯が何か云っても「うん、うん」と返事をするだけであつたが、時々肩を慄わして頭を珈琲樹の下に突込んでいた。

「もうたくさん、もうたくさん」

と云う、苦しい言葉が洩れていた。

燃える陽が棉畑の中に落ち、さながら大釜の形にくぼんでいる向いの谷の樹海はしだいに暗緑の色を深めていた。そこには、大夕蟬の声が重苦しい余韻をこもらせて、闇を吸寄せていた。

耕作はすたすたと珈琲園の道を下つた。バナナ林近

くの隣の稲畑の低みにオレンヂ色の沢蚩が飛交っていた。女の歌声がその棉畑の中の堀立小屋から洩れてきた。北、伯移民として来たセアレンセ（セアラ州）の家族が、そこへ住んでいた。

月の無い

漆黒の闇の色に似た髪を

背に長く垂らした

インヂオ娘よ

それは夕闇の沈鬱さの中に泌みでる、草深い感じの恋歌であった。耕作は故郷を懐しむ心で、とおいマリリアの耕地生活のなかに帰って行く心地であった。

ミレーの落穂ひろいに似た娘達、その中に星の光りが射しこむように、アンゼリーナの面影が浮かんでいた。フェジョンの煮える匂いに暮れゆくコロニア、そこに少年から青年に移る頃の平和と夢が、素朴に醸されていた。その頃の想出がその歌の節に籠って耕作の半ば放心した心は、母の乳房を吸う嬰兒のように、その歌の中に浸っていった。

そうして大夕蟬の声に、谷の樹海の方へ吸込まれてでも行くように、家の傍を逾越し、道のないミーリヨの畑に突き当って吾れに返った。げっそりと痩せた耕作

の顔は、どこかゴツホの描いた、矢車草を喰えた男を思
わせた。泣いた時の顔がそのまま硬化して残った顔、魂
を失わんとした者が一途に一つのものを追っている顔
である。

耕作は黙々として毎日働いた。

「パトロンは馬鹿になって了うた」

峯はそう思っていた。けれ共、耕作の仕事振りには少
しの狂いもなかった。あの稲穂の上に描いた農場の夢
を執念深く追う権化のようでもあった。ただ耕作は一
言も物云はぬ人間になって了ったのである。

働き者の峯は、時々、急に畑に立ったまま動かない
事が多くなった。そんな時の彼の猫背は傀儡のように
曲っていて、急に頭を上下に動かし乍ら、「ようし、よ
うしっ」と、云う言葉が吐かれていた。

峯は、智沙の家近くの一本橋を渡っていた。恋人を
撃った時のカーキの服にピストルを腰にはさんでいた。
もう耕作の家へは帰らないつもりの出で立ちであった。
月の光をあびた自分の姿を川の流れにみていた峯は
低い声で呟いた。

「彼奴さえ片付けりや、あの娘つ子は親方の所へ帰
る」

ペローバの巨木を倒しただけの、この一本橋の太い
幹は、異様な形に智沙の家を指して伸び、そこに灯は見
えて来だした。峯はピストルを握って胴震いをした。

突如、

「フイー」

はかない響の鳴声がした。峯は其処へ立止って、きよときよと辺りを見まわしていたが、一点の空間を視凝めだした。

「峯さん」

と、一言云って抱きついた腕の力を次第に無くした恋人の顔がそこに浮かんでいた。

峯達の恋は許されなかったのであった。恋人の里子はサンパウロ市の叔父の家へあずけられる事になった。峯は里子の乗って来る貨物自動車を珈琲園の坂道で待ち伏せ、一途に自分より逃げてゆくと思った里子を躍り出て弾ったのであった。

がくつと頭を垂れた里子の白いブルーズの胸は、見る見る鮮血に染っていった。里子はその胸からやつと頭を上げて、峯の方を見詰め、憶える両手を峯の方へ上げて来た。

「おっ、おう、おう」

峯は苦るしい呻き声を上げ、眼の前の空間を掻き抱き、長く一本橋の上に立ったままだった。蛍が彼の足もとを照しすぎた。峯はもと来た道の方へひき返して行った。

耕作は竈に沸かしてある珈琲を飲んでいた。その竈の割れ目に錆びた一つのピンを見いだした。智沙のも

のであった。篠をついて降ったあの夜の雨のことを思った。

耕作はそれを掌にとつて、ふらふらつと、外に出た。月は青白い水のような光りを谷の樹海の上に投げた。その日をふり仰いだ時、ごうと絶えず鳴響いていた耕作の耳の音は、月の光りに消されてでもゆくように遠のき、土人の云い伝えている、植物の母の日と云う感じに、耕作の頭上に清々しく濡れ輝いてきた。

その月の輪の光りの中にピンをかざしていた耕作は、憑かれたように樹海の方へ耳を傾けた。

「フィツファイ、フィツファイ」

久しく聞かなかつたサツシーの鳴声であった。土人の伝える。

センフィン センフィン

「水遠に、永遠に」

と、云うように聞えてきた。遠い樹海の果てからのようであった。突如、「ファイファイ」量感にふくらむ澄んだ声が間近かでし、「フィツファイ……ファイ」その声は急に何者かによって引きかれた悲痛さに変つて途切れた。

「傷ついた胸よ」と鳴くと云うその声である。次にはただ、「フィツ」と一声を樹海に残したまゝ消え去って行った。首を垂れたまゝ耕作は、長くそこに月影を浴びて立っていた。

その月の光りの中に土人の伝説は、木の洞の太鼓を叩く素朴なひびきを以って耕作の胸にしみ込んできた。植物の母ジャシーと云える月、その月の家臣である魔性の一本足の黒人のサツシーと鳥のサツシー。

そこまで思った時、焦点をとりもどしつつあった耕作の頭は、再び不気味な耳鳴りをともなうて、ぐらぐらと目眩を感じ、蒼黒い巨大な渦巻きの中に巻き込まれこいた。大樹の倒れゆくどよもしが、その中に沸き返り、地の底から響きくる杜の精の虚な声が迫った。耕作はたゞらを踏んでその渦からのがれようと空中をふらついた時、ごうつと、耳鼻の奥に鳴っていたあの音がぼつん、と軽るい音をたで、鼓膜の奥で消え、月の光りが洪水のように渦巻きを押し流していた。

不意に豚小屋の方で、豚の鳴声が耕作を現実にもどした。ミーリヨの葉に夜風はさやさやと音たてゝいた。頭を上げた耕作の目に、ほろほろと惹く黒い無数の影が樹海の上に踊って見えたが、それは耕作の錯覚であつた。

谷の樹海は依然として月の光りに煙っているばかりであつた。

耕作は厨へ入ってピンを竈の火の中へ投げ込んだ。

老移民のこの日

山里アウグスト

略歴 本名山里アウグスト繁。一九二五年サントス生れ。一九四八年南米時事入社、編集部勤務。一九五二年日本へ留学、京都竜谷大学に入る。

一九五八年同大学大学院卒業（仏教学専攻）。一九五九年仏教書「心のともしび」出版。一九六一年第二回「農業と協同」文学賞に本集収録作品が入賞。この時期創作に没頭、純二世作家として注目された。一九六二年、ラジオ・サント・アマールからラジオ小説「笠戸丸移民」を放送する。一九六八年「日本の歴史（ポルトガル語）」出版。一九七一年長編映画「レジナと魔法のコイン」製作、一九七二年テレビ・ツピীরぬいぐるみ人形劇製作。

老移民のこの日

山里アウグスト

(1)

時間はわからなかった。とにかく、一と眠りして眼をさました河上老人は暗がりの中を手さぐりで勝手のわかった表戸を開け、もどかしそうに外へ出た。全身を冷たい夜気に包まれると、急に生理的欲求が切迫感をもつて下腹部のあたりを疼かせた。老人はいつもの習慣通り、家の前に横たわっている花壇めがけてじやじや用をたしはじめた。救われたようにほっと安堵感をおぼえながら、彼は満天に瞬く星を仰ぎみるほどの大あくびを空に向けた。

雲ひとつない中天に、大小さまざまな金粉を蒔きちらしたように一群の星座が輝いていた。その中に、特に大きく見える星と星との間に仮空の線を引いてみると、サソリが毒針を秘めた尾先を鋭く湾曲にさせ、餌物を狙っているような不気味な型になる。それが冷く冴え、老人の視野の届く範囲の天界を独占していた。地上の闇には、ほのしろく漂った霧のヴェルがうつすらと降

り、森、竹藪、窪みなどの遠近感が水墨画のような幽玄さをもつて見える。しかし、この不透明な風物は墓地のような不気味な静寂さに包まれ、気の弱いものは周囲の黒い影を見て群魔を連想してあまりの静けさに全身の毛穴に冷気が触れるのをおぼえるに違いない。やがて、老人が小用をすまして屋内に吸いこまれると、周囲は再び生物の存在を失ったかのようにひっそりと寂漠の中へもどった。

遠くで一番鶏が鳴いた。それを合図にあちこち遠近で鶏の声が上がった。河上老人の寝室の窓外からも、聞きなれた赤雄鶏の太い流暢な声が出た。また時おりそれを真似るように、若鶏が羽ばたきとともに洗練されなしいしわがれ声を絞りだして鳴く。老練の雄鶏が正確な音律でしかも微妙な音韻を細ながく引いて鳴くに反して、若鶏のそれは音尾が濁ってとぎれる。その二つの声を聞きくらべながら老人は寝台の上で口をもぐもぐさせて「やっぱり若い奴はだめだ」とつぶやいて笑った。彼は経験を重ねてすでに老練の域に達した赤雄鶏の声には聞きほれたが、流暢な声量に達しようと若鶏がけんめいに絞りだしているしわがれ声には注意をおかない。注意どころか、彼は嘲笑だけを向けていたのである。

表の間の古い柱時計が鈍重な音を立てて二つ打った。河上老人はまたもふとんの中で寝がえった。神経が高ぶって眠れない。眠ろうとりきめばりきむほど、興奮状

態が全身に湛ってますます眼が冴える。隣室から聞えてくる長男の嫁のいびきや、耳鳴りを思わせる夜更けの草の虫の単調な音が老人を睡眠から引きはなす。彼はしきりに夜明けを希いながら、体の関節ごとに痛みを感じては寝がえりをうち、寝がえりをうってはまた節々の麻痺をおぼえた。幾度おなじことを繰り返しかえしたかわからない。

もう夜が長く感じられる年齢ではあるが、今夜は特に夜明けが待ちどおしく、床についてからしばらくうとうとしたが熟睡は全然していない。夜が明けたら、サンパウロの法科大学を卒えた次男のタケシが帰ってくる。それで彼は夜が明けるのを無性に待ちどおしかつたのである。

（明日、タケシが戻る。あれもとうとう大学を卒えたか。おどん一人であれを弁護士にしあげたからのう）こんな眩きを何度やらしたかわからない。老人は暗がりの中で板の張っていない天井に視線を向けた。そこには星明りがほのかに瓦の隙間からもれていた。そのほの明りに次男の白い細面が浮んで自分に微笑みかけてくるのを見た。老人は、青年騎士の前に立った乙女のような羞恥感をおぼえてふとんの中でもじもじした。

「あれはよかにせ（好男子）じゃのう」と、老人は眩いた。口をもぐもぐさせて。それからタケシが帰ってきたら、まず何からいおうかと心配をしはじめた。・子供の

頃、褒める時にはよく頭を撫でてやったが、成人になった今ではそれもできない。「おめでとう」と握手する方がよいか。それとも、肩を抱くか。これはどうも儀式めいていて、しかも日本人の生活様式にはそぐわない。こんな不自然な借物みたいな挨拶を振りまわすよりも、いつそうのこと日本流に頭をさげてお辞儀をした方がよいかも知れない。しかし、それでは他人行儀になって、父子の親密感が薄れる。それに、倅に向って頭をさげると親の活券に関わる。やはり、親としての威厳を保たねばならない。嬉しさのあまり、やたらに頬の筋肉を緩めたら子供にばかにされるだろう。だから平常を装い鼻先で受けごたえをしなければならぬ。タケシを偉くさせたのは自分だから、自分が威張るのは当然だ。こんな止めどないことを考えながら、老人はふとんの中で肩をそびやかし、しかめ面を試してみた。そして自分の為種に滑稽味を感じて、暗がりの中で思わずげらげらと笑ってしまった。

タケシが帰ってくる報せを受けとったのは一週間前。その日以来、河上老人はそわそわして落着かず、早速この吉報を植民地中に鼻高々で触れあるいた。日頃みんなとあまり交際していないにもかかわらず、彼は遠近の隣家を戸別訪問し、邦人のみならず伯人のところへもこのことを告げまわった。植民者の殆んどが嫌味を

持って老人の触れまわりを聞いた。そんなことには無頓着で、彼は他愛ない自慢巡廻を続けた。彼は植民地中、いや世界中にこのことを知って欲しかった。自分の息子がサンパウロの法科大学を卒えたことを。その息子を大学に出したのは自分であることを。

「おい、おどんとこのタケシが偉ろうなって戻る。おどんの育てたタケシがのう」と、嬉しさのあまり道端の草を喰んでいる牛にもいうたほど。傍目には正気と思われないが、本人はすこぶる真面目。彼は得意になって、この録音したような決まり文句を口にしたが、「おどんの育てた……」というところに特に力をこめた。彼は息子を通して自分の存在を強調して歩いたのである。

（村の奴ら、おどんのことを偏屈と蔭口しとるが、この辺で子供を大学まで出したのはおどんだけじゃ）と老人は深い自丘陶醉におちこんでいた。

実際、河上老人は偏屈者の部類に属している。彼の性格及び生活態度がそれを示している。

老人がほろ酔い機嫌の時に決まって口にするのは、自分の家柄は武人だということ。彼の語るところに依れば、その先祖は薩摩藩の「兵部所家老」を務め、四千石の家柄である。老人のいうような職務が果してあったかどうかは誰も詮索したことはないが、とにかく彼はそれを自慢した。なお、彼の祖父河上兵馬は若干十七

才で鉄砲組の隊長として明治維新に参加して数々の武功をたてて陸軍大尉にもなったが、西南の役に西郷勢に加って戦い、ついに田原坂で壮烈な討死を遂げたという。この祖父兵馬の意志を継いで父の一馬も軍籍に身を置き、日露戦争の沙河の会戦で戦死してしまった。当時、河上老人はわずか五才。彼もまたやがて祖先の血の命ずる道を踏み、陸軍士官学校を経て少尉になったが、母の遺言に従って軍人職業を途中で断念したとのこと。ところが、老人の旧知に依れば、彼は野外演習の際、不覚にも高所から転落して膝の関節をひどく挫き、止むをえずして軍人課程から身を引いたようだ。そういえば、彼の右足はかなりいびつだ。しかし、彼はその右足の肢に関してはあまり触れなかった。いつも五分刈りの胡麻塩頭をまっすぐにし、骨組みのたくましい肩をそびやかして歩く。彼は太平洋戦争後まで、この界限の在郷軍人会の支部長という肩書を保持していた。

また、河上老人は「頑固」という代名詞がわりにされているほど、融通性の欠けた男だ。人が自分の意見に従わない限り、絶対に承知しないし、妥協も決してしない。

軍人肌の人でありふれた性格で、単純そのものだ。思慮分別に深さがなく、単純にものごとを考え、単純に判断をくだしてかかる。自分の独断的な私見を正当づけるためには、平気で横車でも押す。こういう性格の人が

持つ類型として、彼もまた短気である。この短気は、最後の護身術みたいなものだ。詭弁をふるうほど脳がスマートフォンに働かないので、彼は私見を無理に通すために短気を用いる。こうして彼はつねに「無理が通れば道理ひっこむ」という事態を起す。そのため、彼はますます頑固になり、思慮分別の方もいつそう鈍くなってゆく。おまけに、生活環境も彼の智能を低下させる役割りを果している。ブラジルの最低の文化程度しかやうしていない農村で、彼はすでに三十二年間も暮らしてきたし、現にそこで生活している。時代文化や思潮などとはおよそ無関係に生きていてもいえる。最近の文化、思想、情勢などと多少の接触があるにせよ、それは極めて間接的なものであつて、彼を刺戟し、その思考に影響をもたらすほどのものではない。米・ソがロケット打ちあげ計画促進をしていると聞いても、それはキリストやシャカの説教と同じように全く無関係なものだった。彼はすでに、いわゆる「大陸呆け」をしているのだ。だから、今の彼がじかに身に感ずる世界の動きといえ、自分の作った棉や落花生の価格の変動だけであろう。

河上老人は移民の殆んどが辿った経過を通り、明治時代の人間とも、大正時代の人間とも、また現代人ともつかない「老移民」という遺物的な存在となつてしまつている。時代感覚を失い、記憶からだいぶん薄れた昔日の知識にすぎり、己れの中に深く閉じこもつて頑固一

途に生きている存在となっていた。身体的には筋肉や関節が緩んで自分の意のままにならないという悲哀感をおぼえながらも、彼の生命欲は旺盛である。この生命欲は自己保存という根本的本能に基づく。この自己保存の本能の一部であるところの自己防衛の心理が、この老人をして頑固にさせていた。彼は社会を構成する一員たらんため、また自尊心を守るために自分の古ぼけた知識で固執し、それを冒される危険性を感じた時に怒りと暴力という手段でもって守ってきた。もちろん、意識的な行動ではなかった。彼は自己防衛の本能に従っているだけに過ぎない。

河上老人が一世一代の活躍をしたのは、終戦直後のことだ。いや、この大袈裟な表現は老人自身が使用していることで、いわば彼だけがそう思いこんでいるわけ。ただ、この界限の在郷軍人会の支部長として、ブラジルの日本人コロニアを戦慄と混乱におとし入れた勝組・負組の暗闘の中に登場したにほかならない。もちろん、老人は自分の信念から割りだして、日本大勝利の確信を抱いたものの一人だった。植民地で日本の敗戦を口にするものがいてその人々の家へ彼は単純な青年数名を指揮して殴り込みの真似事を行った。彼は日本の敗戦を口にしたものに強固談判してその発言を撤回させ、改めて天皇に対して忠誠・玉砕を誓わせた。彼の強請に従わないものは「国賊」として踏んだり蹴つたりの目に

あつた上、家具を悉く破壊された。この暴力にあつた家が二軒あつた。

幸に、老人の指揮下にあつた範囲では、他処で起つたような流血・殺人事件はなかつた。しかし老人は日本勝利の盲信者の旗頭として五カ月間ほど警察に留置される憂目をみた。彼は鉄格子の中で納得できないものを経験した。日本を愛し、天皇に忠実な心を寄せている自分を弁護してくれるものが現われなかつたこと。なぜ忠君愛国の精神を抱いているものの味方になつてくれる人がいないか。それが合点できなかつた。彼は自分のように忠誠の心をもつたものを擁護し、弁護してくれる正義の騎士の出現を希い、自分の次男にこの役割りを果させようとサンパウロの法科大学へやつたのである。こうして動機で、いわば副産物として一人の法学士が世に出たわけだ。

河上老人を無条件に偏屈者の部類に属させるものは、彼のしみつた根性だ。この点ではかなりの悪評をあげている。たまに町へ出たり、結婚披露宴に招待されたりなどのような特別の集合に出席する時以外には、まれではあつたが、たとえ人の家を訪問する時でも絶対に靴をはかない。ブラジルのインジオの洗足主義の習慣をも、ほぼ忠実に守っているような老人だ。また彼を着てあるく衣服の殆んどが継ぎ剥ぎをしてある。時おり、あまりにも継ぎ剥ぎが多くて、どれがもとの布地だ

か判別のつかないようなものを着てあるく。良男の嫁はそれを嫌って、老人の衣類の継ぎあてや洗濯をしたことがない。だから老人はみずから、或は炊事に雇っている土地の小娘にそうした継ぎ剥ぎをさせているから、器用な継ぎあてができているはずがない。すべての面で彼の吝嗇はこのように徹底していた。で、彼はかなりの蓄えを持っているという噂さがある。実際に、彼がどれだけ蓄めているかは彼の息子さえ知っていない様子。彼の耕作面積や収穫量、販売価格などからおよそ百万クルゼイロスを持っているだろうと推測されている。ところが、老人は底知れぬ沼のようにいつも不景気な顔をしている。生活を楽しむことを知らない彼は、開拓期の茅舎よりは少しばかりましな程度の住居で暮し、朝から晩まで子供のできない長男夫婦や雇人たちと原始的に近い農法でがつがつ働いている。

表の間の古い柱時計が三時を打った。その鈍い金属性の打音の余韻が次第にうすれてゆくのを聞きながら、河上老人は自分の希望もその時計の音のように消えてゆくような心細さをおぼえた。果しない深淵に吸いこまれて、光の世界から永遠に離れてゆくような堪えがたい不安に包まれて、やがて闇の中で涙ぐんだ。涙もろい老年期にありながら、彼は今まで一度も人に涙を見せたことはないが、夜の暗がりの中ではしばしば秘かに枕を濡らす。孤独に慣れているとはいえ、彼はつねに

そうした身の細るような佗しさをおぼえさせられた。特に今夜はいつそう深く、そして強く。

次男の卒業は老人にとってこの上ない喜びだ。しかし、他方ではこの事実から表現しがたい淋しさを感じさせられていた。矛盾しあったようなこの二つの気持が交々に、いや同時に彼を襲っていたのである。終戦の混乱期も過ぎ、年月を重ねてゆくうちにコロニアの人心もすっかり安定し、タケシを忠君愛国者のために闘う騎士に育てあげる夢はいつの間にか消えはてて、ここ数年は、「タケシの学資を稼がなくちゃ」という名目を掲げてけんめいに働くことが老人の唯一の生き甲斐であった。この生き甲斐を感じることによって、彼は孤独の淋しさをもぼかしてきた。ところが、タケシの卒業でこの心の支えが失われたわけだ。この現実に基づくかと、老人は心にぽっかりと大きな空ろが開いたような気がした。その空ろの暗がりの中に吸いこまれて、永遠の闇の世界に葬られてゆくような恐怖すらおぼえた。もはや娑婆に自分を喰いとめるなんらの口実をも見いだすことができないように、彼は今まで殆んど思っておこしたことがない年齢を切実に感じ、身心の衰退をしみじみと味わった。朽ちた家屋が支柱を失ってまさに大音響とともに倒壊せんとしているように、ブラジル山野の拓士河上兵武老人もまた肉体的にも、精神

的にも崩れおれんとしているのだ。

彼はそうした危機の上に立っていた。

老人の眼から涙の玉がいくつも転りおちた。佗しさに堪えかねた時には、無性に一杯飲みたくなる。彼は垢臭いふとんの中から起きでて表の間の戸棚からピンガの瓶を手さぐりで取ってラツパ飲みにごくごくと喉を鳴らした。強烈な液体が臓腑に沈みこんだ。ついでに戸外へ出て小用を達してから寝台へ戻ったが、なぜか今夜のピンガの効力が薄いように思われた。いつもより二口も余計に飲んでいながら、酔えない。今夜のピンガは現実をぼかし、それから逃避させる効果をあらわさず、かえって逆作用を起して老人を佗しさの中へ追いこんだ。彼は生命の危機に直面していた。殆んどの老人が希望を失って孤独と感傷とに捕えられると早く世を去ってしまう。河上老人もこの危険性を持っていた。で、彼は速かになんらかの生きる理由、生きる意味づけを見いだし、気を取りなおして生き甲斐を感じない限り、この危機から脱出することができない。しかし、この危機の上に立ちながらも、彼の生命欲にはまだ脈搏が力強く打っていた。

―あー、そうじゃ、タケシに嫁を探してやらなくちや
―老人は急に全身に生命を感じた。心も混乱させ、細らせていた陰影が忽ち消えうせ、胸の躍るような歓喜が一度に押し寄せてきた。あたかも青春の血潮が澁刺

と蘇ったかのように。

と、長男イサムの嫁の高いびきが耳についた。

パウ・ア・ピツケ式の土壁で隔ってはいるが、天井に板が張ってないので嫁のいびきが筒抜けに聞える。老人は聴覚神経をいやが上に刺戟され、甘い陶醉境からいきなり現実へ引きもどされたような幻滅感をひしひしと味わった。

彼は不愉快な気持に襲われて暗がりの中で顔をしかめた。

そして寝がえりをうった。

「あんな女みたい奴はタケシの嫁に選ばん。絶対に。

子供さえ産めん奴はいかん。石女は冷うて。あんな奴をイサムの嫁に選んだのはおどん一生の不覚じゃ！老人は長男の嫁を毛嫌いしていた。自尊心の強い彼が、そんな嫁を長男に選んだのは自分の一生の不覚だ、と思うほどに。

河上老人が嫁のみえ子を憎む根本原因は、彼女が子供を産まないところにある、といってもよからう。自分の孤独を紛らわしてくれる孫が生まれるのを非常に楽しみにしていた老人だ。自分の欲求を満してくれない嫁に対してエゴイスチックな性格を持つ彼が寛大な気持で向うはずがない。芽の出ない種を掴まされた百姓が種を呪い、それを自分に売りつけた商人を呪うように老人はいつしか嫁を憎悪するようになった。また、み

え子の方も子供を産めない女が持つ一種の僻みからくる冷い態度をつねに示していることは事実だ。彼女の冷さは、自分自身に対してだけでなく、一家全員や他の人々にも向けられているが、老人は自分だけにそのような態度を示めしているものと思いきこんでいる。で、六年経った今日では、同じ屋根の下に住んでいながら老人は嫁に対して一日中一言もものをいわない日が多くなっている。嫁の方もまた、やはり僻みからくる片意地を張って絶対に口をきかない。いわば悪循環だ。この家庭の冷い雰囲気は、老人にますます孤独感を与えていた。

河上老人は嫁についてのいろいろな不愉快な事柄を払いのけるように寝がえりをうった。すると、故障を起した映写機の映しだす画像のように、植民地の娘たちの顔が入りみだれて彼の脳裡を通った。やがて彼は星のほの明りのもれている瓦裏に眼をすえて、ゆっくりにした気特で次男の嫁の選択にかかった。

谷川治次の娘は頑丈な体格をしているが、顔があまりよくない。松永菊造の三番娘はなかなかの美人だが、おっちょこちょいだという噂。女子青年会の会長をしている畑辰夫の娘はしっかり者だが、体格がどうも貧弱で、あれを貰ったらタケシがかわいそうだ。こんな風に、老人は自分の知っている限りの娘たちを、体格、容貌、人気、噂さなどの点からあれこれと物色した。長男

の嫁の選択で苦い経験をしているので、再び同じことを繰り返かえすまいと念入りに幾度も人選を重ねた。常識的に考えてみれば、大学を出てこれからブラジル社会に乗りだそうとしている息子の嫁を、この片田舎で物色するそれ自体が根本的に間違っていたが、老人がそれを早く気がつくはずがない。とにかく、厳選を重ねた結果、彼はついに息子の嫁にふさわしい娘を自分の知っている範囲内に見いだすことができなかった。すると、俄に重苦しい不安が彼の心を包んだ。自分の知らない娘がタケシの嫁になる。一体、どんな娘だろうか。またイサムの子の嫁のようなものを貰っては大変だ。と、老人の不安は「イサムの嫁のような女」という具体的なものに対する恐怖にかわった。誰でもよいから、自分の知っている範囲内の娘を今のうちに決めておかなければ安心できない。そういう焦りをおぼえながら、老人はまたも繰り返かえして植民地の娘たちの顔を思い浮べはじめた。

「おぬいのような娘がいたらう。あいつはほんとうにやさしい奴じゃった！少し疲れをおぼえてきた老人の頭に、今度はメランコリックな想出が浮んできた。二十六年前に死んだ妻おぬいのいろいろな想出が。わずか二十五才の若さで世を去った妻のことを想いおこすと、決して涙をこぼす。ありし日の妻の面影は深く彼の脳裡に刻みこまれ、今もなおいきいきと蘇る。ほつ

そりした面持に鼻すじがよく通り、小さなそして厚味のある唇のあたりに甘えるようなあどけない笑みをよく浮べていたおぬい。その愛妻が、配耕されたノロエステ線の奥地で妊娠三カ月ころにひどいマラリア熱に冒され、流産とともに激しい子宮内出血を起し、医師も薬もない山野で若い一生を閉じてしまった。

開拓初期の苦闘の最中に妻を失って、心の支柱をもぎとられたように彼はしばし半狂乱となった。生活の大事な同伴者に逝かれた苦悶の中から、彼は二人の子供を支えにして辛うじて立ちあがった。当時、長男が四つ、次男が二つで、彼は三十四の壮年期にあった。妻に死なれたことは堪えがたいものだった。開拓の重労働に疲れはてた心を慰めてくれる同伴者としての妻だけでなく、セックスの欲求を満してくれる女性としての妻の存在価値は大きかった。それだけに、彼は絶えず妻に対する恋慕をおぼえた。夜毎に亡妻の弾力性に富んだまるっこい肉体を想いおこしてはやり場のないセックスの激しいどよめきに悩み、妻のやさしい慰めの言葉を想いおこしては涙ぐんだ。再婚するにも、彼の配耕されていた植民地には適当な相手がいなかった。後になつて、再婚の話をつつ三つ持ちこんできた人もいたが、すでに男手で子供たちを育てるコツをのみこんでいた彼は、もはや積極的にそうした話に乗ろうとはしなかつた。そのため、彼は亡妻を追慕して生きることを

おぼえ、妻に関する想出のすべてを美化し、妻でもって世界一の良妻賢母の理想的女性像をつくりあげてしまった。彼が長男よりも次男のタケシの方をより以上にかわいがっているのは、タケシの顔には亡妻の面影を偲ばせるものがあるからだ。つまり、妻に向けるべき愛情のすべてをタケシに与えていたものである。

表の間の柱時計が五時を報せた。

―そうじや今朝は忙しいわい ―

河上老人は現実には引きもどされ、垢臭いふとんを掻きのけて手さぐりで野良着に着かえて裸足になった。裏の鶏舎では、気の早い鶏は地面に飛びおりて暗がりの中で餌を漁っている気配。豚も腹がへっていることを告げるかのように、低く鼻を鳴らしている。老人は小用に外へ出た。

南十字星の影はすでに見えない。西よりに、黒々と霧の上に浮んだ森の頂に暁の明星がきらめいているが、もうだいぶん光が薄れている。陽の出る前の一刻、闇を君臨する群魔が光のやってくるのを怯えて縮こまっているかのように、霧の薄いヴェルのあなたこなたに森や山などの黒い影がなおも静寂のうちにおさまっている。老人は欠伸しながら周囲に一瞥し、ゆっくりといつものように家の前の花壇めがけてじゃじゃ用を達しはじめた。

放出された尿のアンモニアの臭いと、庭に咲きみだれている菊と季節はずれのマナカーの香が冷い夜気の中で混合し、それが老人の嗅覚をついた。彼は大きなくさめを二つ三つした。そのくさめを聞いて厩のロバが鼻を鳴して秣を強請った。

老人は無頓着に、小用をすますとさっさと屋内にはいり、勝手の解った台所へ右足を引きながら降りて行った。

そして、いつも決って置いてある場所からマッチを探りあて、カンテラに火を灯した。と、闇の中に、とつぜん老人の中の広い角張った額がクレパス画のように浮きでた。眼もとの弛んだ顔、心持あぐらをかいているように思われる穴の大きい鼻、へ字型にぐつと湾曲した太い唇とよく発達した顎、これらの容貌全体がカンテラの光を受けて銅色の陰影を見せていた。これが河上という一拓士の顔だが、揺めくほの暗いカンテラの灯に照りだされると、怪奇物語に登場する怪人を連想させ、時折り光線の具合できらつと光るその眼は不気味にさえ思える。が、それも気のせいで別を角度から見るとそんなものではない。やがて老人は灯が消えぬように手で裸のカンテラに風除けをしながら、不自由な右足を引きずりながら表の間へ行き、片角に置いてある食器タンスの前に立った。タンスの上には手製の粗末な仏壇が安置されている。彼はいつものよう

に、カンテラをその傍に置き、線香をともした。そして、その前で合掌し、眼を閉じて静かに頭を垂れた。カンテラの揺ぐ灯心がほのかな明りで老人の胡麻塩頭を照し、孤独な佻しい人間の姿をそこに見せた。独り生まれ、独り生存しなければならぬ大自然の冷酷な法則に従って生きている人間の悲哀を如実に照りだしていた。

「おぬい、喜べ。今日タケシが立派に大学を卒業して帰ってくるからもう」

ゆらゆらと細長く立ちの成る線香の煙のかげに見える妻の位牌に向ってそっとつぶやいた。仏壇の中の暗がりに見える「釈順恵信女」という文字を身動きもせずに見つめていると、そこには小さな厚味のある唇を甘えるようにはころばした亡妻の面影が生ける人のもののように浮んだ。彼はつねにこうして、妻の幻像を見た。そしてそれに話しかけた。しかし、彼は淋しかった。自分がどんなに話しかけても、妻は答えてくれない。この現実感を味わうと、彼は妻が死んですでにこの世にいないという事実をいやが上に感じさせられて身も心も消えゆく思いをした。彼はやはり孤独だ。でも、老人は毎朝欠かさずに妻の位牌に手を合せ、それをすることによってその日の活動力が全身に漲る感じがした。

「子供たちを願ひ。タケシを……」

といって果敢く世を去った妻の声が、二十六年後の今

日なお彼の鼓膜に残っている。で、妻の位牌を見つめて
いると、その声が蘇って彼に奮起を促すのであった。

「おぬい、タケシはのう、もう弁護士じゃ。おどんが
立派に育てあげた。その姿をお前に見せてあげとう
て のう。よかにせじやよ」 河上老人はにっこりした
つもりだったが、その笑いはぎこちなく、やがて心持あ
ぐらをかいている大きな鼻を手の甲で擦りながら「し
ゆっ」と鳴らした。右斜めにカンテラの明りをほのか
に受けて、銅色の容貌の頭に散っている白いものが佗
しく見えた。しばらくして、老人は手を伸して位牌の傍
に立てかけておいた手紙を取りだして開いた。一週間
ほど前にタケシからきた手紙だ。それを今まで何回読
んだか解らない。今日もまた、彼の手は、それを開いて
いた。

オトサン、ゲンキデスカ。ボクゲンキデス。アン心
シテクダサイ。ボクトウトウダイガクスミマシタ。カタ
ズケモスンダカラカエリマス。五月二十日ニカエリマ
ス

老人の暗褐の眼は、読みづらい不揃いなカタカナ文字
の上をゆっくりと辿って行くうちに、とうとう涙で
曇ってしまった。その拙いたどしい文字に少し滑
稽味をおぼえたが、自分のために息子が不慣れの日本
語の手紙を書いてくれたと思うと頬が濡れた。彼は肯
くように胡麻塩頭を上下に動かすと、手紙をもとのと

ころに置いた。

「タケシよう頑張った。男手一つでおどんが立派に育てあげたのじゃ。褒めておくれヤ」

老人はこうつぶやきながら、鼻水を擦った手の甲で涙の方も擦りつけた。

外から帰ってきた三毛猫が甘ったるい声を出して、河上老人の剥だしの脛に滑かな毛並をこすりつけた。老人は急にわれにかえったようにカンテラを下げて仏壇の前を離れ、足を引きながら台所へ降りて竈に火を起して菓罐を掛けた。そして厨の戸を開けて外へ出た。霧のヴェルは濃くなっていて周囲を白く閉じていた。それでも、もう手近かものは充分に判別できるほど明るい。人間の起きでた気配を感じて、豚やロバはしきりに鼻を鳴して餌を催促しながら右往左往しはじめた。風呂の竈の中でまるくなって寝ていた黒犬も体についた灰を身震いして落しながら、尾を振り振り老人の機嫌うかがいにやってきた。

「おう、ハヤテ、おはよう。今日はのう、タケシが帰ってくるのじゃ。お前にもうんとうまいもんを喰わすからのう」

犬は主人の言葉に答えるように喉もとで「おうー」という音をたて、千切れるほどに尾を振って躍りまわった。

猫も負ん気になって老人の足にまつわってきた。彼は

しきりに犬や猫と喋りをがら背中をまるめて風呂小屋に入り昨日近所の娘と土地の細君たちが味づけをしておいてある小豚、鶏、牛肉の漬り具合を覗いた。金盟を除いた桶の中にアーリオ、サウサ、胡椒、塩などの調味の強い嗅いが充満していた。老人は今朝窯に入れて丸焼にする小豚と鶏とに調味料を丹念に擦りつけ、そして満足したように頸をこっくりさせながらもこのように金盥で蓋をした。

「そうじゃ、スイカをもぎってこなくちゃ」

老人は風呂小屋から出て、家の横の緩やかな斜面をゆっくりと肢を引き引き登っていった。その後を追って黒犬と三毛猫とが従っていったが、猫の方は直ぐ諦めて引き返した。霧は深く、大地は冷い。五月のなかば過ぎると、朝寒むが身にしむ。老人は背中をまるめ、露に濡れながら裸足で冷い大地を踏みしめて一步一步と登っていった。

裸足主義で三十年近くも通してきた彼の足には、そうした冷さは苦にならなかった。感覚が薄れているのだ。それに彼の足はもうだいぶん変形していた。足の裏の皮膚は、ひびわれては固まり固まってはひびわれし、妹の傷跡や、肉の中に喰いいつて産卵する砂蚤をほじくりだした傷などで部厚くなっており、あたかも靴の底ほど丈夫になっている。それで彼は山の中であろうと、砂利の上であろうと、平気で歩く。

河上老人の指の太い足に踏まれた赤土は柔かく、むくむくと生命を持って脹らんでいた。太古以来、地殻の底から絶えまなく新たな生命の鼓動を地上に送っている大地だ。この眼に見えない大地の生命を、老人は無意識に感じとっていた。朝な朝なこの大地を踏んで、彼は自分の体内に満ちみつる新鮮な生命をおぼえる。そして開墾意欲に胸を脹らます。彼はその赤土を掘り起し丹念に耕して種を蒔く。大地はそれを育くみ、やがて彼の労苦に報いてくれる。大地の生命の結晶を手にとった時の喜びは表現しがたい。殊に、その赤い大地が自分の所有物だと思うと、愛撫してやりたい衝動を感じる。近頃そんな境地をおぼえるようになっていた。だから、彼は時おり大地に向って生ける人に対するように話しかける。今朝もまた、大地につぶやいた。

「うちのタケシが帰ってくる。今日はよか日じゃ」しかし、大地は黙して霧の中にひっそりと横たわっていた。

老人が動物に愛情を寄せ、大地を愛撫せんとする気特になっっているのは、もちろん彼の孤独感からきている。彼が独りごことを喋るようになったのも。この独りごとは長男の結婚後から始った。それまではタケシはすでにサンパウロへ勉強に行っていなかったにしても、イサムが彼の話し相手になってくれていた。その、しみりりとした話のできる唯一の相手が嫁の所属内に入る

と、老人は痛切に孤独感を味わった。遙か遠いサンパウロの次男に希望を寄せながらも、長男はもはや自分の圈内のものではないという事実に表示しがたい淋しさに打ちしずまずにおれなかった。そして、いつしか彼は独りごとをつぶやくようになったのだ。ロバに向って語りかけ、豚や犬などに冗談しはては草木、大地にも話しかけるり　晴れやらぬ幽玄な霧。千古の謎を秘めたかのように周囲を包んでいる。一步先が未開の境であり、永遠に果てない迷宮でもあるかのよう。その中を右に傾き傾き河上老人の不透明な影法師が妖怪のようにゆっくり歩いていった。小径の両側には、人間の肩ほど伸びた綿の木が列をなして拵っている。すでに収穫は済み、残り花が白く点々と霧のヴェル越しに見える。いわゆる「猫の手も借りたいほど」の忙しい時期は過ぎているが、それでも農繁期が終えたわけではない。これから収穫しなければならぬ落花生が四アルケイレスある。今なお収穫の秋だ。

この周辺は地味の関係上か、永年作のコーヒーは殆んどなく、綿や落花生を主として豆に唐黍などを植えている。いわゆる雑作地帯だ。開拓間もない頃は、作物の収穫は非常によかったが、この辺は比較的に表面の腐植土の層が薄く、土地は早く有機質を失って衰微し、固化して雨量が少しでも上ると忽ち表土が押しながされてしまう。そして次第に固い第二層の土地になる。そ

れに比例して収穫率も年々低下して行く。勢いこの界限の農業状態が不振になって行くのは当然。適切な表現でもってこの事態を表わすならば、これは悪循環というべきだろう。なぜなら、この辺の日本人はみんな原始的な農法を行なっているからだ。つまり、地味を保存することに一切頓着せず、無肥料で次から次へ植えては穫り、穫ってはまた植えることしか念頭に置いていない。従つて、元来そう豊饒でもない土地は見る間に衰退し、生産量も低下して農家それ自体の経済に直接影響する。経済窮迫にあうと、百姓たちは早く植えつけて早く収穫して金を握ろうという焦慮にかられる。で、地味保存どころでなくなる。結局、土地の肥沃度と生産率の低下に辿りつく。土地から搾り上れるだけ搾りとつて、その土地に対して何も与えないこの農法を指して「略奪農法」と名づけたのかも知れない。とにかく、この「略奪農法」の結末は決まっている。土地を不毛状態にし、経済的に行詰まり、挙げ句の果て新たな土地を求めて移転する。そしてまたまた性懲りなく同じことを繰り返さず。百姓ジプシーともいうべく、大陸の山野に転々と放浪して歩くわけだ。これは、土地に対する愛情を全く持っていないことを如実に示す。

出稼ぎ根性を露骨に出し、「後は野となれ、山となれ」式でこれらの農民は渡り歩く、彼らの通りすぎた後には不毛に近い土地と、「日本人は土地を荒す移民だ」と

いう悪評だけが残される。太平洋戦争が終ってから、日本人移民の心も落ち着き、「一日も早く郷里に錦を飾ろう」という焦慮も次第におさまり、放浪農耕に終止符を打ってこの大陸に定着しようという傾向が見えるようになった。

河上老人の植民地では、地味の衰退問題が現在重大視されている。借地を耕していた人々はすでに他へ移転し、今残っているのは殆んど土地の所有者たちで、自分の土地を未練なく見捨てることのできない人々だ。だから彼らは土地のことを問題にしはじめている。そろそろ新しい農法に切りかえる時期が到来したことは、いわず語らずのうちにみんな切実に感じていた。そこで、古い土地を牧場にしたてて畜産の研究をはじめたものや、植林して土地のエネルギー回復を目ざす人も見うけられるようになった。

河上老人も例にもれず原始的農法を用いているものの一人だ。彼も土地の所有者であり、新農法の採用を痛切に感じている。がしかし、現世利益的な忽ちの実利を得ようとする性急さのために、少しも地味保存対策に乗りだそうとしていない。それに、彼の場合、すでに幾らかの蓄えを持っている強味と年齢的に思うように体が動かないのが、積極的な農業改革意欲を湧かさなかつた。

もし、長男が新農法の採用を主張し、自主的な活動を

示したならば、老人は直ちに諸手を奉げて賛成したろう。ところが、彼の長男たるや、大陸人にありふれた思慮怠惰症ともいうべきか、ものごとを工夫し、改良して行こうという努力と研究意欲とが全く欠けている。自発性としてなく、ただ喰って寝て働き、考えごとはすべて父親任せで、希望としてなく、刹那的な享樂に流れるのもなく、平たくいえば「のほほん」と日々を過しているだけ。万事にこの調子だから、勢いものを考えるのが臆劫になり、智能が退化してそらの土着民となんら異ならないものの考え方しかしない。だから老人は長男を頼りなく思い、イサムが三十になっても事業を任していない。とにかく老人の現状としては、新農法を採り入れることは全く不可能だった。

よくできた大和スイカを一個抱えて、河上老人は「城山」へ登った。そこは彼の所有地のうちで最も高い所で、郷里鹿兒島を偲んでそう命名したのだ。城山とは鹿兒島市街の西北にある緑の岡で、むかし上山氏の居城のあった場所だ。この山の北の方にあたる岩崎谷で西郷隆盛が戦死した。この史跡を想いおこして老人は自分の所有地の一番高い所をそう呼んだわけ。こうした子供めいたことをやって彼は孤独な心を慰めていた。その高所で彼はいつも自分の血管の中を流れている武人の血潮を躍らせ、しばし英雄感を満喫して孤独を忘

れる。機嫌さえよければ、晴天、雨天を問わずにそこへやっできて、直立不動の姿勢で決まって「城山」の詩吟をうなる。今日もまた、

「ごぐんー ふんとうー ……………」

とやりはじめた。噎れてはいるが、腹の底から絞りだす声には力がこもっている。霧は窪みに、低く沈澱し、山の高所だけがあちこちに島のように浮いていた。東方の空は赤く、陽はまさに現われんとしている。老人の声は霧の海を渡って彼方の山にぶつかる。彼は西南の役の一勇士になったような気分陶酔しはじめた。祖父兵馬のように。力が全筋肉に湧り、血潮がわく。轟きわたる銃声、馬の悲壮な嘶きと入りみだれた蹄の響き、はげしい怒号と刀の触れあう不気味な音などが周囲から聞えてくるような気がする。彼は生死の修羅場の中を必死に切りぬけるような緊張感をおぼえる。こうした興奮状態が少し止むと、老人は自分の人生で果さねばならない役割りが次第に終局に達しつつあるような予感めいたものを今日この頃感ずるようになった。まさに消えんとするローソクの火が最後のエネルギーをあげて赤々と灯るように、自分の血潮もまた最後の力を振りしぼってやがて朽ちゆく肉体の中を駆けめぐっているのではなからうか、と。そこで彼は人生の悲哀をしみじみと感じ、感傷に捕えられる。

赤味をほんのりと帯びた金色の朝日が彼方の山かげ

から覗いた。その光線を正面から受けて仁王立ちになつている河上老人は、背後に黒い陰影のコントラストを強く見せて立像のようだ。丘の下から仰ぎみると、彼の姿は紺碧の空に立ち、燦然と投射される陽光を満面に浴びながらも、深い哀愁に包まれていた。継ぎ剥ぎのはなはだしい野良着を身につけ、背中を少しくまるめて裸足で赤土の上に立っている姿は歴史的遺物の感が強く、二十世紀の人間とは思われないほど原始臭がする。それに、銅色の角張った容貌は、誰が見ても土着民と間違えるだろう。これが日本人であり、かつての帝国陸軍少尉であり、島津七十七万石の膝下にあつて四千石を貰っていた家臣の末裔であろうとは、誰も想像だにするまい。また彼の系図を話したところで、信用するものもおるまい。とにかく士族の家柄の出身であろうが、もとは何々であつたらうが、現に、今、河上老人は心持あぐらをかいたような鼻から鼻水を出して朝寒の中に裸足で立っている。

身にぼろをまとい、銅色の貌に六十の皺を寄せて。二十世紀の後期に生きながら明治・大正への郷愁に閉じこもり、ブラジル生活三十二年ですつかり大陸呆けしてしまつている老移民。故郷から遠く離れ、時代から遙かに取りのこされ、異国の空の下で孤独にして老いこんだ移民の姿。これが河上老人そのものの姿であり、彼の現実だ。この歴史的遺物めいた老移民の存在価値

を詮索するものとしてない天地の下で彼は大陸の大きな朝日に向って静かに合掌していた。

河上老人はスイカを抱えて足を引き引き威勢よく家へ戻ってきた。家の建っている窪みにはまだ陽光が至らず、そこらにうっすら霧が棚引いていた。黒くくすんだサペー葺きの風呂小屋の横に伸びた二本のパイネーラの巨木をまいて、煙が傾くもつれながらゆっくり昇っていた。

その巨木の下に練瓦と粘土で造つである直径一メートルほどのまんじゅう型のパン窯の前に、見すばらしい恰好をした老黒人が昨日命じておいた通りにじやんじやん火を焚いていた。この窯で小豚や鶏を丸焼にするのだ。古ぼけて穴の開いたヤシ葉帽子をかぶった老黒人はすでに十年近くも河上家に雇われている正直者で、彼は丸焼の調理人として立派な腕前を持っている。老人同志のよしみというものか、河上老人はこの老黒人ジョオンとはよくうまがあう。だから丸焼や肉の調味はすべて彼に任しておいた。

老黒人ジョオンは動作が少しく鈍重だが、元気よく薪を割って窯にくべては火熱の具合をみていた。頬の縮れひげに幾らかの白いものが見えるだけで、彼の年齢はさつぱり誰も見当がつかない。とにかく、彼はブラジルの奴隸制時代のなまなましい話をよくし、八十才

余の息子がいる点などから推測してみると、百才はとおに越しているだろうといわれている。正確な年齢は誰も知らないし、彼自身すら知っていない。彼は今なお畑仕事を一人前やってのけるし、二十代の五度目の細君を娶って乳飲児もいる。隠れた青春の超人だ。

「ボン・ジア、セウ・カワカミ。でっかいやつができたな。今日のスイカは特別うめえぞ。セウ・タケシの祝いじゃから。へっへっへっ。窯はもうかんかんじやで、そろそろビッシュヨどもをいれますか」

老黒人はまっしろい歯並を見せて一息に喋った。口もなかなか達者だ。剽軽な目玉をくるくる動かし、厚い唇を突きだして愛嬌を振りまく。河上老人はジョオンにこっくりこっくりと頭で応対しながら、井戸端のセメント張りの洗場を横切って厨に入った。そこでは、汚れて不潔な感じのするよれよれの大柄のワン・ピースを着たの小娘がしきりに菓罐を掛けた竈の火を吹いていて、その傍で今しがた起きてきたらしい嫁が、寝巻とも野良着ともつかないような荒木綿の白い着物を横さがりにだらしなくきて、艶のない赤毛の髪を額や首のあたりに振りみだし、目脂を出したまま不機嫌な顔で立っていた。

濃い眉はやや釣りあがり気味だが、それがかえって大きな瞳を印象づけ、鼻すじも通っていて田舎ではちよつとした美人。おそらく、老人はその容貌を認めて

長男の嫁に選んだに違いない。

事実、みえ子はひところ「アリアンサ小町」と噂されたことがある。結婚生活にはいつてからは極めて不精になり、今では子供を産めない僻みからくる一種の陰しさと、欲求不満やら生理的欠陥やら判別のつかない歪みを顔に表わしている。また、彼女はつねに意識的にふてぶてしく装う。この態度からしても決して正常とはいえず、ヒステリックの感が強い。彼女はもともと勝気で、消極的な夫に対する歯がゆさと、頑固な舅に対するレジスタンスをおぼえることによつて、ますます気性が荒くなった。

不機嫌の時はふとんを頭からかぶつて不貞寝し、舅に向つて反抗の態度を露骨に示す。家事を嫌つて炊事や洗濯などは土着民の小娘にさせ、自分は雇人たちの細君や娘たちの間にまじつて畑仕事をしながらみんなと一日中ぺらぺら喋っている。この嫁を河上老人は激しく嫌悪していたのだ。離婚させることもできず、彼女の無礼な態度を懲らすこともできず、ほとほと手をやいているのは、次のような理由がある。老人と嫁の父親とは同航であり、同じところに配耕されて開拓の苦斗時代を互いに励まし、慰めあつてきた親友だ。特に妻を失つてからというものは、二児を育てるのにこの親友一家の世話をだいぶん受けた。そうした義理に絡まれ、老人は嫁に対して自分の頑固に任せて強い態度を示せ

ない弱味があつた。それを知つてか、知らずか、嫁は次第に底意地悪く彼に反抗し、二人の間にはつねに陰悪な空気が報り、特に最近それが嵩じていつ爆発するかわからないほどになっている。事態はもうそこまで進んでいた。義理がたい頑固一徹の老人が、義理人情を踏みにじつてもかまわないと思うようになったほどに。

河上老人は煙でくすんだ厨の角にスイカを置き、嫌悪する嫁の前での手持不沙汰をまざらすために、足にまとわりついてきた三毛猫を抱きあげて外へ出た。ほんの一瞬、彼は三毛猫に対して向けられた嫁の憎悪に満ちた冷い視線を感じて不快な気持にかられた。何かしら、今日は特に陰悪なものを感じ何か起るような予感めいたものが老人の脳裡をかすめた。彼は、タケシが帰ってくるこの晴れの日、自分に不快な気持を抱かせた嫁が憎かつた。そればかりではない。タケシが大学を卒えたというのに、嫂として少しも喜ぶ様子を見せない。喜ぶどころか、不気嫌に顔をふくらませ、何一つ祝いの食物をつくろうともしなければ、また手伝おうともしない。許せない。今度こそ許せない。いよいよ来るべきところまで来てしまったのだ、と老人は思った。

老人のそうした不愉快をわずかばかりほぐしてくれるのは、老黒人ジョオンをはじめ自分の雇っている人らだ。老人とともにタケシの帰ってくる日を楽しみに

待っていたのは、彼らだけだった。老人は優秀民族という意識から彼らを軽蔑してはいたが、この人々があまりにも程度が低く、あまりにも素朴なので、彼らに対して優越感よりもむしろ親密感をおぼえていた。老人は彼らの単純さと素朴さを愛し、彼らとともに今日の日を待つことのできたのを喜んだ。娯楽の乏しい田舎では、祝いといえばみんなが心から楽しみにして待つ。従って彼らは自分たちにこの上ない喜びをもたらしてくれる主人の息子の帰ってくる日を指折りかぞえて待っていたのだ。特に、日頃しみったれの主人が気前よくピンガとブドウ酒の大瓶を十本ずつ、ビールとグワラナーそれぞれ十ダース、それに牛一頭、小豚二頭、鶏二十羽をほうらせるという豪気な祝宴だ。こんな大きな祝いは生れて初めてだ、と彼らは眼をまるくして噂しあっていた。おまけに、晩には露天でダンスも催されることになっている。

この千載一遇の祝宴に参加できる喜びを包みきれず彼らは自発的にいろいろな手伝いを申しこんで、すでにダンス場、シユラスコの青竹の長串や窯などが用意されている。シユラスコ用の牛肉も二百グラムほどの大きさに切られ、調味料の中につけられていた。

「セウ・カワカミ、ごらん。この小豚おとなしくしているよ。へっへっへっへっ」

いつも決って同じ笑い方をする老黒人は、行儀よく四

脚を曲げて調味料につかっていた小豚を黒い大きな両手に乗せて河上老人に見せた。表皮を剥がれてさくら色になっている小豚は、今にも両眼を開けてジョオンの手から飛びだしはしないかと思われた。鼻すら鳴しはしないかと感じられる。その小豚に向って黒犬がしきりに吠えたてるのを面白がってジョオンは踊るような恰好で手に持った小豚を犬の前に突きだしておどかした。黒犬はますます吠えたてた。老黒人と犬があまり騒ぐので河上老人の腕に抱かれていた三毛猫が怯えて厨へ逃げこんだ。老人はジョオンと顔を見合せて「あはは」と腹をかかえた。

いつの間にか、嫁から受けた不愉快な気持がすつとんでしまった。

(2)

小豚と鶏を熱したパン窯に入れおわった頃、厨から入れたてのコーヒーの香ばしい匂いがしてきた。河上老人は早速、炊事の小娘にコーヒーとピンガとを持ってくるように声をかけた。彼は老黒人とパイネイラの下に転してある丸木に並んで腰をおろし、小娘の運んできた湯気の立ちのぼるコーヒーに強烈なピンガを少量入れて二人で飲みはじめた。

見上げると、陽光はすでにパイネイラの高い梢を赤

黄金色に輝かせ、白い花が蒼天にくつきりと映しだされていた。霧の薄いヴェルは速度を増して除かれ、やがて燦然と現われる太陽のために大陸の全舞台をくりひろげているかのようだ。梢を渡る小鳥も、地面を小走る小鳥もいつものように賑々しくさえずり、餌をねだる豚も騒々しく鼻を鳴らす。

「あいつらも腹がへっているようだ。どれどれ、今日
はあいつらにも祝いをしてやるべえか。へっへっ
へっ」

コーヒーを飲みはした老黒人はにこにここと白いものまじった頬のちぢれひげを撫ながら、厨の裏側十メートルの所にある豚舎へ行った。そこには、ヤシ樹を二つに割ったのを並べて柵にした一千平方メートルほどの囲いがあって、その中には大小三十余頭の豚が入っている。老黒人が近づくのを見て豚の群はますます騒々しく鼻を鳴らし、前脚を柵にかけたり、押しあい噛みあいして一塊りになった。ジョオンは厚い唇を突出してなんやらを豚に話しながら、山盛りに積んである南瓜を鍬で切りわっては囲いの中に地りこみ、唐黍も剥いて投げあたえた。

そこへ薄い小麦色の腕をむきだしにした緑のワンピースの娘がやってきた。パーマをかけた暗褐の髪を肩のあたりまで垂らし、まるっこい顔の輪廓に双絆が大きく、実際のところ娘だかすでに女だか見当がつか

ない。彼女はテレザという。この界現の大地主で、ポルトガル貴族の末裔と自称しているアントニオ・ジアスの次女で、年齢は二十二。このテレザが河上老人にモーションをかけているという評判だ。

「おはよう、セウ・ジョオン。いかが？　豚と恋しているみたい」

「へっへっへっ、豚は黒人の恋人が好きじゃってさ。テレザは日本人の恋人が好きなようにさ、へっへっへっ」

「セウ・カワカミに頼まれたこのズボンとシャツをやっと縫いおわって持ってきたんだ。今日は祝いだ！」

「今晚は彼氏とダンスすべえか、へっへっ」

老黒人にからかわれて、テレザはまるっこい顔に深いえくぼを一つ浮べて、口紅の間から少しく不揃いの歯並を覗かせた。

ポルトガル人はもともと複雑な混血によって構成された人種だ。それに、ブラジルでもいくつかの混血を重ねているので、テレザやその一家の容貌は一般の土着民となんら異るところがない。智能の点においても、また生活水準にしてもそう大差はない。ただ、祖先ゆずりの広大な土地を所有し、それを利用することも知らずに持てあましている点に、そこらの日雇い土着民とは大きな違いがある。テレザの父は親日家で、長女を日系

二世に嫁がせているし、長男の嫁にも日系を望んでいる。日本人は働き者で頭がよいから、と彼はつねにいう。彼はテレザを河上老人の次男タケシと結婚させようという魂胆で、人附合の悪い老人と努めて親しくしていた。ところが、テレザは一年半ほど前にそこの日雇い人と懇ろになつて駆けおちしてしまつた。自分の希いを裏切られて、彼は憤慨し、テレザと相手の男とを射ちころすと息巻いた。

その劍幕を伝え聞いたテレザの相手は恐れをなし、とうとう彼女を捨てて姿を晦ました。テレザにはそんな曰くがある。

テレザは放浪者のようを日雇青年と恋をし捨てられてからは、金の必要性を痛切に感じたらしく、貧しい者とはもう結婚する気特を起すまいと決心した。それに、一度世間に醜聞を弘めた以上もはや未婚の青年を結婚の相手に望むことはできないと諦めていた。で、彼は金を得るための打算的結婚の相手に河上老人を選んだわけ。選んだといえ、語弊があるかも知れない。彼女の知っている範囲内では、小金を持っているのはこの老人しかいないのだ。別に彼が金を持っていることははっきりわかつてはいるわけではないが、世間の噂では百万クルゼイロスを蓄えているというから、この老人と結婚することに決めた。先の短い彼と結婚すれば、彼の死とともにその蓄えの全部ではなくとも、河上未亡

人としてかなりの金額は貰えるだろうと、テレザは考えた。彼女は直ちに河上老人との結婚について父親に話した。アントニオ・ジアスは別に驚きもしなかつたし、反対もしなかつた。

彼にとっては商品価値を失った品物のように、処女を失った娘のことなどはもうどうでもよかつた。むしろ相手が河上老人ならなお不足がなかつた。たとえ年齢は孫と祖父ほど隔つていても。そこでテレザは足しげく老人の家へやってきては、世話女房気取りでなんでも手伝っていた。その傍では、自分は河上老人と結婚するのだと植民地中を吹聴して歩くので、このことが専ら評判になっていたのだ。

最初、河上老人は不快な思いでこの噂を聞き、テレザを眺めていた。が洗濯や繕いなどをやって貰ううちに、彼女の世話に甘えることは悪い気がしなくなった。孤独な彼は、たとえ偽善的な親切行為であるにしても、誰かが世話してくれることの喜びを心のかたすみを感じた。いつしか老人は孫ほど年齢の違うテレザに対して心が動くのおぼえるようになった。恋人を持つ青年の胸のどよめきに似た感情で彼女が来るのを待った。が、他方ではこの若い異性に恋慕の情を寄せることによって、彼は後めたいような卑屈感をおぼえるのだつた。自分が「ケトウ」と軽蔑している人種の娘の情に絆されるとは。人もあろうに、大和民族の一員であるこ

とを誇り、薩摩藩の家老職にあつた祖先を持つ自分が。そう思うと老人は暗澹たる気特に包まれてすっかり面目を失い、亡き妻の位牌すら正視できなくなつてしまふ。激しい屈辱感とも罪悪感ともつかない気押に責められて眠れぬ夜も多い。

是が非ともテレザを遠ざけねばならない。そう思つて老人は彼女に対して軽蔑と憎悪とを寄せてみたが、根拠のない感情は成立するはずがない。この心の葛藤を抱いて老人はますます孤独の穴倉深く閉じこもつて行くのだつた。

庭先に狸々花が真紅に燃えていた。秘められた大自らの生命を集結し、それをあますところなく吐露しているかのように。その陰で河上老人はテレザからズボンとシャツとを受けとつた。彼女は相変らずまるっこい顔に愛嬌えくぼを浮べ、黒い大きな双眸で老人の顔をじつと見つめながら、仕立て物を手渡す時にちよつと彼の手を握つた。老人は電流に似たものが全身を駆けるのおぼえた。野生趣の強い豊満な女の肉体が彼の前にあつた。その肉体から発散される女の臭いが彼を包んだ。すると、夕風のように静まりかえつていた原始以来の本能が強く揺ぶり起され、セックスのあたりに熱湯のように集結する血潮を感じた。老人は狼狽し、いきなり被と思えない速さで家の中へとびこんだ。恐るべきものから逃れるように。すると、とつぜん阻止さ

れた性欲が彼の脳裡を混乱の中に巻きこんだ。自分の情欲をそそるテレザの爛熟した肉体を拒否するなんらかの理由を求めて、彼の理性が本能とぶつかりあったのである。この心理葛藤の末、彼はテレザの肉体に対して激しい不潔感をおぼえた。土着民の、「ケトウ」の劣等人種の女の肉体として。これが彼の理性の捕えうることのできた、性欲阻止の意味づけであった。

河上老人は汚らわしい物を捨てようように、抱えていたズボンとシャツを部屋のかたすみへ放り出した。テレザの触れたものからも離れたかった。多少矛盾した気持ではありながら。そうして彼は救いを求めるように仏壇の前に立った。慙愧な気持が彼の胸に満ち、鋼色の頬を濡らした。彼は妻の位牌を見上げて誓った。もう絶対に情欲を燃やさない。

太陽が窪みを覗いた時、河上老人の家が黄金色に照りだされた。家という名詞を使い、それに黄金色という形容詞をつけると聞えは非常によい。が、老人の家は、開拓初期のものと比較すれば少しはよいけれど、極めて粗末なものだ。四つに仕切った縦八メートルに横六メートルの母屋と差出しの別棟が厨になっている。屋根は旧式な古瓦でおおわれ、壁は小さな丸木を縦横に組みあわせて、その隙間に刻んだ茅をまぜて粘った土をぬりこんだもの。いわゆるパウ・ア・ピッケの壁だ。

家の正面の中央から少しく左へそれた所に戸口が一つ、その荒作りの戸口からさらに左へ寄った所に窓が一つ。風雨に晒されて屋根瓦は黒茶け、壁の粘土がところどころ落ちて丸木の骨組みが露出している。厨の屋根の緑や壁の亀裂などは、煙のために黒くすすけている。厨の横戸の直ぐ近くに直径一メートル半の井戸があつて、そのまわりを筒形に煉瓦とセメントでぬりかためてある。この井戸からほど遠くない所に風呂小屋、麻、豚舎、鶏舎、はては便所まで建っている。そこから発散する悪臭が風によって厨に充満するが、悪臭に対して既に無感覚になっている彼らには苦にならない。

家の前には、家中のものが夜には小便をたれこむ名ばかりの花壇がある。花壇は荒れるにまかせ、白紫の菊の一叢が横倒れに咲きみだれているのと、紅をさしたカンナが不愛嬌にちよこんと立っているのが眼につくだけ。

後は雑草の中に見えがくれするオンゼ・オーラ、地味な小さい青花など。正面の戸口から家の中へ入ると、そこは客間と食事間とを兼ねている部屋。正面の壁には活気のない音を立てている古い柱時計があり、その横に優雅なスタイルをしていた時代の天皇と皇后の写真がかけてある。そのほか、西郷隆盛、東郷平八郎、肉弾三勇士、山本五十六、感謝状、表彰状などの額やカレンダーなどがごちゃにかけてある。土ほこりの立つような

土間はでこぼこで、古い長方形のテーブルと椅子などが不安定に置かれている部屋のかたすみにはやはり古い食器ダンスがあり、別にこれといった器具はないが、その上に安置された粗末な仏壇が人目を引く。日本人が神様と霊を奉る場所、として土着民らは眺めていた。

河上老人が心持ちあぐらをかいたような鼻を手の甲で拭きつつ仏壇の前を離れて振りむくと、戸口のところにテレザが心配そうな面持で立っていた。理解できない日本人の一面に触れて当惑したようでもあった。が、仏壇は日本人の神聖な場所だということを知つてか、或いはそう感じたのか、彼女の大きな瞳には畏敬の念がこもっていた。そんなことも老人は知らない。ただ、彼女がそこに立って自分の為種を眺めていたと思うと不愉快だった。誰にも見られたくない弱点を覗かれたように。老人はテレザに対して一種の警戒心を働かせながら、ポケットから百クルゼイロス札をつまみだして仕立物賃として彼女に渡し、さっさとそこを立ちさるように冷い態度を示した。テレザはふくよかに盛りあがった両乳房の間に札を入れ、艶っぽい一瞥を老人にあたえ、挑発的に体をくねらしながら手伝いに来た土着民の細君たちにまじって祝いの用意の世話をやきはじめた。その様子を窓越しに眺めて、老人は深い溜息をついた。と、にわかには長男のことが頭に浮んだ。今朝は姿を見ないが、まさかまだ寝ているはずはある

まい。そう思つて、

「イサム、イサム」

と呼んでみたが、返事がない。窓を閉ざしたうす暗い長男の寢室を覗くと長男夫婦が頭からふとんをかぶつて寝ている様子。老人は腹の底からつきあげてくる火の塊りのようなものをおぼえた。彼ははずかずかと寝台に寄りいきなり二人のかぶっているふとんを足の方からはぎとつて大声でどなつた。

「ばかもんっ」

夫婦は背合せに、エビのように曲つて寝ていた。ふとんを剥れ、どなられても驚いて飛び起きようとしなない。二人は申しあわせたように不貞寝していた。嫁は時おりそうして不貞寝するが、長男がそうするのは初めてなので、老人はいささか驚いて理解に苦しんだ。やがて彼は憤慨した。祝いの手伝いもせず寝ていることに對して。老人は剥ぎとつたふとんを土間の上に放りだすと、腕を伸して嫁の上から長男の襟元を力まかせに引いた。すると、嫁が肩で老人の腕を下から突きあげたので長男の襟元を握っていた手が外れて老人は崩れるように土間に尻をついた。と、今まで堪えていた嫁に對する憎悪が大音響をあげて爆発した。

「ばかもんっ」

怒号もろともに節くれだ手の甲で老人は寝ている嫁の横顔を思いきり三つ四つ殴り、それから嫁の体を躍り

こえて長男の胸倉を掴んで、その顔もひっぱたいた。そうしたことを六十とは思えない早業でやってのけてから、再び寝台の傍に立って二人を睨んだ。憤慨のあまり、唇のあたりをひくひく痙攣させていた。もちろん、彼の憤怒は嫁に対してだ。長男は巻添えを喰ったに過ぎない。彼は今まで長男に対して腹を立てたことがない。というよりも、長男は素直に、従順に自分のいうなりになっていたから別に文句がなかったわけだ。その長男が今日は嫁と共謀で不貞寝している。珍らしいことだったし不可解な出来事でもあった。

河上老人は長男の顔をうす暗がりの中で見つめた。イサムは角張った父ゆずりの貌に臆病な眼をガラス玉のように光らせて必死に老人を睨んでいた。猫に追いつめられたネズミのように、けんめいに反抗の態度を示していた。老人にとっては、それが不可解だった。いくら考えてみても、長男の拗ねる理由が思いあたらなかった。彼はその理由を聞きたださないうちに暴力をふるったことに対し、少しく悔いの念をおぼえる。老人は尋ねた。

「なぜお前は拗ねとる？ 理由をいえ、理由を」
イサムは返事をせずに父親を睨んだ。いや、睨んだというよりも、今にも泣きだしそうな眼でぼんやり見つめているだけ。なかば痴呆状態に陥った人のように。角張った顔、大きな鼻と唇などは父親によく似かよって

いるが、父親のような強い意志を示すところは一つもない。どことなく精薄児のような感じがする。彼が拗ねて父親に反抗しているのは、むしろ妻に唆されてやっていることだ。

しかし、ひごろの彼の意志が全然まじっていないでもなかった。彼は父親に無条件で、無批判で絶対服従してきたが、内心には不平を抱いていた。第一に、一個の人格として自分の存在価値が認められていないことが不満であった。事業や世間との交際などのすべてが父の独断でやってのけられ、自分が三十になる今日まで一度も相談事をもちかけられたことがない。第二に父は弟のタケシだけをかわいがり、タケシだけに学問をさせて自分は牛や馬のように働かせている。父はなんでもタケシのために、躍起になり、自分のことは何一つやってくれようとしなない。イサムの不満はこの二つの点にあった。といっても、これは極めて消極的な不満で、なかば漠然としたものであった。だから彼は今まで強いてそれを表面化させようとしなかった。ところが、とうとう妻に唆されて反旗をひるがえし、父親と対決する事態を引きおこしてしまった。

イサムは弟の前ではつねに影の薄い存在であった。父親はいつも弟を褒め「タケシを見習え」と口癖にいった。

それで、イサムは子供の頃から卑屈感と激しい劣等感

とを植えつけられてしまった。彼は弟が自分より優れているので、すべてに対して自分よりも権利を持つのが当然だと諦めた。そうしていつしか奴隷根性が生じて彼は宿命的に自分のすべての感情を抑圧し、マヒさせて、痴呆症にかかったかのように、無感動な人間となった。彼は自分に内在する不満やコンプレックスについて考えることすら億劫になり、そうしたすべての感情を漠然として意識の彼方へ押しやってしまった。ところが、結婚してから妻がしきりに唆すので、彼は自分ら兄弟に対する父親の不平等な扱いに不満を意識しはじめた。それを不当だと思いながら今日まで表示せずに過してきた。が、弟が大学を卒えて帰ってくる報せが来て以後、妻は急に積極的になしかも陰険な態度で彼に迫った。父に反旗をひるがえすか、それとも自分を離婚させて里へ帰すか、と。

彼は妻が自分の消極的に対する齒がゆさと子供を産めない僻みのために小姑根性を起してタケシが大学を卒業したことを妬んでそうした態度に出ていることは気がつかず、彼自身も弟の成功を喜べない妬みを抱いていることはもちろんだが、妻の威嚇に恐れをなした。現在の彼には、同伴者なしに君主めいた父の膝下にいることは堪えられなかった。たとえ子供はできないにしても、妻が傍にいてくれるだけでも心が慰められ、強味を感じず。だから彼は父親に反抗する意をかためたの

だ。彼にとっては一生一度の英雄的決断ともいえよう。

「なぜ拗とる理由をいわんか」

老人は幾度も問いつめた。とうとうイサムは、

「パイはタケシばかりかわいがる。おれを雇人や馬のように扱きつかって。おれはもういやだ。タケシのためだけに働くのはいやだ。」と、妻の指示通りに、なかば泣声で露台の上でわめいた。

老人は長男の気持を理解するはずがない。彼は長男が弟の大学卒業を喜んでいない事実だけを捕えて怒りを爆発させた。

「ばかもんっ。タタケシはお前の弟じゃ。タケシはおどんやお前のために偉ろうなっただんじゃ」

「へん、何が偉いのさ。一方ではうちの人みたいな雇人をこしらえてさ。ふん」

みえ子がすかさず針を含んだ皮肉を吐いた。

火に油。老人は忽ち狂暴性をあらわして嫁に躍りかかった。悲鳴をあげる彼女の髪を掴んで寝台から引きずりおろし、その横腹を足で三つ四つ蹴った。イサムはうす暗がりでもわかるほどに大きな唇を土色にさせ、眼を怯えたウサギのようにきらめかしながら角張った顔を強張らしておののいた。自分の抗議によって父が我を折り、自分の存在価値を認めて弟だけの最良をしなくなるだろうという胸算用が全く狂って意外な事態を引きおこしたから。みえ子の方は体勢を整え、暴力を

振われても泣かずに頑と抵抗を続けた。

「蹴るがいい、殺せつ、なんだい。パイなんか怖いもんか。さんざん人をこきつかって全部タケシにやろうとしている。タケシがなにさ。頭にポマードをこつてりつけているだけで、何が偉いのさ」土間に倒れたまま、高ぶったヒステリックな声を上げてわめきたでた。その甲高い声を聞きつけて炊事の小娘やテレザ、それに手伝いにきている土着民の細君たちが寢室の戸口からこわごわ顔を覗かせた。これらの人々の手前もあつて嫁のふてぶてしさに幾分か毒気を抜かれた老人は親としての威厳を保ちながら、次のようなことを長男夫婦にいいわたした。短く、きびしく。

「勘当じゃ。さっさと家を出て貰おう」

実際のところ、長男夫婦が出ていっても、自分には痛くも痒くもない。むしろ、嫌悪する嫁から解放されるだけでも気がせいせいする。タケシが今日帰ってくるから、毒にも薬にもならないようなイサムなんか、どうなつてもよい。最後の宣告を長男夫婦に与える前に、老人はそうした打算を素速くやってのけていた。だから彼は長男に五千クルゼイロスを手渡し、夫婦がトランクと風呂敷包みをさげてしよんぼりと出ていく姿に一瞥すらくれなかつた。

長男夫婦が出ていった後、河上老人は少し気に病んだ。

ずいぶん世話になった嫁の父に対して、何んと申しわけしたらよいか、と考えて。でも、嫁一人でなく、長男ともども追いだしたので幾らか気が楽だった。そのうちになんとかなるだろう、と彼は考えてもつと現実的な問題について思いをめぐらした。タケシが帰ってくることに。

（タケシが戻ったら、なんとゆうてやろう）

この問題が再び老人の脳裡を占めた。大学の休暇にタケシは時おりこの草深い田舎へ帰ってきて、一週間か十日ほど滞在していたが、ここ二カ年は課題の研究に多忙の日々を過しているとして全然顔を見せていない。この二カ年の隔りが老人に云いしれぬ不安を起させた。この不安は彼の心のかたすみに抱かれている一つの疑惑だ。これをさらに具体的に表わすならばタケシが大学を卒えて偉くなったからといって、土百姓をやっている自分を軽くみ、蔑みはしないだろうか、という懸念なのだ。子供からばかにされはしないか、されてはいないか、という心配が生じたことは、子供に対する親としての自信の喪失、つまり権限の崩壊のはじめであり、一種の敗北感でもある。親たるものが等しく一度は経験しなければならぬ悲哀感だ。これは大自然の法則の然らしむるもので、新しい世代へバトンが渡されてゆく過程にほかならない。

しかし、多くの親は自我意識が強いためにこの自然現

象から激しい劣等感を植えつけられ、やがて子供に寄りかかって生活しなければなくなると居候的な一種の卑屈感を抱いて一生の幕を閉す。

河上老人は六十にしてはじめてこのことを意識した。極めて遅い方だ。長男が彼の傍にいたからである。老人は長男にはまけない自信を充分に持っていたので、そうした親としての権限の崩壊を味うことなしに過してきた。ところが、次男に対しては自信を持てなかつた。特にこの二カ年の隔りが、タケシを底知れぬ沼のような不気味を存在として老人に感じさせた。彼は次男の存在から一種の威圧感をおぼえ、すでに親としての自分の権力のすべてを放棄していた。

（そうじゃ、服を着がえなくちゃ）

柱時計が鈍重な音で十時半を打つと、老人はにわかになぞわしはじめた。彼は自分の寝室へ入って、先刻、部屋のかたすみへほうりだした衣類を拾いあげた。テレザの仕立てたものを着用しようかどうしようか、としばらく考えた。がやがて彼は決心したようにそのシャツとズボンを再びもとのすみへ投げ、ブラジル製の長持を開けてやや色の槌せた紺のズボンを取りあげた。特別な席場へしか着てでないもの。折り目はすでに消えている。ネクタイも締めて仕度してみると、体中を束縛されたような窮屈さをおぼえた。三十二年のブラジル山野の開拓生活が、すっかり彼を野良着になじま

したので、野良着以外の衣服を着ると他人の物を借りて身につけているような表現しがたい複雑な気持ちになる。が、今日は次男を迎える晴れの日なので、そうした窮屈感もさほど苦にならない。「これはちよくらまずい。やっぱり新しいやつがよか。いけんすかい」

老人はそう呟いてそわそわした。古い物を着てみたものの、なにかしら落着かない。こんなものを着てタケシから蔑まれはしないかという懸念がふと頭をかすめたから。

結局、彼は古い衣服を脱ぎすてて、テレザの仕立した物に着がえたが、ばさばさした新しい布の感触でますます借物を着ているような窮屈さと羞恥感とをどうしようもなかった。変形した大きな足に靴をはいて表の間へ出た時に、柱時計が十一時を報せた。

やがて昼食が用意され、老黒人ジョオンをはじめ手伝いにきている人々が集って長方形のテーブルを囲んだ。

食事中みんながしきりに河上老人の新調の衣服を褒めてさかんにお世辞を並べるので、老人は大勢の前に立った乙女のように羞み、しどろもどろにものをいたり、眼のやり場を失ったりした。それでみんなますます面白がって彼をからかい、油汗をかかせた。冗談と爆笑の賑々しい昼食が終ると、みんな再び祝いの準備にかかった。

タケシが帰ってくるのは、たいてい二時頃であった。町から来るバスがこの植民地を通るのはおよそ一時半。バスの道路から河上老人の家までが徒歩で約三十分。時計が一時を打つと、老人はすっかり落着けなくなつた。

靴にしめられて少し痛む肢の足を引き引き、家に入り入ったり、台所へ行つて見たり、井戸端を覗いたりしながら、思案していた。タケシをバスの道路まで迎えに行った方がよいやら、家で待つていた方がよいやら、と。

しばらくして、子を出迎えに行つては親の活券に関わるような気がしてとうとう家で待つことにした。彼は強く意識した。子の前であまり頬の筋肉をゆるめてげらげらしてはならないと。そうして、どうすれば親の威厳を保つことができるかをしきりに工夫してみた。軍隊時代のように胸を張ったり、肩を怒らしたりして。幅の広い顔を渋面にし、唇をへ字型に曲げて鏡を覗いてみたものの、何かしらぎこちなさをおぼえていささか頼りなく思った。

締めなれない地味なネクタイを右の方へ寄せてみたり、左へ引張つてみたりし、少しく色のやけた紺の背広を着てすっかり支度を整えたが、彼は柔軟性を失つて片足の壊れたロボットののような動作であちこちしながら

ら幾度も窓外を見やった。

厨寄りの太いパイネイラの彼方に竹藪がしげり、その向うへ雑草に囲まれた道が急カーブをなしているのが見える。町の方から河上家へやってくる者は必ずその道を通る。だからタケシがやってくるのを、ここからいちはやく発見できる。そうした見張りをしながら、老人は次男を迎える心構えをつくろうと努めていた。彼は仏壇の前と窓のところとを行ったり来たりした。と表の方から四人の日系娘が顔を覗かせた。そして異口同音に、「おじさん、今日は。お手伝いに来ました」との挨拶。老人が次男の嫁を選択した時に想いうかべた顔々。小柄でつぶらな瞳をいきいきと輝かせたのが、村の女子青年会の会長をしている畑辰夫の娘。それに「八頭身」といわれているこの界限一の美人である松永菊造の娘。平凡な丸っこい日焼け顔をした島浦音也の娘。体格の大きい谷川治次の娘ら四人。別に彼女たちに手伝いを頼んだわけではないが、植民地で祝いや葬式などがある時には彼女達が率先していろいろ世話をやくのが慣例になっている。が、世間付合の悪い河上老人の家へ手伝いについてよいのか、実際のところ彼女たちも迷った。

結局、なかば親たちにすすめられ、なかば自発的にやってきた。彼女たちの親も例にもれず老人を偏屈者扱いにしてはいたが彼の次男が大学を卒業した事実を

前に一つの魂胆を抱いた。あわよくば自分の娘を村一番のインテリ―青年の嫁にして肩身の広い思いをしよ。うと。娘たちもやはり土臭い田舎青年に認められるよりも、大学出のスマートなタケシに認められたいという希いを抱いていることはもちろん。

河上老人は娘たちを眺めながら、ほのぼのとした暖いものを胸に感じた。自発的にタケシの卒業祝いの手伝いにきてくれた彼女たちに、心から感謝したい気特でいっぱいだった。彼女たちも自分の息子の卒業を喜んでくれていると思うと、感激に老の眼がうるむのおぼえた。

彼女たちは前掛をして、手慣れた早さでそこらをかたずけたり、食物の用意などをはじめた。テーブルに盛花を飾り、仏壇に持参してきた花を供し、煙で黒くすすけた家が明るい感じを持った。そうした娘たちを眼前に眺めていると、昨夜、自分が頭の中で措いたものとは全く雲泥の差がある、と老人は思った。冷い長男の嫁に比べると、彼女たちはやさしく親切だ。花を持参して、仏壇まで飾ってくれた。思いやりのある心だ。是非とも、この四人のうちからタケシの嫁を選ぼう、と老人は考えた。

そして、彼は松永菊造の三女、千代子の姿を盗みみていた。長男の嫁を選んだように、彼はまた美貌に眼をつけたのである。眉が濃く黒い瞳を引きたて、鼻すじが

整っていて肌白い千代子の容姿が気に入った。世間では、彼女は少し「おつちよこちよい」だといっているが、そんな様子は見えない。タケシにふさわしい。「よかおごじよ（美しい娘）だ。そう思いながら、老人は空想の中でタケシと千代子とを並べてみて満足感にひたった。そうした陶酔境に入っていたので、彼はタケシが雑草に囲まれた道の急カーブに姿をあらわし、竹藪の蔭を通ってすでに家の庭のところまでやってきているのを気がつかなかった。

「セウ・カワカミ、タケシがそこに」

炊事の小娘がタケシの姿を見つけて、急いで老人に報せた。老人はばねじかけのように椅子から腰をあげて表へ出ようとした。出合い頭にタケシとぶつかった。彼は卒倒せんばかりに驚いて、すっかり狼狽してしまった。

「ハイ！」

タケシはスーツ・ケースを地面に置くや、呆然と立ちすくんでいる父の肩を抱いた。老人は痴呆状態におちいつていた。息子を迎える心構えはしていたものの、ちよつと外へ注意をそらしているところへ不意にその息子が出現したために思考力が停止し、かねて考えておいた歓迎の挨拶も浮んでこないばかりか、声帯も完全にマヒしてしまった。この忘我状態が数秒間続いた。次の瞬間、迅速に狂いまわる映写機のうつしだす乱像

のように、妻、長男、嫁、タケシ、テレザ、千代子らの顔がさっと老人の脳裡を通りすぎた。と今度は西南の役の修羅場、郷里の山野、若い頃よく酒を飲んだ茶屋、妻の島田姿など全く関連性のない事柄が一種の感動をもって分裂的に浮んだ。ながい時間ではなかった。ほんの数秒間、いや一瞬の間に旋風のように通りさつたのだ。そしてわれに返ってタケシに肩を抱かれている自分を意識した。すると、自己防衛本能がけたたましい警報をあげて彼の内部を奔走した。

とたんに彼は親としての威厳を保たねばならないことを強く意識し、危く溢れでそうになっている涙を押えるのにけんめいになった。鼻のあたりもこそばゆくなくなるをおぼえて、背広の袖でこすりつけた。そして彼は厳かにいった。

「これからも、もつと勉強しなくちゃ」

タケシはにっこりして、少し神経質そうな青味を帯びた聡明な額をうなずかせた。折り目のはつきりした空色の背広がよく似合い、貴族的な気品の具った青年紳士だ。

母親似の顔の輪廓、しかし体格はがっしりしていて美丈夫だ。それに、高尚な学問と教養とが身についているので、強い個性からくる侵しがたい威厳がその風貌にあらわれていた。この息子の姿を眺めて、老人は心身ともに縮こまる思をした。例の敗北感がひしひしと彼の

胸に押しよせてきたのだ。時代や文化にとりのこされた自分をそこに見た。それから自分の息子との距離を考えた。もはや、自分がどんなに躍気になったところで、息子の立っている世界に到達することはできない。そう思うと淋しさが胸の底から港みでてきた。が、この息子は自分がそこまで育てあげた、と思うと、誇らしく感じた。表現しがたい複雑な気持が止めどなく入りみだれた。

そんな気分を味わっている父親をしばしそこに残して、タケシは溢れるほどの愛橋をもってテレザ、老黑人、植民地の娘たち、みんなと振手を交わし強張っている一同の表情をほごした。そのわけへだたりのない態度を見て、老人は安心感をおぼえた。タケシは自分の学問を鼻にかけて威張るような奴ではない、と。老人は息子のスーツ・ケースを取りあげて家へ入った。その後からタケシも煙で黒くくすんだ家に入って、なつかしように周囲を眺めまわした。そして、いつもの習慣通り、母の位牌の前に立って線香をともし、静かに合掌して頭をさげた。その姿を横から眺めた老人は、涙腺を冒されたようにほろほろと頬をぬらし、鼻水をすすった。妻が死んだ時、一年と八カ月くらいしかなかった息子が今は立派な青年となつて、しかも大学を卒えてそこに、仏壇の前にぬかずいている。自分の今までの苦労が報いられすべてが無駄なくここに結集した。そう思うと、

心持あぐらをかいたようを鼻をしきりにすすらずにおれなかった。彼は誇りと喜びに満ち満ちて、胸がふくらむ思いをした。しばらくして、

「パイ、ながい間ありがとう。おかげで、ぼく大学を卒業することができました。ほんとうにありがとう」

と、タケシは父の手を握ってしんみりといった。老人はますます、今度はこらえようともせず涙をほろほろと落した。親の威厳を保つとか、体裁などはもうどうでもよかった。彼は自分の気持に忠実に従って、思うままに涙の流れるに任せた。タケシはそうした父の肩に手をかけて仏壇の前に寄せた。

「ママイが生きていたら、パイが喜んでいるように、喜んでくれたらうね……」

タケシは自分の思っていることを呟いた。うるんだ声で。

その声が老人の胸を強くうった。開拓の苦闘たけなわに妻を死せた無念が、今までかって経験したことのない激しさで感じられた。おぬいにタケシの成人ぶりを見せたかった。そう思つて。彼は胸の底からこみあげてくる嗚咽を押えなかつた。タケシも。手伝いにきていた娘たちも貰い泣きして前掛で眼をおさえていたがテレザや炊事の小娘たちは父子の感動を理解することができずに怪げんそうな顔をしていた。

タケシに兄たちのことを聞かれて、河上老人は不快

な顔つきで言葉少なに先刻の出来事を話した。タケシは青白い顔を曇らせた。彼には兄の気持が解るような気もした。頑固一徹の父のもとで自分の主体性を押しころして暮してきた兄を不憫に思った。彼には父に対する感謝の気持は充分にあつたが、父の頑固さにはそう好感を寄せていなかつた。だから、彼は深く兄に同情した。気が弱く、無口でいつも下敷にされて甘んずる兄に対して齒がゆさや腹立たしさをおぼえた頃もあつたが、考えてみればそんな兄だからこそ自分は大学まで行くことができた。

そう思つて彼は兄に感謝と憐憫の情を寄せた。だから兄が父に反抗したことも、同情的な立場から理解することができた。そうして、兄の現状を考えると憂鬱になつた。

「あんな奴らの云うたことは気にせんがええ。さあさあ今日はお前のために祝おう」

老人はタケシが兄たちのことで気を悪くしたと思ひこみ、わざと声を弾ませて息子の肩をとんとんと軽くたたいた。タケシは気を取りなおしたようにスーツ・ケースを開け、その中からコンニャケの瓶一本となにやら知らない紙包みとを取りだした。

「パイ、これはプレゼント。これはパイの好きなコンニャケ。こちらはぼくの婚約者がパイに上げるといつて編んだジャケツ」

といって老人の前に差しだした。婚約者と聞いて老人の角張った鋼色の顔から血の気が引いた。全身が強張って息子が渡そうとしているプレゼントに手が出ない。長男が家を出た今では、タケシだけを唯一の頼りにしている。

そのタケシが自分の知らない間に婚約の相手を見つけた。

一体、どんな娘だろう、という不安が彼の心にわいた。とつきにその不安を押えるために、老人は腹を立てた。

「お前、婚約したと？ おどんの許可なしにかっ。ばかもんっ」

タケシは声を荒げた父を穏かに宥めて、

「パイ、いい娘だよ。気立てがやさしく、思いやりも深い。きつとパイを大事にしてくれるよ。ほら、このジャケットをわざわざパイのために一生けんめいに編んでくれたんだよ」

そういわれて老人は少し安心した。彼が心配していたのは長男の嫁のように自分に冷い態度を示す女がタケシの嫁になること。だから息子の言葉で安堵感をおぼえながら、頑固を引っこめた。自分を大切にしてくれる条件さえ具わっている娘なら、もうなにもいうことはない。先刻、松永菊造の娘を、と思ったが、もうそんなことはどうでもよかった。彼はタケシのやさしい婚約

者を想像しながら、息子が背広の内ポケットから出した一葉の写真を受けとって覗いた。彫りの深い顔をした伯人娘だった。

老人は脳髓に充血をするのをおぼえた。声が震えた。

「ケトウじゃないか」

「イタリア系です。家庭はとて……」

「ばかもんっ」

一かつで老人はタケシの弁明を遽ぎった。噛みつくような声で。大きな唇のあたりをひくひく瘦攣させた。と、いきなり手に持った写真をずたずたに裂いて土間に叩きつけ、絶望したように眼を怪しく光らせてわめいた。

「誰にことわってケトウと婚約した。お前はおどんのおかげで大学を出られたんぞ。おどんのおかげで。だのにおどんにことわらんとケトウと婚約したとは、なにごとっ」

タケシは土間に散らばった婚約者の写真の破片を見つめて黙っていた。感情を昂ぶらした父に向っていくら弁明を試してみたところで無駄だ。ということを知っていたから。彼は小面憎いほど穏和な態度で、立像のように動かなかった。息子がなんら反応を示めさないの
で、老人は愚痴を並べてしきりに彼を詰じた。

「……………それにちんけ時からおどんが育てた。お前を大学を出すにもどっさりお金を使うた。だのに、お前

はおどんの希望を裏切ってケトウと婚約しとる……」

ふと、老人の眼に息子の右手の薬指にはまっている金の指輪が映った。彼は愚痴の世界から再び切迫感を持った現実の世界へ引きもどされた。おさまりかけていた興奮がまた昂まった。彼はそのイタリア系の娘と別れて、日系娘と結婚するようにタケシに迫った。いや、歎願したのだ。ところが、息子が青白い顔を閉ざして全然、取りあってくれないので、取りつく島のないもどかしさにかられてますます神経を昂ぶらせ、ついに半狂乱の声をあげてどなった。

「ばかもん。出て行けっ」

とうとう話を最終局へ持って行ってしまった。興奮が嵩じて自我主張の果てに鋼色の容貌をいかめしく構えてはいたが、老人の胸の中では破綻の言葉を出したことに對する悔恨の念がわいていた。実際、息子が他人種と結婚することを反対するなんらの根拠をも、彼は持っていなかった。単なるコンプレックスにはかならない。年甲斐もなくテレザに対して欲情を燃やした呵責から起った感情の歪みなのだ。伯人女に恋慕の情をおぼえた自分を責めたと同様に、タケシをも責めた。自分自身を許せなかったように、タケシにも寛大でありえなかった。彼はテレザを自分の心から排斥したように、タケシの婚約の相手をも排斥したわけ。ただ感情的になっただけに過ぎない。だから、感情を爆発させて息

子の婚約に反対をとなえてみたものの、具体的な反対理由を見いだすことができなかったのでいささか不安を感じ、破局の言を吐いたことに少なからず悔いをおぼえたのである。そうした心持が内部に起ると、彼はもはや声を荒げることもできず、そうかといってその場を繕う術すら思いつかなかった。また、タケシの方は黙っていたので勢い父子の間に白けた空気が漂ったのは当然。その白けた空気の中に、二人とも同じように絶望を感じとったのである。

タケシは相変らず黙って土間に散らばった婚約者の写真の破片を拾いあげてポケットに入れ、持ってきた土産をテーブルの上に置いたままスーツ・ケースを閉じた。

彼の青白い細面は憂鬱な暗い影におおわれ、暗褐の眼には苦悶にさいなまれていよう様子が浮んでいた。彼は意外なものを発見した：父と自分との間に横たわる隔りを。

今まで気がつかなかった、その隔りがあまりにも大きいので一時は驚愕したが、やがてその事実に対する深い悲哀に変わっていった。その隔りを具体的に示すならば、年齢、感情、思考、知識、生活などだ。これらの点において父と自分とは全く立場を異にし、互いの方からの歩みよりはとても考えられない。もし、努力によつ

てそれが可能だという人がいるならば、その人は自己を偽っているに過ぎない。現実には、たとえ互いにけんめいになって努力してみたところで、この間隔を縮めるなんらの役には立たない。自分が父のものの考え方や気持を理解しえないように、父もまた自分を理解するのに苦しんでいるだろう。また、自分がもはや父の生活環境にとびこむことができないように、父もやはり自分の生活環境にとけこむことができないだろう。結局、父は父であり、自分は自分である。全く別個な存在だ。別個な存在ならば、その間に隔りがあつて然るべきであり、相異点があつて当然だ。ところが、この論法を辿つてゆくと、親子の関係などはどうでもよいことになりはしないか。親は親、子は子、という全く自己中心的な冷い関係になりはしないか。ここまで理論的に考へてきて、タケシははたつと障害にぶつかつた。人間という障壁に。そうして彼は考えた。一体、自分と父とを繋ぐものは何か、と。やがて答えが出た。「血」という答えが。自分と父とを繋ぐものは「水よりも濃い」といわれている血だけ。この血こそ、自分と父との間に横たわつた大きな隔りを埋めてくれるものだ。極めて短時間うちに、学問的に訓練された彼は思いをめぐらした。彼は理屈を越えた人間関係をしみじみ感じながら、父親の方を振りかへつた。父の頭の霜や貌の皺が佗しく彼の眼に映つた。三十余年の間ブラジルの山林を伐

り、大地を掘りおこし、人生の苦闘を重ねて老いこんだ父の姿に深い衷憫をおぼえた。しかし、彼は父の希いを聞き入れる気はない。父が自分の弁明を全然、耳に入れようとしないことや、自分の婚約者が丹念に編んだジャケットにこもっている真心を汲みとってくれないことを少し腹立たしく思った。いくら親でも横暴過ぎる。自分はすでに成人だから、自分の意志で行動する権利があるはずだ。新しい建設のために自分は郷愁めいた親の情を超えて行かねばならない。自分の辿るべき道を力強く歩もう。そう決意したタケシは仏壇の前に進みよって静かに別れの合掌をした。

タケシのそうした様子を見て、河上老人は狼狽した。とつきには息子を引きとめる方法を思いつかなかった。彼には息子の気特がはかりかねた。幼い時から一人手で育てて大学まで出してやったのに、大恩ある親の一つの希いを聞きいれてくれない。それどころか、年を老った親を見すてて、そのイタリア系とかいう娘のもとへ行かんとしている。老人には合点がゆかなかった。それはともかくとしてタケシを引きとめることが先決問題だ。彼はみじめな思いで息子の旗下に降る決心をした。

「タケシ、おどんのいう通りにしな。悪いことはいわん。そうじゃ、お前に法律事務所を構えさせようと思っ

てお金を用意しとる」

老人はいそいそと自室から濃茶色の風呂敷包みを持ちだしてテーブルの上にひろげた。札束がナフタリンの臭いとともに現われた。息子を自分の方へ引きよせるための、老人の最後の切札だった。

「ここに千二百コントスある。これをお前にやろうと思つて貯めとつたんじゃ」

息子の顔色をうかがいながら、老人は得意そうに頬をくずしたが、それは悲哀をおぼえさせる泣き笑いのよくな表情だった。奴隷が主人の機嫌をとるために何かをおどおど持ってきた時の顔のように。タケシが驚いたのはいうまでもない。彼はしばらくの間、父の顔と札束とを見くらべていたが、やがて七・三にきちんと分けた頭を上下に動かした。感動の色が彼の青白い額に浮んだ。だが、彼の態度は静かだった。やがて彼は穏かな語調でつぶやくようにいった。

「パイありがとう。このお金は兄さんに上げて下さい。ぼくは大学を出してもらっただけで、たいへん喜んで感謝しています」

老人は怪訝そうに息子の顔を見た。すばらしい餌に魚が喰いつかないのを不思議に思う釣人のように。彼は肢を引き引き、落着かぬ気持でテーブルに置かれた札束のそばをうろろう動いた。そして、

「お前このお金いらんか。千二百コントスだ。千二百

コントスだよ」

と、金額を繰り返かえした。心持あぐらをかいたような鼻を擦ったり、背広のポケットに手をつつこんだりしながら、じれったそうにタケシの返答を待った。タケシは静かに首を横に振った。万策つきた老人は、腹の底から突きあげてきた怒りを吐露した。大洪水が堤防を切って奔流した時のように、

「ばかもんっ」

怒号もろとも彼は節くれた掌で思いきりタケシの左頬を打った。青白いタケシの頬が赤くなり、眼が心持ちうるんだが、彼は相変らず落着いた態度で憐むように父の顔をしばらく見て、それからスーツ・ケースを取って空色の背広を着た体をひるがえして外へ出た。そして、井戸端や厨の近くにたむろして親子喧嘩のなりゆきを案じていたテレザ、老黒人、娘たちに向って強張った表情で軽く挨拶し、パイネイラの横を通って竹藪のかけに姿を消し、雑草にかこまれた急カーブの彼方へと行ってしまった。頭は深くうなだれていたが歩調は力強く運んで。

後に残された河上老人は、心の支柱を失った空虚のために錯乱し、操縦装置に故障をきたしたロボットのよう四肢を引きながらあちこちした。色の槌せた紺の背広、新調のカーキのズボン、大きな靴、そうした衣服の窮屈さは彼の念頭になかった。彼の内部には余憤

と、不可解と、悲哀と、不満と、孤独などが入りみだれて混乱の限りを極めていた。この錯乱状態がもう少しながびいたならば、老人の精神に異状をきたしたかもわからない。

幸に脳髓の統卒力が正常に戻った。が、そこには冷厳な現実があった。独りになっていること。唯一の心の支えであったタケシが去ってしまった。孤独の佗しさがひしひしと情容赦なく彼の胸に押しよせた。心が次第に細くなつて遠い彼方へ消えうせて行くような淋しき。「しゅん」と心がふるえながらすすり泣いていた。堪えがたい気持その気持を処理しなければならなかった。その処理法を彼は無意識のうちに求めた。そうして、老人は欲求不満の子供が動物を虐待したり、物を破壊するのように、肢の靴足でそこらの椅子を蹴りまくった。と、タケシが置いていった土産が憎悪をわかせた。激しい憎悪が脳裡を支配すると、彼は再び狂暴性をあらわしていきなりコンニャケの瓶を掴んで角の壁めがけて力任せに叩きつけた。音響、強烈な酒の香、そしてガラスの破片が飛びちった。老人はさらにタケシの婚約者が編んだというジャケットの紙包みを取りあげ、同じ場所めがけて投げつけた。

包装が破れて灰色のジャケットがはみで、それが土間にこぼれて酒にまみれた。老人はぎらぎらと怪しく光る眼でそれを睨みつけた。いまいましげに。そして疲れを

おぼえ、崩れるように傍の椅子に腰をおろした。ながい時間の葛藤、緊張、興奮、不安などのために心身の疲れを感じた。

しばらくして、ふとテーブルの札束が疲れた河上老人の眼にとまった。永年の間、一種の感動をおぼえながら撫たり、かぞえたりしてきた汗の結晶、これだけを蓄えるためにどれだけの辛苦をなめてきたかわからない。文字通り骨身をけずる思いで働き、三十余年もの年月がかかった。それも、息子のために、と思って貯めてきたもの、銀行にもあずけずに自分の身近かで暖めてきたものだ。にも関わらず、息子はこの金を無視したかのように、手にも触れずに立ちさってしまった。そう思いめぐらしながら、彼はそこに置いてある札束を空しいもののように眺めた。空しさは札束そのものにあることまでには考えをおよばさずに。表現しがたい悲哀がにわかに彼を襲った。

何んのために苦勞をして子供を育てて大学まで出したか解らなくなった。何のために人生の苦惱とたたかつてこれまで生きてきたか、解らなくなった。自分が人生をわたって老いこんだ意義が全く見いだされなかった。彼は暗澹たる思いで、自己の内部から生じた質問の間をさまよった。そうして、老人は仏壇の前に立って妻の位牌に聞いた。うるんだ世にも憐れな声で、

「おぬい、教えてくれ。おどんは苦勞して今まで生きて

きた甲斐はどこにあるのじゃ。教えてくれ、おぬい、教えてくれ」

この日は一九五八年五月二十日。

(一九六一年)

糧

土井マンジヨリカ

略歴 本名小野みちよ。一九六一年の「農業と協同」文学賞に佳作人選した当時の年令二十才。サンパウロ近郊サント・アマールで家族と共に農業に従事。後コチア産業組合に勤務「農業と協同」の編集部員となる。別のペンネームでパウリスタ文学賞などにも応募していたが、結婚後は文筆から遠ざかってしまっている。主婦。

糧

小野マンジヨリカ

イヨは嫁のセキが四十五にもなつて、結婚するのが何だか面白くなかつた。元々、この再婚はイヨから勧めたものである。死んだ長男は五人の子供を残しており、イヨ自身は最早七十の年を聞くに至っているし、人並みの物指しで計るなら平均より下になるセキは真面目に飯は炊くにしてもそれ以上は何の役にも立たぬし、十六になる孫は幾ら大人びているとはいえ、一人前ではない。

セキに代って鶏飼いの月給取りをしているイヨも雨のひどい日やそれがイヨ自身に罪はなくとも鶏の産卵率の悪い日には気が滅入ってそれだけでなくも筋がつつばって重い足が一しお重く感じられセキの長女ヤスヨが「ハイ、ばあちゃん」とよそつてくれる飯もなんだかぼろ布を噛むように疲れ切ってみると、何とかしなければならんわいと思つたのである。

「どうでしょうがな、いい人はおらんでしょうか」

イヨは同じ天理教仲間の中田さんに口をかけてみた。イヨはセキに「お前婿を貰う気はないかの。まだ清エーは一人前にならぬし、どうだろうか。なあ、清エ。何ちゆうっても家庭に男片れが居らんと人に馬鹿にされよるからな。そうすればお前と二人で畑仕事をして貰えるし、ヨがガリンニヤをトラツタして楽になると思うがな。お前エだつてパイが欲しかるが」セキの長男で十六にしては柄の大きな清吉は口を突んがらした。清吉は婆さんつ子であつた。四十五になつても何の知恵もつかず味噌樽からボツボツと味噌を取り溝に中にウジ虫を湧かせても一向に構わぬようなセキを、子供ながら清吉は母さんのボンヤリと呼んでいた。イヨほそんな清吉を見ると胃潰瘍で死んだ忠吉が生れ變つて来たようで嬉しい。嬉しそうにニツと笑う口元だの、怒つた時の目付きだの、マキナを背負つた後姿だのが思吉にそっくりなのである。イヨは清吉が可愛くて仕様がなかつた。清吉はイヨとは別に少しばかり畑を作っていた。十六になる清吉は一人でバージエンを植え消毒し出荷してイヨと二人で生活費を得るのであつた。

「母さんのぼんやり」

イヨは清吉がセキにこういうのをホクホクとみつめる。

忠吉にそっくりだ。忠吉もセキをそう言った。このボン

ヤリ奴とな。清吉もそう言うようになつた。イヨはニコニコと笑つた。イヨは清吉の言う事なら何でもフンフンと頷くのである。

「祖母ちゃんよ。フェラばかりだと矢つ張り押されるとこがあるからよーどっか組合に人らんと駄目だ。そうすれば資金も少しは出してくれると思うよ。中田さんもそう言つとつた」

「そりや入つてもいいが、組合に入るとなれば加入金も要るし、何だお前よ、まだ年端も行かぬお前を入れやしまい」「母さんを入れればいい」

「あのボンヤリがアシナ（署名）の一つも出来ぬのに……」

「じゃ祖母ちゃんが入れればいい」

「七十の年寄りを組合は入れるかエー」

「でも中田さんに聞いてみればいい」

「それより良夫にでもあたつてみるがエー」

「あつたら。婆ちゃん、良夫叔父はだめだイ。何にしてくれた、今までに。何にもしてくれないじゃないか。婆さんと子供いるうちに年に一遍も来ないじゃないか。そうさ、くれば金がかかるからな。くれば祖母ちゃんに小遣いせびられると思つているんだ。あつたらのだめだ。あらたらの無い方が余つ程いい。その方が腹が立たないからな」

イヨの次男はこの男手のない家庭に本当に年に二三

度も顔を出せば良い方であった。良夫は近所に住む天理教仲間の中田さんに自分の親を依頼していた。イヨは良夫よりは中田さんに何でも相談もするし、イヨが大黒柱のこの家に二百クルゼイロの百クルゼイロのと借りに来る中田さんの家内になけなしの財布から貸してやりもするのだった。尤もイヨは中田さんの家内からその小銭を返して貰った覚えはないが、万一の時、身勝手な良夫よりは世話にもなるうによと黙って目をつぶっている。イヨは結局組合に加入する話もセキが年甲斐もなく顔を赤くして、「母さん、ワシはだめだね」と気弱く否定する婿取りの件も好んだのであった。

清吉は畑仕事が捗どるならエエと賛意を示したしイヨ自身も清吉可愛さから七十近い身にマキナを背負つてトマテやバージエンを消毒するのから少しでも浮ばれたかった。

中田さんは大阪育ちの仕立て職人である。中田さんには女の子だけ七人もある。職人としての腕は仲々大したものだと良夫の妻はほめるのだが中田さん自身は街に出て職人する気はない。「いやあ、そりや職人は楽です。しかし、七人の子供にやオマンマは喰わされんですよ。百姓はねえ、どんな貧乏していても喰うだけは喰って行けますよ。ハッハ。世の中もこうなればきれいなもんです」

何でも中田さんは歩合のパトロンに仰山の借金を作っているという話である。就労者の少い家族には違いないけれども、一人男の中田さんが日曜毎天理教のお祭りに出て行くので畑作はいつも留守になっていた。乳呑児を抱えている女将さんはしょつ中胸をはだけて呆んやり主のいない畑を眺めているし、その周りを年子の子供達が五月蠅く走り回るかと思えば泣き、泣き止めば戸棚を引つかきまわして胃を満足させようとしていた。

中田さんは天理教仲間にもかなり不義理な借金があるし、パトロンは日曜は欠かさず出勤する天理教に腹を立てて思うように資金を出さなくなっているし、八方塞りであった。

癩な事には女房がまた孕んだのだ。中田さんは金持ちには子供が出来ぬのに貧乏くされの自分に欲しがりもせぬ子供が次々と産れるので何につけても腹が立つ。幾らブラジルが気候が良いにしてもあまりではないか。けれどもラジオも新聞も一切の娯楽に乏しい農村のしかも歩合作者であってみれば夜だけが楽しみであった。中田さんは腹を立てながらも用を足すことだけは欠かさなかった。

子供等に盛りきりの飯を喰わしても一カ月に一俵半の米をキチンキチンと搾るようにして消化してしまう。全くよく喰う奴等だ。すると中田さんは天理のみこと

の為さぬ方法を聞きたくなり、皆であげる祝詞に何だか救いを感じるのである。その時だけ中田さんはよく喰う子供も孕む女房も忘れてしまうのであった。もつとも中田さんは子供や女房のためにせつせと天理教通いをするのであったが段々この頃では自分の息抜きの為になつて来たのであった。

日曜日が来ると中田さんはイヨと誘い合つてお祭りへ行く。良夫は用足しのイヨに今年は少しばかりトマテの値が良かったのでツーピースをプレゼントしてくれるそうだとイヨは一カ月ばかり前に埃りっぽい道を中田さんとテクテク歩きをがら得意そうに言ったものだが、相変らず何年も前から見慣れている灰色の長い裾の服を着ている。二人は手に大きなサツコーラ（袋）を持っていた。イヨは帰りに食糧もかつて来るのだ。

「どんなもんでしようかな中田さんよ。うち等のような貧乏人でも入れる組合がありますでしょうかな。精エがの、組合が良いといつとるけどな。ワシも組合に入らにや矢つ張り腰が弱いと思うがな、中田さんよ」

「大きな組合は貧乏人のしかも新しい組合員には貸さぬ話ですからな、何ですよ、入るとしたら小さな組合でしような。少し当ってみましょう。何に貧乏人を殺すばかりが能の世の中じゃないですからよ。それからな。セキさんの話よ。いいのがあつてな、カンピーナスの人よ。年は四十だとかとよ」

「フン、それじゃ向うのサマはどんな風じゃろな」

「仏様みたいにいい人だそうで、何でも三年ばかり前に女房に逃げられたんだそうだ。しかし甲斐性のない男さの。女房が男と逃げても今迄帰って来よつたら困るゆって待ったとったそうだがよ。こんどはもう諦めたんだろ。ホレ、元、ここに住んでいたな、原村さんが世話してくれた話だがよ、何でもカンピーナスは大きいらしいよ、仕事が。矢っ張り土地の出来具合は郊外はもう話にならんからな。イヨさんよワシ等はここを喰いつめたら夜逃げでもするか。アドボ（肥料）と農薬に喰われるからよ郊外は」

「それで男は働き者か」

「そりゃあ働くそうさ」

「年が四十じゃ、少し若いの。セキは四十五だけに」

「なに、若い者ンでもあるまいしよ、年なんか苦にならん、ならんならん」

「とに角働いてもらえればの。男の四十はまだまだ働き盛りだものよ」

「大の男がうちに入ればそりゃ違うわ。セキさんもな、根っ切り反対じゃないんだろ。それにこれは先の長い話だが、向うに娘が一人あるそうだよ。一年位は娘は兄の家に預けとくそうだが、ホレ、大きくなった清エと組ませたいと思つとるがの、俺は。すれば向うもまるつきり他人の子供に頼るよりは娘のいる家だと少しは気も

開くだろう」

「フン、清エにはワシが気の良いのを選ぶよ。セキは駄目だ。セキのようなのは駄目だが」

「いや、それは今流行りに当人同志がよければの話よ……ま、先の長い話だから、慌てる事ない。どうする？話は進めるのか？」

「働き手は欲しいからの」

「ま、進めてみようか」

カンビーナスで女房に逃げられたという気の好い男は鼻の脇にホクロをつけてやって来た。イヨは中田さんに言った。

「どうも、ワシはあのホクロが好かん。フン好かん顔だの」

「イヨさんが婿とる訳じゃないからいいじゃないですよ」

「それもそうだが、働いてくれさえすればの」

「セキさんはどうかの」

「あの…ヨ（私）はカザメント（結婚）は早い方がいいと思います」

中田さんはハッハと笑った。イヨは呆れてぼんやり
の嫁をみた。歯が二本も欠けているセキのどこから早
やかザメントを待つものが出て来たのだろう、セキは
亭主を亡してから五年もたつのに三つの子供を持って

いた。

セキは父親の判然としないしかもこういう子にあり勝ちな眉目の整った男児を膝に抱きながら、カザメントは何んでも早い方が良い方と言うのである。イヨはこうなると自分から乗り気で進めた婿取りの話であるけれども自分も三十前後から孤閨を守っている身で何とも嫌な気がして来る。本当に、年甲斐もなく色気付いている。イヨは何だか妬ましい気がした。自分の時は誰も婿取り話など持って来てくれなかったし、進めてもくれなかった。

してみれば自分は又何と物判りの良い姑だろうか。セキとは他人なのだから。自分の子じゃない者にの、イヨはそう思った。

清エーは孫だがの、セキは他人じゃ。イヨはそう思つて長男の忘れ形見を愛しんだ。いわば己れの息子じゃ。清エー、清エー、とイヨは十六にもなる清吉を抱いて寝た。大きくなったもんじゃない。

寝床の中で触れる清吉の脚や腿はポカポカと暖かい。清エーよ、母さんは呆んやりじゃの、本当に呆んやりだよな。いい釜戸の嬢がよ、アルモツサ（お昼）炊いたらお茶まで黙って室の壁みているって法もなかる。清エーよ、また米が高くなったの。これからは育ち盛りだから皆、ムツタクツタ喰うぞな。一カ月に一俵で足りん

だろな。なあ、清エ。今度のトマテは何箱とれるかな。ベトがひどいからの。アラメの附近になると毎年あゝだな。アドボが切れよるのかな。今日は鶏があまり卵産んでない、どうした訳じゃろの。フアレロだつて水だつていつもと変りなかつたがよ。風邪引くな、清エー。もつとこつちに寄れ。

イヨは清吉の自分の倍もありそうな肩に透けてみえるような綿の固まった蒲団を掛けてやる。

「祖母ちゃんよ。雪男さんな、ノーボの自転車こうたぞ。俺も欲しいぞ。こんなによセッセと働いとるの俺ばかりだぞ。俺な、こんど青年会に入るわ。な、祖母ちゃん。俺考えてみたら母さんの産んだ子供よ、俺が働いて喰わせにやいかん話ないぞ。クルパ（咎）は母さんにあるんだな、祖母ちゃん。俺も自転車欲しいぞ」「そりやだめだな。借りて乗れや」

「じゃ俺働かんぞ」

「今度パイ貫うたら少しは清エー遊べるだろよ、お前嫌か」

「あいつが働いてよ、みんなのそこ喰わせるんだつたらいゝわ。小まいのらによ」

「だから貫うや」

イヨと清吉はサーラに箱を並べた上に寝かせたカンピーナースの婿を思った。セキはその隣りの室で父無し子を抱いていた。セキはその児を絶対傍から離さな

かった。

セキは訳の分らぬ事をつぶやきながら無心に眠る頭を撫でてやる。セキは二十七の時に嫁に来た。セキにはそれまで殆んど縁談らしきものもなかった。セキは嫁に来て呆んやり、呆んやりと夫から呼び付けられて、清吉から四人の子を産んだ。

父無し児の誠もセキの子には違いなかった。話の種に乏しい田舎でずい分取り沙汰されはしたけれど、今では時たま思い出したように人の口端にのぼるぐらいのものであった。

セキは意志を持たぬような女である。誠だって成り行きがそうだったのだ。人は天理教の奴だと言った。亭主が死んでからひところシゲシゲと通って来たと言う。イヨは呆れてセキが産床の中に坐っているのを眺めたものであった。セキのお産はイヨが看続けて来た。誠も又、イヨの手で臍を結ばれた。セキはそつと身を起した。誠の思いつめたように母親の首へかじりついていゝる掌を一つ一つ剥がしていき、色のあせた寝巻の前を合わせると裸足で歩き始めた。セキはフト気付き下穿きをとった。

鼻の脇にホクロのある婿は気安そうに寝ていた。間もなく自分の家になるという安心感から、何にもないこの家で五人の子供と四十五の女と一人の婆あが自分の

肩に掛かる事など忘れて眠っていた。結婚すればまたあれが出来ると思ったりしながら。するとホクロが膨らみ夢の中で下腹が力み始めるのであった。セキは寝巻を脱いだ。

息遣いから顔があるとおぼしい辺りに気が向かなければ開かない唇を持っていった。

「ヤスヨ、先に弁当詰めたか？」

卓につくとイヨは孫に言った。ヤスヨはフウフウ飯を掻き込みながら仲々返事しなかった。飯は幾ら食べでも腹一杯にならない、何んぼでも食える。ヤスヨも清吉も小鼻に汗を浮かべて白い砕け米のゆげの出る奴を掻き込む。

「ヤスヨ、弁当先に詰めたかや」

イヨは怒鳴った。全くこいつらは腹がきつくなるちゆう法をしらん。ヤスヨとセキは茶碗に三杯の米を炊く。

イヨは先に弁当をつめろと言う。余った分を明日の朝早い学校行きの弁当になどと呑気な事を言っていると鍋は底を鳴らすのである。精工はヘラが鍋の底に触れる音を聞いたたび、もつともつと喰いたいと思った。早よ喰べよ、早よ喰べよ、子供達はかけつくらのように先を急いで飯を流し込む。

「ヤス、弁当詰めたか？」

「ウン、まだ」

「このばか、早くつめろ」

「ウン」

ヤスヨは皿の飯をきれいに片付けている。ヤスヨはもうちよつと欲しい、皿を持って行き先に弁当を詰める、弁当が三つ、アルミの塩分であちこちフヤケているひし形の弁当。ヤスヨはもう少し欲しい。そこで後の弁当二つに軽く詰め、鍋底は皿へ盛って席につく。

「ヤス、寄越せ半分よ」

清エーは皿をつき出す。誠も向う席の小んまい奴等も。

ヤスは清エーにだけホンの少しやる。

「もつと」

「ノン」

「もつと」

「ノン」

「ヤスヨ、清エーは働いとるんだから、やれや。な、清エーは大人並に働いてくれよるから、やれや」

イヨが言う。清エーはそれで勢いを得て皿を奪る。ヤスヨは口を突んがらし清エーを睨んでいたがその日からみるみる涙が盛り上って来、ガルフオや小皿を叩き付けるとオイオイと泣き出した。

「ヤース」とセキは声をかけた。

「泣くな」セキはこういう。

イヨは苦々しい思いで飯を噛みながらボソボソと言
い始める。飯粒は抜けた歯の間からポロポロと止むこ
となく膝に落ちる。

今な、お前等にパイ貫おうてやるからな。ホレ、こ
の間来た小父さんあるだろ、あれや、パイがよう働い
てくれよるから今度は喧嘩せんでもいいぞ。鍋に余る
程マンマ炊いてやるぜ。どうだ？嫌か。ヤスヨは嫌か」
ヤスヨは不貞腐れて返事もせず卓の上にこぼれてい
る飯粒を拾って食っている。

「パイを貫おうのか。ただで貫おうのか。こうのと違
うか、祖母ちゃんよ」

「そりゃあ、貫おうね。な清エ、ノン。こうて来るのか
な。そうだ。こうて来るんや」

「パイをこうて来るのやな、祖母ちゃん」

パイをこうて来るのぞと、子供等は笑い出した。セ
キはカンピーナスのパイを思った。今度は本当に米
をどんどん俵で買えるだろうか。

「あのパイな、ここに黒いのがあった！」

小鼻を指しながら三番目の子が叫ぶ。子供達はめい
めいに頷いた。

「頭も禿げよった」

「アズール（青）の服着よった」

「ああ、よう、ママの顔みよったぞ」

セキは帰り際に自分の目を覗くようにして見た事を思い出した。ガルフオを持ちながら体の内が火照って来たパイをこうて来るんだ。早よ、カザメントをせにやなあ。

良夫の嫁はカザメントの当日に手伝いにやって来た。イヨとは背中合わせの民はもう二、三年もこの女手だけの家に顔を出してない。民は色白の肌が自慢の器量良しである。民は「もう年になってしもた」の連発でセキを居たたまらなくする。

「本当にもう、ウチなどは婆さんになってしもて。この頃はちよつと仕事するとカンサードよ」

民は三十五である。三十五の民は四十五のセキが再婚する事に片腹痛い思いである。良夫と民は、セキを好き者だと噂し合つた「そうだともよ。誰の子かも判らんのを産みよつてしゃあしゃあと澄ましてるわ。ホンに嫂さんは好き者よ。ねえあんだ。祖母ちゃんはそりやパパの親でもあるし、面倒みるのは当然だけでも清エーは甥ちゆうつても何よ、他人みたいなもんだし、嫂さんは元々他人じゃ。いい具合に婿サン貰つてもうまく行かん時はあんだ、祖母ちゃんだけ引き取つて構わんだろ。大体ウチは祖母ちゃん好かんけんど、親は大切にせにやいかんから。祖母ちゃんも祖母ちゃんよ。義兄さんが死んだ時、わしや長男より面倒見て貰う気無いと抜

かしよった。今になつてみ、あんた。どうしたつてウチ等の世話になるじゃないか。ざまみたらいい。セキさんもセキさんよ。ウチ等と一緒に居つた時はウチとパパイトカマラーダみたいに朝早くから畑へ追いやり、祖母ちゃんは清エーの子守り、義兄さんはペスカ（釣り）、セキさんはコジンニヤ（台所）。今のざまみたらいい。おまけに胃潰瘍で死んだら、パパイが信仰する天理教には上げ物が少いと言われて。ウチは天理教は悪いと言わんけど、喰う物を喰わずに上げる必要はないだろ。

一週に米も、ありつたけの野菜も持って行って、どんな功德があるかはしらんけど、セキさんもセキさんよ。いい年して。祖母ちゃんも祖母ちゃんよ。いい年して婿貰いもあるまい。世間体の悪い。嫂さんは実の姉じゃないからいいよなものさ」

民は台所で両手を粉にして中田さんの女将さんとまんじゅうを作りながら噂し合う。

「それはそうでも民さんよ。来てくれる人があつたら一生後家で通す事もないでしょ」

すると、いざカザメントの段取りになつてみるとイヨは自分も後家を通して二人の子を育てて来た我身を顧りみて妬ましさを忌ましさを掩いきれなくなつて、セキに当り散らしてみたり、清エーを殊更強く抱いてみたりしているから民と中田さんの間に分け入つて来、合槌を打つ。

「ホンに、今の者は何ぼになってもいゝ思いが出来るのう。ワシなどまだ二十の数がつくうちから後家を通して来ての、何んぼか損な思いをしたかの」

イヨは喉の奥でヒイヒイと笑った。

「あの男は禿げよつて、年より老けてみえるの」

と民は中田さんの女将の横腹をつつきながら、

「ウチがカーザする訳じゃないからいいけどさ。好かん。ウチだったら袖振るがな。女に逃げられるなんて、だらしがないよ、全く」

「そうとも、逃げた相手ちゆうのが日雇いだとよ。いやだねえ」

イヨは齒をむき出して顔をしかめてみせる。

「いやだ、いやだ。バカなものよのう」

三人はクスクスと笑った。まんじゅうはフクフクと沸けて行く、そばで飴を丸めているヤスヨに民はからかうようにして訊いた。

「パパイ貰うていいな？」

「ウン、ウチでパパイをこうで来たんだ」

二人は今度は遠慮なく笑いだした。セキは温和しくコロツケを転ばしている。清エーはサーラ（客間）でメーザを作っている。客は中田さん夫婦とパトロンの堀口さんと、良夫達と向うから婿とその兄と仲人役の原村さんとの最少限の披露である。民は中田さんの女将の脇腹を突きながら、

「ウチ等はブラジル式のカーザだから、もう絶対止められんですよ。例え一つあるマキナ（機械）でも両方で権利があるんですからね。セキさんは日本式だから簡単ですよ、奥さん」

エへへと民は下を見て口を抑えながら笑う。若い時はずっと色白だったそうだが、この頃では大分落ちた民であるが、丸い尻だのウフフと含み笑いする癖などたつぷりの色気があるのだった。五尺二寸の小粒の良夫には過ぎた女房で勿体ないという評判があり、それが民の耳にも入るものだから、民は絶対の自信を持っていて、尻を振ったり殊更含み笑いなどして良夫をヤキモキさせている。

民が三カ月毎に美容院に通うのにも良夫はグズグズも言わないし、帰えりが遅ければ逃げはしないかと家の周囲をウロつくのである。

民が意気揚々と帰えって来ると、
「うちは人手があるから、街へ行ってゆっくりも出来るだろ」とあてこするのだ。

「オイオイ、今日はフェジョン（豆）はないのか。そうとも、今時はフェジョン安いから、フェジョンばかり食ってもいいだろ」

二、三日味噌汁が続くと良夫は又言う。

「そうとも。今年は味噌を余計ついたからな。来年まで持つだろな、オイ」

民はそんな時世界で一等嫌いなのが自分の連れ合いだと思ふ。時折りやって来る行商人がまだ若い男であれば、若い男から物を買うたらいかんといい、婦人会の集りでどこそこのマリド（夫）は男っ振りがいいと噂し合つたと報告すればブンと膨れる。良夫は民に気を遣う余り、イヨを可哀想だとは思ひながらも碌な小遣いも気兼しいしいやらねばならぬ。良夫は民を大事にする余り男同志の世間交際はしない。それだけに世間の狭い男であつた。

他所のカザメントに招ばれてもこれも、家長としてやって来たイヨと並んでケーキ類をつつく男であつた。良夫はセキを罵しつた。

「いい年をして婿を取る。俺はもう恥しゅうで路を歩かれん。あの女が俺の本当の姉弟だつたらホツペタの一つもブンなぐつてやるんだ。ガンとよ。ガンと殴つてやるんだぞ。センベルゴーニヤ（恥知らず）。イヤイヤ、話にもならん。今頃になつて魔がさしたんだろ。センベルゴーニヤ」

ヨ（自分）は良夫にセキがカザメントは早よせいと言つたと報らせてあつた。

「年甲斐もなく、もう恥しゅうて」と祝いの席でも癖でクチャクチャとケーキを喰ひながらイヨ達のパトロンに言うのであつた。そのたびに口をすすぐようにしてグワラナを飲む― 頭髪は民のサービスでオールバツ

クに刈つてあるけれども額が丸い。時々切り忘れた長い髪が耳の後に垂れているご愛嬌を持っている。新郎新婦は数多くの子供の中にキッチンと四角に坐っている。良夫の子と中田さんの子と自分達の子で一ダース半もある。子供等は渴れてガツガツと喰い、てんでに皿を運んでそれぞれの隠し場所に。仕舞い込む。清エーの弟達は今日だけは幾ら喰っても祖母ちゃんが怒らないのを知っていたからありったけのポケットにバーラやシヨコラテやまんじゅうを片っぱしから捻じ込んだ。昔は一様に朗かであった。

「な、ヤス。毎日カザメント（結婚式）があればいいな、こんなバスタンテ（たくさん）喰えるもんな。ママイはノイバ（新婦）だな。白い服着んな。下ばかり見てるな。ママイはどうしてバーラ（飴）喰わん？ ママイどうして寿司も食べん？ 今日、パイをこうて来たんだな。ノーボ（新しい）のパイだな。ベリーヨ（古い）のパイは写真にあるなヤス、毎日こんな食えればいいな。正月だもんな」

口の中に詰めるだけ詰め込む。一度に二つも三つもバーラを捻じ込み、齒を噛み合わせるのがやつとである。よだれがだらだらと前を汚す。それでも苦にせずどんどん食べる。子供は苦にせず食って伸びる。それぞれの隠し場所に一人で満足し、また明日も食べれると楽しみにしながら飴だらけの顔と手でカマ（ベット）の上

でコロリと眠ってしまった。

清エーとヤスだけはノイボとノイバ（新郎新婦）に非常な興味を持っている。祝いの席も卓の上の御馳走がなくなるにつれて白けて来、夜気がしんしんと服を通して肌に突きさす頃になると、イヨと良夫と民、セキ達は釜戸の口に集り、薪が燃える暖かみで婿さんにカンピーナスの話を訊いた。

カンピーナスはトマテが二十段程も穫れるそうである。山のスツテンペに池を作り、そこから畝々に水を流し込むそうである。カンピーナスは沃土であるそうなの。カンピーナスは米作りも盛んなそうなの。良夫はいつまでも郊外に居てもラチが明かんから民を突いてカンピーナスの方へ行こうかと言い、中田さんもフンフンとうなずく。同じ歩合作でも郊外の歩合よりずっと歩がいいという。

大人の顔を口が動くたび首をヒョイヒョイと捻じ曲げて一々仰いでいたヤスはアアと欠伸をする。

「ママイ、もう眠よう。なあ、眠よう」

「オセが先に眠れや」

イヨは椅子に腰かけながらも、膝の上に肘をつき釜戸の口にガバツとふさがるようにして掌をあぶっているながら、炎が反射して赤くテラテラする顔で言った。

「な、ママイ。もう眠るな」

自分の末っ子を抱いていた良夫も

「じゃ、もう、明日にしましよ。ママイよ、今日はノイボも疲れていることだから」

民は決して自分の子でも小んまいのを膝に乗せたりはしない女であった。雨が降れば愛猫のチャコに風邪を引くなと言いはしても、子供等にはセーターの一つも着せはしない。それでも民は四人の子の母であり一家の主婦なのである。一家の主婦はそんなにうちをあけて歩けぬから、祖母ちゃんところにも顔を出せぬと言う。その癖、歯が少しでも痛み出したら声を大きくして叫ぶ。歯も治療出来んような甲斐性のないあんたところに来て損してしもうた。あの、背の大きい人のところに行っとれば今頃はもっと幸福だったろよ。良夫は民には今でも決して財布を預けない。民には二百クルゼイ口の小遣いを与えておく。その固い財布の口から良夫は渋々金を出し、女は髪が伸びたらみつともないからパーマをせいと言い、痛くもない歯も治療させる。民は決して世帯じみはしなかった。釜戸の薪も燃えつくして来た。民の頬は白々と冴えていた。

「そうだ、もう眠る、眠る」

イヨもこう言った。皆は席を立った。人のいなくなつた釜戸の前は急にさびしくなり、残り火が淋しく周囲りを灰白く照らしている。椅子の脚だけが明るかった。

ノイボとノイバの寢床には三つの誠が眠っていた。大の字にひっくり返って眠っていた。セキは誠を隅に

置き換え、そこに二人の寢床を作った。誠の存在はそのまま、これからの二人の生活に当てはまるものであった。

二人は再婚だし、五人の子の親なのであるから。清エーは眠いくせに仲々寝つかれなかった。そろそろ大人の世界に頭を突っこみ始めた清エーは種々の想像で胸苦しかった。清エーはイヨの脚にそつと触れた。するとそんな自分に嫌悪感を抱き、思いつ切りイヨの足を蹴つとばした。

「寝相の悪い奴じゃ」

清エーは眠たふりで寝返えりを打った。

婿の周助は飯を食う時に窮窟そうであった。子供達はパパイはどんな風にして飯を食うだろうかと一口毎に周助の顔を仰いだし、イヨはイヨで皿の下から上目遣いに視線を走らせて寄越す。周助は慣れぬため清吉に仕事を聞きあれやこれやと用を言い付けられた。

イヨの考え通り、周助と精エとは畑に出て行き、イヨはイヨでパトロンの鶏をトラツタ（面倒見る）していた。セキは相変らず食事から食事時の合い間には壁をみている。何も変りはしなかった。米も今まで一俵ずつ食っていたものが一俵半と食い扶ちが殖えはしたけれど減る事など及びもつかない。

年老いても後家のイヨには、未だ慣れぬために四十

五と四十のノイバ同志だけれど時々妙な初々しい素振りを見せる二人に白けた気持になつてしまふ。

フン、寢床に行けば一緒に居れるものをくつつきよつて、みつともない奴等じゃ。

イヨは周助とセキが何か話しているのをみて忌まひましく舌打ちする。セキはやつぱり他人じゃわ。

清エーは清エーで心中周助をボンヤリだと思つてゐる。

馬の程年を取つてゐる癖に何と気の利かぬことだらう。禿げる程長生きしているのにと思つた。清エーはこの五年間に父親を亡くしてから十六才とは思ひもつかない程老成していたが自分自身それに気付いてなかつた。イヨは清エーと益々増長させたのも、老婆自身も気付いていない。セキをボンヤリと言つて棚の上にあげて片付けてしまつてゐる事がセキの生来の無氣力に益々拍車をかけてゐるのにも気付いてなかつた。

大海原を一そらの小舟で渡るのを人生とするなら、この舟は七十の老婆と十六の少年が舵を握つていた、舟はヨタヨタと進んだ、老婆が方向舵をとる時舟は大きくカーブし、少年が進路を指す時舟はガタピシと揺れた。

老婆は何分年寄りだからと他人に甘えたために随分不義理をしても平氣であつたし、少年は父親がないのだからと好意を正当化し続けて来た。イヨも清吉もそ

れ故に周助がもっと身を粉にして働くのが当然だと思
う。

周助は大人なのだ、大の男なのだ。老婆でも少年でも
ない。それが務めだと思つた。

周助は仲々この家に慣れなかつた。イヨは周助が来
てもさし当つての収入は増えもせぬのに、今まで思
もよらなかつた腸詰も長持ちのする塩魚も毎日とは言
わぬまでも三日か一週間に一度は食わねばならぬし、
戸主のなかつたこの家では今まで諸々の寄附などは類
かむりで通して来たのが、レツキとした金タマを持つ
男が居ればそういう訳にも行かなくなつた。

「パパイさん貰つたら楽になつたでしよう」

路を歩くたび早いもので人々の耳にセキが婿を取つ
たと伝ちつており、イヨにこう声をかける。

「あ、そりや男が居れば違いますわ」

イヨは頭をペコペコしながら応えた。

始めの一度二度は末だいいとしても段々と会うたび
周助の事をとやかく言われてみると、イヨは面倒くさ
くなつた。ホンに五月蠅いことよのう。禿げ頭の男が珍
しいのかよ。

イヨはブツブツ口の中でつぶやき始める。男、男ち
ゆうつてもどうつて事ないじゃないか。うちはホンナ
ラまるで周助が居らにや飯食つとらんじやつたみたい
じゃないか。周助が采たつてワシは鶏をトラツタしと

るし、可哀想に清エーだって相変らずだワイ。セキばかりいい思いしとるのじゃ。その清吉は村の青年会に入った。

日曜はどんなに忙しくとも出て行った。清吉はパトロンから自転車を借りて行く。清エーには他人が迷惑したら悪いという気などない。

「小母さん、自転車貸してや」

「小母さん、卵のケブラード（こわれ）少しくれや」
「あんな、そこのミシリーカ（ミカン）ちよつと食っていいか」

パトロンの細君は可愛気のない児だねと言っていた。清エーの胃はしかし絶えず何かを要求する。清エーは遠慮などして居られない。腹が減っていれば辛い思いするのは自分なのだ。エンシヤーダを使うと倍も腹が減るのだ。

清エーは人中で、何の躊ちよもなく手を伸ばして食った。

腹が減れば困るのは自分で、どれだけ食べば満腹するかも知っているのは自分だけだ。青年会に行く、お茶が出る、残るビスケットやバーラを必ずポケットに入れて来た。会費を払つとるんだもの、役員ばかり残り物持って行く必要ないんだ。会は皆のものだもの。グワラナもバーラも皆のものだもの。

「どうだ、パイパイは？」

「あー、うまいことやってる」

「楽になったろ」

「なるもんか。仕事が殖えただけだ」

「仕事が殖えればいいさ、収穫も余計になるんだから。」

清エーよ。パイパイと呼ぶんか？」

「呼ぶもんか、あったら。ママイのマリドだけど俺のじゃない」「きいたぞ。オセな、あの男の娘とカーザ（結婚）することになつとるそうだな、へッ、いいじゃねえかよ。ちゃんと嫁も連れて乗り込んで来たな」「フン」

清エーはこのことをイヨから聞いてとつくに知ってはいたが、清エー自身結婚などにまだまだ意味のない反撥する年頃であったために、大人が勝手な事しよる、とムチャクチャ腹が立つのであった。あの野郎、俺んとこ誤魔化そうとしとるんだ、へッ、カーザしたかったら自分だけすれば良いじゃないか。人の事まで持ち出して体裁が悪かるよ。そうだともさ。

清エーは朝早くから成長期にあるペピノ（キュウリ）を消毒する時、小さな花や、小指程の果実に目を細くするような愛しみを覚えるのだが、周助には分らぬだろうと思う。

骨の髄までのぞこうとするマキナ（機械）の肩紐の痛種の快感を覚えぬでもない。清吉は百姓に生まれ百姓

さこー

に育つて来た。世界一番寝心地の良いものが自分のカーマ（ベット）であるなら、一番いいのも土壁のサツペ屋根のこの家である。そして百姓が生活手段である。清エーは借りた自転車に股がりながら、それが一等なのだと思う。疲れたって、疲れを癒やすものを作物は持っている。周助には分んねだろ。

小さな弟達がパイパイパイと呼ぶのも気に入らなかつた。周助にじゃれつくのも嫌だつたし、セキが周助に優しい笑顔をみせるのも癖だつた。周助は無口な男だつた。二人で畑をカルビ（除草）などしていても一言も口を利かぬことがあつた。それが周助の性癖なのが、清エはそうとらぬ。

イヨと陰でさんざん悪口を言っている清エは、それが聞えたんかもしらん、と息苦しくさえなる。清エーは、「あんたよ、ペビノの実にようかけてや」「うん、実にな」

周助はそう言う。今まで清エーと何でも相談していたイヨまでが、時々周助に相談もかける。何処そこにお産見舞いもやらにやいかん、何がいいだろなあ、あそこは初産じやけにを。清エーは自分が除け者にされたと思つた。

（一行判読不可）

安物で間に合わしとこやと言つたもんだつた。

清エーは飯を食いながら面白くない。トマテ（トマト）

だって病名なんか俺より知らんぞ。バージュン（ササゲ豆）だって穫るのに遅いんだぞ。カルピ（草取り）したって五分々々だ。俺は年が足らんでも一人前やるんだ。皆がそう褒めてくれたんだ。人の褒め言葉の中に自分の価値を過大評価していた清エーに、最早、パイがおるもんだから、大変だの清ちゃんと言いつつ誰も言いはしなかった。周助の事ばかり根掘り葉掘りして訊ねてきた。それが人間の物見高い覗き見からなのだが清エーはそうとしない。周助に今までの信用だの、人気だのを取られてしまった。ましてや、パイが来たから楽だろうと言われなぞすれば頭の中が熱くなった。周助をライバル視しているのだが、清エーは気が付かない。

好かん奴だった。セキは何の思いもなく周助の言うことならフンフンと頷くし、本当に腹の立つやつだ。清エーは飯を食べ終わると奥に引っ込み、祖母ちゃんも祖母ちゃんよ、あんなのを頼りにするんだから。米が早よ減るとこぼした癖にな。

「あんな、祖母ちゃん。あいつ、今日カルピした時、コーベマンティガを五本も切りよったぞ。そしてな、消毒したらエラそうに何度も肩を揺すったりするんだ。大の男がよ……可笑しかったぞ。そんでな、俺が話しかけても返事もせんだった。五本も切っちゃまったんだで」

「フン、大の男がのう。それに飯もよう食うなあ。清エー、あんな奴だから女に逃げられるんだア」

「祖母ちゃんよ。何であいつんとこ怒らんだ。なんであいつの気嫌とりよるんだ」

「大人がな、目角立てて物言うようになれば、大事になるからよ」

「そんだってあいつは婿だろ。うち貰われて来たんだろ。祖母ちゃんが大将だろう。うちは俺や祖母ちゃんのもんだろ。あいつは他所もんだろ。祖母ちゃん怒ってもいいじゃないか、コーベマンティガやレポリヨ（キヤベツ）は余り切ったらいかんと言ったら良いじゃないか、飯も仕事に合わせて食えとゆったらいいじゃないか」

イヨと清吉はベットの途中で話し合った。

「忠吉さえ生きとればのう。良夫のような用に足らん奴は死んでもの。忠吉さえ生きとったら、ワシは鶏のトラツタせんでいいんじゃないや。孫を負って遊べるんじゃないや。たのによ。清エや早く大きくなれや。早よ大きくなって祖母ちゃんを楽にさせてや。ワシはそうでなかったらいい思いして死なれんやの。本当にワシのような不幸な者ンはどこにも居らんわ。お負けに小んまいの等はワシの言う事は聞きもせなんだし」

イヨの愚痴はいつまでも限りなく続いた。イヨはコボシながら自分が哀れになって涙をにじませる。すると、日曜毎天理教会に出かける女のうちに年中着た切り雀の自分を思い出し、ツーピースを買ってくれればいいながらその俣になっている良夫を恨んだ。民はま

たノーボ（新しい）の服着よつたではないか、自分は良夫を何十年も育ててやったんだ。背中に背負つてもやった。忠吉とよう喧嘩した時仲裁もしてやった。あいつは一人で育つた氣しとる。たまに行けば金のない話ばかりしよつて、くれるどころか貰う氣しとるじやないか。本当に育て甲斐のない……。

イヨはすすりあげながら、精エ、清エという。

「お前だけじゃ、お前だけが頼りじゃ」

すると清吉はようやく祖母ちゃんをとり戻せた氣になつてくる。清吉はイヨの愚痴が煩しいのだが、そう言われれば頼りにされているんだとゾクゾク嬉しくなつた。

「祖母ちゃんよ、大きくなつたコルシオン・デ・モーラ（寝台）に寝せてやるからな。ブドー酒も每晚飲ましてやるぞ。な、祖母ちゃん、長生きしてや」

イヨはいつまでもグズグズと鼻をすすり上げていた。あれやこれやと思ひ出して鼻をすするのであった。鼻水がタラタラと汚れたシーツを濡らす。イヨが口汚たなく石鹼を使い過ぎるの、洗濯きりしか能がないのと罵しる上、生来の無精も手伝つてセキはろくろく洗い物もしなかつた。

イヨははな水をゴツゴツの蒲団に拭きつける。蒲団の衿は黒くテカテカと光つて鼻の頭を擦るようであつた。

イヨはショボショボと泣いた。ホンに人間ちゆうも

んは報われんもんだ。七十近くになっても、どんないい事もありやせなんだ。長生きして損したようなもんだ。忠吉もうちの人も早よ死んで幸せもんじやわい。ワシなんぞもう死にたくても死ねなんだ………。

イヨは久し振りに何十年も前に死んでしまった夫の顔を思い出してみるのだった。それから忠吉の顔、忠吉と良夫は毎日喧嘩して、口では間に合わず茶碗を投げてやったもんだった。清エーよ、早よ育ってや。そしてな、たまには新しい服でもかってくれや。天理教に行つてホンに肩身が狭いんだで。

イヨはクチャクチャと眠ってしまった。

清エーは年寄りの愚痴にホトホト欠伸が出て来る。アーアと大きく欠伸して、イヨに尻を向けた。セキの室ではまだ話し声がしていた。周助の声も途切れとぎれ聞えて来る。一体なんの話してるんだろ、俺の悪口かもしれない。言ってみろ、ここは俺のうちなんだからな、追ン出してやるから……。清エーは眠り始めた。明日も明後日もマキナを背負い、エンシヤーダを持たなくてはならぬ子であった。

……清エ……は不図目を醒ました。セキの室からはまだボソボソ話し声がする。清エは耳をピンと馬のように立てた。それが猫のようだと思ったりもした。話しは定かでない。話が途切れる。清エーはコトコト心臓が鼓動を打つのが分る。突拍子もない想像がそうさせる

のだった。

又、話し出す。いつまでも話が続けばよいと思う。ベットのきしみに清エは胸が張り裂けるようになり、早よ眠らねばならぬと思った。清エーは二人に反撥した。汚たならしい事ではないかと思った。胸がムカムカして来、唾を空に向かって吐き出した。唾は清エーの顔の上にペチャツと落ちて、ひどく惨めな思いがした。パイさえおればと清エも思った。すると先程のイヨの愚痴がそのまま清吉自身に当てはまり、ベチヨベチヨと泣き出した。パイ、パイと泣き出した。セキはもう母でない気がした。セキは他人だと思った。ママいなか糞くらえだ。暗闇に憤れた目は屋根のリツパ（梁の板）まで見通せた。冴えざえした頭から意味もない愚痴が出て来、何のためらいもなくオイオイと泣いた。清エーは泣き声を聞かれぬために頭から蒲団をスツポリと被った。蒲団の人の丸味の山はいつまでもモゾモゾと動いていた。

婦人会の集いにセキは大恥を搔いた。

セキはその日曜が役員選挙日であると知っていたなら出るのではなかったのだ。

セキはまるつきり学問のない女である上に、会が始まる前から四十五になって婿をとった彼女は女達から目引き袖引きされ通しだった。四十五で再婚すること

はそんなに皆から、話の種にされねばならぬのだから。それもイヨから出た話ではなかったろうか。五人の子供の養い手として貰うた婿殿ではないか。

「あんな温和なしそうな顔で、好き者だそうよ」

「頭に白髪がみえてるのに……。バカなもんだのう、その婿さんは、え、私ならどうせ若いものと思うがね……。ま、いいじゃないのよ」

「子供の手前もあるだろうに。大きいのは十六だそうじゃないの。もう、甘いも酸いも覚えている年頃なのに……。ホッ」

大仰な身振りと手振りである。誰も自分の連れ合いに病氣して貰いたくはない。誰でも父無し子など産みたくない。けれど誰がセキの頼りになつてくれたらう。良夫は尤もらしい口で舌先のアジユダ（助け）はするけれど、決して損する手には乗つて来なかった。出すのは舌でも惜しい人間なのだ。セキが頼つたのが男で、セキが女だった為に誠は誰も望まないまゝに産れてしもた。セキはその事に無頓着であった。感じ過ぎて麻痺したのではなく、元々感じぬ人間であつたのだ。それ故セキは他人が思う程不幸でなかった。

民が折り合はぬイヨともうかれこれ二十年近くも一緒に生活出来たし、一家の主婦でありながら、飯炊きの合い間に壁の割れ目をみて通せた生活も倖せだつたと言える。

セキよりも民が嫌がり羞じていた。民はセキが目引き袖引きされているのをみて恥かしゆうで恥かしゆうで顔を上げられぬ思いであった。

「ねえさんねえさん言うても、ねえさんじゃないよ」

民はセキの事をいろいろ取沙汰されると奮然と応えた。

「ねえさんにはねえさんでもホントの姉妹じゃないよ、他人だよ」

民はこう弁解した。すると女達は今度は民の言葉に呆れはてる。

「兄嫁も兄嫁なら弟の嫁も嫁だよ」

民はセキの傍によりつかなかった。席についても二人離れ離れに坐った。

「ねえ。会長はホレ、あの人がいゝじゃないの」

民の傍に坐ったこの部落の世話好きな女は、金持ちの奥さんを指さしてささやいた。

「あの人よ、あの人に入れましょ。奥さんてば入れなさいよ。副会長には、ホレ、あの人よ、弁が立つんだつてよ。コチアの総会に行っても男共を相手に腕相撲で捌くそうよ」

民も周りの女達も、その通り票を入れた。民は日本語は得意なのだった。

日語の先生が世話をかって出て、出席した婦人連の名を黒板にふりが名をつけて書いてあるのだったが、

セキは戸惑ってしまった。

会長の名を書くにも書記を書くにも一々、その一画一画確かめるようにみねばならない。セキはタラタラと汗をかいた。先生が籠を持って票を集めに回った。セキは待つて貰う。セキは夢中になって黒板と睨めっこして、一生懸命になって書く。書いた字と黒板の字は似ても似つかぬものになる。

「すいません。奥さん消しゴム貸して下さい」

セキはもう周りの事など目に入らず消しては書く。書いては消す。セキが手間どっている間に開票が済み、先生が教壇から声をかける。

「奥さん、まだですか」

セキは汗だらけの顔をハンケチで拭く。

「はい、もう、ちよつと」

また鉛筆をなめながら黒板をみる。一目みただけではピント来ない上に、皆の視線が集中する。セキは黒板の字がフワフワと羽を生やして飛んでいるようにみえて、自分のみている名が分らなくなる。

「ねえさん、何しとるんだろ」

「何ぼまた分らん人だの」

セキはようやくくの思いで小さな紙片を渡した。ホツと嘆息をつき、セキはさっぱりした顔で額を拭ぐった。とにかく暑かった。視線も決らないセキは会の間中、机の上から視線を上げなかった。それが婿取りの話と重

なつてセキの噂はますます花咲くだろう。

民は中田さんの女将さんに言った。

「あれは二カ月にはなつとるの、奥さん。うちのねえさんは本当に子供作るのが上手いんだから……」

中田さんの女将は八人目をはらんでいる手前、鼻白んだ。民は頓着なく続ける。

「名前もろくろく書けない癖に……。よう子供を作るのは上手いんじゃない。ウチなど産みたいと思つても産む法もしらなんだ」

民はしやあしやあと云つてのける。産むのは四人も六人も同じなんだがそうは思わない。中田の女将さんは益々鼻白んだ。彼女だつてセキに毛が生えた位の学なのだった。

幸いセキのような醜態は演じぬまでも、ようへ黒板みいみい書いてやったのだ。何とか抗弁したいのだが、言い方も見当がつかない。

女将さんはそつと汗を拭ぐつた。脇の下が冷やっこかつた。

セキは、民の後から地面ばかりみて歩いてた。朝の十時に始まった会は四時半までかゝつた。決議事項は何一つなかった。役貞選挙もようやく終えたような始末だった。

「詰まらん話よの。もう入れん前から決まつとるんだから……」

「ヨ（自分）等には誰がいいか見当もつかんものな」「あの人よ、副会長の人よ。男も負ける程口が走るんだつてよ。余りそんなのも困りもんじゃないの。男がおるのに男をだし抜く事もあるまいね」

「いや、いや、あんな人も居らんと。温和しいものばかりだと話が決らんからね」

女達は陽光の熱気がまた残っている埃りの道をゾロゾロと歩いて行つた。婦人連は乳呑児や幼児を抱えていた。

道端の小さな店に寄つて、皆は家へ駄菓子や土産を買つた。競争するように買つた。

セキは小さな巾着を出して誠の好きなマリアモーレ（マシユマロ）を少し買つた。中田の奥さんは明日にもイヨに話すだろ。

自分はゆうゆうと書けた振りで知らせるだろ。

イヨはイヨで言うだろう。

「フン、呆んやりがまたそんな恥かしい事をしよつたか」と。

セキは今まで文字と縁遠い生活をして来た。字を書く必要など全くなかつた。セキに必要なもの米堰の中でありパンでカフェーであつた。セキは嫁いで来てから家庭経済の危機などというものは考えた事もなかつたし、又、相談もかけられはしなかつた。忠吉がセキを仲間はずれにしたし、イヨも清エもそうした。セキは大

して好きでない学校も小学校を様に行かずに卒えてしまつてからは、字など、何処に必要があつたらうか。

セキはだるい体で中田さんの奥さんと、岐路へ入つた。周りはほの暗くなつていた。路には山木が被さつて来ている、道の草は腰ぎりまである。

「こりや子供等にカルピ（除草）させにやあかな」

中田の女将さんもだるい身体で言つた。セキは何とか産みたくなふと思つた。

「奥さん。何とかする法ないもんだるか」

「そうよ。ワシもそう思つとるんだけど……。何せ、金がかゝるだろ。うちはもう七人もだけに本当要らんのだけだよ」

「何んぼ位かかるんだらうの。ワシは本当、産みたくなくてな」

「仕様ないの。貧乏人にはどうしてこんな子が産れるのか。の、セキさんワシ等、豚だったらいい豚じゃ。ハハハ」

女将さんは呆れてしまつた、という風に大口を開けて笑つた。

「なに、生めば生んだで何とかなるもんよ」

「そうやな……」

セキはホツと嘆息をつく。でも周助さんは喜んでくれるかもしれん。うちに五人も子が居るけど、全部周助さんとは生きぬ子なのだから。周助さんもうちにいる

席が空くかもしれらん。誠ももう三つだし。ホンなら生もうよ。セキは涎を吐いた。軽い吐き気がしたのだ。それをみると中田の女将さんも一緒に背を曲げた。二人は並んでクエツクエツとやった。

：二人は諦めながら口を拭き、顔を見合せ腹をよじって笑い出した。涙をにじませながら笑った。何とも滑稽で何とも哀れでそうしなければ堪まらぬ気持だった。

清エーと周助は顔を見合わせるたびに喧嘩し、イヨはセキが子を産むのに始終渋面を作り、さりとして墮胎する金も工面つかぬまゝに月が満ち、セキは床についてた。

精エと周助は皆が呆れる程口論した。喧嘩の種は無いと言えど何にもないのだが、探せば又幾らでもあった。

情エと周助は飯を掻き込みながらも反目する。

「大して働き甲斐もない癖に食うな」

清エは周助の顔を見ずイヨに合槌を求める。周助は三言に二言位は聞き流す事にしてはいるのだが、大の男が子供に嘲ぎ笑われると腹の虫がムカついて来る。「清エよ、言っていゝ事と悪い事があるもんだ」

聞えぬ振りで誠にからかっているイヨを横目でみながら周助は口重に言った。こゝへ来てからめつきり老

けの目立つ周助である。禿げた頭の残り毛は櫛も入っていない。

「清エ、清エと気易く呼ぶな。オセ（あんた）は何だ。こはヨ（おれ）のうちじゃ出て行け。行つちまい。何だ、俺んとこと一口も利かぬくせに、ママイとグチャグチャ話しよつてみつともない」

周助は清エの嫉妬に憤然として、顔をみる。セキには似ず、街の子かと間違われる程色白で整った顔の清エは憎々し気に言い放っているのだ。清エは小さい子が周助になつているのも癖に触る。清エにはセキもイヨも弟等も自分の物だという所有観念があつた。そのために清エはウンコラ働いても、一種の英雄気取りがあり、自己満足出来るのであつた。その思いは多分にイヨにもある。ところが周助が来てからというものは、その責任感も英雄感も転嫁されてしまった。イヨはホツとしたのも束の間で何か物足らなく思ったし、清エは面白くない。周助が憎らしかった。周助のアラを探す時、何もみつきりはしないのだが、それが清エやイヨには又、腹立しい。

「出て行けと言うなら行つてもいいがな……」

周助は大人気ないと思ひながらも、ついつい言葉を買ってしまった。

「あ、出て行けや。今すぐ出て行けや」

「あ、よう考えとく。祖母さんも、聞いたろな」

そう男から念を押されるとイヨは心がワナワナとして来る。

「何の話だな、清エよ」

「出て行くちゆう話よ。な、祖母ちゃん、こいつが居らんでもいいな。いいじゃないか。今まで飯食えたんだからよ。行っただっていいな」

イヨはフンフンとうなづく。けれども決定的なことは避けて言わなかった。

「セキもお産する身だしな……」

イヨはセキのお産には、本当の所吐き気がする思いだった。イヨはこの事が起り得ると想像してなかった。イヨはホゾを噛む思いでいらいらした。周助が来たからと言って一千本のトマテが五千本に殖えた訳でも千本につき百箱のものが二百箱になりもしなかった。

そういう事実はあり得るにしても、イヨも、セキの年令など数えてみて、ホンに思ってもいなかったのである。要らんとし思いながらセキの腹を横目で透かしてみても、膨みは減る所か月が満ちて行った。

……セキは男児を出産した。三キロ足らずの小さな、その割に手足の大きな児であった。イヨはこの出産を誰にも知らせたくなかった。セキは口癖のように、ホんに年甲斐もなくと呟き通しであったし、周助は周助で清エの手前、何とも気恥しい思いであった。四十五にも

なつてからのセキのお産は並々ならぬ重いものであつたが、セキは死ぬ程の苦しみを味わつた上で出産したので、その後はポカンと惰性で乳首を与えているだけであつた。

ヤスヨは、ネンネ、ネンネ（赤ちゃん）と覗きに来はしたが、清エは嬰兒の顔さえみようとしなかつた。イヨは、もう孫はあきたのと、これまた抱きもせず、あやしもしなかつた。周助は畑から帰えるとヨツ、ヨツと覗く。セキはそんな時だけ産んで良かったと思う。けれども母乳が思うように出ず勢いよく吸い出す児に満足させられなくなると、ミルクを買わねばならなかつた。イヨは首を振り通しである。清エは二言目に出て行けと言う。セキと周助が話している姿を清エは遠くからでも冷い視線を投げてよこすのだった。

イヨが良夫に周助を出そうと思つとるがのう言つたのは、一カ月程してからであつた。良夫は中田さんの小んまいのが学校でうちの小んまいのに、セキさんがネンネ産みよつたと聞いたと言つて、慌てた様子で産見舞に顔出した時であつた。

民は、良夫に産見舞を包んでくれながら、さんざん悪づいたものである。

「何よ、うちに子供が出来たと知らせもせんのに見舞いに行く必要もないよ。産んだら産んだと知らせりやいのに。ワシは行かんよ。アンタが行けばいいじゃない

か。いい年しよって、ホンにセキさんは子供作るのが上手じゃないの。祖母ちゃんもよ、何でうちへ知らせんのか。人を莫迦にしとる。ワシは行かんからな、アンタが行けばいい。アンタの親類じゃからさ」

「オイ、オイ」と良夫は指を折り始めた。

「あれは誰のか判りやせんぞ」

「間違いないよ。カンピーナスと離れておりやどうって事ないじゃないのさ。間違いないよ」民は含み笑いをして身をよじった。良夫が矢張り皇孫誕生の時にも誰の児か分らんといいながら指を折って首をかしげたの思い出したからである。良夫はそういう性であった。誰の時でも数えてみなければ気が済まぬのである。無趣味の良夫には言ってみれば唯一の趣味のようなものであった。

「の、精エは毎日のように喧嘩しよるし、どんなものかね……良夫ア」

「そりや、大事なもんだがら軽々しくは言えんですよ」

良夫はネチャネチャと言つて、考え込む風をした。

「それでねえさんはどうかね。周助さんを出すちゆつたら子供はどうするかね」

「それよ……」

その日はそれきりになったが、一週間程してから、内で前々から燻ぶっていたこの問題は言ってみればバカ気た事から大きく爆発してしまった。

曇天であった。清エはレポリヨ畑のカルビをしようと
言った。周助は大人の緻密さから雨が来れば又、トマテ
に疫病がつくから予防して置こうと言った。すると
前々から面白くなかった精エは人に物言いづけすると
思った。

「何だ、黙ってカルピすりやいいじやないか、消毒なん
てせんだっていいんだ」

「ベト来にやいいが……清エよ、後で全部きちまったつ
てしらんぞ」

「あ、俺のトマテだもんな」

「清エよ、ワシはカマラーダ（日雇い）じゃないんだ。そ
りやトマテはお前えのもんだろ。家もお前えのもんだ
ろ。ワシはお前えから何にもとるつもりじゃないんだ。
いいか、清エ。仕事には膳立ちゆうものがある。そのや
り方で儲かるのと損するのと差がついとるんだ。上手
い膳立せにや、頭を出させんもんだ」

「自分で上手い膳立てしてうちへよう来たなあ、行け！
行けよ。行ってしまえ。お前えなんぞ用ないぞ。子供も
連れて行っちゃえ。祖母ちゃんもそう言っとるんだ」
「そうか」

周助は覚悟を決めた。もともと尻の下に鍼でもある
ような坐り心地であった家なのだ。周助はカーザなど
せにや良かったと思った。今でも姉女房であるけれど
セキは愛しい。けれどもこの老成した、増長の文字のよ

うな清エが居る限りサツペ小屋であるにしろ、精エのものであり、生れ落ちてから清エに培かわれた主という気持は到底、一年、二年で掻き消せるものではない。周助は結局自分が招かれざる客であつたと思う。それならば何故イヨはセキに婿取り話を進めたのだろう。自分は一体五人の子と二人の女の家庭に何を希んでやつて来たのだろうと思う。

この家に来て得たものは一人の嬰兒にすぎない。自分のものだと大口を開けて言えるのはこの児だけである。セキは自分のものには違いないけれども又清エのものでもれる。母と妻は異質のものであるにしろ、清エはセキをボンヤリとほぎきながらも十六年間も所有して来たのだ。清エにしてみれば周助の存在は横合いから飛び出して来た邪魔ものに過ぎぬ。なんという道化た役を演じたものだろう。

「じゃ、出て行こう」

周助は重々しく言った。

「あ、行つちやえ」

清エは甲高く叫んだ。

イヨと周助はセキに言い寄つた。

「セキ。どうするか、お前ここへ残るか、一緒に行くか」
セキはワナワナと震えて嬰兒を抱きしめるばかりである。意を決して周助の顔を見、イヨの顔を見ると苦しうに喘いだ。

「わかんねえ」

良夫が呼び出され、中田さんが顔出して親族会議が開かれた。

周助は出て行くことに腹を決めており、こんな子供にこうまで莫迦にされたのは始めてですよと言ったりした。

最後にセキは又、聞かれた。

「お前はどうするか?……」

セキは唾をのみ込んで答えた。

「ハイ。あの、一緒にヨもカンピーナスへ行きます。ネンネとヨがここへ残っても清エにネンネをいじめられるなら、子供等も案じるけど、今、ネンネからヨが離ればネンネは死んでしまいます。ヨもカンピーナスへ行きます」

セキは思いつめた風にこういうと涙を溢れさせた。フン。清エにネンネをいじめられるとの。中田さんは腕組みして、沈黙した。祖母さんは清エをいい育て方したもんだ。こりや、皆祖母さんの責任だぞ、鼻もちならぬ子にしたもんだ……。フーン

「あんたはそれでも母親か。後に残す五人の子は案じんのか。後に残る年寄りも案じんのか」

良夫が激して叫ぶ。

セキが家を出れば老婆と五人の子は必然的に自分の懐に転げこんで来る。ママイは親だから面倒みてもしよ

うがあるまい。精エ等は甥には甥だが、たったそれだけの話である。第一、実母が手を焼く清エーがうちへ来てどうする。うちは日曜もなく働きづくめじや精エのよ
うな奴に限ってシネマは好きじや、トラバーリオ（仕事）は嫌いじやに相違ない。精エとヤスヨは手助けになるからまだいい。

後の三人はどうする、まだまだ食い盛りで何の役にも立ちはしない。

「あんだ。五人も子があつたら考えてみイ。今更、男の後尾けて歩く年でもあるまい。恥しらずだ。あんたは本
当にセンベルゴニーヤだよ、年令も馬に食わせる程とつといて……」

良夫は拳をキリキリ震わせて言った。

いや、いや。良夫さんも身勝手じや。本来なら、長男
が死んだ時にとくにイヨさんも五人の子も引き収らねばならん立場なんだ。セキさんに今更センベルゴニーヤもあるまい。他人の厄介にはなつても良夫の世話にはなつとらんのだからの……フーン。中田は益々腕を固く組む。

「いいや、良ヨオ。いいや。セキ、お前行きたかつた
ら行け。婆がお粥を食いながらでも育ててゆくわ。あ、清エが一人前になるまでは死にやせん。百まで生きるつもりじや」

「ホントにママイが可哀想だよ……」

良夫はそう言った。ママイが可哀想でしようがなかつた二十の代がつくうちから後家を通して来て、長男には先立たれて、七十の声を聞いてからでもマキナを背負って……。セキはそれを捨てて男と一緒に行くというのだぞ何てセンベルゴ二ヤな女だろう。ホんに魔がさしている。ママイを投げて男と一緒に行くぞ本当に魔がさしたんだ。こりゃ、ママイの面倒もみる気もたんで、反対に泣かせるバカな奴だ。良夫の腹は煮えくり返る思いだった。

五人の子供は身じろぎもせず大人達の顔を見守った。清エだけは不貞腐れてカマに転がっていた。サーラが沈黙するとわざとらしく口笛を吹くのがだった。

セキがカンピーナスへ行くという日、清エは家に居ず、小さな子供等は、周助とセキが黙ってムスムスとトランクに衣類などをやったりとったりしている様を半ベソをかきながらも、今にちよつとしたきっかけで破れてせきを切ったように泣き出すのは分っていないながらも、黙然と柱や壁にもたれかかってみているのがだった。

イヨは畑に居た。畑のトマテの畝の中でぼんやりと虫食いのトマテの実をみていた。

殺虫剤を金を撒くように使用しても、毎年このビツシヤード（害虫）は殖えるばかりであった。一体技師は何しとるのだろの。世の中何んぼ進歩しても駄目なもんだの。イヨは放心しながらも薄ぼんやりと思う。セキ

もいよいよ行ってしまうのに。五人も子がいるのに、子もまた、セキを繋いでおく鎖りにはならなかった。イヨは不意に立ち上った。忘れておった。ホッ忘れておった。ホッ。忘れておったわ。

走るようにして家に入るとイヨは、服を着換えているセキに早口に言った。

「オセよ、セキよ、誠も連れて行けや。あれは忠吉の子じゃないけ。あんな人の子まで年寄りには育てきらんかな。よ、連れて行けや」

呆んやりのセキは聞えぬふりをした。もう呆んやりではなかったのだ。これから周助さんと生活する。向こうには周助さんの子がおる。だけんど清エみたいなのやイヨのような年寄りは居らんだろう、向こうへ行ったらワシも働かにやならん。これ以上小んまいのがあれば困る方で……。

「セキよ、連れて行けや。行かんのか……これは他人の児じゃ。今まで黙っておったが、周助さんよ、これほどこの馬の骨かも分らん奴の児じゃ。とんだ尻の軽いやつよの……。誠ア、ここへ来い。お前もな、ママイについて行けや。ママイの傍がいいじやろ。そうよまだ小んまいけにな、ヤスヨ、お前誠の着物出しや」

誠の泥服を剥ぎとるようにし脱がせ、セキと競争するのように、たった一枚のよそ行き着物に換えさせた。誠、ママイはな、オセも置いて行く気じゃったぞ。恐し

いママイだな……。向うへ行ったら、ママイの言う事聞けや。セキの奴、こいつまでワシに預けて去る気しとつたからの。矢っ張り思った通りだった……………。

「ヤス、どら手拭いもってこい。誠の顔リンパせにやならんから濡れた手拭いもってこい」

準備が終ると誠をセキの方へドンと突いてやった。

「忠吉のじゃないけに……」

セキは思案顔で周助をみた。

「あ、連れて行こ」

周助は大きなトランクを二つ持った。これが周助の婿入り道具であった。セキは嬰兒を抱いた。誠の手を引き、子供が寄って来る中を表へ出た。ヤスヨは大きく目を見張って、一言も口を開かずポカンとしたようにイヨの顔をみる。誠の上の奴がヤスヨの手を探ぐって来てママイが行きよる……と揺する。

「ウン」

ヤスヨは思わずポロツと涙を落した。涙は口に入り、塩辛い。

「ママイが行きよる……」声にして叫ぶと、

「祖母ちゃん、ママイが行きよる……」と繰り返した。

「そうだ、ママイはチャオよ。お前もチャオしろや」

「ママイーッ」

叫ぶと泣き出した。手をバタつかせて泣き出した。ヤスヨと残る一人も鼻をすすった。

「ママイーツ」

東も西も分るヤスヨは下唇を噛んでいた。

畜生！。お前え等の世話にならんぞ、出て行けや、世話にならんぞ。

イヨはグツタリとメーザに凭れていた。

どうして世の中はこうも自分達に辛いのだろっ楽出来ると思つて貰おうて来た婿が今度はセキも連れて出て行つてしもた。

若い時から苦勞して育てたのに忠吉は早よ死によるし、良は良だし。どうしてこんな目に遭うのだろつか。自分は一生懸命七十の年になつても働きよるのに何が悪くてこんな目に遭うのだろか。ホんに世の中はつれないもんじや。ホんに世の中はへソ曲りじや。十六年も一緒に住みよつて他人の気がせんじやつたセキでさえ、行つてしもた。みんな行つてしもた……。

それから間もなく清エ吉はサンパウロへ、メカニコの助手となつて出て行つた。

もう二、三年したら年が若くても加山家を樹てる人間なのだから嫁を娶つて一旦潰れてしまつた加山の家を再建することになっていた。ヤスヨはこれもサンパウロの勤人の家へ奉公に出され、半日だけ通学の便を与えられているという事であつた。

下の二人の男の子達はイヨ達のパトロンがどうせ子

供もないのであるから引き取ってくれたのである。良夫は、うちは丁度六人住むのにキチキチの家なのだからと言っておさないといけない児には手を延べようとしなかった。口癖に言っていた親であるイヨだけは良夫の手に渡った。

イヨはこの家に来てから張りを失い七十の老婆になり、民の手伝いするのもヨウヨウであった。十何年前、民がイヨに皮肉られたようにイヨは民に何かにつけて皮肉られる身となった。寝たり起きたりのイヨを、うちの孫は可愛くないのだろ。良夫の事は案じぬのだろ、と当てこすっていた。

イヨは世界中で一等不幸な者は自分だと思つて、鶏のトラツタ（世話）で痛めていた腰が寒くなるにつれて痺くの黙つて、さするのであった。

（一九六一年）

軟水

山崎準平

略歴一九一三年岡山県勝山市に生る。

一九三二年県立勝山中学（現勝山高校）卒業。一九三四年四月日本力行会海外学校卒業と同時に单身渡伯。同年六月サントス着、ノロエステ線渡辺農場に入り、ここを振出しに十回の移転、放浪を続けたが、常に“儲からない農業”をなりわいとした。作者自身のいう“小説めいたもの”を書いたのは一九六二年から六九年までの七年間、この間「農業と協同」及びパウリスタ新聞の二文学賞に応募、「農業と協同」には七篇ほど掲載されている。現在カウカイア在住。

軟水

山崎準平

(1)

武夫は十四才になった。昨年頃から急に背だけが伸びて、もう短いカルサ（ズボン）では羞しくて恰好もつかないようであった。

大きい声をだして「おーい」と人を呼ぶ時など、声が不思議に咽喉にがらんでどす太い声音にハツとすることがある。喉仏のところが大人のように三角形にふくれ上がっているのに気づいていた。「武ちゃんもエエ若い者になりましたなあ、もうあんたも楽ですわい。全く子供の大きくなることときたら、まるで竹の子みたいだねえ」と、となりの新田のおじさんが父に話すのを、武夫は馬の手入れしながらぼんやりと聞いていた。

家のパスト（牧場）の中には今年買入れたオランダーザのめ牛が大きいお腹をして草を食っていた。武夫はブラジル生れであった。この植民地には彼と同年輩の少年や娘たちが多いのである。武夫たちの村には入植

当時、日本語小学校としてたてられた学校が、今では州立のブラジル小学校と変って、教師にはT町から若い日本人二世の娘やブラジル人の娘が毎朝のオニブス（バス）を利用して通っていた。武夫はこの三年制の小学校を四年かかって卒業した。

ある夕方、武夫は父に言いつかって植民地の中央にあるボテコ（酒や雑貨を売る店）まで馬を飛ばせて買物に行った。その帰途、橋のところまで馬に水を飲ませるために橋げたの下の深みに馬を乗り入れていた。その時、上の道路を二人連れの道子と里美が、お裁縫の包みを持って声高に話しながら帰るのに気がついた。道子は武夫と同じ年の娘で、里美は武夫より二つほど年上であった。

橋板をふむ音がカタカタとして、ちらちらと二人の歩くのが橋げたのすき間から見えた。武夫ははっと息をつめてだまっていた。馬がぶるぶると言って水を前脚をもつてガバガバとかいた。

「あら、誰か人がいるわ」と道子たちは橋の下をのぞきこんだ。

「あら、武ちゃんだわ」と娘たちはさも安心したかのように入った。武夫は里美や道子の顔を真上に見上げる位置にいて、何とはなしに顔がほてってくるのを感じた。

彼は馬の尻を手綱でひっぱたきながら、一気に道に

かけ上り、力一ばい拍車をあてたので馬は驚いて道子と里美のそばをかけ抜けて一散に走った。その走り去る武夫の後から二人の娘のかん高い笑声がきこえた。

土曜日の午後、武夫は神林の次郎の家へ遊びに行った。

「次郎ちゃんいる？」

と武夫がいつもの窓の外から声をかけても、次郎はいないのか誰の返事もなかった。

家の裏手にポルコ（豚）の飼育場があるので、そこではないかと母屋を廻って井戸ばたへくると、次郎の姉の沢枝が洗濯をしていた。武夫の姿を見つけると沢枝は濯ぎの手を止めて、

「まあ、武ちゃんね今日は次郎は金村の喜八んと共に用事で行っているんだけど、もうすぐ帰るころだと思うけど」

と言って武夫の姿をまじまじと見た。

「武ちゃんももう長いカルサ（ズボン）がよく似合うのね、家でも次郎に作ってやったのよ」

ほほほと沢枝は笑った。沢枝は彼よりも年上だけど二人だけで向い合っているのが、武夫にとっては何んだか息苦しいようで落着けないのですぐに帰ろうと思っ

た。

「武ちゃん、次郎に何か用事でもあるんでしょ」

「いゝえ、ぼ、ぼくはまた来ます。」

武夫はぴよこんと頭を下げて帰ろうとした。

「武ちゃん、一寸お待ちね、今日はいいいものがあるのよ」と言つて沢枝はコジンニヤへ入るとお皿に盛った三時用のポーロ（ケーキ）を持って来た。

「食べて行きなさいね」

「いいんです、ぼく。」

「まあ、遠慮するのね、はずかしいの」

ほゝ、と沢枝が笑うと、武夫はますます赤く顔に血がのぼるのであった

「さあ、私がつつてあげましょう」

と、武夫がもじもじしている手のひらへ沢枝は一握りのポーロをのせてやった。武夫はむっちりした沢枝の滑かな手が不意に自分の肩にふれたのにびくりとした。

「まあ、あんた私より少し背が高いのね」

沢枝は驚いた風であった。武夫は何だか泣きたいような気持ちで小走りに走りながら背戸の小道を帰って行った。

日本語の夜学を武夫たちは始めることになった。昼間は働かねばならないので、日曜日と火曜日と木曜日の夜日本人会の会館で授業を受けることになった。日本人会の会長の杉田さんの長男は、旧制の日本の中学を出ているので夜学の先生になつてもらつた。

武夫たちの仲間ほとんど皆集った。夕食を早目に終ると手提げランプをさげて、植民地の中央部まで出かけて行くのである。川を境として一区二区というように分れていたが、その日本人コロニアの中に点在してイスパニア系とかイタリア系の移民たちの農場も五つ六つあったであろうか。武夫の家と次郎の家の間に道子の家があつて、その夜学のある夕方、武夫が道子の家の前までくると、きまつたように道子と里美も手提げランプを下げて出てくるのに出くわした。武夫が素早く小走りで次郎の家の方へ行きかけると、二人もまた武夫の後から「武ちゃんよう、待ってよう、待ってよう」と走ってくるのであつた。女二人に武夫は一人であるから、彼は走るのを止めて無言のまま次郎の家のあるパスト沿いの砂道をぱくり、ぱくりと歩いてゆくのである。道子も里美もほんのりとうす化粧の香をただよわせて、くっくっ笑いながら一緒に歩いて歩いていた。

次郎の家から会館まで家が五、六軒並んでいて彼と同年輩の男女がぞろぞろと出てくるのだ。或る者はピカピカと懐中電燈を娘たちの顔にあてきやつきやつと娘たちの誰彼を驚かせたりした。ここまできると今までおとなしかった武夫もぱっと電燈のついたように元気づいて、

がやがやとはやしたてたり走り廻ったりするのである。

暗闇を利用して娘の髪をひっぱったり、どんどん走り抜ける拍子に手をにぎったり、お尻をつゝいたりした。娘たちは「痛いっ」と大仰に悲鳴をあげたり、「武夫ちゃん、言いつけますよ！」と言ったりした。

会館は武夫の父の信作たちが入植して三年ほどたつてから建設されたもので、太いがんじょうなペローバやカネリンニヤの古木がふんだんに使用されて、地上から二米ほどもある高床式の建造物で、小学校と同じ敷地にあつてかつては彼等の自慢の建物でもあつたのだ。階段を上ると二米巾の廊下があり、板敷きの大広間には煌々たるガソリンランプが二つほど天井のはりからぶら下つて、川向うの連中などがやがやと喋ったり、ふざけたりして始業の時間までを楽しんでいた。

会長さんの息子の杉田の元さんは三十才位で、まだ新婚のほやほやであるが、ぴかぴかにポマードをつけた頭にナイトキャップをかぶつてすましこんでいた。「今晚は先生」と娘たちは殊更にげらげら笑いながら会館に入つて行くのである。娘たちと若者たちは左右に分れて席につくのであるが、その時もまた一時喧騒を極めるのであつた。

島の除草の終つたことや収穫の話、カミニヨン（トラック）を買つた話、馬の話、棉花の相場、カフェーの植上りとか、そういつた日常の話題がいかにも対手を意識した大げさに気どつた話しぶりで賑うのである。

娘たちの中で若者たちの人気の中心であり一番の器量よしはボテコ（お店）の茂子であったから、特別に若者たちはちらちらと茂子の顔色をうかがいながら話し合った。そうした時、茂子がにっこり笑いでもすると、若者たちにどっと氣勢があがるのであった。

先生の元さんは彼等がやゝ静まった頃をみはからい、一寸威儀をただして

「それでは今晚も一つがんばりますかね」

と、一つの日本語読本の課題をとらえて読み、書き、話し方と約二時間ほど講義をするのである。川向うからくる多吉や金村の喜八兄弟など何が何やらわからぬ講義に、ぼんやり眠気まなこをこすりこすり、大きなあくびを連発するのである。娘たちの幾人かは眠気のために、みにくく口をとがらして元さんの言葉を上の空で聞いているのであった。

事実、ブラジル生れの二世の若者たちにとっては、日本語なるものは難解そのものであった。二様にも三様にも一つの字が読めることや、一つの字句がこれまた二通りも三通りもの意味をもっていること、全く不可解至極のしろものであった。特別に漢字の暗記ともなれば、暗闇でものをさぐるような困難がともなうのである。或る娘は元さんに言った。

「先生、家のお父さんは修身の話し、すこしして貰えと言っとりましたぞな」

そのそばから少年たちは

「修身て何や？」

と娘の方へ向って口をとがらせて言った。ところが一番年上の星野三郎がにきびだらけのてかてか光る顔を変にくずして、

「修身て、よか嫁さんになることやな」

と大声でわめいた。彼の父親は九州の出身であった。次郎の一家は東京都の出身であり、このせまい植民地の言語そのものは、感化力のあるアクセントの強弱によって左右される傾向があつた。標準語とか何とか言つても、どうしても九州弁また四国の土佐の方言などが多量に混同されてくるのであつた。

娘たちの大半は一斉に三郎の方に向きをおつて

「まあ、うそつぱち、知らないくせに」

と言つては、ははは…、ほほ…と大口をあけて笑うのであつた。若者たちも一緒になつて

「うそなものか、よか嫁さんになることやな。それからよか子供たくさん産むことや」

はは…は…と皆をで笑い合つた。娘たちは意地になつて

「杉野先生、あんなうそでしようがな？」

と喧しく騒ぎたてた。元さんもやにやしなから「ま、三郎君のいったようなこともふくまれておるでしょうな」

と言うと、

「そうれ見ろ、知らないのはお前の方やないか」

と大阪弁の誰かがはやしたてると、今度は若者組にわあーと歓声があがるのであった。

南国育ちの若い男女は性的には早熟であるが、どこか幼いところのあるもので、またその反対のことも言えるのである。子供子供と馬鹿にしていたり、安心してきつていたりして、いつの間にか親たちが馬鹿にされていると言うようなこともしばしば起きるのである。うすもやの流れる夜の世界に白い梅の花が咲き、甘つたるいマモンの花やカフェーの花の香りがよんだなま暖い空気に満ち満ちる頃は、若い武夫たちにも道子や里美たちにとつても、いい知れぬ喜びに満たされる季節なのであった。

武夫の家は父母と兄の美代三及び弟の義樹の三人の男兄弟だけの家なので、割合いと年頃の男女は遊びにこないのであるが、次郎の家やとなりの道子の家になると、日曜日とか仕事のひまな日など若い者たちがわんさと押しかけて夜おそくまで騒ぐのであった。白いレンソを首に巻いて頭髮に安物のポマードをぬたくつた若者、半青年たちが馬を飛ばしたり、ごとごとトラツトールを運転して三々五々と集ってくるのである。娘の顔を眺め一言でも話せば本望なのであるが、ただ家内に娘の気配をかんじるだけでも青年たちは心に張り

を感じるのであった。

或る朝であった。武夫は弟の義樹と二人でセルカ（仕切り）の中へ馬を呼びいれてつめを切っていた。武夫は馬喰がしている赤皮のなめした前掛けをつけて義樹が馬の体を金刷毛でこすっている隙に、つめきりのみを素早く使用するのである。馬バエをばしつばしと追うはずみに、馬は体をゆすったり後脚を半ばあげたりするのでなかなかあぶないのである。

「おーよ、おーよ」

とたてがみをかき上げ、鼻づらをなでてやる。そうして馬をなだめすかしながらその仕事を続けていた。そこにのそりのそり、白ぶちのあるオランダーザ（オランダ種）のめ牛が入ってきて、散らばっているミーリヨ（とうもろこし）の皮をあさり始めた。美樹はそのくりくりした目で、め牛の張ってきた乳房を眺めていたが「武兄ちゃん、一寸みるよ、牛のめんちよ、すごくはれているよ」

と言った。

そう言われて武夫がそのめ牛のお尻の方をみるといつもみるしなびた不恰好な部分が、はれぼったく、心もち赤味をまして充血しているのに気がついた。

「蜂さしたんじやろうか？」

と義樹が言った。武夫はめ牛が近いうちにお産をする

ということに気がついていた。

父と二人で植民地の共有の種牛のところへ、め牛を引いていったある日のことを思いだして、思わず顔に血がのぼってゆくを感じた。もおー、もおーとせわしくなき続けるめ牛のお尻のところは、ちょうど今のようにはれぼったくなっていた。武夫は種つけ場のセルカ（柵）の外で父と種牛の管理をしている若い男の話を聞いていた。

「立派にはやりをしておりますがな、大概一回でしまりますじゃろ、どーりゃ、一つかけますかなはは………」
「こつちもたけっておりますぜ」

と、セルカの外の武夫には気がつかぬように男たちはげらげら笑いながら、め牛を四本柱のトメヤの中へ追いこんで、はなかんを両方の柱に二本のコールダでしっかりとしぼりつけた。

「こげんところはソルテローロには見せられませんわな、はは………」

「あんたも興奮するくみですな、はは………」

と父が若い助手の男の肩をたたくのを見た。

父はふとセルカの外で待っている武夫に気がついたのか、一寸むずかしい顔つきになって、

「武よ、お前は一寸先にボテコまで行って、釘一袋買って家へ帰っておれ」

と言った。武夫はだまっただまま、セルカの所からはな

れて一人でボテコの方へ歩いて行った。武夫は今まで彼の幼い頭脳でくるくる回転していた自然の生理というか、不可思議で未知な宿命ともいわれるものが、だんだんとその回転をゆるめてはつきりした姿を現わし、不安で救いがなかったうっせきしたにごった血潮も、新しいさわやかな流れとなつて心にひびきわたるのを感じるのであつた。

武夫は十四才である。彼はすでに全ての摂理というもののがわかつていた。しかし、義樹にはわからない。その澄んだ眼は全てのものを透徹させる力を持っているのだけれど。義樹がじつとみつめているその豊かな、しめっぽい一部分から、今にもめえーめえーとなき声をたてながら大きい牛の子が飛びだしてくるのではないかと、あぶなつかしい錯覚と楽しい期待に、武夫の胸はわくわくするほどの喜びにみたされるのであつた。

こうして植民地には人が生れ、豚、鶏、犬、牛などの動物どもが盛んに繁殖し、その発情する彼等のそばで、少年や少女の好奇のまなこが光り、言いしれない不安と期待のもとに彼等の一団は生長を続けて行くのである。

武夫は或る夕方、裏手の芋畑からマンジヨカ芋を掘りだして手車に積んで豚小屋まで運んでいた。二年越しのマンジヨカ（マニオク）は一株掘ると、石油箱一ば

いに入りかねるほどの太さであった。二米近くも伸びた莖を鋏でたたき折っては、その一端を持ってごつそり引抜くのである。やわらかい砂まじりの赤土をざざりざざりと大きな音をたてて、ムラタ（半黒娘）のふくら脛を思いださせる芋が現われてくるのである。そのざらざらする茶褐色の表皮がくるりとむけると、美白な成熟した甘肌が現われ、したたるようなまるで白人女の柔肌を思わせるような感触でさえあった。武夫はその甘美なる柔肌にながぶりとかじりつく。ポリポリと音をたてゝかじるほどに甘い乳にも似たマンジョカの味が口中いっぱいに拡がって行くのである。ふと武夫は背後に人の気配を感じてふりむくと、となりの道子が白いレンソを上にかけてプラット（皿）を持って立っていた。となりの新田さんでは今朝ポルコ（豚）を殺したのである。近所近辺どこの家でもポルコを殺すときはすぐ分るのであった。シツケイロの中からウギーウギーと断末魔の悲鳴をあげるからである。山陰の家であらうと川向うの家であらうと、一人でだまって殺して食べることはできないのである。月に一回か、または隔月に大概の家ではポルコを殺して自家用とするのである。その時には向う三軒両隣りには、必らず二、三キロずつの肉を配っておくのである。そうすると次の機会には、どこかの家から新鮮な生肉がとどけられるので、年間を通じてポルコの肉は絶えることなく食べら

れる勘定なのである。

道子の父の新田さんは東京都の出身なので、道子の言葉も東京弁というか、この植民地では他の者にくらべてきれいなのである。また、これは新田さん一家の人にとってひそやかな誇りでもあった。つい最近、T市へ行ってかけてきたパーマが、道子のまだ成熟しきらない顔を引立て、武夫にとっては少々まぶしい感じなのであった。しかし、人気のない静寂が二人に安心をあたえたのか、あたたかい二人の幼な友達意識がすっかりよりそうたような甘美な感情をかもし、サンダルをひっかけた道子の素足もはち切れそうに肉づきのよい二の腕も、武夫にとってあの五才の或る日の幼い情事とも言える日向くさい道子のオカツパ頭を抱いて、人気がない広いパストのやぶ影で、はねたり、ころんだりした記憶をよみがえらせる。

「武ちゃん、家でポルコ殺したのよ」

「あの赤毛のカツパード？（去勢）」

「うん、そうよ、あの雄豚よ。六アローバ位あるってパイ言ってたわ」遺子は積みあげたマンジョカの荷の上に片手を支えながら、上気した顔をじつと武夫にそそぎながら「あんたとこのめ牛が赤ちゃん産むのね。わたし牛のお産て見たことないんだけど……でもお産て恐いのね」道子は一人で頭をふる。誰しも恐いのである。しかし、武夫は事実を知っているから、道子の恐怖

しているものや未知の不安と言ったものを、何とか慰めてやりたいとも思う。しかし、ほの暗い不安の壁の中には、瞠目に価する絶対の神の摂理があり、滅びることのない自然のなぐさめが続いているのである。武夫が七才の頃みた、あの豊かなる情景とでも呼ぶべき、マンガの茂みから眺めた黒い大きなめす豚のお産の光景なのである。彼は今でもあの時の情景を思いだす度びに、心は和らかい光に包まれるような気持になるのである。死んだ祖母がまだ達者な頃であった。のこのこと裏手のポルコ小屋の方からもどつてくると、彼女は遊んでいる武夫に向って言った。

「武よ、豚小屋へ行ってはならんと。黒めんが子豚ば産んどるけにな」

武夫はきつと祖母の方をふり向いて

「なんで、ばあちゃんいかんと？」

「なんでってな、人が見ると子供食べてしまいうけにな」

と祖母は武夫を哀れむような眼差しであった。

武夫は恐しいことだと思った。母親からガリガリと頭から食べられてしまう、その逃げ口のない恐怖に幼い彼の心は巨大なしめ木にかけられたちっぽけな小動物のようなものであった。しかし、祖母にそう言われたものの、童子の好奇心は彼の行動そのものを止めることを許さなかつたのであった。幼い武夫はそろり、そろりと裏口のラランジャ畑の木影をしのびしのび、豚小屋

の横手に凍るマンガの大木の下までたどりついた。そうして、下枝の茂みから黒めんのいるシッケーロの中をうかがって見た。大きい黒めんは中のしきりの方に腹を向けて横たわっていた。大きいからだ全体に波うつような息を時々する黒めんのお尻の近くに二匹の小さい白と黒のまだらシャツを着たような子豚がひくひくと小さい腹を床につけてうずくまっているのだった。しっかりとマンガの下枝にしがみついた武夫は、息をつめたま、じつと瞳をこらしていた。トクトクと打っている彼の幼い心臓は不安と恐怖のために引きしめられ、その反動として彼の膀胱神経はゆるんでくるのであった。親豚は全身に力をこめてうーんと体をふくらませるようにはしてはそのままの姿勢をたもち下腹にうーんと力を入れるのである。そうしてお尻の局部に充血がひろがり、半透明の袋をかぶった肉塊がむっくりと出てくるのである。そうすると、今まで親豚の体にくっついてうずくまっていたまだらシャツの子豚が起き上り、その黒い鼻づらをもって今出てきたばかりの肉塊の膜を破り、現われでた自分の肉親の体をこすりまわる。そうされると彼はひよろひよると立ち上り、くんくんと新しい空気で小さい肺臓をみだし、親豚とのききぎりなある乳白色の細ひものようなヘソの緒をひきちぎり次に出てくる兄弟姉妹を待ちうけるのである。こうして出てきた各々お互いの助力によって、すつかりと片付

いて行くのであった。そこには苦しみもなく、また煩雜もない整然たる秩序が美しく展開して行くのであった。次々と産れてきた子豚の数は十二匹もかぞえられるのであったけれど……。

全く幼い武夫にとって、それは驚異の世界であり、心をゆすぶるほどの喜びが彼の魂をみたすのであった。その晩、武夫はこのことについて誰にも話さなかった。彼はすっかり満足し、ゆるやかに体をめぐっている健康な血液の温みを感じっ、誰にも知られない自信とでもいうようなものが、幼い心の中に生育し始めていった。

武夫はいつか彼の家の土地と川を境界として農場を持っている金村てつさんの次男の喜八と一緒に、川下の沼へトライラ（雷魚にいた魚）釣りに行ったことがあった。喜八はカーキ色のカルサをすねのあたりまでたくし上げて、もやもやと生えてきたすね毛をだしてバストの中を流れている川沿いにぴちやぴちやと水際を歩いてゆく。武夫より二つも年上の喜八であるけれど、彼は三年制の小学校を五年もかかって卒業したので、武夫とは学友でもありよいコンパネイロ（相棒）でもあった。下ぶくれの喜八の赤黒い鼻の頭と脂汗の浮いた頬ぺたにブツブツと出ているにきびが、何故か武夫に威圧するものを感じさせ、その彼の背中の広さに或る種の憎しみさえもおぼえるのである。しかし、武夫

もまた虚勢をはってそんな喜人と背較べでもするよう
に長い竿をかついで歩いて行った。沼のみえる場所ま
でくるとポルティラがあり、その門の内がわの砂地は
牛群の屯ろする場所で二、三十頭の牛どもが寝そべっ
ているのだった。ふと喜人は何を感じたのかにやにや
白い歯を出して笑いながら言った。

「武ちゃんよ、トーロ（雄牛）がめんた牛のめんちよ、
嗅いでなんで笑うか、俺知っているぞ」

「ふーん。そんなことば俺知るものか」武夫は答える。
「笑うことは俺だって知っているけどな」

パストの中では動物たちのこうした行為は白日の下
で正々堂々と行なわれていて、事実雄牛はめ牛のその
局部を嗅ぎ、またなめずって下唇をつき出してさも嬉
しそうに喜ぶのである。武夫だってそんなことは知っ
ている。しかし、喜人がいう何で喜ぶのか、何んで笑う
のかと訊ねられると大変困るのである。

武夫は喜人が搾乳場のセルカの中でしていることを、
ずい分前から知っていた。こんもり茂ったマンガの木
で取かこまれている柵の中で、喜人はめす牛の腹の下
にもぐりこんでふくらんだ乳首を口いっぱいにほうば
りこんで乳を吸うのである。地面に片手をつけて子牛
がするように顔をあお向けてごくりごくりと満腹する
まで飲むのである。め牛は子牛の飲むときとちつとも
変らぬ姿勢で、後脚を開いたまゝ、かいは桶から餌を食

べ続けていた。

喜八は柔い乳房に顔をいっぱい押しつけて、甘い乳の香にむせぶのであった。そうした喜八になんで雄牛が笑うのかぐらいの心理が判らぬはずはないのである。喜八はいつも牛糞と乳のにおいを漂わせている子供であった。

また彼の家全体が家畜の排泄物の臭いで包まれているような家であった。周囲はパストでかこまれた古い大きな板屋の家で、喜八達の死んだ父が入植と同時に苦心して建てたものであったから、土台にも柱にもがんじょうな材木を使用してあって、ほの暗いレンガ敷きの台所の中央に大きなレンガ造りのフオゴンがあった。この古い大きな家で夫の良太が死に、てつは十五年の長い年月、長男の房夫と喜八を育てつつ働いてきた。いわばてつにとっては堅固な城にも似た台所なのであった。そのただ広い台所の壁ぎわいっぱいペローバの乾いたレンニヤ（薪）が喜八の母のてつにとって、心の抛りどころのように大事に整然と積み重ねられていた。てつはこのレンニヤにはおいそれと手は出さないのである。日常のコジンニヤ（煮炊き）に使用する分はせつせとパストの上方のカフェーザール（珈琲園）から毎日のようにとってくるのであった。入植当時は若いてつ達夫婦と三才になった長男の房夫のみの三人家族であったから、なかなか夫婦の苦労は大変なものであつ

た。

夫の良太が死んだのは次男の喜八が生れて間もない頃であったから、てつは十五年も空閨を守ってきたわけである。

てつ達のこの農場は最初、イタリア移民のカルロスという老人の持物であったが、当時は大変荒果てたみすぼらしいものであった。土壁の家と小さい使用人の家が二、三軒という貧弱な佇まいであったけれど、ほんとに血の汗を流すほどの苦しみと戦って今のように着いた農場に仕上げてきたのである。夫の良太が死んだのもこの荒果てた農場と取組んだその過労が原因であったのだ。一時良太の死という突然降って湧いたような不運の中で、若い三十才のてつは茫然自失、ほんになす術もなく目先きの真暗になるほどの悲嘆にくれたのであったが、なんとかこの十五年の間、この孤城にも似た農場を守り続けてこられたのも、房夫と喜八という抛りどころが支えてくれたからである。また、最初のカルロスの時代からここに住みついている牛飼いのジュゼー・プレット一家が今にいたるまで陰日向なく働いてくれたからである。

てつはフォゴンの前に坐り、とろとろと燃える赤い炎の色をじっと見つめて動かない。そんな時にはきまったように死んだ良太のことや幼なかつた喜八の生れた頃のことを思い出すのである。その当時から喜八

は妙な子供であった。よちよち歩きの幼い喜八は母の日を逃がれてはセルカの中へもぐりこんでいき、め牛のしっぽにしがみついたり腹の下にもぐりこんで無心に遊ぶ子供であった。彼にとって人と動物の見境はないように思われた。

思えば喜八も生長したものだ。むしやむしやと蒸し焼きのミーリヨ（とうもろこし）をかじりながら喜八は母にたずねるのである。

「何んでママイは積んであるレンニヤ燃やさんのけ？」
てつはフオゴンの火をつくろいながら言う。

「何んで燃やさんと？まさかの時の用心によ。物は何んでもあるだけ使ってしまったええそれだけでお終いやないか」

と答える。

「銀行へ預けたお金と同じよの、使ってしまったええ何が頼りになつてくれるのけ？」

「何んぼあるものだって雨の日も風の日も、みんなコンタの計算に入れてからにかからんことには、いつかのようにお父ちゃんの亡くなったときのように困ることがいつだって起るものよのう。」

そう言つててつは溜息をつくのである。そうして豆の煮え沸ぎる音をききながら、今は遙か彼方にうすれはてようとする亡夫の面影を再び心に描き止めようとするのである。それに関連して長男の房夫のますます亡

夫の良太に似てくるその言動と風貌への関心なのである。思わずてつは一人でうんうんと頷いたり、あきれはてたりすることがあるのであった。日雇いのカメララーダたちとのやりとりや仕事に就く仕種など、良太が生前にしていた通りの様子を見せつけるので、てつは苦笑することがしばしばなのである。また二十才をとつくに過ぎた彼の下着を洗濯するときなど亡夫の体臭をじかに感じさせて、過ぎ去った夫との生活や忘れられない亡夫の体質などを想起するのである。そうして未だに彼女の耳に残っている良太の声を思い出す。「てつよ、てつよ」と段々に夫の声音は強くなる。そうして寝ている首の下を持ちあげられて乱暴に引きよせられていったあの頃の感触を思い出しては、思わずてつの顔に血がのぼり、さもなくても血色のよい顔が熱くほてってくるのだった。

牛飼いのジュゼー・プレット（通称。黒いジュゼの意味）の娘のジータは、みにくい顔の娘であつたけれど、気だてのよい娘でブジュウー（吠え猿）のような母親ゆずりの髪をした、唇の厚い目のぎよろぎよろした娘でぷりぷりした大きいお尻が、いまにもころげ出るのではないかと思われるほどだった。

てつはこのジータを愛して屋内の仕事の大半を手助けさせていた。ジータは大きなよく動く目をくりくり

させながらつを笑わせた。黒くすすけた大きな台所の調理台の一端にしつらえたカフェー豆をひくマキナを、ゴリゴリと廻しながらジータは体をくねらせる。そうして彼女はバイヨンの曲で唄うのである。

「よどんがも少しましな顔をしていたら

も少し色が白かったならー

よどんは決して房夫をほっとかない

だけど、よどんには房夫の心が分っているし、房夫にもよどんの心が分っているに」

と、ジータはおく面もなくバイオンをくちずさむのである。そうして喜八がにやにや笑ってそばで聞いているとこんなバイオンも飛び出すのである。

「喜八はよこ（牛の子）で甘ちようで

おなみ（め牛）の乳房で育ってきたが

もうすぐ彼もトーロ（雄牛）になつて

可愛いゝめ牛のお尻を嗅いで

にーたりにーたり笑うはず」

喜八は真顔になっていかるのである。ジータはさも恐そうな突拍子もない恰好をしながら、キヤツキヤツと悲鳴をあげてせまい台所を逃げまわるのである。ジータのこんな唄をてつは苦笑するのである。

「ほんになあー。お前がも少しきれいであつたなら、房夫と一緒にしてやったところで誰が笑う者があるうぞ」
彼女の目がしらにうつすら涙の浮ぶことさえある。こ

れは一つの宿命なのだ。黒人女が自分の宿命を諦観して自分より色の白い人種に対してのことへの一つの憐憫でもあるのであった。ジータは房夫より二才年下の十九才の娘盛りなのである。ジータの産れた時、産湯をつかわせてやったのもヘソの箱を切ったのもみんなてつなのであった。土間の片隅に敷いた古い麻袋の上にジータの母はうづくまっていた。夫のジョゼーはほの暗いカンテラのゆらめく片隅みの鉄のカーマに、これまたつゝ伏してうーん、うーんとうめいているのであった。妻の陣痛を身をもって味わうと言うのか、ジョゼーの目は充血し、うめきにも似た吐息をもらすのであった。そうした転倒したジョゼーをてつは叱咤して、かまどに火を焚き、用意の品々を取出させ妻のマリアの黒い半裸の半身に、家から持参してきた綿毛布をかけてやり、不安と恐怖に自失している女の冷たい手をしっかりと握りしめてやったあの日のことをも、てつはホンの昨日のことのように思い出すのである。

ジータは今は色が黒い。しかし胎内から出た時のジータは、血色のよい普通の色の皮膚とさほどのちがいはなかったのに、日数がたつにしたがって段々と色が濃くなって行くのであった。それは丁度ニューハンプシャー種のひなが、白色レグホンのひなと殆んど同じ色をしているそれと同じような具合なのであろう。どうにもてつは納得のゆかぬ気持なのである。黒い世

界では白色は異色のものであるうし、またこの白色の世界では黒は異色なのであって、全く救いのない神のいたずらとでも言う、哀れとも言おうか極限のない宇宙の果てを求めてさまよう解決点の求めようのない悲しさであった。

ジータはてつをママイと呼ぶ。

「ママイよ、ようは房夫の嫁ごになれるか、なれないか？　ようが一番よく知っているのに、ママイを苦しめるようなことは絶対にしないつもり」

そう言っではてつの坐っている方に向って手のひらをはげしく振るのである。てつが

「うん、うん」

とうなづくとジータの屈託もまたふっ飛んで丸っこいお尻の筋肉が殊更にぶるんぶるんと動くのであった。

「そうよのう、ジータの心だつてヨウにもよく分る。お前に早くよい婿がねが見つかるといいがねえ」

と、てつはつぶやく。ふんとジータは小鼻にしわをよせて、大きい目玉をくるくるさせて笑うのである。

(2)

房夫は飼料小屋の一室の鉄のカーマ(ベット)にポライナ(皮ゲートル)を着けたままの姿で横たわっていた。うるさくつきまとう馬糞をしめ出してから、うす暗

い部屋の皮臭い空気の中で、うつすらと目を閉じたまゝ昨夜のジョアンナ・セードラで行なわれたバイレの光景を夢みるように瞼に思い浮べていた。しっかりと誰にも渡したくない気持で抱いて踊ったジュキッタの香水のにおいが、未だに彼の体一ぱいにこびりついていふのだった。

サンフオ！ナ（アコーデオン）の曲音が高なるたびに、ジュキッタのうすも色の耳たぶに口をつけて、「ジュキッタよ、ヨウはお前が好きだ！！：ジュキッタよ：ジュキッタよ」

と彼はあらんかぎりの誠をつくした。

後悔のないすつきりした気持で房夫は昨夜のことを再び思い浮べているのだった。かるく閉じた瞼のうらはうす暗い。しかし、それでいて空しくはないのである。房夫の心は初夏のうす緑の風のように和かく回転する。「ジュキッタよ：」

彼はその幻に向ってつぶやくのである。そのむっちらしたイスパニヤ人の二世娘の体臭を再び思い出す。彼の清潔で健康な血が娘の体臭を感じることによって、極限のない奔放をくり返すのであった。

きゆうつとしめつけた娘の腰をしっかりと抱いて房夫はゆっくりとタンゴの曲にのって踊るのである。ジュキッタの頬に感ずる猫の毛のように柔く光るうぶ毛と、顔にふれてくる細かいかぐわしい頭髮の香りに、彼の心

はむせるほどの喜びにふるえるのであった。濡れたようにうるんだ二重瞼の底から、彼の心の底まで貫くようなジュキツタのまなざしを感じた時、また、しつとりと汗ばんだ指に力がこもり、弾むような胸の鼓動がはつきり感ぜられた時、ジュキツタは詠嘆にも似た溜息をもらすのであった。その時、彼はしっかりとこの娘の全てを所有できると感じた。その喜びのため、昨夜はまたしてもジュキツタの体温を、その甘く心をしびれさせるような体臭を感じ、息苦しくなるほどの接吻が夢中の彼の生理をも誘発して、夜着の下着はしつとり濡れてしまったのである。

午後の日射しはまだ高い。母屋の方からてつの房夫を呼ぶ声が聞えてくる。

「ふさよー。房夫よう。」

てつの声は尻上りに高くなる。しかし、房夫は寝ころんだまま動かない。じつくりと房夫は部屋のうす明りの中で、見るともなくほこりの積んだ太い大梁を見上げる。

彼はもの憂くて少々気だるいのである。何故か口の中が乾からびた感じで、ジータが運んでくれたポチの水をゴクンゴクンと飲みはす。そうして再びがさがさとの音のするコルシヨン（クツシヨン）の上に寝ころぶのであった。

死んだ父が使用した長いサーベルのようなファーク

ン（山刀）や三十二口径のエスピナルタ（ライフル）が板壁にぶら下り、また分厚いカネリンニヤの革細工用の仕事机の上にはこれまた父の遺愛の馬具が一式飾物のように置かれていた。

なんとというこの午後の静寂なことか！末だかつて味わったことのない心の安らぎが房夫にはある。昨年以來の気がかりであったジュキッタへの恋情の完成が目に見えているのである。誰が何と言おうとジュキッタはもう俺のものだ：俺は絶対にあの娘を守り続ける。このファーンコンにかけてもと、房夫はすわった目付きで決心を新たにするのである。いつもがさがさ騒音をたてる喜人もいない。母屋はしんかんと静まりかえつて、広いセルカ（囲い）の内庭で馬具を解かれたブロー（ロバ）が、日溜りでミリーヨを食べ続けていた。

二、三日後、朝食の終わった台所でつとジータは向い合って坐っていた。フォゴンの上の梁から梁へ渡された太い竹竿には、トツシンニョ（豚脂）の塩漬けがぶら下り、脂肪の浮きでた腸詰めがぎらぎらと光っている。火の絶えることのないフォゴンの上では、これまた昨日も今日も同じように厚い鉄鍋の中で、ぐつぐつと赤茶色の豆が煮えている。その傍にいるかぎり、てつはいつだって落着いた安らぎを覚えるのである。

しかし、今日のジータにはどうもいつもの明るさが

ない。頬杖をついたジータの瞳には、卑屈な影さえ見えるのである。

「ママイよ。房夫はナモーラしているに、ようはとつくに知っていたんだけどー」

ジータはそう言つて、てつの目の色をうかがつて見る。

「どこの娘とよ」

「ほうれ、ママイ、イスパニヤの（てつにはイスパニ屋と思えている）末娘のジュキッタよ」

てつはやれやれと思う。どうぞ、出来ることなら日本人の娘ツ子を嫁女にしたいと思つているのである。ジータだつてそうだった。房夫が里美とか道子を恋人にする分には、いささかの差し支えもなければジータの面子も誇りも傷つけられることはないのである。

しかし、それがイスパニヤのあのバルデラーマ親父の娘のジュキッタとなると、少々事情が違つてくるのである。何分にもこの地で生れ、同じように育つてきた同年輩なのである。色の少々黒いとか白いとかは問題にならないのである。ジータの目の色は何事かを真剣に物語り、あやしく光つててつの心に何事かを訴えようとしている。

てつはジータの気持はさて置いて、川向こうの広いパストとエスピゴン（境界の山の峯つづき）まで拡がったカフェー畑の持主であるイスパニヤと近所で呼ばれ

ている一族へ、何か嫌悪を感じているのである。あの赤ら顔のバルデラーマが妙にくねくねと女のように腰を動して歩く姿そのものへ対する嫌悪もあつたけれど、てつが良人を失つてまだ半年も経っていない頃のできごとであつた。

その頃、てつは乳房の張つた三十四才の女盛りであつたけれど、若い未亡人に対する人々の目のあまりにも獣臭いのにてつは驚いたのである。男性という人間の姿そのものへ信頼のおけない危険な、混濁した原罪の姿を見る思ひだつた。ほとんど言つていい男達がてつの体にめぐっている血液の色を透して見ようとしたり、てつの体の奥深くひそんでいる女の希みを引きだしてやろうとおせつかいをしたがるのだつた。

あまりにも露骨な男達への反抗は仕事の上に現われたし、こうした、男達の意図に対しては、先手々々と全ての野望を封じこめていったのだが―しかし、旺盛だつた良太との性生活の慣習は、てつの体の奥隅まで浸みこんでいたので、てつの肉体そのものは転々反側して眠られぬ夜が幾夜続いたことであろうか、忘れたような暗い思ひ出の心の部屋に、ちらりと射しこむ日射しのような色々のできごとが、てつの頭に消えたり浮んだりするのである。

あの飼犬のように従順なジータの父のジュゼーだつてそうだつた。それとは彼も言わず、行動に移してきた

わけでもない。しかし、てつにはわかっていた。彼の人間意識の外で体内の男という獣性が、うっ積した炎となつて噴きでているという悲しい事実なのである。

湯上りの寝巻きのまゝてつはどなった。

「ジュゼー。用事があるなら朝にしておくれ：」

てつの声音はきつい響きをもつて戸口に佇んでいるジュゼーを驚かせた。ほの暗い台所の入口からジュゼーの獣のような淫な目が光つて、そゝくさと闇の中へ消えて行つたのもその頃であつた。

イスパニヤのバルデラーマが不埒な行為にでたのもその頃であつた。そういつたことが特別にイスパニヤ一家への嫌悪となつて、いまだにてつの心に残っているのである。彼がてつに挑みかゝつたのも、今にして思えば時期が悪かつたのである。或る日の夕方のことであつた。傷心のでつは良太のしていた全てのネゴシオを行なつていかねばならなかつた。その日も所用があつて、セードラの町まででかけた帰途のできごとであつた。

町はずれから、バルデラーマのカロツサへ乗せて貰つたのである。州道からはずれて森の中のせまい道へ入つた頃、毛むくじやらのいかつい手がてつを横抱きにするように彼女の柔乳にふれてきた。てつは反射的にバルデラーマの横面を張つたのである。小心なバルデラーマは泣面をかいで、「奥さんよ！かんにん、か

んにん」と繰り返し、彼のそばから身を引いて睨みつけている。つを乗せたまゝ、カローサをがらりと走らせていったあの虫ずの走るような不快感を、つは今でも覚えていいる。

あの男の娘のジュキッタと房夫はナモーラをしていると言うのだ。やれやれとてつが思うのも無理はないことである。けれども。今のてつにとって彼等の若い生命とでも言おうか、野の雑草にも似た不敵な、自然に順応でき得る生活力の前に立はだかることの、如何に無役なることかはてつ自身がよくわかまえている。なるようにしかなるものか。ジータだって房夫が欲しいなら自分の才覚をもつてとつてしまえばよいし、ジュキッタだって房夫だって落着くところまで行く筈だ。しかし、考えてみればジータだって哀れである。この黒い娘の欲しがっているものを何であたえてやれないのか。てつの臉はうつすらと濡れている。長年こうして一緒に身近かに暮らしているせいにかあの黒人特有の臭いはてつの一家にはあり得ないものなのである。それとは別な親しい自然のまゝにとけ込んだ豊かな軟水のようなものにさえなっている。

てつが今のように出無精になったのには、それ相当の理由があるのである。武夫の父の信作と良太は故郷こそ違っていたが、同航海の仲間同志であったので、良

太と信作一家は言わば親しい親類づきあいのような関係にあったが、良太の死後何かと信作は親切にしてくれて、てつにとつてほんとの依り頼みは信作へかかっていたと言つてもよかつた。

しかし、或る日どうにも男手の必要に迫られて信作を一日家の仕事に頼んだ事があつた。そのねぎらいの夕食の時だしたピンガが、信作の疲れた体にこたえたせいか、彼は鼻歌きげんで家に帰つていった。それが妻の文代の嫉妬を呼ぶ原因となつてしまつたのである。

「信さん！ あんたこんなに遅くまで何していんさつた？」文代は月のものの最中でもあつたのか、ほつれ髪をそのままに――信作が一ぱい気嫌で家に入るやいなや浴びせかけたのである。信作はいつにない文代の顔付きの凄さに酒の酔さえさめるようであつたが、信作も家へ入るやいなや妻の様子に腹をすえかねて言つた。

「おどんはジャンタ招ばれていたんじやい。それがどげんしたと？」

彼は目をむいた。

「てつさんのもてなしがよくて、遅くまでいんさつたんでしょ」

文代はますます形相がつり上つてきた。

「女房子供のある者が、よその後家さんの家でこげん遅くまでお酒招ばれて」

「あ……くやしい」

文代は狂態でさえあった。信作の胸ぐらへかじりついて、わめき泣きするのであった。そうしたことが誰彼の口からてつの耳に入って来たのである。

何とも言えないくやしきであった。てつは齒をがちがち言わせて怒るのであった。

「ふーん。ヨウをそんな目で文さんまでが見ているとは」

特別に同性への憎しみがてつの胸に炎のようにこみ上げてきて、どうにも我慢のできない胸の張りさける思いとは、こんなことを言うのであるうか。そんなじよそこらの男達が淫らな目付きで見ると、てつは何とも思いはしなかった。しかし同性の者へは根深く残酷でさえあるのである。

信作は事実善良であり心からの親切をつくすのであった。そうしたことがちよくちよく起きてからは、用事があっても何かの手助けや相談ごとに呼ばれても、彼は何かと言わせて小早く帰って行くのであった。

てつも覚えているが、信作と文代がこの村へ入植した当時、信作一家には仮住居の家もなかったもので、てつの家の古い小さい椰子壁の家を借りて一年近くも一緒に住んだことがあった。そんなことのあった或る日、信作と文代がささいなことからいさかいとなり、良太やてつが取持って治めたことなどを思い浮べては、今の

文代が自分に対して抱いている憎しみの的が見当はずれであり、理不尽であることがたまらなく、てつにはくやしいのである。

それは、信作達がこの土地へ入植した年の秋であった。

サンジョンの火祭りの夜で寒々とした月の光が煙りぽい夜のもやおぼろに照らし、方々の家ではボコンボコンと花火をぶち上げるのである。火祭りとも霜よけ祭りとも言うのであるが、この夜は日が落ちてくると、どこかしこで子供達が屯して、この音の出るだけの味も素っ気もない花火を、ここを先途と打上げるのである。夜の大気をゴクンゴクンと振わせて、大きい三発弾の花火が中天に轟き渡ると、子供達は手を振り空を仰いで やったーと歓声を上げるのである。また、この夜にそなえて荒山の焼残りの大木や木株を若者達は前々から庭の空地に集められるほど集めて積み重ねて置き、夜に入るとこれに火を放つのである。ばりばりと火の粉を飛ばせて、焰は空高く中天をもこがす勢いで燃え続けるのである。

その焚火を囲んで子供達はうろちよると駆けずりまわり、各々の小遣い銭をはたいて買入れて来た花火を夜半近くまでかかって打上げるのである。バストでは、その時ならぬ破裂音に驚いて若馬たちが荒々しく鼻をな

らして、月光の白々と照らす広いバストを駆けずりまわるのであった。

信作の家では長男の美代三も幼く、そういった火祭りではしゃぐ子供も集っては来ず、ひそやかなカンテラのにぶい光りの下で夫婦の睨みあった感情がますます険悪な空気をかもしているのだった。

「貴方だって自分の仕事ばかりにかまけて、私の体のことなどちっとも考えてはくれないんですものー」

文代はその頃次男の武夫をはらんで、四カ月の身重の体であったが、まだ風呂にも入らない夕食後の砂埃りを浴びた汗臭い野良着のままの姿で、いぼ尻り巻きの頭髪も横っちょにねじれて虫歯の痛みに暗いみじめな表情が、なんとかこの切迫した空気から逃れようとしている信作の意識をつかんではなさないのであった。

ことの始まりは、信作達の地続きの横川さんの息子の嫁の千代さんが、二、三本しか残っていなかった歯を抜いて、立派な総入歯をしてすっかり若返って町から帰ってくるのに信作が道で出会ったと、夕食の話題に話したのである。いつも見ていた頬のそげた老婆のよくする口をつぼめたような表情は、その日の千代さんの顔から消えていた。

「新さんの嫁女にはたまげてしまったよ。全くよ。千代さんすっかり歯ば入れて花嫁さんのごつなっていたっけ」

新作は火酒をちびりちびりなめながら、文代の横顔に目を注ぎながら話したのである。

「あんた、新さんの嫁さんとどこであつたんですう？」
文代の尻上りの言葉には穏かならぬものが感じられたが、次に言った信作の言葉がいらいらしていた文代の頭にかちんと来たのである。

「女は身だしなみよのう。なんぼ貧乏していたって、ちつたあ頭の髪でもすいて油でもつけんこつには、問題にならぬたい」

そう言つて文代の顔と千代さんの若返つた顔と比較でもするかのように眺めやった。

「それは、あんたの甲斐性の問題と違いますか？わたしの歯だつて、今に始つたわけでなし、あんたがお金できたら一番にわたしの歯ぐらいなおしてくれたいじゃないの？　金が無いの？　金が無い、金が無いと繰り返言ばかり言つといて、仕事ばかりさせながら新さんの嫁さんなんかと比較されてたまつたもんじゃないの！　お白粉も紅もつけて貰いたかつたら、たまさか町へ行つた時、あんた買つて来てくれたらいいじゃないの？」

口をとがらして文代の早口が続くのである。

「そげんな意味でよどんは言つておらん。ただ女つてものは、便所臭くないこつちつたあー小ざれいにするこつたと言つたまでで、お前がどうのこつちの言つてはおらんばい」

信作はそう言うってうそぶいてはみたものの、いきり立っている文代の感情はおさまるところか、みじめな現在の境遇や妊娠にともなう不安ないらだちが、ゆすり上げるようにこみ上げてくるのでさえあった。

「新さんここではカミニオン（トラック）も買いんさつたし、町さ行く時にや、千代さんも連れて二人で買物して、シネマまで見て来んさる言うに。ーわたしのこと、あんたちつとも考えてはくれさらん、こげん人とは思わなかった」

と、文代の双眸は醜悪にゆがみ、じんわりと涙の玉が光って頬をつるりと一すじすべり落ちる。

「文。そげんこつ言葉が過ぎるぞ」

信作も無能呼ばわりされてみると、どうにも責任を回避することの困難さを心に感じて、燃えさかっているような文代を一気に押えつけようとして言った。それが極点にまで沸騰して信作も文代も常識をはずしてしまったのである。

「あんたがー」「オセイがー」という言葉も「何貴様が」無能力者がー」「お前のようなそゝけ婆が」といった悪罵に変わって信作は酒の力も手伝って、始めて文代の横びんたをはりあげ、頭髪をつかんで椰子壁にごしごしとこづきつけた。文代も負けてはいないで、がむしやらに涙と鼻水のみにくい相貌に変わって信作の体にむしやぶりついていた。

小さい家のことだから、二人のわめき声はつゝ抜けにてつのコジンニヤにとびこんできたのであった。めったにそんなことのない信作達夫婦のことだったから、てつも良太もほっては置けず二人の中に割って入ったのである。

「まあ！ まあ、信作どんも奥さんもそんな乱暴せんかて、落着いて」

とひげ面の大男であった良太は信作をメーザの方に抱くようにして連れもどし、てつはてつで文代の小柄な体を後からしっかりと抱いてやるのだった。しばらく二人はふうふう言いながら睨みあっていたが、信作はメーザに頬杖をついたまゝ、「どうにもこうにもつまらんことで、文代の奴があんまりつまらんこつくどくどぬかすので」とぼそぼそ言った。文代は美代三の寝ている寢室のカーマに身を伏せておいおいと泣くのであった。

事実、このブラジルへ来た当時二十才であった若妻の文代も、慣れない過激な労働と貧弱な食生活の影響ですっかり歯を悪くして、次男の武夫を身妊ったこの頃急激に体内からカルシウム分の欠乏を感じるのであった。皮膚はぎらつき昔の面影はすっかり失っていた。近頃ふえてきた虫歯は荒山の焼跡の片付けなどの重労働の後には、ずきんずきんと痛みだして眠られぬま、に不覚の涙がついつい夜着の袖をぬらすのであつ

た。

信作だってそんな文代の感情は判りきっている。(可愛そうだけれどの今の俺達の境遇ではどうにもならぬ)だからこそ信作は誰にともなく腹が立つのである。乱暴に戸棚を開けて火酒のびんの一杯入ったのを取出して、たて続けに二、三拝飲みはした。そうして信作は文代に聞かせるとなくぽつりぽつりと話しだす。

「よどんもそのこつでどうでも良いと思つては居らん。出来ることなら歯ばなおして今にでも入歯してやりたいと思つている。しかし、の、文よ、実のところ現在のところどうにもならんことは、お前にだつて判つているに。今年の棉相場ときたらカマラーダ(日雇い)の食代もでんような安値だし、今年分の山代の払込みだつてもう期日は迫っているしなあ、まあ、来年まで待つてくれんことにはどうにもならぬ。ご飯だつて柔く炊いてお前の歯で食べれるように(信作は柔いご飯は好まなかつた)なんでも作つてくれても、よどんは一向にかまわぬから、なあ、文よ、元気をだそうや」

そう言つて、小さい文代の後姿をいつくしむ感情が信作の声音を優しいものにしていた。

「あなたがそうわけの判るように言つて下さればわたしだつて我慢できるけど、いま先のようなこと言われると、わたしだつてつい我慢ができることだつて、そう言いたくなつてしまうのよ。何もわたしは今が今と言つ

たんではなし、もう三年ほども歯が悪い、歯が悪いと言っているのに、日本のお母さんにもこんな暮しのことなんか知らせたくないし……」

と、文代はしゃくり上げながら子供のようにおいおいと声をたてて泣くのであった。

そうした彼達の取残されたような味気ない部屋内の空気をよそに、満月近い明るい寒夜の空ではボゴン、ボゴンと三発弾の花火の轟音があたりの空気をふるわせているのであった。

あの女学生上りの若妻の文代の湯上りの時よくしていたお下げ髪がよく似合った小作りの顔と、きらきら光るつぶらな瞳を信作は昨日の姿のように覚えていたが、この現実の文代には何か仮屋の二階に倅ずむ遠い知人の姿でもみるような、悲しさと虚しさを感じさせるものがあるのであった。

信作達の土地境を流れるリオ・ツルボ川の下流の沼は、むし暑い炎天の続く十二月の半ばを過ぎる上、浅い泥水の上よどみはぐつぐつと沸ざるような異様な臭気を漂わして、メタンガスの気泡が無気味な水草の中からボロンボロンと湧き続けるのである。そうして、マラリヤ菌を小さい軀にいっぱいにつめ込んだ稿模様の足長の蚊の群が、湧水の上よどみに発生してくるのであった。雨はぐずついた空から轟然たる雷鳴をともない牧場も、

村も焼跡の畑地も一瞬の間に白い瀑布の彼方に姿を消して行くのである。

「今度はどうもあかん、この暑いのにぞくぞく寒気がして、五体がこわばってどもならぬ」

と言つて男どもはニンニクを浸したピンガを顔をしかめながら咽にはうり込むようにして飲むのである。埃のつもった吊棚の片隅から昨年買っておいたパルダンの注射薬をとり出して、お尻の筋肉にこの青黒い液体を打ちこむのである。

或る家では収穫期に入った棉や米などの収穫を家族のマラリヤのために中止して、虚脱したような青黒くむくんだ顔の誰彼が、うそ寒いふところ手のままで溜息をつきながら、白々とふき出て地上に流れ落ちそうな棉畑や黄金色にかしいでいる米の畠を、いても立つてもおられない焦燥にかられながら眺めやるのであった。

こうした季節の変動の中で、信作達は自分の土地の経営にせつせと働き続けた。

信作は井戸の底から「おーい。文よ、もう少しラツタ（缶）を下におろせよ」

とうすもやのようなガスの溜った井戸底から、地上で滑車の取手を握っている文代にこもった声でどなると、文代は「おーよ」と答えて二巻き三巻き網をゆるめて

土揚げのラッタを下すのである。小石混ざりのかたい土をガリガリとけずり取ってラッタに八分目ほど入れては「よっしや」と下から綱を引いてどなる。

文代は全身の力をかけて滑車の取手を巻く。一瞬の油断もゆるされないのである。井戸底の信作の生命は文代のものであり、一本の巻揚げ綱にぎりぎりときしみをたてて上ってくるラッタの土が、しつかりと文代の手で片寄せられて地上に置かれた時、文代は大きく呼吸をはずませて安心するのである。

掘り始めて今日で六日目になるであろうか、井戸底は生臭い油の臭気に似たかすかなガス臭を漂わせて、カツンカツンと信作の打ち込むはしの先が、小石混ざりの固い土層に火花を飛ばせて荒い信作の呼吸音が、じつと下をうかがっている文代の耳に切なく聞えてくるのであった。

「信さん、大丈夫？」

文代は時折り下にむかっていたわるのように言うのである。

「よっしや。ラッタ下せよ」

文代は汗にまみれたひたい髪をかき上げては、そろりそろりと全神経を集中して綱を下してやる。もう十二米ほどの深さに達して、水近い砂まじりのピサラという地層に達して、上に引き上げられた土の塊りはしつとりと水気をおびて来ていた。

「文よ、水ば近いよ」

信作はうつとりとするような表情で上から見下している文代の顔を見上げていう。二人とも疲れているのであった。頭脳のもうろうとするような気だるさが襲ってくるのだけれど、再びがちんがちんと信作はつるはしを振り続けるのであった。そのような重労働の続いた夜など、体の華著な文代の五体には、しびれたような疲労の波がひろがって眠るともなく夢を見るのである。綱を放したら全ては絶望である。身うごきしてはいけないのだ！ 文代は全身の力を込めて誰かにしがみついて行くのである。彼女のにぎりしめた指の力がぬけた時、果てしない空間をどこまでもどこまでも転落して行くのである。

「信さん。 信さん」と文代は呼びつづけるけれど、全て手応えのない暗黒の闇の世界なのである。文代は絶望のもとに 「うーん。うーん」と泣き声にも似たうめきをもらして、そばに眠っている信作を驚かすのであった。

「文よ、どげんしたんじゃ？ ひどくうなされている」

信作は眠っている文代の背を抱いて引寄せ、耳に口をつけて文よ、文よ」と子供でもあやすようにゆすぶつてやるのである。文代はもうろうとした半睡の中で信作の体の重圧を感じとり、大きい吐息をはいて信作の胸にしがみつくのであった。二人の体は一体となり、し

めつけられた体はぐるぐる巻きにされたみの虫のそれにも似て、はなすこともはなれることもでき得ない余裕のない感情の渦の中に沈んでゆくのである。そうした夜半など文は思うのである。

「信さんだって男ぶりだに」

てつさんはきつと、夫の信作を求めている。信作だつてきつとそうだ。あんな肉付きのよいてつさんの体が、なんで男なしで我慢できようぞ：指を折って文代はてつの夫の良太の亡くなった月から、今までのてつの一人寝の月日を数えてみるのであった。

おせつかいでなく、文代には真剣な気がかりなのである。

文代には三人目のお産が近づいていたが、今度だけはてつの世話になりたいとは思わなかった。

「文よ、そげえこつ言つてよどんに臍の緒を切らするか」

信作にとっては文代がそう言つてごねると、大変な事態が起きてくるので文代のわがままにおいそれと同調する気持になれないのである。

信作は土間の食卓に坐つたまま、ぼんやりと蚊やりの煙をみつめながら、何とかてつにお産の世話をしたいのであった。文代が何を考えているか、信作にも分らなくはないのであるが、臨月に近く異常につき出たお腹を、文代は砂糖の空袋をほどいて作つた岩田

帯でしめながら、ほの暗い隣りの部屋でだまっていた。文代にとっては、てつの家は彼方の森の一軒の距離に遠のいてしまっているのであった。

頼りになるものが一体どこにあると言うのだ。一皮むけば男だって女だって何かの油断をみすかしては飛びかかったり、噛みついたりするんだもの。文代にはまた文代の理屈があるのである。

南の大陸にも春はやってくる。常緑の森にも柔かいビロードの様な新芽が出揃って、サビア達が、赤くうるんだ胸毛をはって黒土をあさりまわる頃、まだ冷たい小雨のしぶく日が続いて農家の人も気忙しい土地作りに追われるのである。

開墾の手をやすめて信作は子供達の働く姿を見やるのである。

「美代三よ。もう一寸根っこからはなれたところから鋤を入れんと、骨折るばかりぞ。直接お前は根っこを引抜こうとするごつあるで、力ばかり使ってはかどらんのじゃ」

と信作は、息子へ叱言めいた注意をあたえる。しかし、美代三は我かんせずと若い力いっぱいにとしんどしんと黒土へ深深と鋤を打ちこんでゆく。州境の山脈を越えてうすら寒いもやが流れて、背骨にしみるような寒さが信作のすじばった五体を痛めつけ、口ぐせの

ように「やれ腰痛やのう」と言っては掘起した切株に腰を下してズボンの横のボルソから縄タバコを取出してけずるのであった。

それもこれも全て、二十数年かかって彼が会得した落着いたポーズの一つではあった。父のそうした姿を子供達は意識の中に認めようとしてもしない。武夫もまた美樹も兄の美代三に遅れまいとして、鍬を力いっぱい振り続けるのである。信作はゆつくりと時間をかけてけずった縄タバコを、しめった手の平でゆつくりともみほぐして、ミリーヨ（とうもろこし）の皮を小刀で切り揃えてタバコをしっかりと巻くのである。

てつにせよ文代にせよ、お互い若い時の考えは真剣で生臭い一途なものであったが、喜八や武夫達の世代が始まっている今日この頃、てつは一人でうんうんとうなずくことがある。

「そうよね。人間は誰だって業というものがあるんだから、そう容易すくは救われない。文さんだって私だって同じよの。」

てつはそんなことをとりとめもなく考えていると窓の外から拡がっている牧場の果てに湧いている白雲の去来にも似た心の空洞に、たまらなく亡夫の良太を慕う気持が渾然と湧いてくるのであった。今度の房夫とジュキツタのカザメント（結婚式）には、文さんに是非とも采配をふるってもらって、披露宴の段取りをして

もらうことをてつは考えていた。

「喜八よ、ママイは久しぶりに信作どんの家さ行きたいでな、ジュゼーにそう言つてカロツサの用意させといてな」

いつだつてどこにも行かない母がそう言うので、喜八は呆気にとられててつの顔を眺めやると、てつはいつものようなゆっくりした足どりで立上るのであった。

(一九六二年)

壁の中の仲間たち

島木史生

略歴 本名、金高繁登、一九三三年一〇月一日、広島市宮島に生まる。一九四五年、呉市荒神町小学校卒業。一九五一年、呉市三津田高校卒業。一九五四年、日大芸術学部卒業。一九六一年渡伯、現在に至る。現在の職業、技術コンサルタント。

文学歴、一九五二年、「市井文学」

同人。一九五八年、「国文学」同人。一九六二年、第六回パウリスタ文学賞受賞、作品「流れはさらに遠く」。一九六三年、第四回農業上協同文学賞受賞、作品「壁の中の仲間たち」。、「コロナア文学」会員、中央委員、

壁の中の仲間たち

島木史生

(1)

逃れるような、或いは、誰かを探し求めるような足取りで、雑踏を掻分けながら歩いていった。

その友田のそそくさと、小股に急ぐ歩調には、どこか浮草者らしい薄暗い影が尾をひいている。安香水と人いきれ、煙草のヤニの匂い人間くささの混入した雑踏へ迷い込んだことを友田は後悔していた。

こんな場合、常に、頭上から襲いかかるのが例のいたたまれない孤独感、全く慰めようもない悪質なもの。流れる通行人に些かの親和感も感じられず、自己のぐるりは常に冷い真空世帯が取巻いており笑いも、囁きも、怒りも、憎しみも、友田の胸には響いてこない。友田が歩く方向だって、確かな道があるわけではなかった。

突然、夜気を切って、鋭い摩擦音が身を襲う。防音装置を施した銃口からはじき出たような渴いた音だ。雑踏をむさぼるように泳いでいた友田はその摩擦音を耳

底に受けとめて首を捻じ曲げた。巨大な黒人の、輝きのない、視線がそこにあり、「エンングラツシヤ・日本（靴みがかんか）」、ぶあつい唇が痙攣するのを友田は見て、恐れる如く視線を逸せた。その時、友田の背後に女の冷たい笑い声が舞い上っていたが、それはいま、友田の横をすれちがった背中だけ美しい女の唇から漏れた誇り高き笑いだった。友田は、目抜き通りのしらじらしさを感じながら、歩速を早めた。

同時に余計者心理に追い廻されていた。右手にかなり重い鞆を提げていたが、その鞆の端が幾度も通行人の体にふれてゆさぶられるのだ。支える二本の足は小児麻痺的に虚弱であり疲労の集積された足の裏は熱っぽく腫れ、友田の体さえふらついていた。

のろい歩調の通行人を幾人か追い抜き、街頭のブツクシヨップの前を通りかかったとき、前方の明るいシヨウウインドーの前に、物欲しげに突立っている旧知の千野を認めて、友田は、その場へ立ち止った。千野との邂逅は下宿Mの二階を出て以来半年ぶりのことだが、不思議に懐しさも親しみも感じない。そればかりか千野を認めた瞬間から声をかけないで素通りしようと考えていた。

月並みな立話し、仲間の噂をすることがひどく煩しいことに感じられたのだ。

午後九時のイピランガ大通りである。華々しく装っ

た人ごみの中で黙って通り過ぎれば気付かれる心配は、まずありえなかつた。千野は「オールド・イングランド」の宝石店の飾り窓を覗いていたのだが、半年前より見窄らしく痩せこけて、一層さらに貧弱だつた。皺だらけのYシャツを腕まくりして、小脇に小さな風呂敷包を大事そうに抱えていた。見るからに日本人らしいその姿が直ぐ友田の視線を引き止めたのだが、辺りの着飾つたブラジル人の中で千野の姿は、いかにも不釣合であり異色だつた。友田は目の前に立っている一人の貧しい同胞にある種の羞恥を感じながら、千野の背後を忍ぶように逃げようとした。しかし千野は、まるで、そこへ友田が来ることを予期していた如く突然振り返つて友田を見た。

友田は千野から言葉をかけられる前に、その場へ立ち疎んでしまひ黙って通り過ぎようとしたことに心がとがめた。半年前も、そうだったが、いまの千野にもやはり馴染めなかつた。「やあ」千野がいくぶん調子の狂つた声を發した。友田は通行人の冷い視線が一斉に自分たちへ注がれるのを全身に感じ、あやうく走り出すところであつた。千野の「やあ」という掛け声は周囲のブラジル人に素頓狂なわめき声に聞こえたに違ひなかつた。友田は押黙っていた。ひどく不愉快な氣特に包まれていた。千野が近寄つて右手をさしのべた。友田はその手に軽く受け答えながら、千野の異様な相貌に愕然と

した。というのは、千野の顔に数筋の浅い切疵が浮いていたからだ。

肩が力なく落ち、いかにも病的だった。まるで藪の中から這い出たような相貌なのである。

「どうしたんだ！」

田は、ややうろたえ気味で、あたりの通行人に気を配りながら低い声で千野に訊ねた。顔の切疵に対する質問だった。

「昔からショーウィンドーを覗くのが好きでね」

千野はショーウィンドーの前に物欲しげに立っていたことを弁解するように、しかし、かなり太い声で押しつけるような言い方をした。

「美しいですね。いま、プラチナ台に小型のイタリヤ真珠をはめ込んだネクタイピンを見ていましたが、あれには孤高の輝きがありますね。宝石の光に比べれば、人間の善意の光なんて全く無きに等しいようなものです。見てみませんか」

友田は全く狼狽していた。切れ目なく流れ行く通行人の青い視線が全身をちかちか刺すからだ。

友田は一人のみすぼらしい同胞を前にして慰めようもないほど孤独になった。

「いゝよ、少し歩こう……」

友田は千野に聞きとれないほど低く、日本語で答えることを恥るような言い方をした。一刻も早く目抜き通

りの立話を切り上げて、千野から離れたいと願っていた。

二人は歩き始めると直ぐ裏町へそれた。道の半分が工事中でその工事側の歩道には足場板やコンクリートの塊が散在していて、ひどく歩きにくかった。

「ぼくは、あの大通りの人ごみが好きで、よく歩くんですよ。むせかえる脂粉の香や豪華な衣裳、花火の如き浪費、人間的なあの愚劣さが好きなんですよ」

友田は、おやつと思った。半年前の千野とはまるでちがうからだ。あの頃の千野は、こんな風にぽんぽん跳ねる男ではなかった。半狂人で白い顔をして、真夜中に突然目をさまし、おいおい泣き出す男であった。千野はどこかで自己欺瞞を行なっている。それは見窄らしい姿を隠すためのポーズなのか、それとも仲間達に共通な、見えすいた虚勢なのか、或いは本当に狂ってしまったか。

「まだペンソンMにいるの？」

友田は皮肉な口調で千野に訊ねた。裏町の工事中の道路とはいえ通行人はかなりあったが、友田にとってすでにその視線は目抜き通りで感じたほど気にならなかった。裏町の薄暗さが友田に息を与えた。

「最近下宿人が増えましてね、一段ベッドが蚕棚のように二段になった。ぼくは、値段の安い地下室へ下りました」

友田が千野に嗅ぐものは、泥土の沈んだ溝の悪臭であった。その匂だけが執拗に友田の鼻先きにちらついて離れなかった。潮が満ちると河口から逆流する河水が友田の住んでいた家の前の溝まで押し寄せてくるのだが、その時、強烈な悪臭を伴ってきたものだ。いま千野にかぐものが、その匂である。溝を挟んで両脇きに居並んだハモニカ長屋、一日中絶えることのない子供達の泣き声、主婦の愚痴、のんだくれ亭主の醉笑、遠い国の薄ぎたない残像だった。しかも、どす黒く朦朧とした残像なのだ。

その残像に重ね合わせて友田は千野を見た。さらにその果てにペンソンMに集っていた汗くさい仲間たちが現われるのだ。クリーニング屋の小僧だった松崎、東畑というバーテンくずれ、それに電気屋の半職人だった柳川と渡り者志鶴、

「皆んな、まだ一緒なの？」

「出た人もいますが、だいたい顔はそろっています。柳川君を知っていますか？」

「あゝ、君と同郷だった柳川君」

あいつは、いやな奴だった。友田はそう思ったが顔ははっきり思い出せなかった。

「彼、今朝死にました。それで今夜は通夜なんです」
「死んだって！」

友田は虚を突かれてぎくりとした。「柳川の死」に対し

てでなく「死」という決定的な言葉が友田の心を突き刺したのだ。全く、予期しない言葉であった。足もとがぐらつき、死に対して激しく反応している自分を感じた。柳川の死に対する憐憫ではなく、友田の心に燃えている焦燥の炎に千野が発した無造作な言葉が油となって注がれたのだろう。孤独な異国での生活が死に対する敏感さを養うのかも知れない。数十本の白毛まじりの頭髮が、格子縞の模様を描いて目の前にちらついていた。その幾何模様を描いた頭髮は友田の両親のもので、それはスーツケースの底に角封筒に入れられてひっそりと納っている。しかし、死を告げた千野は表情ひとつ変えていなかった。友田が動揺していることを逆にいぶかしがっているかのようだ。

「交通事故だった。車の数が増えるだけ事故の数も増えますよ。全く道理というもんだ。今朝、リベルダーデでね、出勤しがけだった。脳内出血で頭が牛の首ほど腫れあがっていました」

千野の言葉はひとつの事故統計を説明しているような淡々とした表現である。柳川の死の生々しさは二人の間には微塵もないのだ。毎日何件か起きているに違いない不運な交通事故についての話題でしかなかった。

「あいつ、死んだのか。そうか、死んだのか」

友田は動揺しながら口の中で言葉を噛んだ。しかし千野は柳川の死を平然と述べた如く、友田の動揺に対し

ても心を動かすことはなかった。

「ぼくは、近いうちに日本へ帰るんだ」

千野は感情を交えないで冷く言った。その無表情な顔の切疵が友田には一層気味悪かった。言葉の意味さえ理解できないほど死に対して動揺していた友田である。今、目抜き通りから裏町へ逸れ、道巾が狭ばまったせいか、高層ビルの谷間を歩いていることが友田にはそれら恐しく突然、頭上のビルが瓦解を始め、熱帯的な驟雨の如く襲いかかる土塊の雨の眩惑にとりつかれていた。無惨な姿で路上へ叩きのめされた自分の姿、脳内出血ぐらいではおさまらないだろう。死体はどこへ埋められるのか、墓石ひとつ建つ可能性もありはしなかった。〈母親はなぜ、あの湿った土の中へ帰ることばかり願ったのだらう〉そう考えたとき友田は空耳のように聞いていた。「柳川の死」が突然耳もとでうなり出し、柳川への憐憫を僅かに感じてきた。

「今年の夏は郷里の静かな河で泳げるだろう」

「誰が帰るって？」

友田は皮肉に反問してから、きつと頭上を睨み上げた。一個のレンガが友田をめがけて落下してきた。思わず顔を逸らせたとき、前方に工事中の標識である赤ランプの光が目にとまった。ひと玉が燃えながら通り過ぎたような錯覚だった。急いでその幻覚を払い除けた。

「ぼくは、数ヶ月以内に日本へ帰るんだ」

「きみが、帰るって……」

友田は千野の言葉を疑っていた。この男は正常じゃない、柳川の死に表情ひとつ変えないで、郷里の河で泳いでいる自分の姿を連想するのは、正常な神経の持主には出来ないことだ。千野の連想がたとえその夜の蒸し暑さから起ったものであるとしても、そう言う無神経な言葉の続け方は尋常とはいえないだろう。しかも千野には精神の狂いかけた過去があるのだ。友田が「妙だ」と判断したことに無理はなかった。

「こゝを通り抜けよう」

千野は、ビルの下を別の通りまで突き抜けているギャラリーの前で友田を誘った。従うことが当然であるような言い方だった。この男とは一刻も早く別れねばならない。

友田が「こゝで」といゝかけたとき、

「通夜に行くんだろう」と千野が言った。

それで友田は別れの言葉を言いそびれてしまい、千野の後へ従った。ギャラリーの中は、丁度地階の映画館が何回目かの上映を終了し観客が地上へ吐き出されてくる瞬間だった。二人はその人波にのまれてしまい、友田は再び激しい動揺にとりつかれていた。わけもなく落着かないのだ。

ギャラリーの両脇のショーウィンドーは末だ悠々と輝いていた。友田にはそれをのぞき込むことの興味は

なかつた。買うことの出来ない品物、欲しくもない商品を眺めるほどの好きでもなかつた。千野はインディオの彫像が、むやみと多く並んでいる薄気味悪い窓の前に立止っていた。友田は、その中に飾られている商品ではなく、窓に映った千野の亡者の如き影を見詰めた。「日本へ帰るときこの中から土産を選びます。何がいいだろう？」

しかし友田は答えなかつた。千野が問いに対する答を欲していないことは確かだつた。千野の心の中にこり困った幻影には他人の言葉の入り込む余地はないのだ。友田は、千野に出会つたことを後悔し、焦燥し、同行する　ことのいたゞまれない淋しさは涯しなく増大していた。

その日友田がイビランガ大通りを徘徊していたのはうかつにも、バスを乗り間違えたからだ。八時までA通りの或るアパートでブラジル人の女教師からブラジル語の個人教授を受けていた。その日は、一日うだるような暑さだつた。仕事を終えそのままC夫人のアパートへかけつけ一時間半の授業を終えた友田は目まいがしそうなほど疲れきっていた。肉体的な疲労のみでなく、そのアパートを出るとき、いつも或る種のむなしさを感じるのである。

或る種のむなしさ、他国の言葉が思うまゝ習得できな

いことのアセりもあつた。また闇くもに同化しきつてしまいたいと願う心の反面、異国の風に抵抗を感じながら生きねばならない自己矛盾：深い亀裂の中でもがいている不安があつた。一年もC夫人のもとへ通いながらC夫人と語つたことは、果物はマンガが好きだとか、一人の旅行は楽しいとか、買物の会話など、要するに他愛ないことだ。しかし仮りにお互いの言葉をよく理解し得たにしても、語り合うことは何もないだろう。もう四十に近いこの夫人について友田は何も知らない。C夫人にしても、一億分の一にすぎない塵のような日本人の友田に興味を感じるものは何もなかった。友田が教えを受けるのは、薄暗い広接間の丸テーブルであるが、C夫人の人柄や趣味を察するとしたら飾りつけや身のこなし方から判断するより方法は無いのだけけれども、友田はこの夫人がどのような性格の女性であるか全く判断がつかないのである。

言葉の不足は無口になる場合もあるが、逆にひどく饒舌になる場合もありうる。表現が廻りくど、しかも通じにくいからだ。C夫人に対するときの友田がそうだ。生来、口数の少ない友田だが、むやみと多弁だ。知つていゝ言葉を総て吐き出し、訴えるような喋り方だが、何を語りたのか。友田は、その自分に気付いて呆然となる。

夫人は必要以外なことは絶対に喋らないのだ。友田に

とってC夫人は一冊の教科書にすぎないのである。金文字の書籍が並んだ書架、カクテルグラスの飾ってある飾棚、胸まで沈みそうな深いソファ、ペルシャ絨毯南欧を描いたものらしい二十号の風景画、そしていつも閉されている二つの扉、不思議にそこから一人の人間が現われるのも、そこへ誰かが入るのも友田は見たことがなかった。

呼び鈴を押すとC夫人がにこやかな表情で友田を迎え、二人は丸テーブルに向い合って座るのだ。一年間、C夫人の不在だったことは一度もなく、友田もまた、一週間に一度の授業を欠かしたことはなかった。にも拘らずC夫人の存在は友田の胸に迫ってこない。教科書に用いている小学用の読本を開き、C夫人が先ず読んだから友田があとを読む。丁寧に発音の訂正がある。舌を捻じ曲げ、口先を突き出して正確さに近ずこうと努力するのだ。しかし、友田の二重鼻音、摩擦子音ば常に不完全であり曖昧である。何度も言い直す。C夫人は決して投げやりにはならなかった。うんざりするの友田であった。

「呪文のようだ」と友田は思う。祈祷師を前にして悪魔払いをやっているような錯覚に陥ち入るのだ。アパート特有の沈滞した空気のただよいが、そういう発想を起させるのだろうか。やがて、友田の発音は、ごく正確に近い言葉となって飛び出すのだが、すでにそれは

友田とは無縁のものだ。言葉だけが浮き上って宙に舞い意味を失った交響曲となる。その呪文を数度繰り返し返してから、C夫人は「よろしい」と低く言うのだ。友田は心の底で畜生」と叫ぶ。C夫人へではない。己に対してそう叫ぶのだ。しかし、この言葉は生きている。心の中で叫ばれた言葉は直ちに友田の神経を刺戟するのだ。友田は身振をする。そしてC夫人の口もとを見詰めながら、毒薬の後を追ってゆくのだ。

C夫人のアパートを出ると、A通りの高いビルの上に輝く電光時計を見上げるのが友田の習慣だった。腕時計がないからである。いつも二十時何分かだ。彼がバスの停留所まで歩く間に末尾の数字が「一」だけあがる。この通りには普通バスとトロリーとが走っているが、下宿へ帰るには普通バスを止めねばならない。しかし友田は目の前に停ったトロリーバスに何気なく乗り込んでしまう。乗り間違ったことは二度や三度ではない。この夜も友田ほうかつだった。イピランが大通りに来るまで自分が別の道を走っていることには気付かなかった。おびたらしい人ごみの中へ吐き出されてから、疲労は孤独感を誘い出したが、千野に出会ってからは更に輪をかけて拡ってゆき、逃げ出したい感情は、ギリギリの処までふくれ上った。

「日本へ帰ったら奈良に住もうと思っています。つつま

しく生活したい」

千野が振り返って友田を見た。そのとき始めて千野の顔の切疵が顔を剃るとき切ったものであるらしいことに友田は気付いた。全く不器用な奴だ。この男に一貫性のある言葉を期待するのは無理なことだ。もともとこの男には定見がない。もつとも定見のないことが、定見だという皮肉な一面もあるにはあった。

「日本を出て、始めて日本の良さが判ったよ。ぼくは、帰ったら奈良へ行きます。中学の修学旅行で一度行ったことがあるけど、奈良は静かない町ですよ。それに古い都ですしね。君、奈良を知ってる？」

月並な愛国者の言葉であった。

「知らないな。行ったこともない」

千野の質問には、友田が奈良に限らず日本について殆んど無知であることを了解した上での間であることが露骨に表われていた。そういう意地ぎたなさは柳川のやり口だった。こんなとき、友田はいつも相手に対して無愛想になる。相手に対して無愛想であるだけでなく、友田自身、或る種の焦燥感にとりつかれるのだ。実際、友田が日本について、殆んど知識のないことは事実であった。

思い出すのは、ただ満潮と共に匂ってくる泥水の悪臭と、数十本の頭髮を埋葬するために出かけて行った山腹の、そこにぽっかり口をあけた暗い洞窟であった。そ

れ以外、友田の記憶に残っているものは殆んどないのだ。何度か話合ったことのある職場の仲間、村役場の下級役人、漁師たちのむくんだ顔、朽ち果てた船の残骸、村人たちが誇る夕暮れの島影も、友田にはどす黒くにじんでしまった墨絵なのだ。どのように残像をむさぼってみても、よりどころとなる追憶を引き出すことは不可能だった。

友田が生れたのは北朝鮮の羅津である。両親はそこで小さな雑貨商を営んでいた。四平街へ嫁いでいた姉が一人あった。戦争終結を促進するためとの理由でソ連軍が一斉に国境を越えて進撃してきたのは八月九日の未明であった。友田がまだ十一才のときであった。一家は鴨緑江を渡って満州へ難を逃れた。四平街へ嫁いでいた姉の安否が気かりだったことや、関東軍の拠点であった満州同胞の多い南満を安全地帯と判断したからだ、しかし一家は四平街へ行き着くまでに満人の民兵に依って抑留された。吉林の郊外だったが、日本の敗戦を知ったのはその抑留所内である。

極度に人々は混乱していた。歴史の曲り角を見詰めるには、友田はあまりにも稚すぎた。ただ収拾のつかない混乱の中で、自分達がどうしてもたどり着かねばならない国、祖国の土を想い続けた。しかし友田の母親は四十六年のまだ冬の明けない三月、極度の疲労と衰弱

で満州の土になった。息をひきとるまで、祖国へ帰りついてから死にたいと呟き続けた。異国の土に没する限り死後の安らぎは得られないものと、それだけが不安であったようだ。凍土に埋葬するまえ、父親が白毛の目だつてきた母親の髪を切つて、その半分を友田に持たせた。親子が離別しなければならぬときの事を危惧したからだ、父親のその予感は一カ月もたたないうちに的中した。抑留所内の日本人間に作業問題で騒動が起き、数人の指導者が謀叛罪として無裁判のままシベリヤ送りとなった。

友田の父親もその中に含まれていた。そのとき父親も自分の髪を切つて友田に持たせ、万一のことがあれば母親と共に郷里の墓地へ葬るようにといい渡した。

友田は両親の頭髪を入れてある角封筒をもう十数年持ち歩いている。墓地まで持ち歩かねばならない厄介な荷物であった。

抑留所から林という中国人農家に使役に出て、その為に帰国も遅れて日本へたどりついたのは、二十九年の一月だった。友田は二十才になり青春の活力をすでに広野の中に失っていた。藁蒲団に寝ころんで毎夜毎夜考え続けたことが、墓場のある両親の故郷であった。海に見える山腹、夕暮れの浮ぶごとく島々、両親から幾度も聞かされた祖国の姿を描くことがただ一つの楽しみだった。

佐世保へ着くと友田はその足で瀬戸内海に面したS村へ帰った。帰った、というのは或いは友田にとって正しくない表現かも知れない。そこは、「他人の土地」であつたからだ。訊ねる者は一人も居なかつた。父親や姉の生死すら判らなかつた。二三両親を知っていたという村人が居るにはいたが、さらに転っている戦争悲話に耳をかす者はなかつた。村役場の世話で或る小さな町工場に就職できた。S村に着いてから翌々日、夢にまで見た山腹の墓地を訪れた。しかしそこに友田が見たものはぽっかり口をあけた巨大な洞窟だつた。S村がK軍港に近かつたため、戦時中火薬や軍物資を隠すために掘つた洞窟なのだ。すでに無一物のただむなしさだけを感じさせる空洞だつた。地下水の点滴がひどくあわれっぽい音をたてていた。板切れや新聞紙が散在していた。そのとき友田は矢鱈にわめきたかつたのを記憶している。しかし何に対して喚けばいゝのか。

洞窟の入口に立つと村人が誇る内海の静かな光景が目の前にあつた。死んだ如き静かな海だつた。凧が耳もとで鳴つた。友田は足もとの凍みついた黒い土を一振り握りしめた。この土の中へ帰りたがつた母親がひどく哀れに感じられた。

友田は遺髪 of 埋葬を取りやめて持ち帰つたが、それ以来墓場まで持ち歩かねばならない荷物となつた。

友田はいま千野の薄ぺらな郷愁を腹立たしい思いで

聞いているのだ。この男が気の狂いそうなほど思いつめる日本とは何であるか。おそらく千野はその総てを知らないだろう。千野もまた一億分の一という塵にすぎないのだ。吐息にさえ煽られる極小の塵埃なのである。千野が日本を這い出した動機は何であるか。友田は知るよしもない。しかし千野が典型的な現状不満型であることは事実であった。とにかく日本を抜け出してしまえば別天地があると考えていたに違いないのだ。千野が常に愚痴っていたにちがいない因習、小煩い感情のもつれ、国土の狭さは、千野がたった二年異国へ出ていた間に変るものでは決してないのだ。

依然として愚痴や不満の種はそこにあるのだ。とはいえ、この男が帰るとすれば地球上どこを探してみたところで日本しかないのも事実である。九十九パーセント日本人であることの宿命を背負って、千野は結局祖国へ帰り着こうと考えるのか。

千野がベンソンMの二階へ柳川と二人で移って来たとき、彼は殆んど発狂寸前の精神状態であった。下宿人の出入が激しいペンソンで千野と柳川が移り住んだこと自体さほど取りたてて騒ぐほどの物珍しいことでもなかったが、柳川に会ったことは友田にとって決して愉快的思い出ではなかった。その頃同じ部屋には松崎と東畑、もう一人柳川と千野が移ってきてから直ぐ南

大河州へ旅立った風来坊の志鶴がいた。見るからに小ずるそうな小男だった。友田は、彼等のすべてに馴染めなかつた。馴染めないばかりでなく、心から同宿の仲間たちを軽蔑していた。彼らとても同様、友田に好感は持っていなかつたお互いに共通の広場の中で語り合える仲ではないのだ。

思い思い勝手な夢を描いて、しかも、やっかいなことには、それぞれの幻影を胸の中に暖めて誰にも傷つけられない為に閉じていた。可能性の確率はゼロに近い幻影なのだ。クリーニング屋の小僧の松崎は、クリーニング屋を最も嫌うが結局それしか能力の無い男であった。友田より二つ年下の二十五才だ。彼の夢は将来洗濯屋を開業することではなく、目抜き通りに何か大きな店を構えることだった。この松崎と友田とは同船のいわば同じ出発点に立った仲間である。バーテンくずれの東畑は東京の一流バーでシェーカーを振ったことがあるという噂だったが、サンパウロへ来てからは中華飯店のボーイであった。中華料理の国際性に目をつけたのか、日本へ帰る途中、香港へ立寄って本場の味を身につけるのだといきまき、料理人で月収十万円以上のものは中華料理を除いて他にはないとくだらない事を考えるのであった。報酬の高に依って職業を選ぶことはすでに一般化し常識になったがそれはそれでいいとしても東畑の職業の選択には矛盾があり長つゞきしそ

うもないのだ。どだい、ブラジルにきて中華料理とはへんな話だ。

東畑は友田に中国語を学びたがった。中国語が話せるのと話せないのでは収入の点で差がつくというのであった。彼は殆んどブラジル語に対して興味を抱かなかった。友田はこの東畑が最も嫌いな男であった。中国人のレストランに働きながら、東畑は中国人を軽蔑していた。

中国人を軽蔑するときの東畑は日本人の排他性を極端に表面化するのだ。友田は中国語を教えてくれといわれたとき、殆んど日常会話が思い出せないのに自分ながら驚いていた。確かに林家で話していた言葉は中国語に違いなかったが、不思議にそれらの言葉が思い出せないのである。健忘症にかゝった如く過去がもともと存在しなかったように浮き上ってこないものである。

言葉だけではなかった。あらゆる過去の出来ごとが総て消滅しているのだ。昨日すらすでに曖昧だった。こんなとき友田はひどく慌てた。朝鮮語のいくつかも知っていたが嘘のように忘れ去っていた。朝鮮や満州の追憶はすでに黒い幕の中に閉じ込められていた。しかし東畑が軽蔑的な語調で中国人を批難するとき、友田は猛然と東畑に対して腹が立った。

志鶴という南へ下った男は、どうやら一箇所に腰の

落着く男でなかった。誰よりもいわゆる、ブラジル通だったが、志鶴が移民生活六年目だというだけでなく、転々とする放浪がつまらない知識を与えるのだ。彼の話の中には一度も善人の現われることはなかった。彼自身は大陸をさまようことを「トランク人生」とボヘミアンの表現を用いるのであるが、根は勘定高い吝嗇家のようなであった。松崎にしても志鶴にしても金のある生活ならたとえ不毛の砂漠であつても構わないのだ。志鶴は「うまい話」をくそ蠅のごとく喚ぎつけて移動するのだが、話ほどでないと判るとまたサンパウロへ舞いもどつてくる。

サンパウロへ住んだ仲間たちは再びサンパウロへ舞い戻つてくる。そんなジnkクスめいたものがあつて、志鶴もまた例外ではなかった。一ト月たゝないうちに舞戻つてき 「日本人街」を徘徊していることもあつた。

友田の接した仲間たちは例外なく金に対して敏感だった。誰かが儲話を持ち出すと、聞き手の総てはその話を笑つて聞いた。そのくせ、思い思いに儲けることの計算だけはやっているのだ。しかし、それはあくまでも数字だけの計算だった。いわゆるHOW TOの発想より「もし」という副詞で始まる仮定法の考え方が主体であつた。外車を買ひ、サントスカリオの海岸に別荘を持ち、ロイラ（金髪）の娘と恋をして、どうやら、挙句の果てが日本へ錦を飾つた旅をすることが想いの至る終

局だった。しかし彼らとて可能性の限界に突き当らないほど無知ではなかった。

日に日に、自信の喪失を積み重ねてゆき無気力となり、とどのつまり「帰国」に依って問題を振り出しに戻そうと考えるのである。

夜、消燈後のベッドの中で松崎と志鶴が寝つかれないまゝ思い詰めたように語り合うのを友田は息ぐるしく幾度も聞いた。「奥地で牛を飼う」話から「こけし人形」を製造する話まで、考えつくアイデアは陳腐であった。しかも情けないことには話は例外なく話だけで終るのであった。しかし話し合っている間だけは、どうやら、百パーセント成功の確率があると信じ、それが束の間の慰めとなるのだ。要するに自慰であった。幻影に溺れる自慰であつても彼らの頭から黄金の輝きを取り去ることは不可能ごとだ。高級車の幻影はあらゆる価値観に優先するのだ。それ以外、どこを探しても目標の定め処がないことも事実であつた。

「扇子作り」で儲けた話、或いは「トマテ作り」で当てた話を聞くと仲間たちはみじめなほど動揺するのだ。そしてあせつた。慌てもした。その後で「当てた奴ら」を猛然と攻撃するのだ。

こんな仲間たちの中へ、柳川と千野がまざれ込んだ。二人は四国E県の同郷だった。同じ船で同じ村から同じような安ものの夢をもってやって来たのだ。二年前

である。欲求不満の爆発する厄年だった。千野はすでに半狂人で、仲間たちの虚な目つきに慣れていた友田も千野の虚脱しきった表情には驚かされた。ペンソンの主人に案内されて部屋に這入ると千野は挨拶もせず無遠慮に部屋の中をじろじろ見廻し、「いやな匂いですね」そう言っつてづかづかと窓ぎわに歩み寄り鎧戸を開けた。東畑がその場に居たら奮然と食ってかかったに違いなかった。松崎が露骨に不快な表情を示して千野を見詰めた。向いのビルの三階はクラブであった。坂道に沿って建てられているこのペンソンMの二階は丁度隣接のビルの三階の真向이었다。土曜日の夜だと必ず夜会が催される。ビルの小脇にレンガ造りの製パン工場の煙突が覗いているが千野はそれから吐き出されている煙を見て「あ、あれは焼場の煙突ですね」と吐いたのだ。千野の言葉に答えたものは一人も居なかった。型はずれは例外じゃない。ただ松崎が「ブラジルに焼場なんかあるもんか、ここは土葬の国なものな」と小声で友田にいった。千野は友田の其近くに立っていたから、千野の耳にも達したに達しないが、千野はただ阿呆のように突立っていた。

その夜柳川が、千野は精神異常者であること、少くとも精神分裂の初期であるに違いないことを全員にふれ歩いた。同部屋の仲間に限らず、その夜のうちに千野のことはペンソン中にもれなく拡った。精力的に柳川が

喋って廻ったからだ。「同郷の友」として見捨てるわけにもゆかず、全く厄介な荷物を抱え込んだと、千野に対する同情すべき状態の説明よりも、自分がいかに千野に対して献身的であるかを強調したのだ。大体、柳川は自分のことを矢鱈に喋りたがる男であった。海軍大佐の伯父が居たとか、遠い親戚に国会議員がいるとか、そんなことを聞きもしないのに喋りまくるのだ。自分の生いたちから家系の末端に至るまで報告するのである。昔は柳川家と千野の家とが地主と小作人の関係であったことまで自己紹介をやったのである。自分の家柄については千野が良く知っていると、千野をその証人台に据えるのだが残念なことに千野は否定も肯定もしないのである。柳川にとっては気の毒だった。輝ける家柄がちつとも光らないのだ。しかしいずれにしても信じる者が居ないことは、千野の証言があろうとなかろうと同じことだ。物ごとを信じないことに仲間たちは慣れすぎていた。動物的な喚覚で疑惑を喚ぎ分ける能力があるのだが、一旦疑い始めると底なしの沼に向って沈んでゆくのだ。柳川は電気屋の半職人だが、最高水準の技術を身につけたエンジニアであるように、這って逃げるような嘘を平然と喋ってのけた。友田が朝鮮生れであることを、柳川が知ったとき、彼は極端に友田を軽蔑した。それは東畑と同様だった。しかし友田がこのような「他生者」扱いを受けるのはこ

のときが始めてではなかった。

村の小さな町工場へ就職してからも友田に安らぎはなかった。春夏秋冬の単調な煉り返えしで四年間は瞬く間に過ぎ去った。友田が帰国したときすでに講和条約は発効し朝鮮戦争は休戦協定が調印されていた。鳩山内閣、日ソ交渉、国連加盟、石橋、岸内閣と世の中は矢継ぎ早に変って行った。ソ連のICBMの成功が世界に新しいテンションを生んだ。しかし漁村の空気は全く変わらないのだ。友田の住んでいた海に近い長屋の溝には、泥臭い海水が十年一日の如く、繰り返し繰り返し流れ込んだ。

泥水の色もねばっこい悪臭も変らなかった。しかも友田は村から一步も外へ出たことはなかった。数人の工場仲間と愚痴っぽい隣人たちと厭きもしないで顔を合わせた。

どれも同じように色褪せた顔色だった。それが友田の世界の限界なのだ。三十二年友田に渡伯をすすめたのは職長のKさんだった。友田にしてもKさんにしても、ブラジルという国があることは知っていたが知識は皆無であった。「緑の魔境」という映画があつて漠然とそんな国だろうと想像していた。無理もないことだった。空のかなたはど遠い国のことだ。Kさんは村役場で移住者募集の告示を見たとき、どうしたわけか直ぐ友田のことを思い出した。多くの人たちが押しかけてゆく

から、いい処に違いないとKさんは考えたのである。友田は移住するには最適な男だ。満州で苦勞した男だし、係累はなし、同じ苦勞するならやり甲斐のある苦勞をした方が得というものだ。Kさんは友田にいった。

「お前さんは、身軽な体だから、ひとつ南米へでも渡つてひと働きやってみないか。こんな狭い漁村で石に噛りつくようにして生きていても、うだつは上らん」

Kさんは、友田の渡伯に熱心だった。実際、友田を支えるものは何ひとつない。財産、学歴、家柄、「村人」である以前に「引揚者」であった。余所者なのだ。大陸から携えて帰ったものは両親の頭髪だけだ。一介の引揚青年がハイ・ソサエティにのし上るのは万に一つだ。数少ない出世譜だ。それは誰もがよく知っていて、それを希めば野心家と中傷される。諦念の哲学だけが辛うじて生活を保つてくれるのだ。友田には、その閉された未来に立ち向うだけの気力はなく、激しい生存競争に打ち勝てる自信もなかった。熱心に渡伯をすゝめたのはKさんだけではない。誰もが諸手をあげて賛成なのだ。ブラジルがどこにあるのかさえ知らない人間が賛成するのだ。口を合わせたようにすすめる理由もKさんと同じであった。

逆にシニカルな村人たちは「どこへ行っても同じことだ、ええ事はない。どこの国も同じことだ」と友田を制す。

生きていることが、つまり愚劣なことだ。呼吸をしている限り、どこの国であろうと するに苦勞の種にすぎないのである。この村人たちは金輪際小さな村から動こうとはしないのである。村は退屈きわまりなく平穩なのだ。

しかし村人たちの心の底には、友田を孤独な引揚者と見て見詰める冷たい目があった。

出発の日、それは物々しい見送りだった。駅頭では村長が祝辞を述べた。

「縮少された国土の中へ、満州大陸から百万、東南アジアから百万、支那その他から百数十万、日本は、いよいよ狭くなった。息をするのも遠慮しなければならなくなった。それを思うと南米大陸は別天地である。気候温暖、寒さの心配は勿論いらぬ。これからの青年は大いなる希望をもって国外へ雄飛すべきだ。

それがとりもなおさず国際交流であり、民間外交というものである。日本民族の榮譽ある伝統と文化を世界に拡めて戴きたい。この友田君は、敗戦の苦汁を満州大陸でなめて生き抜いてきた不撓不屈の青年であります。今日、雄躍壮途に着くにあたって、私は、君の前途洋々たるものを信じて疑いません」

友田は不思議な思いで村長の大時代な演説を聞いた。この村長も実は何も知らないのである。お祭り好きな村人であった。

友田は三つのトランクを持って村を出た。いきなり代表選手に仕立てられて気恥しい思いであった。すねて考えれば、お前たちが帰国したので、日本はいよいよ狭くなった。先ず人間処理が先決だ、とも取れた。しかし、すでに四年は過去であった。一步、村を出てしまふと心残りとなるものは何ひとつ無かった。愚痴っぽい隣人や工場仲間の顔が平坦な露出の悪いネガチブに還元され、遙かに遠い出来ごとに考えられた。その中でぽっかり口をあけた空洞とねばっこい泥水の悪臭が執拗につきまとっていた。

友田は立ち止っている。その前を何ものかが物凄い勢いで遠ざかってゆく。影のような、或いは乳色にかすんだ霧のような奥深い何かが、遠ざかってゆく。友田は自己の生きている位置をどのように定めていゝのか判らないのだ。歴史の末端でただひと呼吸するだけのことか。

友田は、自分の異名が「支那」であることを知っていた。口ぎたない東畑がつけたものだ。東畑は陰口の好きな男であった。友田が朝鮮生れだと知っているのは同航者だった松崎以外は居ないはずだから喋ったのは松崎に違いなかった。

東畑の排他性より柳川のそれは一層徹底している。柳川の頭の中では朝鮮生れは要するに朝鮮人だった。友田が四年しか日本に住んでいないことも友田から日

本人の資格を取りあげる理由であった。柳川の友田に
対する態度は、ブラジル生れの二世たちにも同じよう
に適用された。「日本人の顔をした非日本人」これは「人
間の顔をした人非人」というほど強烈な否定の意味を
持つ言葉であった。しかし柳川がどのように友田を捻
じ伏せでみたところで、彼の誇らしい顔が輝きを増す
わけではなかった。ホテルの制服を着たドアボーイに
日本語で軍隊号令を掛けて喜ぶ柳川であった。彼の偽
ナシヨナリズムには東畑さえ憂慮していた。

その柳川が、いやが応でも千野を狂人に仕立ようと
するには理由があった。千野の発狂に依り移民の悲劇
性を実証しようと考えていたのである。ここに一人の
同情すべき同胞がいる。農家では懲役に等しい労働
だった。幾度もぶっ倒れて砂を噛んだ。都会へ出てくれ
ば激しいインフレの荒波である。お互いの胸の中は石
のように固く閉ざされている。柳川は祖国の両親へ連続
的な帰国嘆願の手紙を書いた。手紙は柳川の実家だけ
に送られたのではなく、千野の実家にも、おせっかいな
手紙を書いた。千野は、すでに発狂してい、自分もやが
て千野のように狂うだろうと、叫ぶような文章を書い
た。柳川にとって、千野は狂人であってくれなければ困
るのである、勿論、千野の確な異常はそんな柳川の気持
を察したうえでの狂言ではなかった。千野は柳川とは
無関係にただ矢鱈に帰りたがった。真夜中に突然目を

醒してベッドの上にひよこりと座り、おいおい泣き出す姐末であった。柳川にとっては好材料であった。その夜のうちに千野の両親に手紙を書いた。泣き濡れて泣き濡れて、涙が渴いたとき自ら死を選ぶかも知れないと女学生じみた手紙を書いた。

ノートに草稿をとって、それを皆んなに読んで聞かせるのである。千野が黙って聞いていたのは、正常でない証拠であったかも知れない。

ギヤラリーを抜けてから、二人は両脇にぎっしり車の駐車している一層薄暗い裏町を歩いて行った。友田は疲労困憊していた。千野は何度も立ち止ってはシヨウウインドーを覗き込んだ。先入観があるせいか、千野の態度が正常とは思えなかった。小脇きに抱えている小さな風呂敷包みは何だろうか、と、友田はふと考えた。しかし、想像もつかない中味であった。本のように角ばっていた。

「日本へ帰りたいとは思いませんか」

千野がいった。言葉の裏には、友田がこのような問いを好まないことを承知の上でいっているような皮肉な調子が含まれていた。

「別に帰りたいとは思わないさ、君のように帰る家もないしね」

友田は、やゝふてくされた調子で答えた。この男から

逃げ出す術は見当らなかつた。すでに柳川の通夜に行くことは心の中で決めていたが、千野とはなるべく並ばないようにして歩いた。

「蒸し暑い夜ですね、雨でしようか」

千野がぼそりといった。

「そうだね、雨かも知れない」

ふと気付くと千野の靴底がぽかぽか口を開いて鳴っているのだ。そのぽかぽか鳴る音が千野を余計みじめな男に感じさせた。

「仕事は？」

千野が訊ねた。その問は友田が千野に対して訊ねたいことであつた。

「相変らず錠前工場に勤めているよ。君の方はどうしているの？」

「先月、日本から送金があつて、何とかやっています。いまは何もしていません。手につかないんですよ、何をしても。早く帰れるといいんですが」

「柳川君、気の毒だったな」

「まったく可愛想だよ。あいつ、もう少しで気が変になるところだった。帰りたいたい、帰りたいたいいつもいつてた」

千野の言葉を聞いていると、友田は妙にちぐはぐな気持になつた。もつとも、日本へ帰れると決つた千野が元氣を取り戻し、何かの事情で帰れない柳川が動揺して

も不思議はなかった。しかし、その動揺にも終止符が打たれたのである。数十本の白毛まじりの頭髮が幾何模様を描いて友田の脳裡に映し出され、その映像と重り合って母親と柳川の二つの顔が、不鮮明に浮び上った。こういう幻覚に襲われるとき友田はなぜかいちいらしてくる。

両脇に立ち並んだ高層ビルが音をたてて崩壊してきた。

千野は、そのビルの壁に小さな風呂敷包みをすらせながら歩いていた。ビルの壁の暗い窪みで男と女が抱擁していた。千野があわてて横へ飛んだはずみに友田の体へ強くぶち当たった。友田は手にしていた提鞆を手から落した。

鞆の中の数冊の書籍が濁いた音をたてた。

「失敬、驚いたよ」千野が言った。

友田は黙って鞆を拾いあげた。それからやゝ広めの歩巾で歩き始めた。ドン・ジョゼ・ガスパル広場に采たとき、千野が一つのビルを指して、ここの九階が日本領事館だと友田に告げた。しかし友田は見上げながった。

「ブラジル流で、九階なんだ」

友田が手から落した鞆の中には、日本国政府発行のパスポートが入れてある。その第一頁には、「右の者は日本国民であって、農業に従事のためブラジル国へ赴くから、通路故障なく旅行させ且つ必要な保護扶助を与

えられるよう、その筋の諸官に要請する。日本国外務大臣―K。そこに大きな角判が捺してあるのだ。誰にだつて否定できない事実であろう。しかし、これほど頼りにならない証明もほかにはないのだ。ベッドの下に放り込んであるビニール製の大型トランクには、郷里から神戸駅留めで送ったときの赤い荷札がまだそのまま括りつけてあるが、つまりこの証明はこの荷札と同じ性質のものなんだろう。鞆の中にはもう一冊、外人登録証もあるはずだった。

「少し休もうか」

友田が言った。

二人は広場のベンチに腰を下した。丁度二人の坐った真向いに、歩道まで卓子のはみ出したボールがあり、数人の客が未だ冷めきらないで漂っている暑気を避けるため閑談している風景が見えた。時間の推移を忘れた如く、ひどく悠長な眺めであった。

友田はベンソンMを去る一ト月ばかり前、東畑と柳川に食ってかゝった。意地張りな若者たちの巢窟だから、小さいがみ合いは日常ごとだが、その朝はひどく荒れた。友田はすでにペンソンを工場近くに移す予定だったから、その朝が最後の口論となった。

前日、柳川は仕事を休んで、おせっかいにも海協連へ千野のことで相談に出かけて行った。領事館へも顔を出した。実家からの返事は、柳川が考えたほど甘くな

かった。お役所筋から話があれば実家も心を動かすだろうと考えたのだ。柳川は、千野の精神異常をダシにする必要があった。勿論自分も帰国したい旨をつけ加えることは忘れなかった。強制送還か国援法の適用で帰れる方法はないかと考えたのである。しかし、話はそう簡単には運ばないのだ。「本人に会ってから」係員の返答はそうであった。

ベンソンへ帰ってから柳川は千野に対して何でもいから帰国する方が良策だとそゝのかした。こんな問題は大袈裟な方が効果的だ。いくぶん演技的になるのはいたしかたないことだ。すべてが宣伝効果の世の中である。

悪知恵のたけた柳川はそう考えた。たとえ国援法で帰れなくても、その筋から実家に対して説明があれば近所の手前もあることだし、見知らぬ他国に放って置くわけにもゆかないだろう。これが柳川の計算だった。しかし千野は柳川の計画を受付けなかった。強制送還や国援法では絶対に帰らないと強硬に言い張るのだ。腐っても鯛は鯛だというのか。

「しかし、お前の精神状態がヘンな事は間違いないのだ。気違いじゃなくても精神が疲れ切っていることは誰の目にも確かじゃないか。お前の為だ」

柳川が千野に対して、むきつけてそう言ったのは二人が部屋に移って始めてのことだった。

千野が不在のときは、すでに狂人として扱われていた。千野はその頃も一定の仕事を持っていなかった。日本から持ってきたものは殆んど売りつくしていた。下宿代も遅れがちだった。日本を出たときは真冬だったからオーバーを着ていたが、その不用品をバスターミナルで南へ行く旅行者に売りはらったこともあった。背中に「このオーバー売ります」とブラジル語で書いた紙をとめて、人ごみの中に三日立った。

千野と柳川はサンパウロへ出る前℃近郊のSで半ばばかりコロノ（農業労働者）をやった。サンパウロへ来てからも四カ所のペンソンを移動していた。柳川の言葉に依ると、千野が柳川から離れないでつきまとうとということだった。

その夜、千野と柳川が言い争うのを仲間たちは冷く聞き流した。

「何も国をだまして国援法で帰るというわけじゃない。ただそうする方が効果的だと思うからだ。お前だって少しぐらいは病氣なんだ。それを説明すればいいじゃないか」

「おれはきちがいじゃない」

千野が叫んだ。その声は、ありったけの声を出して叫んだのか、もの凄く巨大であった。松崎が苦笑を噛み殺していた。どっちも、どっちだ、という風な冷笑が漂っていた。千野は、ただ一声叫んだだけで、それっきり

黙ってしまい、もうかなり前から悪癖になっていた小型トランク一つきりのがらくた荷物の整理を始めるのだった。

明日にでも旅立つような光景だった。

(2)

「おれは、お前の為を思ってやっているんだ、じゃ、勝手にするさ。おれは一人で帰るからな」

柳川はそう吐き捨てるると自分のベッドへ横になった。柳川の千野に対する不愉快さは、東畑と雑談を交えることで紛らわされた。二人は真夜中までべちやべちやと話し合った。それはこの国に住むことがいかに愚劣でつまらないか、ということの会話であった。二人はことごとく合槌を打ち合って、お互いの意見に賛成するのだ。しかし二人の会話は雑音である。友田に対して寝つけない雑音であるだけでない。彼らの声そのものが水中のあぶくなのだ。

友田は柳川と東畑の囁き声が耳について眠れなかった。遠くで笛が鳴っているのを夢うつゝの中で聞いたが、やがて真近かにせまり、再びさえた頭にひき戻された。巡回中の夜廻りが吹き鳴らす笛の音だった。十二時かつきりである。二人は厭きもせず話し合っていた。ギターを奏でながら数人の足音が表通りを通り過ぎた。

語り疲れて柳川と東畑が眠ってからも友田は眠れなかった。千野は荷物の整理を終えると阿呆のようか眠りに落ちていた。

松崎が歯ぎしりをするのもいらだたしく耳についた。夜が、鉛のような重さでのしかゝってきた。友田は、たまらない程孤独であった。耳もとがじんじんとして、漣しない遠くから、砕けてしまった意味の聞き取れない叫び声が襲ってくるのだ。ふと、泥水の悪臭とすっぱり開いた空洞を思い出して、起き上ると枕もとの棚からトランクを下し底の方を引掻き廻して角封筒を取り出した。

数十本の遺髪があつた。じつと眺めた。しかし何の感興もそそらなかつた。死者は語らず、かさかさ渴いてしまった糸屑のような頭髪だつた。

その朝である。友田は、不眠の為に焦立っていた。六時まえに東畑が起き上ってラジオのスイッチを入れた。自慢の種のオールウェーヴだ。日本からの放送をキャッチするのが目的なのだが、聞き取れる朝はめつたにたく殆んどは金属的な雑音かブラジル語の放送なのだ。友田は六時四十分まで睡眠をとることが出来るのである。朝のカフェを飲んで仕事へ出かけるのに丁度いゝ時刻なのだ。四十分も早目に起されるのは友田にとって迷惑なことだ。しかし、それまでに一度だって文句をつけたことはなかつた。友田にしてみれば、名

古屋場所で誰が優勝しようとする興味のないことだ。日本の政局にも景気の変動にも関心はなかった。日本へ帰る積りの柳川が日々値のつり上るドル相場を気にかけていることにも同情できず、何よりも後向きの姿勢が気に入らないのだ。遙か遠くのかすかな音を耳にして喜んでいる東畑や柳川が逆に不憫に思えるのだ。しかし当の二人にしてみれば祖国をあざ笑う如き或は冷たい無関心は、無国籍者の態度としてゆるしがたいのだろう。

日本人が日本の出来ごとに関心を持つのは当然なことだ。

柳川と東畑は大鵬、柏戸の一戦に映画を賭けた。聞かなければならないニュースであった。それをたかが半時間早く起こされたからといって怒るのは道理ではない。むしろ感謝すべきことがらなのだ。新鮮な祖国の声、真新しいニュース、聞くだけで楽しいものだ。それに対して文句をつける友田は、無国籍者の僻み屋にすぎない。しかし、何といわれても友田には興味のない問題なのだ。

愛国とか祖国喪失とか、そんな煩い事を持ち出す必要はなかった。まだ三十分眠れるということは友田個人の保健上の問題なのだ。その安眠を妨げるのは公共精神に欠けた独断じゃないか。それも殆んどが毎朝である。こんな感情では争いの起らない方が不思議で

あつた。

東畑は、銀行破りの手つきでダイヤルを挑んだ指先きに全神経を集中していた。柳川が目醒し二人は互いに喋り合いながらダイヤルを移動している。時々、ピーとかツーとか金属的な雑音を発するのだ。その昔が朝の睡眠不足の神経をいらいらさせた。友田はスイッチが入ると同時に反射的に目醒めていた。ベッドの中でこみ上げてくる怒りを押えつけるのは容易ではない。友田にも激情的な若者らしさが残っていた。松崎もすでに目醒めて壁に掛けた手鏡に顔を押しつけて髪をなぜつけていた。

彼はよく他人の洋服を着用している。洗濯に持って来た客の服を無断で着歩くのである。いつも身なりだけは小綺麗にしていたが、それというのも、新移民と思われるのがいやな為だ。腰に鍵や爪切りや果物ナイフをぶら下げて、カチャカチャ鳴らしながら歩くのである。

千野はベットのの上に小型トランクを引き出して前夜片付けたばかりの荷物をまた掻きまぜる奇癖に熱中していた。汗くさい下着から古手紙、空箱、物干紐、薬類、裁縫用具、古雑誌、写真帖、寄せ書き帖など雑多なガラクタ荷物を夜店のように拵げるのだ。友田は、一通の古手紙を読みあさっている千野を見たとき、この下らない朝に対して、押えきれない怒りを感じた。

「煩いな、ラジオ消せよ」

友田が思いあまって叫んだ。柳川が白い眼で睨み返えした。徹底的に友田をさげすんだ眼の色だった。室外なら痰でも吐き捨てたに違いなかった。柳川は一言も発しなかった。完全な黙殺である。東畑はダイヤルを挑んだままだ。それが友田の怒りに満ちた焦燥感に火を注いだ。

「毎朝毎朝、何ということだ。他人の迷惑も考えてみる、この部屋は共同生活の広場じゃないか。俺にはたわごとのニュースなど爪の垢ほども興味はないのだ。聞えもしないラジオをいじくり廻して……」

最後の言葉が東畑の自尊心をきずつけた。ラジオは彼にとって自慢の品であるだけではない。日本からの新鮮なニュースを得ていることを、とてつもなく大きな奉仕と考えていた。いわば、祖国につながるただ一本の絆であった。安心であり拠り所でもあるのだ。仲間たちに精神的な糧を与えそれは感謝されても批難される筋合いのものではないのだ。しかし友田にとっては煩しい以外何ものでもない。祖国のニュースであれ音楽であれ、要するに音に対して腹が立つのだ。友田にとってたとえ半時間の睡眠でも貴重であった。誰にも煩らわされない自分だけの時間でなければならぬのだ。にも抱らず、日本との継りを聞えるか聞えないかの微かな音で保とうとする二人の態度はめづしい限りだ。

「聞きたくなけりや、隣の部屋へ移ってしまえ。俺のラ

ジオだ」

東畑が言った。「隣りの部屋」とは単なる空間的な表現ではなかった。そこはブラジル生れの二世達専用の部屋であったからだ。東畑や柳川にとっては全く別世界なのだ。壁一枚のへだたりが国境だった。勿論、話す言葉も違っていた。二世達は当然のことながらブラジル語で会話するのだ。殆んどが奥地から出て来た働きながら学ぶ夜学生だった。二十四になる夜学の中学生もいた。その男は立派な口髭をたくわえていたが、それは東畑や柳川にとって、かっこうの攻撃材料だった。こっちの部屋ではやっかいなことに日本語しか通じないのだ。考えてみれば妙なことだった。同じ屋根の下に国境のように強固なへだたりがあることもだが、覗いてみればそこに自分とそっくりの顔があるのはさらに奇妙だ。友田は、その壁を意識して乗り越えたいと考えていた。乗り越えて行きつく場所は必ずしも「隣室」ではない。東畑や柳川は、その壁はあくまでも必要ゆえの壁であって乗り越えてはならないし乗り越えるべき性質のものでもない主張するのだ。

国を出ると人々は愛国者になるというが、柳川や東畑がその典型だった。しかし隣室の住人たちに対して示す必要以上の抵抗感や愛国心とは無縁のものだ。或る種の存在主張であり孤独の慰安なのである。愛国者になったからといって、別に日本の利益に響くことは

まずないだろう。だが、いずれにしても壁を意識するのは幻影だった。東畑が隣室へ移れというのは、自分たちの仲間から出ろということなのだが、その腹の底には、日本人としての友田を強硬に拒否しているものがあった。しかしその東畑にしても、永遠なる完全な日本人ではありえないだろう。情ないことに彼もまた、一億分の一という極小の粒子であった。だが、たとえ有像無像、歴史の末端でひと息かふた息、呼呼して消える人間とはいえ、柳川も東畑も南へ旅立った風来坊の志鶴も、半狂人の千野も気障な松崎も国を失った友田も、輝しき青春の持ち主であり仲間であった。

いかに柳川や東畑が日本人としての友田を拒絶しようとして、その柳川がいかに極小のとるに足らない粒子であろうと、彼らから「日本」を取り去ることはできないのである。岩のように固く、アザのように拭いがたいのだ。

だが、取り去ることのできないその「日本」とは何だろうか。一億の集団、貿易業者が考えるように単なる一億の人間の市場なのだろうか。彼らは、おしくらまんじゆうの中から現実には這い出して来た。しかもまだその幻影に喘がねばならないのは一体どうしたことだ。

今、突然、この地上から日本国家が消滅しても友田の生命に別状はないのだ。「柳川の死」と同様友田の心は動かないだろう。自分の中にあぐらをかいていると

とめもない幻影を抹殺しなければならぬのである。友田にとって「日本人」とは得態の知れない化物であり重荷であった。誇りにするだけの「日本」もなかった。たった四年間の生活だった。東畑が誇らしげに語る大都会東京の夜も友田は知らない。知らないのは、実は、友田だけじゃない、千野も柳川も当の東畑でさえ殆んど「日本」が何であるか知りやしない。脳裡に残っている絵ハガキの枚数の問題なのだ。神話から政治斗争にあけくれる今日まで、どろどろした時間の流れ、内海の島影と泥水の悪臭、ゆがんだ漁師の顔、そのうち何十億かの人間が死んだ。死にのぞんで別に日本人である必要はなかった。

〈母親が祖国へ帰りついてから死にたいと願ったのはなぜだろうか〉と友田は繰り返えし考える。あの洞窟が口をあけた山腹の凍りついた土、それは雑草の朽ち果てた堆積なのだ。国家を持たない民族集団、民族的なつながりのない国家、友田の顔の中で大波に翻弄される一人の人間像が拡がってゆく。〈満州で林家に留っていたら、中国人になり得ただろうか〉その時東畑が冷く言った。

「君には、日本へ魅かれるものがないからな、支那語のニュースがいいだろうけど、相憎そりゃ無理な注文だ、そんなニュースはどこを探してもありっこないさ」

それから反抗的にポリウムを増大し柳川をうなが

して朝のカフェを取るために部屋を出た。ラジオから液体ガスの広告が吠えるように吐き出されていた。千野は拵げたガラクタ荷物をまたもとのトランクに仕舞い始めた。

これで千野の起きがけの仕事は終るのである。友田は、その無言な千野の仕草を見たとき、きっぱりこの男たちから別れることを決心したのだ。松崎は、一生懸命頭髪をなでつけていた。しかし情けないことには、彼の顔はいっこうに見栄えがしないのである。平べったく無表情で「日本」或いは新来」なのだ。苦笑と激怒に値する愚物が、部屋の中に渦巻いていた。

こうして、小さな壁の中の仲間たちの一日は始まるのである。東畑は、油ぎった皿を洗い、柳川は電線を切ったり継いだり、千野は日がな一日妄想にとりつかれて終るのである。松崎は、自転車の荷台に衣紋掛けにぶら下げた洋服を旗のようになびかせながら配達に走り廻るのだ。

間もなく友田はベンソンMを出てP区の工場近くに部屋を移した。三人の異国人たちの中に一人の異国人として這入っていった。目玉がいまにもこぼれ落ちそうなほど飛び出した黒人の青年と三十過ぎたばかりのハンガリー人、片目の見えないドイツ系二世エックマン、この三人と同じ部屋だった。エックマンとは錠前工

場の仲間である。しかしこの世界に冠たるドイツ人は哀れであった。

腕のいい旋盤工だが底抜けの競馬狂でもあった。仕事を休んでまで出かける好きものだが、勝つことは殆んどないようだった。ハンガリヤンは五六年の動乱で亡命してきた男で、まだブラジル語がうまく話せず、限玉が飛び出した此の黒人は福音派の熱心な信者であった。

多彩といえば多彩であった。しかし人種の相場と表現するほど大袈裟な感慨はなかった。エックマンが福音派の黒人を揶揄するのは、どうやら柳川と千野の關係に似ていた。エックマンは殆んどドイツ語が喋れない。両親はパラナに住んでいるらしいが、自尊心の強い男で福音派の黒人をひどく嫌った。肌の色より何よりも偽善者面が気に入らないのだ。二人はよく議論していたが、友田には何を喋っているのか全く判らなかつた。どうやら知恵にかけてはエックマンが数倍上のようであった。錠前工場の経営者がユダヤ人であるのも誇り高いエックマンには皮肉であった。彼は怒ると見えない片目を痙攣させた。エックマンが不在のとき、この黒人は人指ゆびを突立てて「あの独逸人は好きになれない」と、まるでいやな食い物でも断るように言うのであった。驚いたり怒ったりすると、本当に眼球が落ちそうになった。ハンガリヤンは薄い栗毛で秀いでた額と心の奥まで見抜きそうな鋭い目、たくましい軀をし

ていたが情けないことに無学であった。彼の書く横文字は、友田のより読み憎くく、またスローでもあった。話するとき指先きで鼻を叩く癖があつて、それは柳川や東畑がすぐ真似しそうな仕草であつた。

妙なことに、このペンソンへ移ってからの友田は「日本人」と呼ばれるようになった。エックマンがそう呼ぶから、他の二人もそう言うのである。少くとも、話題の席にいない場合は、誰も友田の名を言うものはいなかつた。それは他の三人に対しても同じことだ。「日本」「ドイツ」「ハンガリー」「黒」という方がそのものずばりの表現だし個性的でもあるのだ。しかし「日本人」という普通名詞が友田に対して固有名詞として用いられるとき、彼は一億の人間と三千年の歴史を背負わされるような気持になるのだ。全く荷厄介な幻影だつた。住人たちの話すことは殆んどが悪口か自慢話である。友田にとって一つの期待であつたブラジル語の上達もこの環境はさほど役立たず相変らず白痴的な会話であつた。半年がずるずる過ぎた。しかしもはや逃げ出す世界はどこにもないのだ。

友田の枕もとの壁ひとつ遮つた向う側が便所であつた。

真夜中にその水洗便所を流す勢のいい水音で目醒めることがあるのだが、下半身素裸のぶざまな人間像が彷彿し、エキゾチシズムという甘美な感情を洗い流すの

だ。

ペンソンはかなり高い丘の上にあつた。当然のことながら夜空には南十字星が現われるのだ。しかしこの詩人好みの星に対して友田は一片の詩情も旅情も感じないのである。真向いの丘の上を走るヘッドライトの光が直線に流れてゆき、湾のように突き出した未開地の森に対して新開地の小さな家々の光が、いどみかかるような光景で接していた。昼間なら新開地の背後に河原のように白く光った墓地が見える。夜になるとその広大な墓地の部分だけ穴があいたように暗く、家々の灯が取巻いている。

逃げ出すとしたら今度はその無人の石の下に行くべきだろう。母親は四文字の戒名が嫌いであつた。墓石を高々と積み重ね、落語にあるような拙い戒名を刻み込む、確かに一つの記念碑が建つだろう。しかしあまりにも脆い構築ではないか。

友田は、高層ビルの幾何学的な暗い窓を見上げていた。夜の間、人間不在のこの建物が矢張り恐怖の対象だった。

千野と並んでベンチに腰掛けてから千野は帰国手続きについて喋っていた。貸付け渡航費は払わないでいいとか、三コントスを保証金に納めねばならないとか。船の寄港地のこまかい日程までを記憶していた。だが、帰

れると決ったわけではないらしく、ただ一人よがり
に帰ることを決めている様子だった。

「兄が今度大阪へ出て商売を始めたから、その兄が呼び
帰してくれるんですよ」

しかし友田は千野の言葉には答えなかった。誤解の映
像が頭の中に狂っていた。

「行こう」

友田は短かく言った。いましがたまで友田の脳裡に
拵っていた渴いた河原の如き墓地と墓石をうず高く積
み重ねた記念碑が突然友田の頭上に崩れかかった。

「バスに乗ろう」千野が言った。

広場のベンチには幾組かの恋人たちが型通りに抱き
合い囁き合っていた。さまざまな抱擁のポーズ、或いは
居住いが広場に必要なる石の彫刻めいてみえた。友田は
孤独であった。一人であることがそれだけで異端者の
ように思えるのだ。忍ぶように友田は幾組かの前を通
り過ぎたが、千野は無遠慮に人々の顔を覗き込んだ。停
留所へ来てバスを待つ間にも千野は一人で喋り続けた。
とりとめもない話題であった。二台のバスをやり過し
てから千野が手を上げて次のバスを停めた。乗客は少
なかった。友田が先きに乗り乗車賃は友田が払った。友
田は窓際に千野は通路側に並んで腰掛けた。相変わらず
千野は饞舌だった。友田は冷く聞き流し、車窓に映る自
分の顔を薄ぼんやり眺めていた。教会の尖塔の電飾を

ほどこした十字架が車窓に映った顔の上に重り合ったとき、前の座席の赤毛の太っちょ婦人が苦しそうに太い首筋を捻じ曲げて二人を振りむいた。襟足から微かな香水が鼻をかすめた。

「ぼくは、最近こんな女性を見ると、なんだか恐しくなるんだ。妙にぶよぶよよしていて気味が悪いよ」

千野が言った。

何を言っても決して相手に通じる心配はないのだ。それを計算に入れたうえで、づけづけ言うのだ。こういう悪ふざけは、柳川が好んでやった。赤毛の太っちょ婦人は、それつきりふり向かなかった。

二人は、ジョン・メンドレス広場でバスを降りた。この辺りから同色の皮膚が目立って増える。殺虫剤でもばらまいて、散らさなければならぬほど群ってくる。≪くそ蠅だ≫と友田は思う。郷愁という甘美な雰囲気はなかった。郷愁を感じさせるとしたら、むしろ、工場近くのカラスが群っている黒人たちの貧しい部落だ。そこにはグローバルな匂の漂いがある。

千野は、バスを降りてから妙に押し黙ってしまった。別に友田の無愛想に対して腹をたてたのではないらしかった。千野がまた赤信号の大通りを横切ろうとしたとき、右側から一台のタクシーが曲り込んで、危く千野を跳飛ばすところであった。千野は、車道の中央で両

脇を突走る車に翻弄されながら猫のように小さくなつた。友田は、うろたえた千野の姿を、いくぶん痛快な思いで眺めていた。一步ふみ出せば、千野の命はふっ飛ぶだろう。

《危いわ》と背後で日本語が聞こえ、友田は思わず振り返った。二人ずれの若い娘がそこに立っていた。一人の女は片手に小さな紙袋を持って、その中からピーナツらしいものを掴み出しては口の中に放り込んでいた。顔の長さと同じくらいの頭髪が空に向っておい茂つてい、それは、いかにも重そうだった。

信号が青に変わって、友田は、ゆっくりと歩き始めた。千野は円型の安全地帯で友田を待っていた。気のせいか、千野の顔は蒼ぎめて見えた。顔の切傷が一層浮き上って見えるのだ。ペンソンMに着くまで二人は殆んど喋らなかつた。

ペンソンMの玄関に通じる低い石段に、二人の黒人が携帯ラジオを抱えてうずくまっていた。友田が石段に足をかけたとき、丁度、《M A R C O U》というラジオが吠えたて、それと同時に二人の黒人が飛び上って歓喜した。友田が驚いてその場に立ち止ったほど黒人の歓声は巨大であった。携帯ラジオを高く差し上げわめきながらその場を廻転するのを友田は冷く見流して石段を登った。

玄関に入るとかなり広い食堂があり、その横に巾の狭

いコンクリートの階段があった。仲間たちの部屋、柳川の遺体が横たわっているその部屋は、階段を登り切った突き当りである。友田は、食堂には顔を出さないで、すぐ二階への階段に足をむけた。千野の姿が見当らなかつた。

おそらく、地階の自分の部屋へ下つたのだらう。地階への階段は、食堂を突き抜けた向う側にあるはずだつた。

友田が、このペンソンへやって来たとき案内されて地階の部屋を覗いたことがあつた。頭の高さに鉄格子のはまつた細長い窓があつて、その窓を斜に路面が走っているのだ。しかし、階上との部屋代の差額は僅少だつた。窓のそばに立つと通行人の足音が頭を踏みつけるように聞こえるのだ。友田は二階を選んだ。その部屋には、いま、柳川が冷くよこたわっている。

友田は、ゆっくりと階段を登って行つた。登り切つて、ひと息入れるため部屋の前で立止つた。顔を出す事がためらわれた。室内の囁き声がドアの外にまで響いていた。

この中で柳川の通夜が行なわれていようとは想像もつかないほど、常と変らない空気であつた。友田は、軽くドアを叩いた。「うおい」と太い声が返されて、ドアは内側へ開かれた。顔を出したのは、見知らない痩せぎすのランニングシャツ一枚の若者だつた。むつとする男

の汗と煙草の匂が鼻をかすめた。友田はその男には相手にならず、部屋の奥を無遠慮に覗き込んだ。目についたのは放浪癖のある志鶴だった。また舞い戻って来たのだらう。

彼も友田に気付いて「やあ」と事務的に右手をあげた。志鶴の声で友田は男の横を通り抜けた。柳川の遺体は窓際の、かって友田が寝ていたベッドに横たわっていた。ベッドの上にさらにもう一つのベッドを重ね、室内は以前よりも一層狭ぐるしく、寝台車を思い出させた。遺体のそばで東畑が手紙を書いていた。松崎は自分のベッドに仰臥して、その他知らない若者がもう一人居た。東畑は友田を一瞥しただけで声もかけない。松崎が半身を起して友田に手を差し出した。友田は、その手を握りながら、

「しばらく、さつき千野君に会ってね、柳川君が死んだと聞いたから寄ってみたんだ」

「千野に会ったって。あいつどこに居るのだ」

千野と聞いて松崎は顔色を変え、怒気を含んだ語調で云った。

「一緒にここまで帰って来たが」

友田は、松崎の手を払い除けるような気持で言った。「あいつは、全く、どうもしようもない奴だ、だいたい、柳川と千野は同郷の友人じゃないか、それを肝心の千野が出歩くとは何ということだ。あいつがいわば喪主

じゃないか」

松崎がそう怒鳴ったあと、

「へんな奴さ、好きじゃないね」

友田の知らない、頭髪をスポーツ刈りにした男が言った。友田は、変に居心地の悪い感じであった。通夜とはいえ、お悔みを言う相手さえ居ないのである。遺体のそばにきちんと荷物が整理され重ねてあった。東畑はそのトランクの上で手紙を書いていた。柳川の死顔は白布でおゝわれ、軀にはきちんと毛布がかけてあった。友田は、とても白布を取って柳川の顔を覗く気持にはなれず、その場へ手持ぶさたに突立っていた。

「千野って奴は、全く、いい気なもんだ。自分が日本へ帰れると決ってから、柳川に対する態度は冷たくなつた。千野は、それで地下室へ逃げ出したのだ」

松崎は友田に対して説明しているのだが、当の友田は、ドアを開けた痩せぎすな男が上段のベットへ仰臥したまま、天井からぶら下っている数本の糸に通した千羽鶴に息を吹きかけている至極退屈そうな光景を眺めていた。千野に対する風当りは、相変わらず強いようだった。誰も弁護しないのである。

「やっと、書けた」

東畑がペンを投げ出して、後へそり返えりながら言った。それは柳川の実家へ通知する手紙であった。

「読んでみよう」と志鶴が言った。

東畑が書き終ったばかりの紙切れを掴み上げた。目で一読してから、

「拝啓」と東畑が読んだ。

「馬鹿、拝啓ってことがあるもんが」

松崎が言った。

「じゃ、何と書くんだ」

「知らんな、そんな手紙は書いたことがない」

「じゃ、前略、だ、俺は、拝啓と前略しか書いたことがないからな」

「どうでもいいだろう、要するに判りやいいのだ」と志鶴が言った。「次を読め」

「今朝、柳川君が交通事故で亡くなりました」

「いきなり死んだって書く奴があるか」

松崎がまた訂正した。

「いちいち文句をつける奴だな、じゃ、お前が書き直したらいいだろう」

そう言って東畑はその紙切れを松崎へ投げた。

「俺には書けんよ、第一、柳川とはさほど親しい友達じゃないからな」

その時ドアが開かれ千野とペンソンの主人とが入って来た。主人は、三尺あまりの白木の十字架を手にしていた。日本語とローマ字で「柳川融」の名前が書かれてあった。この単純な構造の十字架は、一瞬、仲間たちの心に「死」を叫びさました。

「近頃は、何かにつけて物価高でね、こんなものでも二コントですよ」

主人の言葉で固くなった仲間たちの顔がゆるんだ。友田は魅せられたように白木の十字架を見詰めていた。眼前に決定的な抽象の世界があった。それは一個の物体と化した。「柳川」よりも「死」という底の知れない世界を形成していた。

「千野。一体、どこをうろついているんだ。柳川のこと是一切お前がやるべきことだ」

松崎が千野を叱りつけた。手紙を押しつけられ困っていた矢先きである。松崎はその面倒な問題を千野に振り当てた、

「手紙は、お前が書くんだな。日本へ帰れることになったのは、半分は柳川のお蔭だ。当然お前が知らせるべきだ」

松崎は紙切れを千野に突きつけながら言った。

「書きますよ」投げやりに千野が答えた。

「何なら、私が書きましょう」

ペンソンの主人が割り込むように松崎へ言った。

「そりゃ構いませんが、しかし千野だって書くべきですよ」松崎が答えた。

「言わなくても書きますよ」

千野の言葉は松崎に食いつくような語調で松崎から紙切れを奪い取った。

「明日は十時だからね、最近では葬儀料も高くなってるね、こんな事だと、うっかり死ねないね。ちゃんと、あとは頼みますよ」

ペンソンの主人は、そういうと、そそくさと部屋を出て行った。ドアを開けるまえ、友田の顔をちらっと見て首を下げた。

「ちえっ」と東畑が言った。「あのおやじは金のことばかり心配しているんだ。迷惑なんか掛けるもんか、まだ月始めだし、柳川のペンソン代は丸儲けじゃないか」
「ここで書くから」

千野は窓際のトランクの前に座っていた東畑をうながしてそこへ掛けた。東畑は逃げるように自分のベッドへ横になった。どういうものか、ペンソンMの仲間たちは直ぐ寝転ぶのだ。椅子がひとつきりしかないことも原因だし、ベッドの上にベッドが重なっていて頭がつかえそうだから寝転ぶのも無理はないが、ベッドがまた一段の時でも、仲間たちは座らないで横になった。ひどくもの憂い感じなのだ。

部屋には湿っぽい涙をそそる空気は塵ほどもない。死体を前にして、若者たちは、この一個の物体から己のなれの果てを想像することは決してなかった。仮りに死というものが彼らを脅したにしても、彼等の盲目的な青臭い慾望は冷たくその影を追い払ってしまうので

ある。しらじらしい空気であった。しかし、友田は、自分が墓まで持ち歩かねばならない、厄介な荷物の重みが両肩に食い込むのを感じていた。つかみどころがなく、正体の知れない影のようでもあった。

「誰か鋏を借してくれませんか」

千野が言った。松崎が大ぶりのタチ鋏を出して千野に手渡した。千野はいま書き終った手紙を、文字に沿って余白の部分だけ切り落した。手紙はただ細長い短冊になった。それから、いきなり柳川の顔を被ってあった白布を払い除けると、指先きで頭髪を挑み上げ生え際からばさりと切った。友田は愕然とした。突然、自分の髪を切り落されたような驚きだった。柳川の蒼白くむくれた顔が目の前にせまってきた。全く、事務的な素早い処理である。誰もとめだてする余裕はなかった。千野がその頭髪を一枚の紙にくるんでいるとき、やっと東畑が叫んだ。

「一体、どうする気なんだ」

「送るんですよ、これなら軽いしね、何せ航空郵便ですから」

千野は、さりげなくそう言って、再び白布で柳川の顔を被うと、あとは短い手紙と遺髪とを同封し張り口を舌で舐めてから封印した。

「明日でも出しておきます」

「何て書いたのだ」と松崎が言った。

「死んだって、それだけでいいでしょう」

「ただ、それだけか」東畑が迫った。

「それだけです」

「どうして、それだけだ」と松崎がいどみかかった。

「書く事はまだあるはずだ」

「ありませんよ」千野が答えた。

「全くだ、書く事なんかありやしない」と志鶴が言つて巻煙草をくわえると燐寸をすった。硫黄の悪臭が強く匂った。

「書いたって、仕様がないうさ」

スポーツ刈りの男が言つた。その言葉は天井へ向つて吐かれたのである。

「おい鋏を貸せよ」

今度は、痩せぎすの男が千野に向つてそう言う身のをり出すようにして千野から鋏を受け取り天井からぶら下つたキヤラメルの包紙で折つた千羽鶴の半分から下を切り落した。その鶴と鋏と一緒に千野へ渡し、「これを柳川の枕もとへ置いてやれよ、日本を出るとき、女のこが贈つてくれた千羽鶴だ」

千野は切れ端の千羽鶴を柳川の胸のあたりに拵げて置いた。

広い空地にぽかぽか穴のあいた墓地の光景が友田の頭にあつた。その記憶は、母親の葬られた満州の凍土だったかも知れない。まだ土葬の墓地というものを見

たことはなかったが、広い赤土の野原に無数の穴が月の表面の如く口をあけて、その穴に、丁度、胎児のような型で葬られるのだらう。穴を選ぶ権利は死者にはない。死者にとって最後の強制だ。

「明日は、友引ですよ」千野が言った。

「友引だって？」松崎が寝転んだまま問いかえした。

「友引に葬式を出すと、また誰かが死ぬっていいですよ」千野が答えた。

「死ぬのだったら、そりゃ、お前さ、お前しか引く者はいないじゃないか」

東畑が冷笑を浮かべて千野に言った。

「莫迦なことだ、ここは地球の裏側なんだぜ、そんな遠い日本の魔力は届きやしないさ」

志鶴がそう一言い終ったとき、真向いのサロンで突然ドラムが鳴り、同時にトランペットががなりたてた。

「始めやがった」東畑が憎々しげに叫び、

「千野、窓を閉めろ」

千野は命じられるま、立ち上って窓に向った。窓枠に手をかけてから、

「ぼくが死んだら、焼いて貰うよ」

そう呟いた千野の後姿は、千野が始めてこの部屋に這入って来たとき、製パン工場の煙突から吐き出される煙を眺め、焼場の煙か、と訊ねたときの、調子の狂った姿を彷彿させた。友田は、その姿を思い出し、この部

屋に立っていることに、耐えられなくなった。

「俺は帰る」と友田が言った。

誰も友田には答えなかった。返辞の無いことが友田を一層孤独にさせた。彼は逃れるように部屋を出た。

食堂ではペンソンの主人が、ブラジル語新聞を小さく折畳んで読み耽っていた。この男が読んでいるのは競馬の記事だ。それしか読めないのである。玄関まえの石段には、二人の黒人が携帯ラジオを抱えたまま、まだうずくまっていた。フットボールのナイターは、すでに終了していた。再び路上に立ったとき、友田は、溶けるような疲労を感じた。千野が柳川の頭髪を孤まみ上げて切り落したときの光景が目の前にちらついていた。その光景はトランクの底にひそんでいる両親の白毛まじりの遺髪と重り合った。あれを処分しよう、と友田はふと考えた。≪焼くと、いやを臭がするだろう≫友用は十数年持ち歩いた両親の遺髪を濁りのない河に流そうと坂道を登りながら考えていた。

S通りの坂道の途中まで来たとき、空に張られた薄い皮膜が破れたように、大粒の雨が降り始めた。友田は鎧戸を閉してしまった建物の高い庇の下に走り込んだ。集中的な豪雨であった。坂道の石畳を洗うように雨水が足もとを流れた。まるで目の前が河であった。坂道を下ってくる車のタイヤが、友田に泥水を浴びせて逃げた。車道の端に数個の敷石が外れてしまった破損箇所

があり、その水溜りにタイヤが落ちるのだ。車は、ひつきりなしに、身を小さくして雨を避けている一億分の一の粒子に対し無慈悲に泥水を浴びせて逃げた。友田は、いたたまれなくなつて、鞆を頭上にかざすと、雨の中へ飛び出し、数米歩道を走り登ったとき、車道の向う側に一軒のバールをみ、そこへ逃がれ込もうと車道へ一歩足を踏み出した瞬間だった。ぐわつという物凄い音を聞いたときには、友田の軀は、二三度雨の中で廻転していた。友田は咄嗟に千野の呟いた「友引」という言葉を電光のように思い出したが、その時はすでに道の中央に叩きつけられていた。泥水が顔を洗った。その泥水で友田は気付いた。

気を失つたのは、僅か一秒か二秒であつた。右肩に激痛があつた。顔を上げた友田の目に刺すようなヘッドライトが襲いかかった。クラクションがなりたてた。友田は、ゆっくりと体を起した。雨が容赦なく降りかかつてきた。二歩か三歩、友田は、引き摺るように足を運んだしかし、再び激しい目眩に襲われてその場に倒れた。誰かが雨の中へ飛び出してくるのを知っていた。倒れ伏した友田の鼻先きを泥水が流れ、その匂は、幻影の世界に友田を引き込もうとした。誰かが体を抱え起した。

その男の口から「日本人」という声が発せられるのを友田は聞いた。空耳のような微な響きであつた。友田

は、凡てが薄らいでゆく頭の中で、数十本の頭髪が織りなす幾何学模様を貪るように求めていたが、やがてその残像は、泥水の中へ溶けていった。

(一九六三年)

珈琲園の唄

園生晶夫

略歴一九三九年三月福岡県戸畑市に生る。一九五七年福岡県立戸畑高校卒業後、一九五八年十二月長兄の家族と共に渡伯それまで八幡製鉄所勤務。二年間長兄が購入した珈琲園で働き、一九六〇年マリングアの吉雄・鴨川商会に入り、六二年同市山口商会に勤めを變る。一九六四年パウリスタ文学賞に「逝った日々」が選外佳作第一席になったが発表されず。同年ウジミナス製鉄所勤務、六五年海外移住事業団サンパウロ支部、六六年同リオ支部勤務、六七年ニイガタブラス社へ移る。六九年在リオ日本大使館に勤務し、大使館のブラジリヤ移転後は総領事館勤務となり、その間伯国統計局の統計学校大学部を学び七四年卒業。一九七五年アポロ・メカニカ・エ・エスツルツォラ社に勤務、現在に至る。

珈琲園の唄

園生晶夫

この夕焼に染まった空。広く青くひろがる原始林。それは次第に色を変え、悠久の深みにぼくを誘う。ひとり佇むぼくの心は、突然、妙に締めつけられるような痛みを襲われる。それはぼくを押し潰してしまおうかと思われる程、激しく胸の奥の方から突き上げてきて、ぼくは暫く息を止めて、足を大地にふんばって耐えねばならぬ。この激痛は瞬時のものだ。瞬間のものだけに、それは烈しくぼくの心を襲い、時には眼から涙が溢れることだってあるのだ。

薄暮の中に立って、彼等と話し合うことを始めたのは何時からのことか、ぼくは知らない。

夕暮れのこの地点に立って、ぼくは前方に展がる原始林と対決する。そして、その濃く緑に彩られた原始林が、静かにぼくへ語りかけてくる言葉へ耳を傾ける。彼の言葉は厳かである。千古の秘密を秘めて、その声はぼくの耳に響いてくる。一度もかつて人間の手に触れら

れることなく、しかし何時の日かきつと、このぼくらの手にかかって亡びてしまふ運命にある彼等の言葉を、ぼくは緊張して耳へ聞き止める。

いつのまにか、この習慣に慣れたぼくは、一日の務めを終えるとその疲労した身体をこゝまで引きずつて来て、彼等と対決するのだ。最初、彼等は決して自分から語りかけてくるといふような軽卒な振舞はしなかった。沈黙をあくまでも守り、ぼくを静かに威圧し、ぼくの独りぼっちの呼びかけ、ある時は、頬に涙の線を引きながらの必死の呼びかけ、ある時はこの地上に生きることへの歎びに満ちた呼びかけに対して、彼は口を結び、冷然とした眼差ししか与えてはくれなかった。それがいつからのことか、彼はぼくへ語りかけることを始めたのである。

「あきらさん、ブラジルへ行つてどうするの」

「さあね……」

「あなたは人一倍淋しがりやだから、人恋しくて毎晩泣くのじゃない？」

「うん。……」

和子はこう言つて笑つたが、ぼくがこうして新しい友と、毎日無言の会話を交すのを知つたらなんと言うだろう。

農場監督のヘンリツケが町から運んできてぼくへ渡した和子の手紙をポケットから取り出し、ぼくはすぐ

傍の手頃な木の切株に腰かけ封を切る。軽いときめきが胸を襲う。久しく忘れていたこの種の感動を覚えながら、丁寧にたたまれた便箋を開いて読み始める。何度読み返しても、そこから、そこはかかない日本の匂いが漂ってくる。なつかしい匂いだ。和子がこまごまと書き記してくる世界、それは日本だ。かつてはぼくもその中で呼吸し生活した和子の手紙の中の世界。ぼくは静かに目を閉じてそれを思う。

周りは一日の終りを告げようとしている。夜が忍び寄ってくる。風が横のバナネイラ（バナナ林）をゆする。総てはぼくのこの追憶にふける想いを妨げようとはしない。ふとぼくは、軽い眩惑に見舞われる。遠く日本の山中に、ぼくはこうして座っていた。山の静寂に、ひとり身を沈めて、ぼくは和子のことを考え、自分の将来のことを思い、現実の自分の属する社会等、あれこれと思考をもてあそんでは吐息をついたものだった。登山、登山にあけくれたあの頃、それは壊しいぼくの歴史の一駒だ。眩惑はそこへぼくを引き戻すぐあの吐息だけが本当のものに思われたあの頃へ。

目を開くと、あたりはもうすっかり夜の準備が出来ていて原始林の果ての方、地平線のあたりに、まだ陽光が茶色に、昼の名残りとどめているだけだ。何のことはない。今日も又、一日終っただけである。原始林はすっかり闇に履われている。彼に、ぼくは心を込めて夜

の挨拶を送る。さようなら、と。

「アキラ、今日恋人から手紙がきたって、本当？」
夕食の席上で、エレーナは首を心持ち傾けてぼくへ尋ねた。テーブルの上の石油ランプの光がゆらゆら揺れる。

ぼくは口の中へ肉片をほおぼったばかりなので唯うなづくだけだ。さつきからぼくの方へチラリチラリと視線を送っては何か言いたそうであつたのが何であつたか、その時ぼくは了解した。

「で、何て言ってきたのアキラ」

「別に何でもないよ。ただ書きたいから、書いてきただけさ」

「まあ！」

エレーナはあきれたといわんばかりに父親のヘンリツケを見た。ヘンリツケはにやにやしながら食事を続けた。

彼は元来無口で家族の者とは余り喋りたがらない。母のマリアがかわりに言った。

「アキラはその娘と結婚するのでしょうか。何時になつたら彼女をこちらへ呼び寄せるの？」

娘の質問をドーナ　マリアは知っていたようである。
「さあ、ぼくは知らない。」

ぼくはフォークを忙しく口に運んで、彼女らの質問

をはずしてしまった。

和子がこんな会話を聞いたら、しかめ画するかも知れないな、とぼくは思った。はっきりして下さいと和子はいいつも書いてくる。こんなに遠く離れていては、あなたの気持をはっきりと知ることができない、せめてお便りでも書いて下さったら、私の心も落ち着きますのにと、しまいには涙の雫の跡が歴然とした便りまで送ってくる。

和子、待つてくれ。もう少し、ぼくは今、この地で、ほとんど絶望に近い状態で頑張っているのだ。と心でつぶやきながら、この異国の生活に流されて、筆をとって返事を書いたことがない。

「アキラ、来週から収穫を始めよう。もう珈琲の実もほとんど赤く熟れたし、そろそろ始めてもよいように思う」

夕食を終わってヘンリツケは爪楊枝を使いながらぼくへこう言った。

「そうだな、ヘンリツケ。もう始めてもよいようだ。

先日パトロン（主人）が来た時、なるべく早く収穫を始め、早く収穫を終らせるようにとも言っていたし……」

来週といっても、今日はもう木曜日、あと三、四日もすれば始めることになる。カマラーダ（日雇い）へは早速用意するように手配しよう。

ぼくも夕食を終えて煙草に火をつけうまそうに煙をは

く。

こうした生活にすっかり慣れたぼくだ。珈琲の収穫、これで四度目だ。日本を発つてもう三年七ヶ月もたつてしまったことが、又胸に迫ってきて息苦しくなり、ぼくは不機嫌な表情で空間をにらむ。前の板壁に食後の片づけをするドーナマリアとエレーナの影が、大きく揺らぐ。うす暗い石油ランプの生活、これも慣れると別に不自由も感じなくなるのが不思議に思われる。

「ヘンリツケ。今度の収穫が終わったらモトールを据えて電気を起そうよ」

と、突然、ぼくは彼へ提案する。そう迫って必要を感じた訳でもないのに。

「うん、そうだな」

と、ヘンリツケは考え込むように言う。

「パトロンに相談してみよう」

洗った皿をフキンでふきあげていたエレーナが眼を輝かす。

「お父さん、電気を起したら、電気洗濯機や電気冷蔵庫を買って丁戴ね」

そうすかさず注文する娘に、思わず苦笑をもらしてヘンリツケは、うんうんと頭でうなづいた。

珈琲園。こうして日本語で表わされると、何と優しい響きを持つのだろう。南国の豊かな、緑溢れる農場。広

い大地。青い空。それは日本にいたぼくを魅きつけるに充分であった。その南の国には貧困も窮乏もないだろう。

住む人達は豊かな大らかな心で屈託なく暮らしているに違いない。昼は、夏の熱暑を避けて、バナナの樹陰で恋人と手を取りあつて語らうであろう、夜ともなれば、ギターが奏でるサンバに人々は一日の疲れを忘れて踊るのであろう。月の明りを浴びて人々は輪になつて座り、音楽は静かな農場に鳴り響くだろう。誰かがつけたかがり火が次第に強く炎を燃えたたせ、そのうち一組二組の男女が立ち上り、そのかがり火の赤い炎を頬に染めて踊り始めるであろう。……日本にいた頃、こんな風に想像したぼくだ。今になつて思うと、そんな夢が持てた自分が幸福だったと思う。白いマストの移民船で、ぼくら青年はよく語り合つたものだ。まだ見ぬブラジルの生活に対する恐れと憧れの混つた口調で、ぼくらは一晩でも二晩でも眠らずに語り合つたものだ。ぼくら青年達は、それぞれ違つた環境で育ち、それぞれ違つた考え方をしていたかも知れない。しかし移民船上にあつては、ぼくらは皆同じなのだ。総ては零から出発するという点に於て、ぼくらは同一の線上に立ち、そこで感じる未知の国に対する期待と恐怖の念におののきながら、ぼくらは出発合図を待っていた。サントス上陸後、ぼくらは、それぞれの目的に向つて別れていっ

た。ぼくは、真直にこの農場へ来た。憧れを胸一つぱいにしながら。

珈琲園。珈琲園へのぼくのイメージは、ずたずたに切り裂かれた。毎朝早くから日暮れまでの肉体労働。全身に汗し、それに埃をかぶつての真黒の自分を、夕刻に見出す時、ぼくは限りなく、悲哀を感じずにはいられなかった。ペンとソロバンしか持ったことのないぼく。手はまめだらけになり、破れ、又新しいまめが出来、それも破れ、ぼくの掌は固く頑丈なものと変っていった。毎夜ぼくは、珈琲園を流れる風の奏でる哀しい唄を聞いた。ぼくは独りでベッドに横たわり、その哀しい唄を聞きながら、言葉もよく解らない自分の状態を生まれたばかりの赤ん坊になぞらえたり、過ぎ去った日本での生活をもう一度瞼の裏に再現させたりした。それは決して自分の寂しさを癒してくれるものではなく、かえって寂しい想いをかきたてるのだった。石油ランプの光のもとで、ぼくは日本から持ってきた書物を読んだり、ブラジル語の教科書を、辞書を引いて解釈したりして過す夜の時間だけが、ぼくに許された、唯一のぼくらしい時間であった。

珈琲園。それはブラジル開拓史の主人公であった。けれど、ぼくは初めての珈琲園に対して嫌悪の惜しか持てなかった。それが、三年以上この地で生活し、その生

活に慣れ、すでにその生活の中に安らぎをさえ見出そうとしているぼくは、今、この事実を好意を以て認めることが出来る。この頃に与って、やっと、ずたずたに切り裂かれた珈琲園のイメージを一片一片丁寧に拾い集め、それを前とは違ったものに繋ぎ合わせようと努力するようになった。こうした心の推移を、和子は理解してくれるだろうか。手紙は、ほとんど書いて送ったことがない。

欠かさず励ましへの便りを送ってくれる和子に、ぼくは優しい心を持ち続けることは出来た。優しい労わりに満ちた和子の手紙。日本の匂をいっぱいにつけた和子の手紙。

それはあまりに優しくあっただけに、この地で寂しく生活するぼくに、時にはますます淋しい想いをかきたてたことを和子は知っているだろうか。

珈琲園。この四十五アルケールの農場には六万本の珈琲樹が植えられ、高みに立ってこれを望むと、整然と四米間隔で植えられた珈琲樹が、遙かかなた地平線まで続いているのが分る。このパラナ州の奥地、最前線にあたるぼくらの農場は、西へどこで果てるとも知れない大原始林地帯を擁し、東へ向かつては、これ又果てしない珈琲園に連っている。

六万本の珈琲樹を管理するため、十家族のコロノ（農園労働者）が置かれる。家族の就労人員に従ってこの六

万本を区分し、平均六千本の樹を各家族に配分する。彼等はその管理、即ち労働によって受け取る最底の賃金により、生計を維持していかねばならぬ。

赤瓦の屋根の彼等コロノの家が、こうして高みに立って見渡たすと、広い珈琲園の連りの下に整然と並ぶのが見える。視線をのぼすと、遙か遠くに点在する赤瓦の屋根、そのまわりを囲む雑作地が目に入る。原始林は、この高台から下ってコロノの家、そして、その小さな放牧地の下の小川を境に、存在を誇示するかのようになり、その果てをぼくらに見せない。

ぼくは除草用のエンシヤード（鋤）を側におき胸のポケットから煙草を取り出して火を点ける。風景はのどかにぼくの前にひろがっている。こうして仕事をしていれば、そしてこの風景の中に、静かに自分の心を浸しておれば誰からも犯せられないしみじみとした平和を身の内に感じることが出来る。時には、全身に汗することの限らない歓こびを、ぼくにもたらしてくれることだ。だ。だ。だ。だ。

ぼくはこの三年半自分が育ててきた珈琲樹を、親愛の情をもって眺める。彼等は真赤な珈琲を鈴なりにつけてそこにある。彼等は知っている、ぼくのこれまでの生活を。暑さの中で大粒の汗をポトポト落しながら働いたぼくの姿、真黒になって土地をはいずり廻ったぼ

くの姿、とげで、てのひらを血だらけにし泣きそうな顔で彼等を収穫したぼくの姿、彼等は、そんなぼくの姿を知っそいるはずだ。

午後の強い陽差しの中で、ぼくは広い農場を眺めるのは好きだ。物音もない静けさの中で、一瞬、総てのものが呼吸を止める。そんな錯覚を与えるこの午後の一。刻。

こうして眺めている視界に、麦藁帽子をかぶったエレナが現れる。彼女は下の方からぼくを見つけ、手を上げて合図すると小走りで近よって来てぼくの傍に立ち、はあはあ息を切らしてぼくを見ながら、なお大げさに、肩を上下するその動作を続けた。

「なんだ、エレナ」

彼女は、いたずらっぽい眼ざしでまだ肩を上下する運動を止めない。その度に胸のふくらみが揺れ動く。十六才という彼女は、もう立派な女になっている。この二・三年の間に子供から大人へ脱皮しようとする彼女を、その初々しさのために、ぼくは驚きの念をもって見る。まだ小さかった頃のエレナは愛らしく稚なかつたので、ぼくはまるで妹のように彼女をあつかった。それが、この頃では、まなざし、そして一寸した動作の隅には、あたしを女としてあつかって丁戴といわんばかりの主張が秘められているのを、ぼくは知っている。子供あつかいするぼくを、うらんでいることを知っている。

る。

「カフェーにしまししょうアキラ」

「もうそんな時間になるのか」

エレーナはくるりと振りむくと、一、二、三步いきかけたが、あっと小さく声をあげて立ち止まった。

「あたしにマモンをとって下さいな」

「またドーセ（菓子）をつくるのか」

うん、とエレーナはうなずくと、あたりを見まわし、珈琲園の中にところどころ自然に育ったマモンの樹を探した。

「ほら、あの樹にたくさんあるわ。アキラは猿のようにうまくとってくれるでしょう」

「猿のようだって。エレーナの方がもつとうまくとるだろう」

「あら、あたしは駄目よ」

「駄目なことあるものか。いつもぼくに取らせずにあんたもとってみたらどうだ。前はよく自分でとったじゃないか。あの頃、ぼくは、エレーナは猿の子供だと思った」

まあ」一瞬、彼女は恥ずかしそうに口をすぼめる。

「あたしもう娘になったのよ」

そして、こぶしを振りあげてぼくを非難する。

「何がモツサだ。まだ十六になったばかりで。まだまだ子供さ。」

「ノン、あたしもうモツサよ。アキラの馬鹿」

エレーナが手をふりあげてぶとうとするのをひらりとよけたぼくは、何がモツサだ、モツサ・ナーダと叫びながら、彼女の迫ってくるのを逃げようと走った。きれいに収穫準備を終った珈琲園を、二人はもつれるように走りながら、五米程あるマモンの樹までつくともう息が切れて、ぼくはその根元に立ち、幹に手をおいた。後から、エレーナが追いついてぼくの背中をとんとんとたゝき、馬鹿馬鹿と言いながら笑っている。

たたかれながら、ふとぼくは和子を思った。朝電車の中で和子と会うと、和子は黙って横に立ち、おりる時いつもぼくの背をとんとんとたたくと、「じゃあ、わたしここで降りるわ」と、小さな声で言った。おりると、安全地帯に立って、ガラスごしにぼくの姿を探し、手を口もとまでもっていき、秘かなサインのように、別れの合図をぼくにおくる。

和子は会社へ出勤するのだ。混雑した電卓の中で、ぼくも弁当の入った鞆をゆすり上げるようにして左手にもつと、右手でそれに答える。出勤時のラッシュ・アワーの中でのぼくのひそかな楽しみ。今でも和子はあの人混みにもまれながら電車で通勤しているのだろう……ぼくは、エレーナの方を振り向いた。

「ごめんよ、エレーナ。ぼくは猿のようにこの木に登り、マモンを落すから、下で受取っておくれ」

「え、いいわ」

ぼくが幹に手をかけて登り始めると、エレーナは、ぼくの腰をよいしょ、よいしょとおしあげる。

「くすぐったいからよしてくれ」

「何言ってるのよ。あたしおしあげてあげる」

エレーナに助けられて、ぼくは樹の頂上に立つ。真昼の珈琲園が午睡にふけっているかのように、眼下になだらかな起伏をひろげる。真赤な実をつけた珈琲園。

「さあ落してもいいわ」

エレーナの声があたりの静けさを破る。

「よし、エレーナ、しっかり受止めるんだよ」

黄色く熟れたマモンをもぎとると、そこから真白い乳のような汁がこぼれる。ぼくの投げたマモンが直線を描くと、それがエレーナの腕の中に受け止められる。まだ青いマモンを残して三つ、下のエレーナに投げおとす。ぼくはその上に立って、しばらくそのままの姿勢で周囲を見渡す。広い、全く広いこの大地が、遙か遠く地平線にまで続いている。原始林の果、地平線に消えるあたり、まるで海のようにだ。目を開いて見れば見る程、それは海のように見えてならぬ。海、久しく見ぬ海。ぼくはそれを、真実の海と信じたい。ぼくらが四十五日を賛して渡ってきた海。こうして見えるあの海も、ぼくのふるさとの日本へ続いているのだろうか。

「アキラア。早くおりておいでよオ。何を夢見ている

のす。昼のカフェにしましょう」

五月ともなると、夕暮れにはもう肌には冷い大気があたりを浸してしまふ。ゆるやかな傾斜で小川まで下る道の片側は、高いユーカリツピが並んでいて、微かな風にもその枝葉をふるわせて、泣いているような音をたてるユーカリの並木を過ぎて、道を西へ折れると両側にはすでに収穫されたミーリヨ（とうもろこし）の畑が続き、その下に柵があり腐れかかった扉を開いて入ると放牧場へ出る。

シャワーを浴びて、さっぱりした服に着替えたぼくはいつものように夕食までの時間をここで過す。一日の疲れはぴったりとぼくの身体にくつついてはいるけれど、こうしてその日の仕事を思い出しながら、そして、いろいろな想いにふけて過すこの時間が、ぼくにとって唯一のよろこびなのだ。

閉ぢ込められたこの環境の中で、ぼくはさまざまなこと考え学んできた。夕暮の放牧場に立って、ぼくは独りぽっちの呼びかけを遠くの原始林へ、広がる未知の土地へ向ってなげかける。風の音と立木の揺れ動く音が、ぼくの耳に響き、そこにたたずむぼくの心は次第にいいよのない淋しさに泣けてくる。こうしてひとりで、この異国の地に立っていることが不思議にさえ思われてくる。何故、ぼくはこうして独りで淋しい想い

をしなければならぬのだろう。多くの友や、たった一人の母を捨て、ぼくは今、こうしてひとりで、夕暮れていく大地の中に立ち一、いい知れぬ孤独感に胸を痛めているのは何故だろう。地球の裏側の故郷は、今、朝を迎えているだろう。

友人達も、それぞれの環境の中で、明けていく朝を迎えているに違いない。ぼくのこの淋しさは彼等にまで届かない。この大地は、ぼくにとって、あまりにも大きすぎぼくの寂しい心は、あまりにも小さすぎるようだ。

ぼくはこうして大地の一点に立ち、自分の力の小さいことを思い知らされる。昔、人々は原始林を切り倒し、そのあとへ様々な農作物を植えつけ、それを収穫し、地力がなくなるとまた次の原始林へと開拓の意欲を燃やしてきた。開拓精神、そんなものは今のぼくには持ちあわせがないようである。すでに開かれた農場で過す生活でさえぼくにとっては、やり切れないものを感じさせる。開拓された珈琲園の生活、その中で生きてきたぼく。自然の息吹を身に一つぱい吸いながら、ぼくはその自然の中で生きてきた。上地を耕し、作物を植え、雨の降るのを待ち、自分の植えたものがだんだん大きく生長していく過程を見守って、自然の偉大な力に驚き、示さな生命を自分の手で育てていく喜びを覚え、ぼくはこの自然と密着した生活を、珍しさと期待に満ちたものとして、これまで過ごしてきた。けれど、その

中であって、ふと心をよぎる淋しさは何だろう。

どこで果てるとも知れぬ原始林に向って、ぼくは今日もまた話しかける。生きていくことはどうしてこう淋しいのだろうか。暮れてゆく原始林は、沈鬱な表情でぼくへ語りかけてくる。彼等は知っている。自分等はいつかは亡びてしまうであろうことを。そして、その亡びてゆくものの淋しさをぼくに語りかけて、ぼくを慰める。

すでに暮れゆく原始林は黒々と眼前に広がり、夜の眠りにつこうとしている。後に珈琲園、前に原始林を見ながら立つぼくの姿は、あまりに小さすぎるように思うのだ。

夜、夕食が終ってぼくは自分の部屋に閉じ込める。石油ランプをつけて、粗末な机と椅子とベットの置いておる部屋で、眠りまでの二、三時間を日本から和子が送ってきた雑誌を開いてみたりする。机の上には母の写真が置いてある。

「あきらや、むこうに行ったら手紙をおくれよ。母ちゃんはあきらだけが頼りじゃけん、一生懸命頑張って親類のもんにも母ちゃんの顔がたつようにしてむくれ」

神戸で、いよいよぼくが乗船する時になって、勝気であった母は急に涙もろくなった。それまでこらえてい

たものが、急に堰を切ったように眼からあふれてくるのを母はハンカチでおさえた。

「死んだ父ちゃんが、いつつもあきらの姿を見守つとるよ。母ちゃんのこととは心配いらんけん、あんたは自分の信じとる方向へ頑張るんやで。……………」

母はぼくの手を両手でしっかり握り、ぼくの眼を見すえながらこう言った。

「元気でな、あきら、元気で……………」

声をつまらせ、すでに老いの見える両頬を涙で濡らして、ぼくの胸に顔をうずめた。戦争で父を失ったぼくは終戦後を母の手で育てられた。あきらが大きうなつたらと世間の荒風から守って働いてきた母の小さな身体をぼくの胸に抱いて、ぼくもきつと頑張ってみせると母に誓った。にこやかに微笑した母の写真を見る度に、ぼくはその誓いを思い出す。高校を卒業し、社会で三年働いたぼくの渡伯の決心を、親戚中の反対から守って、ぼくを旅立たせた母の姿を思い出す。ぼくは、その母の姿を臉に浮かべ、胸の奥の方から突きあげてくる痛みに耐える。石油ランプはそういったぼくの姿をゆらゆらと横の粗壁に映し出す。殺風景な部屋の椅子に腰かけ、さまざまな想にふけるぼく。こんなとき、日本が恋しくてたまらぬのだ。ふるさとの日本がなつかしくてならぬのだ。

戸外で突然犬が吠え始める。又、どこかから見知らぬ

犬でもきて吠えたてているのだろう。ぼくはベッドに横になると、石油ランプを近づけて、ポ語の勉強を始める。

疲れたぼくは、すぐ本をほうり投げて、石油ランプを消し、しばらくいろいろなことに想いをめぐらせる。こうして大自然のふところに抱かれて唯ひとりベッドに横たわっている自分を悲劇的に考えたり、また、日本の母や和子を想ったりする。

ぼくはこの農場でもう三年半、三年をコロノ（労働者）として、そして今年より監督補佐の形で、ヘンリツケを助ける立場に立った。辛棒したおかげで経済的にも少しは楽になりそうである。昨年まで毎月小遣いをもらう程度、今年の収穫によつて、その収穫量の何パーセントかをぼくのものとする事が出来る。時には単調な田舎の生活にもあきあきして、サン・パウロの方にも出て働いてみようと考えたこともあった。けれど、この三年間は石にかじりついてでもと、ともかく全力をあげて働いて来た。

その効果が少しは現れてきたようだ。収穫が終つたなら少しは金が出る。それで和子を呼び寄せようかと想像したりする。それとも母を呼び寄せようか。ぼくはベッドに横たわり目をつぶって、サントスでの和子との再会を瞼に浮かべてみたりする。ぼくは港に近づい

てくる船のデッキに和子の姿を探す。きっと分らないだろう。船が着く。棧橋を駈け上って、ぼくは人混の中に和子の姿を求める。キョロキョロしている前に和子は突然姿を表わして、ぼくをいぶかしげに見るに違いない。ぼくは和子の変わった顔、髪の形、服装に数年の空白をなまなまと感じるだろう。「あきらさんですか」と、和子は間の抜けた呼びかけをするかも知れない。それとも「まあ、あきらさん」と、ぼくの胸にすがりつくだろうか。いや案外冷静に「あきらさん、和子はやつと着きました」と、ぼくの顔をまじまじと見つめて、ぼくの方へ手を差しのべるだろう。そのとき、ぼくは初めて和子をこの腕の中に抱いてやるのだ。日本を出る時握手しただけの和子。好きだとは言ったけど思い切り抱いたことのない和子。お前があまりに清純すぎて、ぼくはいつも、悪い想像はしたけど、一度だって手で触れたこととはない。ぼくらは街を歩くとき一間も離れて歩いたっけ。お下髪のお前が初めてパーマネントにした時、サヴェエさんのようだと言ったら和子は悲しそうな顔をしたね。手紙では好きだと言っても、口では一度だってぼくを好きだと言ってはくれなかった和子。ぼくがこちらへ来てから、和子もブラジルに行きたかったなどと。勝手な和子。…… とりとめのない空想を、ブラジルのこの小さな部屋の真暗闇で、ぼくはもてあそぶ。戸外の犬は、けたたましく吠えている。ぼくは身体を

起し、ランプへ灯をともす。

そのランプをさげて戸を開く。月明りの中に、黒い影が動いている。眼をこらして見ると、それは牛のようであった。

透明な空気を胸いっぱい吸いながら、ぼくは井戸水を扱み上げ、歯を磨き顔を洗う。名も知らぬ小鳥がパインイラの枝を飛び交い愛らしい鳴声を朝の充実した空気に響かす。鶏小屋の前へエレーナは籠へ入れたミーリヨ（とうもろこし）を運ぶ。朝早くから起きて、そこらを歩き廻っていた鶏たちは、声をたてながらエレーナの足もとへ走っていく。そしてエレーナの勢よくまいたミーリヨをにぎやかについばみ始める。ヘンリツケはもう搾りたての牛乳を手にして、牧場から口笛を吹いて上ってくる。

「おはよう」

「おはよう」

ぼくらは朝の挨拶を交す。毎日の朝はこうして始まり一日だって変ることはないのだ。

ぼくは納屋へ行き大きな籠にミーリヨをいっぱいにつめる。それを肩にのせ豚小屋へ持っていく。ブウ、ブウ、というぼくの声に小屋の中から、そして草の茂みから、大小さまざまの豚達が鼻を鳴らして、ぼくのいる柵の方へ集まってくる。ーよし、よし、今御飯をやるぞ。

ミリーヨの皮を一本一本はぎぼくは彼等へ投げてやる。朝陽がその時になって緑の草木へ光をなげかけ始める。優しい陽の光はこの広い大地を包み始める。豚の毛が露を含んできらきら光る。豚達はぼくの投げ与えるミリーヨを争ってそこらじゅうを走りまわる。まわりを見渡たすぼくの眼に、平和な朝の風景は展がる。眼前の原始林は、朝の陽を浴びて起きたばかりの物憂い表情で、ぼくを見る。

平和な朝である。柔かい陽光は草の葉の露を光らせるぼくが歩く度に草の葉からきらきらと朝露がこぼれる。

毎朝のことながら、ぼくはそれを美しいと思うし、こうした平和な穏やかな風景の一点描として、自分の姿を加えられることを幸福だと思う。

「アキラー。バーモス・トマ・カフェ」

台所の窓からドーナ・マリアが前かけで手をふきながらぼくを呼ぶ。ぼくはオーと答えると籠を納屋へ触り投げ、食堂へ出る。ヘンリツケはコップへ並々とついで牛乳をうまそうに飲んでいる。

「ボン・ジア。今日も天気が良さそうだ」

と、ぼくは変りばえのしないことを言いながら、椅子を引き寄せ腰を下す。

「アキラ、昨日はうるさかったな、犬がひどく吠えて」

「そう、ぼくも眠れずに一晩過してしまった。けれど」

何故あの牛は出たのだろう。誰か牧場の戸を開けたのだろうか、ぼくが彼を牧場へ追い込んだときは、もう一時を少し過ぎていたようだ。

「俺もあんたが帰って来たのを知っている」

ヘンリツケはそう言いながら、煙草をナイフできざみミーリヨの皮をとり出してそれに包み、ライターで何回も火を点けようとするがそれが出来ず、やっこの思いで火を点けると、ぱっと燃え上るミーリヨの皮をふっと吹き消した。そしてその口もとに微笑を浮かべて、急に浮々した調子で云った。

「今日は土曜日、アキラ、あんたも町へ行ってみないか。俺はカミニヨン（トラック）で出ようと思っているのだが」

「今日は駄目だ。別に行きたいとも思わない」

ぼくはカフェーを飲み終ると立ち上った。町への魅力などない。ただ昼からの熱い太陽のてりつける時間を、涼しくぼくの部屋で昼寝がしたいのだ。毎日一人で過す習慣に慣れてしまうと、今更あの埃っぽい町に出て、解らぬポルトゲースを話す気苦勞よりは、のんきにベッドに寝ころび、気ままに本でも読んでいる方が、よほどよいと思うのだ。日本にいた頃、時間が惜しい、時間が惜しいと、せかせか一日中歩きまわっていたばかりの変化を、怠惰になったといえるだろうか。週日を激しい労働で過すぼくは、ベッドに横たわり何かを考え

ているようで、その実、何も考えていない空白の状態の方が、余程休息になるだろう。そんなことを思っているぼくへ、ヘンリツケは一寸片目をつぶっていたずら気に言う。

「アキラ、恋人を見つけないか。町には娘たちが、たくさん居るが」

「ぼくにはまだ恋人を探す資格などない。恋なんてどころじゃない。」

「日本の恋人のことが忘れられないのか」

「そうかも知れない。けれど、ぼくはまだ金もないし、言葉も分らない。ナモーラ（恋愛）とか結婚ということは、もっと先になって考えようと思っている」

「しかし、アキラ、一生なんでもものは案外短いものなのだ。生命は大いに愉しまなければいけない。きれいな女をみたら彼女とナモーラすることだ。うまいものがあつたら、それを食ってみようじゃないか。ブラジル語で、テーラ・ケ・コーメ、土が食べてしまうという言葉がある。総ては土に還元されるという意味だ」

「それはそう思うけど」

「あんたは少し考え過ぎると俺は思う。もう少し楽な気持で過すことだ。あんたは金を儲けて日本へ帰るつもりか。そうではないだろう。あんたは若いしよく働く。あせることはない」

「あせっているわけではない」

「この頃のアンは少し寂しそうだ。みていられぬ位悲劇的な顔付をしている。もっと大きな心をもってもらいたい。ブラジルは広いのだ」

彼はもう一度片目をつぶり、眉と目の間隔を広げるおどけた表情をすると立ち上った。年齢より老けて見える彼の顔はそうすると、若やいで見える。子供の頃から自然を相手に鍬を振り続けてきた彼は彼なりにひとつの人生観がある。彼の生れた国は広い。ぼくの生まれた国は狭くて、ちっぽけだ。彼はブラジルこそ世界で最高の国だと信じている。その誇りに支えられて、この貧しい文化の生活を別に貧しいとも思わない。ぼくにしたら、最初はこの文化果てるパラナ奥地の生活に慣れることが出来ず、いつも深刻な顔付で、日本のあおいきとどいた文化を思い出しては、泣きたいような寂しさを覚えたものだった。それがこの頃になって、時折、ブラジルの良さというか、漠然としたブラジルの広い自然のふところに抱かれている幸福感にも似た感情を、心の隅に発見して驚くことがある。ぼくがすでにこのブラジルの風土を愛し始めている証ではなかるうか。この鍛えられた三年間で、ぼくも以前のようにはくよくよ考えることもなく、のんきになってきた。それでもなおブラジル人である彼の目には、ぼくの心が小さく見えるらしい。それというのもぼくがまだ日本という抽象的な言葉を捨て切れずにいるからだろうか。忘

れたようで忘れていないふるさとの日本。心の奥深く秘められ、時々、胸をもつぶすかと思われる程、激しく溢れあがってくるふるさとの日本。日本と口にするだけで、それは甘い、優しい、懐かしい感情と変って心を浸す。ブラジル人から「日本人は背が低く、色が黒く、醜い」とけなされようが、ぼくが日本人であることは確かなのだ。どんなに年老いたとしても、ふるさとを想う心は変わらないだろう。

「元氣を出せよ。アキラ」

ぼんと強くぼくの肩をた、き、ヘンリツケは戸口の方へ出ていった。心配してくれる彼の心がうれしかった。こうして一緒に住んでみると根本の人間的感情というもの、どの国の人間も同じであることが分る。うれしい時は笑い、悲しい時は泣くのが人間なのだ。

「アキラ、ほら見てごらん。牛がミカン畑をのそのそ歩いている」

エレーナが驚いて指差す方を見ると、確かに昨晚と同じ牛が、悠々と豚小屋の前のミカン畑を抜けて、コーヒー園の方へ歩いている。外はもう陽は昇り、強烈な陽差しに変っている。収穫を前にして今日の土曜日は休もうということに、ヘンリツケと申し合わせたのだ。ぼくは椅子から立ち上るとミカン畑へ出ていった。ドーナ・マリアも外へ出た。

「どうして牛が出たのだろうか」

ぼくはドーナ・マリアへ尋ねた。中年肥りしたマリアは、さあというように太った肩をすくめた。

「分らない。どうして彼がこのあたりをうろろろするか」

ひとり呟きながら、ぼくは牛の方へ歩いていった。鈴なりにになったミカン畑は、熟れて落ちたミカンで一杯だ。

腐れたミカンが、ぼくの足に踏み潰されて、ぐしやりとした感触を伝える。ぼくはそのあたりに手頃な枯枝を見付け、手にすると牛に近づいた。彼はおびえた眼付きでぼくの姿を一瞥すると、くるりと向きを変えて、とつとつと身軽く走る。軽く身をかわされたぼくは、その時になって急にむらむらとしたものを覚える。よし、と何かに憑かれた顔に変わったのを自分で感じる。牛は十米も走ると悠々とそこらの草を食べ始める。ぼくが近づくと、はつとしたようにまた逃げるのだ。いつのまにかエレーナも手に枯枝を持ってぼくと反対の方角から現れる。ぼくの顔を見ると、にっと白い歯を見せる。彼女はぼくと調子を合わせて、まるで鬼ごっこでもして遊んでいるかのように、ひらりひらりと身の向きを変え、牛を牧場の方へ追っていく。昨夜締めたはずの小さな牧場の戸が半開きになっているのを見付けたぼくは、その方へ牛を追う。牛は戸の前まで追いつめられる

と、やあ面白かったという表情で、ぼくとエレーナを見、ゆっくりした足どり、戸の中へ身を入れる。そしてすぐに何事もなかったかのように草を食べ始めた。

「アキラ。何故牛が出たと思う」

ぼくは声を閉めながらエレーナの顔を見る。顔の産毛が朝の斜めの光線を受けて、金色に光っているのをぼくは美しいと思った。

「何故って、ぼくは分らない」

「戸が閉っていたのが開いたというのはあの牛が自分で開けたということにはならない？」

「さあ、そんなことができるかな」

「あたし、彼が、牧場の外の世界の空気が吸いたくて自分で開けたのだと思うわ」

エレーナはこう言って息をつき、唇を舌の先でちらりとしめらすと、もう一度、あたし思うわ、と念をおし、一寸夢見るような目付をした。

「そうかな」

ぼくはそうかも知れないと思った。戸は、小さな板切を釘で打ちつけただけで、くるりと横にすると締まり、縦にすると開く簡単なものなのだ。牛がその気になりさえすれば、角で少し上へ押し上げるだけで十分だ。

「あたしも、どこか外へ出て見たい。どこか遠い所へ旅行がしてみたい」

手を止へ上げて背のびをし、エレーナは悲しそうな

顔をやる。そんな感情は、ふと彼女の心をよぎって過ぎるだけで、後は何の痕跡も残さないらしく、もういつもの幼い彼女にかえってぼくにいう。

「アキラ、今度はあなたが手伝う番よ。あたし洗濯をしなくちやいけないから、あなた、洗濯物下の川まで運んでちょうだい。」

午後の強い陽差しを避けて、ぼくは自分の部屋に閉じ込め、久し振りに和子へ手紙を書いた。節くれだった手では以前のように繊細な字は書けない。それに日本語だって忘れてしまったようで、ふと日本語で何といたのだったかしらと、おぼつかない気特になっている。漢字などもすっかり忘れてしまっている。

この調子だと、ブラジル語も日本語も不完全になって、ぼくは一体どうなるのだろうと不安になる。少し悲しい気がしてくるのを振り払いながら、何枚も何枚も何枚も便箋を破り、やっと満足のいける書き出しで書き始める。このブラジルの午後時間では、和子は蒲団の中で眠っているだろう。とそんな優しい気特が溢れてくる。その日の生活に疲れて、和子は蒲団にくるまり愛らしい寝顔で深い眠りにについているだろう。ぼくは今、この地でこうしてペンを握り、眼を細め、お前のかつての姿を思い浮かべては、お前のその心に呼びかけようと言葉を探す。やっとの思いで探し出した言葉

を便箋に書きつけていく。お前とぼくという二人の間が、地球の両端にそれぞれ立っているという事実が、二人を異常な力で魅きつけ合わせる理由にはなるまいか。和子は三年前の姿で、ぼくの心へ焼きついている。ぼくの姿も、あの三年前の色白のひ弱な感じの青年として和子の心に印象づけられているのではなからうか。詩を書いたりする感受性の強いみるからに神経質の一人の青年が、色は黒くなり、身体つきも頑丈となり、そして自然との斗いのうちに勝ちとつてきた、鍛われた精神、山男かと思まちがう身体、全く変貌したぼくの姿を、和子、お前は以前と変わらず愛することが出来るだろうか。昔日の面影をなくして新しくこのブラジルで生まれ変わろうとしているぼくを、和子、お前は愛してくれらるだろうか。少年の日から愛しつづけてきたお前、あのお下髪にした小さな少女であった頃からぼくはお前が好きだった。学校へ通う道筋で何時も和子が行き通って行く大通りに出ると、ぼくはあたりを見まわしてはお前の姿を探した。多くの女学生が談笑しながら歩いていく群に会い、その中に和子がいた時のよろこび、ただお前がこの世に生きているという確認だけで、少年時のぼくの心はよろこびにふるえた。

今、ぼくはこうして遠い日を思い起し、そして又、遠く離れてはいるけれど同じ時間に生きている和子のことを想いながら手紙を書いている。航空便で三週間は

かかってしまうこの距離をぼくの方ではどうすることも出来ない。その距離を思うと、手紙を書く気力もなくなってしまう。明日この便りを日本へ向けて送れば、その返事は和子がすぐ書いてくれて六週間も先になる。その時にはもう何となくピントはずれなものとなってしまうのだ。

手紙のコピーでもとつてない限り、どういう手紙に対する返事なのか訳の分らぬものとなってしまう。

ぼくは和子への手紙を書き終え、ペンを投げ出してベッドに横になり、窓から外を見る。戸外にはまだ強い光線が満ちており、ぼくの眼に射るような痛みを与える。

午後の陽は、展がる珈琲園と、そして一郭を占めるミカン畑を包み込んでいる。碧空に緑のミカン畑、それを彩る鈴なりになった黄色いミカン。強烈な陽に描き出されるそんな風景を、ぼくは一瞬、ゴッホの絵と置きかえてみたりする。そのうち、ぼくの身体中にどこからともなく疲労がおしよせてきて、ぼくはベッドの中で眠りに落ちてしまう。

その夜、ぼくは又、犬が怯えたようにけたたましく吠えるのを聞いた。読みかけていた雑誌をおくとベッドより起き上り、急いでシャツとズボンを身につけ戸外で珈琲樹と取り組み、てのひらの中にそのぶりぶりし

へ出た。目は明かるかった。夜の外気が湿っぽくぼくの身体にまつわりつく。ぼくは納屋の前に昨夜の牛を見た。ぼくは、その時何故か彼に懐かしいものを感じた。エレーナの云ったように、彼は自由を求めてさまよった。い出たに違いなかった。ぼくが何ものかを求めてこのブラジルまで来たように。月の光を浴びて、牛は考え込んでいるのか、

首をうなだれ黙々と歩を運んでいた。自分で懸命に戸を開いて出てきたようには思われない程琳しげな様子である。何を考えているのだろう。犬達はこの夜の闖入者の足元でするどく吠えている。彼はそんなことにかまわず、黙々と何かを思索している風だ。こゝから彼の妙に悲しげな表情がはっきり見えた。牛も哲学者のような顔付をするんだなとぼくは思い、始めて彼を牧場へ入れなければと思った。このままにしては彼が雑作地を荒してしまふ。ぼくは彼の方へ進んでいく。彼ははっと顔をあげた。

泣いていたような表情を、急にこわばらせると、彼は思い出したように走り出した。そのあとを犬達が追いつめる。ぼくもそのあとに続く。朝のようにはうまく追いかむことが出来なかった。彼は軽く身を交し、どこまでもぼくらを嘲弄する。ぼくは次第に牛を追うというところに熱中しはじめ執拗に牛を追う。彼にしても何故こんなな逃げまわっているのか分っていないだろう。

ぼくはいらいらしはじめる。自分の思うようにならな
いものへ対して敵意に似たものを感じ始める。追うと
いうことに夢中になったぼくは他のことを考えない。
ぼくの心は彼に対する憎しみでいっぱいになる。畜生、
と口ぎたなくのゝしり、足の続く限り追う。遠くから眺
めればそれは二つの孤独の影が争っているようにも見
えただろう。そのうち疲れてきたぼくは立ち止まり何
事かを考えつく。ぼくは納屋にとつて返しその隅に置
いてある草切りナイフを手にとり外へ出る。竹竿を探
し出しその先にナイフを結びつける。ぼくはそれを
持って牛の方へ走り出す。彼も疲れた様子でぼんやり
とミカン畑に立っている。ぼくはある程度の距離を
保って足を止め彼の方をうかがう。それから、そろそろ
と彼に近づく。彼の振り返った表情があまりに傾く淋し
げであるのに、一寸した躊躇を覚えるが、それを振り
切って、ぼくは力いっぱい彼の腰のあたりを目ざして、
即製の手槍を突き出す。ぐさりと鈍い音と感触がぼく
のたなごころに感じとられた。

彼ははっと飛びのくと、それで初めて自分に帰ったよ
うだ。刺傷は凶体の大きい彼にとっては別にたいした
こともなかったようである。けれどその突然襲った小
さな傷みは彼を我に帰らせるに充分であった。犬の吠

えつくまま彼は小走りに自分の住む柵の方へ向かった。竹竿からナイフをはずし、月の明かりにすかしてみると、そのギラギラと冷たく光る刃先に何本かの赤茶けた彼の毛があり、切先から一寸余り、うっすらと血糊が浮いていた。夜露に濡れたズボンの裾のあたりから急に寒気がおしよせてきた。ぼくは月明かりにたたずみ、ナイフについた血を見ながら、ふと、眼頭が熱くなり曇ってくるのを感じていた。

珈琲の収穫が始まった。何百年と続いてきたに違いないこの収穫方法は全く原始的なものであった。まづその準備として一月の終りから山寄作業が始まる。赤く熟れた珈琲の実が落ちてもそれが土や葉の間に埋もれないように、樹の根元から鋤で土をひいて、四米間隔の樹の中央に山を作っていく。腐った木の皮や、枯葉、枯枝を中央に集めて、それに土をかぶせた山である。実がその山の上へ落ちてても下に転がって落ちる適当な傾斜をつけてその山は作られていく。作業を終ったあとの珈琲画は、靴をはいて入ってはもったいない気がする位、立派な庭の芸術品にかわってしまう。その庭が四月五月になると新しく落ちた枯葉や早熟れして落ちた実に覆われてくる。

それと共に珈琲の実も一度に赤く色づき始めるのである。収穫を始めるのはそれからだ。コロノ達はそれぞれ分担された農地を家族全員で実ちぎり作業に入る。老人も婦人も子供も狩り出されて畑は急ににぎわうのだ。珈琲園は赤く彩づき、その中で大勢が実を落とし始めると、いかにも収穫という活気と、祭にも似た熱気が珈琲園に充満する。まだ青実もある収穫初期に於ては、てのひらを枝にあてしごとくと、ぶりぶりした実がばらばらと、音を立て、地に転がる。その赤、黄、青の実が地面一ぱいに広がるのを、裸足で踏まぬように留意して、次の枝、次の枝へと手でちぎっていく。高さ二米半もある木の上へ梯子をかけて手をのばすと、嫌が応でも強い太陽の光線が眼を焼く。眼を細めて実をちぎる。近くで収穫しているイタリア移民の家族が、大声で歌っているのが透んだ空に響きわたる。あちこちから子供を呼ぶ声、唄い声、笑い声が聞こえて、あたりはざわめきで満たされる。その中で、ぼくは調子の良い日本の流行歌を唄いながら、ひとりで実をちぎることに熱中する。朝から夕方陽の落ちるまで、ぼくは忘我の状態で実をちぎっていくのだ。

どんなに頑張っても一日に二十本程しか終ることが出来ない。それでもぼくはこの熱気のコもった農園の中

た実を振ると、何かしら充実したものを感じるのだ。樹の葉は潤沢な緑をしているが、やはり赤土の埃をかぶっていて実ちぎり作業をすると、知らぬ間に顔は赤くよごれ、シャツもズボンもきたなくなってしまう。鼻がむづがゆいので大きめの葉を選んで鼻をかむと、溝泥のような黒茶のよごれが葉にべったりつく。暫く、そこへ腰をおろして休む。水を飲み、持ってきたミカンの皮をむく。手が真黒によごれているので、ミカンまでが黒くなる。そんなことに構ってはいられない。口いっぱいそれを頬ぼると口の隅から汁がこぼれ、ぼくはそれをシャツの袖で腕を横なぐりにしてふいてしまう。青い空、そして赤く熟れた実。この中で汗を流して働いている自分が急に偉くなった気がする。こんな汗でよごれたぼくの姿を、日本でぼくを案じている母に見せたい。きつと母は満足してくれるだろう。乞食よりも哀れによごれ果てたぼくの姿を母は悲しがるようなことはなからう。

陽が斜めに傾き、西空が色づき始める時、ぼくはふと手をとめて、その空に見とれる。雲一つない空のかなたに小さな星が輝やいている。その日の労働が快い疲労となつて、身体中を浸してくる。祈りにも似た充実した感情が湧いてくる。自然だ。実に自然だ。日本では決してこんな経験はなかった気がする。人間が素朴に生きていくということ、働き、食べ、そしてその中に小さな

幸福感を見出していくということ。……この自然の中で素朴に生きていく幸福感は何だろう。ぼくだってまだ実現しなければならぬ多くの夢がある。しかし、そうした夢とは別に、この現実の、身体全体で働いたあとの充実感は一切何から生まれるのか。

たてよこ整然と並んだ珈琲樹はその赤い実をもぎとられたあと殺風景な感じになる。その下は多くの実がびっしりと土を覆う。ぼくらはそれをラステーラでかきあつめ、ふるいにかけて袋につめ込まねばならぬ。日本のガンゼキに似たラステーラを木の根本から軽く手元に引いて軸排の実の山を作っていく。それは小さな枯枝、糞、実、土が混合したもので、ペネイラにかけて実だけにしなければいけない。

コロノ達も女子供がラステーラを使い、男がペネイラを持ってそれをさびていく。汗と嬢で全身を真黒にした男達のペネイラを使う腕は機械的である。腕だけでなく体といつてもよい。ペネイラがたわむ程、ラステイラで集めた山を入れ、それをまずざつざつと泥を落とす。それを前へかがみ込むようにして調子をつけると、ぐっと後に弓なりにそるように腰をひねる。ペネイラの中の実が半円形を描いて上へ高く上り、それが一瞬、空に停止したかのような錯覚を与えて、ざつとペネイラに落ちてくる。正確なこの動作を五回も繰り返すと、

ペネイラの中には珈琲の実だけが残り、その赤、青の色がまぶしい程眼を射るのだ。

西風が吹き始めると、南西の地平線から黒雲が伸び上るように湧いた。珈琲の実を落していたぼくは、そんな険しい空の色を見て、今に夕立が襲ってくるだろうと思った。とにかく予定まで終らねばと仕事をしているうちに、その雲はみるみるうちに広がり、ぼくの頭上にまで伸びてきて陽を覆った。まだ青空を見せる空間は残っているが、南の空だけは異様に暗く、ところどころ一段と濃く集った黒雲から暗幕が地上へ垂れているように見られた。次第に他の雲を併合して、暗幕は大きくなり、西から東に移動する雨脚は、ここから見ても激しいものであるうと思われた。風が急に激しくなると、珈琲樹は折れるように、ざわざわとさわぐのだ。それを茫然と見とれているぼくの後姿にエレーナは声をかけた。

「夕立がきそうよ、アキラ」

ぼくは不意をつかれ驚いて後を振り向いた。エレーナは町からの帰りらしく薄化粧をしている。

「何だエレーナか。みてごらん、もうそこまで雨がきている」

南の空を指さしてそいいながら、ぼくはまだその烈しい自然の姿に魅せられたように動かなかった。

『何と素晴らしい眺めだ』 ぼくはそう日本語で咳いていた。側まで近づいてきたエレーナがそれを耳にして怪訝そうな顔をする。ぼくの腕を引いた。

「何とといったの、アキラ、帰りましょうよ」

『雄大だなあ、美しいなあ』

ぼくはエレーナの顔をみて日本語でくり返した。

「何をいつているの、さあ早く」

そういい終るとエレーナはもう走り出していた。

「アキラ、急がないと濡れてしまうわー」

もう一度、振り返ってそう叫ぶエレーナにさそわれ、ぼくもその後を追った。途中まで走ると、エレーナは息切れがして大きく肩で呼吸している。雨脚はもうそこまで迫ってきてポツリポツリと大粒の雨が落ち始めた。ぼくはエレーナを追い越してふり返ると、エレーナは真剣な表情で苦しそうだった。家まではまだ遠い。空を見上ると一塊の黒雲が飛んで、一層雨は激しさを増した。この雲が通り抜ければと思い、ぼくは横手の珈琲の樹の根元に走り込んだ。樹は大きく、枝葉が青々とびて少し位の雨ならその下でよけることが出来るのだ。エレーナもよろめくように、ぼくの後へ飛び込んできた。そして息を切らしながら雨に濡れてはりついた前髪をかきあげた。ふと視線が合って、ぼくらは微笑んだ。面白い遊戯の後の幼子のように、にこやかな微笑みを交すと、ぼくらは肩をすくめた。

「濡れてしまったね」

ぼくは何時も腰に下げている日本製のタオルを抜くと顔と手をぬぐった。

「あたしにも貸して」

エレーナが手を差し出すのに、ぼくは、

「汚れているから駄目だ」

と手を引っ込めた。

「構わないわ、アキラのだもの」

けろりとした顔で、ぼくからタオルをとると、それで顔と手をふいた。濡れた髪が美しく、エレーナの広い額に垂れている。ぼくはその時になって二人があまり近くいることに息苦しいような胸の痛みを覚えた。エレーナの横顔をじっと見つめっていると、エレーナも気付いたらしくぼくの顔を見返した。ぼくの胸は激しくさわいだ。

しばらく見合っているぼくの額に珈琲の葉からもれた雨の滴が、ぽとりと落ちた。

「あら、雨の滴が・・・」

エレーナはタオルでその滴をふこうと、ぼくへ身体をよせ手をのばした。ぼくは、はっとしてその腕をつかむと、エレーナとの距離を保った。そして黙ってエレーナの驚いた顔を見守りながら、突然襲った激情が静かに冷えていくのを待った。

「どうしたのアキラ」

何が起ったのかエレーナは分らずに、ぼくの手へその腕をあづけたまゝだ。

『あのね、エレーナ』

ぼくは日本語で力を込めていった。

『ぼくはエレーナが好きになったのだろうか。この腕の中に思いきり抱いてみたい。接吻してやりたい』

「何とといったのアクラ、教えて」

エレーナはぼくの身体をゆすった。

「何でもないさ。エレーナ」

ぼくは平静に戻っていった。

「嘘よ、何とといったか教えて」

エレーナは真剣な表情でぼくに迫る。

「エレーナがとてもきれいだといったのさ」

「又、嘘をつく、本当をいって」

ぼくは困惑してまた日本語でいう。

『ぼくがエレーナを好きになったって、どうしようもないさ。ぼくにはまだまだしなければならぬことが沢山ある。和子を呼び寄せなければならぬし、その為には、うんと働いてお金を儲けなければいけない。こうして真黒になって働いているのは、みな未来の為だ。ぼくが今・エレーナを力いっぱい抱きしめてもエレーナは怒らないだろう。エレーナは目をつぶってぼくのままに任せるだろう。ぼくもそうしたい。けれど、そのあとに傷つくものは、ぼくとエレーナだ。その行為に未

来はない』

エレーナはあつけにとられた顔で、ぼくをまじまじと見つめる。ぼくは彼女の手を握り話を続ける。

「エレーナ」

「何、」

「分るかい？」

「何が」

「何がって、ほら見てごらん。あの雨に煙むる原始林を。ぼくはね、あのマットをこの手で拓いてみたいのだ。ぼくはこの頃になって、やっと自分の進む道を見つけた気がする。分るかい、エレーナ」

「分るような気がするわ」

「そうかい、エレーナ。ぼくがまだまだ働かなければいけないというのが分るかい。あのマットを切り開き、ぼくはぼくの世界を創ろうと思う。ぼくの考え通りに、ぼくの設計通りの農場に。あの原始林にはぼくの夢があるんだ」

「アキラは大農場主になるの」

「うん、ぼくは、あの果しない原始林に、ぼくの夢をかけよう。エレーナ、雨がひどくなってきたね。だいぶ濡れてきたようだけど寒くはないかい」

「ううん、大丈夫、アキラは」

「何、ぼくは何ともないさ。もうすぐ止むからがまんするんだ」

二人はそのま、黙り込んで雨の止むのを待った。雨は
変わらず激しく加排の葉を打った。風景は白く雨に煙り、
珈琲園の傾斜道は雨水を集めて小川のように流れている。
樹がすっかり濡れて前よりも一層水漏れが増えてきた。
ぼくの頭や髪に首筋に雨滴がこぼれ、エレーナもぼく
にぴったりとよりそい濡れるのを防ごうとする。その
時、何を思い出したのか、エレーナはバッグをとり出し
てそれを開いた。中から取り出したのは、すぐにそれと
分る和子からの手紙だった。

「アキラ、日本のナモラーダからよ」

いつものいたづらっぽい眼で笑うと、エレーナはぼ
くへそれを手渡した。

「どれ」

ぼくは受取ると、身体で雨を防ぎながら封を切った。
読み始めて、ぼくの胸は急に鼓動が激しくなった。何だ
と、和子。お前が結婚するのだと。

それは和子の結婚の知らせだった。≪私達はあまりに
遠くありすぎたようです。この手紙が届く頃、私は新し
い人生の出発点にあるでしょう≫、読みながらぼくの心
は冷えていった。

『そうか……』

読み終わると深く溜息をつきぼくは眼をあげた。雨は
降り続けている。風は鳴っている。もう一度、便箋に眼
を落す。開いた便箋に、何滴かの雨が落ち、和子のイン

クの字がにじんだ。

手紙をのぞき込んでいたエレーナが尋ねた。

「何と書いてあるの」

ぼくはそれへは答えずに、黙ってエレーナに微笑んだ。

和子よ、お前のこの手紙が、このぼくの心を、こんなにずたずたに切り裂いているのを、お前は知らないだろう。

「エレーナも何かを感じたのか更に問おうとはしなかった。」

風が弱まると雨も急に止んだ。ぴたりと止むのが不思議な位だ。空は暗い。まだ降るに違いない。

「止んでいるうちに行こう」

エレーナを誘うと、うんとうなづき彼女は靴をぬいだ。両手に靴を持ち裸足になったエレーナをうながし、ぼくらは樹の下を出た。

「すべるから気をつけろよ」

ぼくらはよろけるように走りながら家へ向かった。南の空に幾条かの稲妻が光ると、突然、耳を裂くような音が珈琲園に響き渡った。

収穫は簡単には終らなかった。実を落とし、それを拾い乾燥場でそれを乾かし、倉庫になおす。その作業が幾日続いたことだろう。

雨の降った後は、実を落す作業が易しかった。赤い色がすでに黒い色へ変った珈琲の実は雨に濡れると落ち易くなる。竹竿で枝をゆすると面白い位、ばらばらと落ちるのだ。樹と樹の中央に立ち両側の枝をまんべんなくたたいていく。あまり力を入れては細い枝が折れてしまう。動作としては叩く動作だが、コロノ達へは「叩いてはいけない。揺すらなければならぬ」と命令するヘンリツケだ。

曇った空から時々思い出したように雨が降ってきた。夕立だと思った天候が意外に停滞して、雨は断続的に降り続いた。

ぼくは竹竿を手にして単調な動作を繰り返す。最初の十本程はまだ作業が面白いと思うが、身体を何回も曲げたり伸ばしたりしているうちに腕が疲れてきて苦痛を感じるようになる。すっかり濡れてしまったズボンがごわごわと足にまつわり、その不快感が全身に広がる。手をとめて休む度に和子の手紙が思い出され、ぼくはそれを忘れる為に、また竹竿を振りまわすのだ。日本を発つてすでに三年、高校時代の友達はとつくに大学を卒業し、それぞれの要職についていることだろう。ぼくはまだこうして全身びしょ濡れになり、珈琲樹と取組んでいるのだ。一日中、労働して得るものは何か。疲労と食欲と熟睡と……。ふと、全身をかけめぐる敗北感にも似た悲哀に、ぼくは耐えようとする。和子

よ、お前が選んだ道をぼくは祝福しよう。そう心で呟いてもすぐに胸の中でふくれ上ってくるものは、和子への思慕と憎悪のいりまじったものだった。和子を失ったぼくは、今からどうすればよいのか分らなかつた。失われた支柱に代るものは一体何だろう。枝からはねる水がシャツを濡らし、ズボンを濡らし、ぼくは黙々と竹竿を振った。

収穫は続いた。八月に入ってもまだぼくらは実をちぎりさびる仕事を続けていた。冬期に入った為、珈琲の葉は茶色となり落ちていく。思一いの外収穫をあげた珈琲樹は、裸となつてうらさびれた姿をしている。実は黒色となり大部分は地面へ落ち、雨にうたれ、なかには土に埋もれて芽を出そうとしているものさえある。冬空はからりと晴れて日本の秋を思わせる。朝夕は上着をつけねば寒い位だが、正午を過ぎるとシャツ一枚で軽く汗ばむのである。

収穫しながらカマラーダ達の監督、そしてコロノ達の賃金計算と、忙しく日を過している毎日だ。猫の手も借りたい程のぼくらは、すでに収穫も終盤戦に近づいた今ドーナ・マリア、エレーナも動員して、出来るだけ早く収穫を終了させようとするのだった。

夕暮が近づく頃、ぼくらは疲れでぐったりしながら道傍に座り込み、皆で、今日はどれ位の仕事が出来たか、明日はどうするのか、と語り合ふのだった。

エレーナも赤土の埠で顔を真黒にして座っていた。そしてぼくの顔を見ていうのだ。

「アキラの顔は真黒だわ」

そういつてさもおかしいように笑うのだ。彼女の笑い声が透みきった空に響きわたる。ドーナ・マリアも笑いながら、

「だってエレーナの顔だってアキラに負けない位、真黒だよ」

と、ぼくとエレーナの顔を見比べる。ヘンリツケはそういうマリアにいうのだ。

「お前の顔だって真黒じゃないか」

「あら、あんただって」

ぼくらはお互に顔を見合わせ、腹の底からこみあげてくるおかしさに大声をあげて笑うのだった。

真赤に焼けた夕暮の空を背景に、原始林が静かに展がっている。どこまでも青く珈琲園が続いている。空は広く果てしない。ぼくらは一日の労働を終え、快い疲労感に身をゆだねながら家路をたどるのだ。

こうして見える原始林。疲れたぼくの心は彼へ向かって語りかけようとする。ぼくは近い日に、お前に挑むであろうと。お前のふところの中へぼくは飛び込んでいくだろう。ぼくは何も失ってはいない。お前のなかで、ぼくは新しいものを生もう。 (一九六四年)

コロニア慣用語注釈（アイウエオ順）

アジューダ	手伝い	加勢
アローバ	計量の一単位	十五キロ
アメンドイン	（メンドイン）	落花生
アヅーポ	肥料	
アラメ	針金	
アルゴドン	棉	棉花
アラード	鋤	
ヴオセ	（オセ）	お前 君 汝
エスペシアル	特別	特別よい
エレ	彼（エラは彼女）	
エスピングワルダ	獵銃	
オペーラ	（オペラソン）	手術
オニブス	バス	乗合自動車
オランダデーザ	オランダ種	オランダ産
カルサ	づぼん	
カザード	男の既婚者（カザードは女の既婚者）	
ガファニヨット	イナゴ	
カバキーニヨ	小型四絃琴	
カイピーラ	田舎者	野暮な人間
ガリンニヤ	牝鶏	

カンサード 疲れた
カルタ 免許証 手紙
カミーザ しやつ
カーマ 寢床
キンタール 小庭 屋後の空地
クルゼイロ 現行貨幣単位
グランジヤ 農園 養鶏場
グルポ 初等学校グルポ・エスコラルの略、組、群
クルパ 責任 負い目
グワラナ 清涼飲料水の一種
クルビ クラブ
クワルト 部屋
グワルダ・ロツパ 衣服戸棚
クニヤード 義姉妹
ケープラ こわれる (ケブラード こわれたもの)
コルダ 綱
コルシヨン 寝台用マット
コブラ 蛇
コンパネイロ 仲間 (男) 同伴者 (男)
コーベ・マンテイガ 野菜の一種
コルシヨン デ モーラ バネ入り寝台
マット 森 (藪にもつかう)
コチア 地名。あるいはコチア組合のこと
コスツォーラ 縫うこと 縫い物

コーメ 喰べる（コメール）
サツペ 萱の一種
サーラ 広間 客間
サツコ 袋
サコーラ 手さげ袋
サンフォナ 手風琴
ジオルナル 新聞
シヨフエイロ 自動車の運転手
シチオ 小農園
ジャーボ 悪魔、鬼、性悪な人
ジューラ 誓い 誓うこと
シユラスコ 焼き肉。バーベキュ
ジナジオ 中等学校
シツケーロ 家畜用の囲い
センタ 座ること
セン・ベルゴンニヤ 恥知らず
セメンテ 種子
センチファイコ（シエンチファイコ） 高校
セルカ 柵
ソルテイロ 独身者（男） ソルテイラは独身女
タツー アルマジロ。センザンコウ
タイエール 上下別の女服
テルサード 山刀
テーラ 土、土地

トランスポルテ 運搬、運輸

トラツタ ものを扱う、手入れすること

トラバリオ 仕事 骨折り

トツカ 触る 鳴らす トツカ ロツサと用いて耕

作すること

ドトール 医者

ナモーラ 恋愛

ナモラード 恋人・愛人（男）、女はナモラーダ

ネゴシオ 商売 取り引き

ノン・コンプレンデ 分らない 理解できない

ン・ゴスタ・デ・ミン 私が嫌いか

ノーボ 新しい

ノイボ 新夫（新婦はノイバ） または婚約者

パイネーラ 木桶の木

バイアノ バイア州人

パガメント 支払い

パトロン 男主人、耕地主（女はパトロア）

バスタンテ 沢山

バーラ 飴駄菓子、

バージエン 英豆

バツソーラ 掃木

パスト 牧地

バンコ 木椅子、銀行

バンダ 楽隊

パリト 洋服の上衣

バーモス 行く（我々の場合）

パシーヤ たらい

ビアジヤンテ 旅人、旅商人、地方廻りのセールスマン

ビシヤード 虫喰い 虫入り

ビツシヨ 虫、けだもの

フンシオーナ 機械などが動くこと、物ごとが

順調に行くこと

プレギツサ くだびれ、面倒。動物のなまけもの

ブジーナ 警笛

プラット 皿

フォゴン かまど、炉

ファレーロ 麩

ファブリカ 工場

フランゴ 若牡鶏

フォルネツセ 農業資材、食料品などの前貸し、物

品の供給

ブルーザ 婦人用しやつ様上衣、作業着

プランタ 種を蒔くことフレゲース 顧客

ファコン 大型刃物

ペネーラ 篩

ページする 物を乞い求める

ベト ベト病

ベリーリオ 老人（男）ベéria（同女）

ペピノ 胡瓜

ベンデドール 販売人

ベスチード 着物

ポライナ 皮脚絆

ボテキン (ボテコ) 居酒屋

ポント 点、停留場

ボニート 美しい

ホーゴ 火、炎

ポルコ 豚、蔑んで罵る言葉にも

ポルテイラ 大木戸

ポチ (ポツテ) 水がめ

マツト 森林

マツト・グロツソ 州名

マリード 夫、良人

マキナ 機械

マルミット 弁当箱

ミシリカ 柑橘類の一種

ムリエル 女、主婦

ムダンサ 移転、転居

モレーナ 肌が褐色な白人と黒人の混血女

ヨ わたし (エウが誤り言われているもの)

ラバツーラ 煉瓦様粗糖

ラインニヤ 女王

リンパする 清掃する、きれいにする

ルーア (RUA 〓街、LUA 〓月)

レンソ ハンカチーフ

レセイタ 処方箋

レポリオ 玉菜、キャベツ

レイテ 乳

レンダ レース編

レンニヤ 薪木

(以上、第二卷収録作品から)

「助成文学賞時代」の年度別作品一覧表

一九五七年

パウリスタ文学賞

イッペー

小滝 土香 佳作

春来たりなば

原 奈保子

虹 選外佳作（発表されず）

鯛 星野忘れな草（同）

流れ 田代寅五郎（同）

一九五八年

パウリスタ文学賞

路上

安井 新 入賞

指輪

由見 欣一 佳作

父 原 奈保子 佳作

一九五九年

パウリスタ文学賞

赤道に添う河

田端 月詩 佳作

つぶやく女達

岡野 由布 佳作

一九六〇年

パウリスタ文学賞

渴情

春日健次郎 入賞

合流

積田 理成 佳作

白夢館

中島 孤峯 佳作

農業と協同文学賞

移民の子供たち

安井 新 入賞

喪失の杜

小滝 土香 入賞

近道

則近 正義 佳作

一九六一年

パウリスタ文学賞

崩壊

山里アウグスト 佳作

兇弾

波多野達馬 佳作

農業と協同文学賞

編集長

佐藤 実 佳作

ミーリオは夜伸びる春日健次郎 佳作

老移民のこの日 山里アウグスト 入賞

糧

土井マンジヨリカ 佳作

春秋社刊

民族の苦悩（上） 酒井 繁一

一九六二年

パウリスタ文学賞

流れはさらに遠く 島木 史生 入賞

きらいな奴 波多野達馬 佳作（発表なし）

歪んだもの 小野みちよ（同）

農業と協同文学賞

残照 牛窪 譲 佳作

はだかの灯 枝盛 梅子 佳作

軟水 山崎 準平 佳作

一九六三年

パウリスタ文学賞

発表作品なし

農業と協同文学賞

壁の中の仲間たち 島木 史生 入賞
燃えろ真紅に 原 奈保子 佳作

一九六四年

パウリスタ文学賞

左代の周辺 矢島 健介 入賞
逝った日々 園生昌夫（佳作。発表なし）
酸鼻の発端 土佐 正己（同）
孤愁 柳田 威（同）

農業と協同文学賞

小さな川の流れ 愚庵 小人 佳作
ネウザ 春日健次郎 佳作
鞠排園の唄 園生 昌夫 佳作
遠雷 山崎 準平 佳作
小舎の中の牝鶏、星野登樹子 佳作一
ピラシカバーナ 春日健次郎 佳作二

日伯毎日文学賞 第一回

転身

浦畑 艶子 佳作

女友達

三瀬喜代志 佳作

白い炎

佐々崎 屯 佳作

きつね

枝盛 梅子 佳作

同 第二回

星をみつめて

浦畑 艶子 佳作

墓の群

小清水 礼子 佳作

愛情の行方 三瀬喜代志

一九六五年

パウリスタ文学賞

油風

津野 恭 入賞

我ら行かん

高山 東 佳作

農業と協同文学賞

我が胸に母ありて 菅野みさを 佳作

序曲 山崎 準平 佳作

岐路
霜明
暗い瞳

原 奈保子 佳作
佐藤 実 佳作
枝盛 梅子 佳作

農業と協同依頼作品

恋文
ねずみ

藪崎 正寿（安井 新）
島木 史生

第二巻の編集を担当して

清 谷 益 次

この時期の傾向について

コロニア小説選集全三巻の性格と意味づけ、時期的背景については、第一巻の編集担当者が克明に触れているので、この“助成文学賞”時代（一九五七―六五年）の作品の傾向に関して若干の感想を述べるにとどめたい。

一九五八年度パウリスタ文学賞の作品概評（募集は五七年）の中で、選者の一人古野菊生がいつているように、終戦から十年を経た頃を起点とするこの時代の作品は（パウリスタ文学賞はパウリスタ新聞創刊十周年を記念して設定したもの）、素材面においてかなり広くなったのが一つの特徴であろう。

これ迄は、作品の舞台と人物の殆どがブラジルの農村とそこに生きる日本人（日系人）であったものが、この時代になると都会生活を描いたものが増えて来るのである。また、戦前の移民の労苦と悲惨の話が多かったも

のに、戦後移住者の生きざまや、戦前移民との異和の状態を扱ったものが混じって来る。一世（準二世を含めて）と二世の間に生じる思考と行動の断層を意識的に扱えようとした作品が現われて来ることも、この時代になってからといつていいようである。

ごく大雑把にまとめてみると①第二次大戦の終結と、世界の中で祖国日本の置かれた立場、敗戦という極限状況から生じたその社会相を知ることによって、今までまだ心のどこかでわだかまっていた“祖国復帰”への心情にやっと諦念に似たものが生れ、ふつきれずにいたこの国への定住をようやく心の中で納得させ（概観してのことだが）、②それと共に、この国に愈よ住みつく以上はまず子弟の教育こそ自家の将来を考える上での“至上命令”だということに俄かに目を開かせられた時代で、奥地の、子弟の教育に不便で両も経済的な安定も容易でない農業に見切りをつけ主要都市及びその周辺への日本人の流入が激しい勢いで起り、都会で生活する者が一挙に増えた、③この頃になって、コアニアの新しいエレメントとして加わった戦後の移住者が、ようやく自分とその周囲を眺める心の余裕を持ち始め、創作を試みる者が現われるようになった、④戦争の五年間とこれに続く数年間の“移民空白”時代に生じた首本の日本人’である戦後移住者と“ブラジルの日本人”である戦前移民の微妙な精神構造の差異といつ

たものによって起る葛藤が、その双方の作品化の試みを促すようになった、⑤この国に生れ、この国の環境の中で育ったブラジル人である自分の子と、日本人的思考の枠と習俗を持ちつづけている移民との初めての“対決”が（それは一世にとって思いも設けなかったものであった）この時代になって顕著な現象となり日系コロニアの中の社会問題の一つとして広く意識されるようになった、などが考えられ、この時代の作品に現われた傾向の底をなすものの一端は説明が可能なように思われるのである。

第一巻の編集担当者が『第一期における戦後の十年間を社会的にも文学的にも、帰国か永住かの内的闘争の時期とすれば、第二期の十年間は固まった永住心、つまりあくまでもブラジルの一部をなす人間として「日本」を外国とみて生きかつ死んでいく（ブラジルの日本人≒というアイデンティティーに基づいて、新しいビジョンと価値体系を形成していかなければならない時期であった」と書いているが、これは一人一人の生き方（或いは生き方の模索）であったと共に、生き力の最も純粋な表現であるコロニアの文芸においては散文の分野でも韻文の分野でも、確かに、これまでの多分に“自然発生”的な創作への対い方から、おのれを含めての移民とは何であったのか、移民の子日系ブラジル人とは何なのか、全く異質な環境との関わりの中で、移民は

如何に生きようとし、或は生きざるを得なかったのか、また移住者にとつてのブラジルとは何であったのか、などという、この国に移住した一人々々が、深淺広狭のちがいはありながらも経験しなければならなかった精神の葛藤と錯節が、“問題意識”として取り上げられ始め、問い始められたことも、この時期の作品の傾向の一つの特徴とみていいものであるだろう。

作品の批評と鑑賞の面でもこの態度が前面に現われて来たのであった。

文学が人間の生きざまの追求を前提としている限りこのような「問題意識」が、コロニアの、小説を書くこととする者たちの心に芽生えて来るのは当然のことであつた。

もう一つ、この時期は、古い移民（準二世や年齢若くして戦前に渡伯した層）が創作に勢い立った時代でもあつた。これらの人の小説を書くこととする意識の底には、自らが経て来た“理不尽”（自分の意志によらず運び込まれた環境とそこでの余儀なくされた生活）な道程を何ものかに向つて訴えたい、知って貰いたい、知らしめたい、という渴望のようなものがあつたことも考えられなくはない。形あるものとして留めたい、というはかないが切ない念もあつたと想像される。

しかし、このような問題意識を根底に置いての作品が見事な結実を見せたかといえ、甚だ心もとない、と

いうしかない。特別に思考の訓練も、ものを書くことへの修練も方法も持ち得なかった移民にとって、ただ心奥にくすぶるひたすらかな渴望だけではこのような容易には把握し難い問題を、まして小説という、かなり深い老察力と高い表現技術を必要とする文学形式の上で十分にコナすことは殆ど至難な業であったといえる。きわめて表面的な描写に終ってしまいうのも、或いはやむを得ないことだったかも知れないのだ。

例えば、日系コロニアの一人々々の心に深い傷を刻した、“勝ち組、負け組”の問題も、幾つかは小説の形をとって文学賞に応募されはしたが、陽の目を見得たものは、誠に蓼々たるものである。発表されたものも、作品化されているというのには、甚だ遠かった筈である。

コロニアの小説作者たちは、このナマナましい、長い期間に亘って練り広げられた愚かにも悲しいこれほどの出来ごとを、客観し分析し、作品として構成、昇華させるだけの力を持ち得なかつた、といえる。余りにも複雑に、ことながらも心理も入りくんでいて、今なお解明を終えていない部分を多く包含するこの出来事と、それに関りを持った（直接的、間接的或いは一人々々の気持において）人間と状況を、小説の中の人物として、背景として描くことは、コロニアの作者にとって荷がかち過ぎたのだといっても間違いはないであろう。

勢い作品は、事件の羅列、人間の表面のみをなぞったもの、或いは余りにも精神的な直接性の故の、感情にかられたものにならざるを得なかつた、と考えられる。

素材を豊かに持ちながら、コロニアの作者たちが“移民”を主題とした秀れた作品をなかなか生み得ないのは、こうした事情によると思われるし、読む側の抱く不満もなかなか解消されない訳である。勿論、移民の生態だけがコロニアの文学の主要素材ではあるまいが、歴史の流れの中の移民の姿を把えることは、常にコロニアの文学の重要課題の一つである筈である。

選出についての基本的態度

この第二巻には巻末一覽表に示す五七篇の中から十一篇が収録されている。

収録作品の選出については一作者一作品のたぐいまえをとり、コロニア文学中央委員の意見を聴いて、若干の変更はあったにしても、選出に関しての全責任は第二巻編集担当者に帰すべきものである。

次に選出に当たつての担当者の考えを略記しておきたい。

コロニア文学とはどういう性格を持つものなのか、ということ定義づけるのはなかなか容易ではないであろう。≪ブラジルに在住する人によって、ブラジルを

舞台にして書かれた日本語の小説》とひとまず言うことが出来るだろうが、それだけではなく、作品の人物がどれだけ深くブラジルの “実態” と関わり合っているかというところが、表現において問われるものである、とみる事ができるのであるまいか。少くとも、移民とは何であり、何であったのか、という問い掛け或いは問題意識を基底の一つとすることを宿命づけられている文学とも言えるであろう。

他国へ移住した人間が、その異質の環境の中でどう生きたか、生きざるを得なかったかということ、またそこから形成される人間像の追求ということが求められる文学であるとするならば、作中の人間に、ブラジルに生きる、または生きた人間つまり “ブラジル生活者” としてのリアリティーのある作品、移住者であるが故の必然の生きざまを描いた作品、ブラジルの風土からでなくては生れ得ない作品でなければならぬ、ということである。

“ブラジル生活者” の人間像を描こうとする姿勢のない作品、バック・グラウンドとしてのブラジルの実態が感じられない作品、薄い作品は、いかに巧みにソツなく書かれていようとも、本選集に収録するものとしては意味がない、と私には思われる。ブラジルを、その中の日系コロニアをカスめて過ぎたと思えない、或いは仮りにブラジルを舞台として借りたに過ぎない人

間しか描けていない作品に、コロニアの文学としてどれだけの意味を見出すことができるのだろうか、とも思うのである。

またまた古野菊生の言葉を引合いに出すことになるが、一九六五年度パウリスタ文学賞作品選評の中で「味は不味いが清冽で冷たい地下水と、人工的に味つけた気のきいたインスタント飲料水、前者はおおむねブラジルに古いか、ブラジル生れの作者。後者はブラジルに日の浅い作者。表現技術が文学以前であるからといって、作者の全身的アピールに無関心であつていい訳はない。しかし、胸底深く欲しているような作品を代表するものが対抗馬として出なければ、今回のような結果にならざるを得ない」と書いている。

この年度の選の結果に対する捨台詞のように聞えなくもないが、しかし選者としてのこのような嘆きは、コロニアの小説の選をした経験を持つ者の誰もが味わっているところのものであるだろう。コロニアで生れる小説を読む者たちは、選者をも含めて“清冽で冷たい地下水”の而も“実態感”に充ち充ちた味わい深いものを求めている、期待していると言うことであつて、小手先の巧みさを喜びはしないのである。

いうまでもなく、たまたま第二巻の編集を担当することになった私に、高邁な文学観、深遠な文学理論がある筈はない。ただ、移民の子としてこの国に渡り、この

国の自然と人にその中の日系コロニアに関わりを持って暮して来た一人として、コロニアの小説作者たちが、ブラジルとそこに生きる人間を題材として書く作品であるのだったら、この国の“生活者”を描いて欲しい、少くともそれを追求する態度であって欲しい、広い意味でのブラジルの風土なくしては生れ得ないような作品を読みたいと希いつづけただけである。そのことをここで明らかにしておきたい。

このような態度と願いを以て第二巻に収載すべき作品を選ぼうとしたため、各文学賞の入賞或いは佳作の作品という、その年々の「賞」の結果にはこだわらなかつた。

各文学賞選考経過の発表や選者の言葉を読んでみると、入賞とか作品の発表には非常に運、不運があつたことがわかるのである。

折角佳作入選で発表を約束されながらも（入賞作とさしたる径庭はないとされながらも）何らかの賞設定者側の理由に（都合？）よって陽の目を見なかつた場合もあり、また入賞作品を出すということにも、賞設定者側の意向が作用することもあり得たのである。何年も続けて入賞作品とするに足る作品が現われなかつた場合など、賞設定者側の意向に選者側が同意して、敢て入選作を出した例もある。文学賞が、奨励の意味を持つものである限り、またコロニアの文学の置かれている状

況においては、これも致し方のないこととしなければならぬ。だがら、文学賞入賞ということがその作品の、“絶対的”レベルの高さを必ずしも意味しなかったのである。

或る期間の全作品を“一堂に会せしめ”て、一つの選考態度を以て選んだ結果が、年々の成績と異って来るのは寧ろ当然といわねばならない。

しかし、こういつたからといって、“助成文学賞時代”八年間の作品の中に、第二巻収載十一篇のほかには価値あるものが存在しない、ということでは勿論ない。それどころか、ブラジル生活者の実態を描くことに心こめた捨て難い作品はなおあるのであるが、第二巻は作品だけでも第一巻を遥かに越える頁数となった。限定される条件下の出版では取捨の生じる事も致し方ない。作品の“運・不運”はここにもやはり存在するのである。

コロニア小説選集・第二巻

一九七七年四月一日第一刷発行

編集・コロニア文学会 発行所・コロニア文学会

G r e m i o L i t e r a r i o . C o l o n i a

ブラジル国サンパウロ市

サン・ジョアキン街三八一番

R u a S a o J o a q u i m 3 8 1

S a o P a u l o (S P) B r a s i l

印刷所・パウリスタ美術印刷株式会社

サンパウロ市オスカル・シントラ・

ゴルジーニョ街四六番